

連載専門誌

対人援助学マガジン



Vol. 2 No. 2

September 2011

第六号

対人援助学会

巻末座談会
『障害をもつ
友達と過ごす
とは？』

対人援助学会

第三回年次大会

「当事者のための連携は
できているか？」

Japanese Association of
Science for Human Services

対人援助学会第3回年次大会1号通信

日時：2011年11月12日(土)

会場：立命館大学 衣笠キャンパス

プログラムは執筆者短信欄を
ご覧下さい。

対人援助学会第三回年次大会 告知		002
目次		003
執筆者@短信	執筆者全員	004-010
知的障害者の労働現場 006	千葉 晃央	011-013
社会臨床の視界 (6)	中村 正	014-025
ケアマネの出会った家族たち (6)	木村 晃子	026-031
街場の就活論 vol.6 -新卒採用に今、何が起きているのか-	団 遊	032-033
心理療法が始まるまで(6)	藤 信子	034-036
第6回 誌上ひとりワークショップ(中編)	岡田 隆介	037-043
映画の中の子どもたち 6「いのちの子ども」	川崎 二三彦	044-045
子どもと家族と学校と ⑥ (開業カウンセラー日誌)	中島 弘美	046-049
蠅螂の斧 社会システム変化への介入 (20年前の兎相と) 第6回	団 士郎	050-055
学校臨床の新展開 ⑥	浦田 雅夫	056-059
学びの森の住人達(1) 学校でもない、塾でもない、森...	北村 真也	060-068
幼稚園の現場から VI	鶴谷 主一	069-078
福祉系対人援助職養成の現場から ⑥	西川 友理	079-085
我流子育て支援論 (6)	河岸 由里子	086-092
不妊治療現場の過去・現在・未来 6	荒木 晃子	093-098
対人援助学&心理学の縦横無尽 (2)	サトウ タツヤ	099-102
小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー	尾上 明代	103-114
家族造形法の深度 (6)	早樫 一男	115-119
旅は道連れ、世は情け 6 (女性 LG 研究所 20 年)	村本 邦子	120-124
きもちは言葉をさがしている「紅茶の時間」とその周辺 第5話	水野 スウ	125-133
やくしまに暮らして 第五章	大野 睦	134-135
お寺の社会性(四) 一生臭坊主のつぶやきー	竹中 尚文	136-140
こころ日記 ぼちぼち(3) (中学生日記)	脇野 千恵	141-144
これからの男性援助を考える 第四回	坊 隆史	145-150
ノーサイド 第二回 禍害と被害を超えた論理の構築	中村 周平	151-155
新連載 それでも「遍照金剛言う」ことにします (精神障害者福祉)	三野 宏治	156-166
新連載 「ほほえみの地域づくり」の泣き笑い	山本 菜穂子	167-174
巻末座談会 「障害をもつ友達と過ごすとは？」	石原×三人	175-198
編集後記	編集長&編集員	199-201
目次		



告知

対人援助学会

第3回大会

2011年11月12日(土)

テーマ

**当事者のための連携は
できているか?**

会場：立命館大学衣笠キャンパス
京都府京都市北区等持院北町 56-1

参加費 事前申込 会員 2,000 円
非会員 2,500 円
当日申込 会員 2,500 円
非会員 3,000 円
事前申込の締切り 9月30日迄

申し込み詳細は学会HPをご覧ください。

<http://humanservices.jp/>

基調講演、シンポジウムでは要約筆記の対応を行います。

ワークショップにおいては、申し込み状況によって対応させていただきますので、

事務局までメールで、「第3回対人援助学会大会 要約筆記希望」とお申込み下さい。

事前申込について： 事前申込み用紙
申込用紙に必要事項(氏名・会員区分・所属・住所・連絡先)をご記入の上、
2011年9月30日迄にFAXまたはE-mail、
郵送でお申込をお願いいたします。

尚、参加費は、同日までに下記指定口座にお振込を頂きますようお願い申し上げます。

● ゆうちょ銀行 四一八(ヨンイチハチ)
店 普通預金：3544210 名義：対人援助学会

● □ ゆうちょ銀行の窓口をご利用される場合は、記号：14120

番号：35442101 名義：対人援助学会

※お振込の際、氏名は必ず申込氏名でお願いいたします。(お振込手数料は、各自ご負担をお願いいたします。)

プログラム

10:00-12:00 ポスターセッション

13:30-14:30 ■公開企画

基調講演

「障がい者の就労支援：『企業の倫理』を当事者のキャリアに活かす(仮題)」
秦 政 (NPO 障がい者就業・雇用支援センター理事長)

14:30-16:10 シンポジウム

「障がいのある個人の継続的支援のための地域連携」

◆企画・司会：望月昭(立命館大学) 朝野浩(立命館大学)

◆話題提供者：

「学校からみた福祉や企業の連携と情報共有(仮題)」朝野浩(立命館大学)

「京都におけるこれからのキャリア支援(仮題)」生田一朗(京都ほっとはあとセンター)

「地域連携、移行にむけた課題(仮題)」光真坊浩(厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部障害福祉課)

◎指定討論者：

秦 政 (NPO 障がい者就業・雇用支援センター理事長)

16:20-17:00 会務総会

17:00-18:40 ■ワークショップ

◎理事会企画ワークショップ1

「『対人援助学マガジン』の可能性」

団士郎(立命館大学)

◎理事会企画ワークショップ2

「IPE教育(専門職連携教育)について」

臼井正樹(神奈川県立保健大学)

柏絵理子(神奈川県立保健大学)

19:00- レセプション 場所：レストランカルム(大学衣笠キャンパス内)



◆ 団士郎 ◆

告知

震災復興家族応援

プロジェクト in むつ

9月19日(月)～24日(土)の間、青森県むつ市立図書館ギャラリーで「木陰の物語」の漫画展をします。B全サイズ・カラー版パネル「木陰の物語」が約30点展示されます。

また、9月23日、24日には、家族応援セミナーと題して、本誌執筆者三名が、それぞれ講演やワークショップを実施します。

9月23日

13:00～14:30 団士郎

「木陰の物語の物語」

14:45～16:15 村本邦子

「子育て支援者応援ワークショップ」

9月24日

10:30-12:00 中村正

「父と子の絵本ワークショップ」

お近くの方しか無理でしょうが、良かったらのぞいてみてください。

立命館大学大学院応用人間科学研究科と青森県下北地域県民局の共催です。このイベントは岩手、宮城、福島の前被災地でも開催すべく、会場の調整中です。

これとは別ですが、「木陰の物語」—3. 11への記憶—文庫版100頁を1万部作りました。会場でも配布します。

これから長い道のりを、子育てをしなが
ら歩んでいく被災地の親御さんへのメッセ
ージのつもりで、一冊一冊丁寧に届けら
れたらと思っています。関心がありましたら
メールで私にお問い合わせ下さい。

danufufu@osk.3web.ne.jp

◆ 藤 信子 ◆

今年の夏は結構長かったような印象な
のは、あちこちで出かけたことが多かった
からなのだろうと思う。8月初旬に、「ま
だ8月が大部分ある」となんとなくほった
のは、きっといつもまるで夏休みの宿題に
追われているような気分だからなのだろう
か。明日から出かけて London でグルー
プ・アナリシスのシンポジウムに参加する
けれど、現在の日本は外国ではどのよう
に捉えられているのか、聞けるだろうか
という思いもある。

◆ 水野スウ ◆

東京生まれ。石川県津幡町の住人。週
いちオープンハウス「紅茶の時間」家主。
コミュニケーションワークショップ「ともの時
間」の水先案内人。ミニミニコミ「いのみら
通信」編集人。

この3ヶ月間はあつという間で、とくに後
半、ドトーの日々でした。前号の原稿をも
とに、『いのちの未来と原発と?3.11後のわ
たしたち』という、初心者さんにも実にわ
かりやすい原発問題の小冊子を作ったこ
と。7月には、親しい友の遺した曼荼羅の
ようなキルト「ちきゅう」と一緒に、原発の
おはなし出前でよく旅をしたこと。8月には、
その友のキルトや私たち母娘の作品をな
らべて、銀座の画廊で展覧会を開き(いま
だに信じられないびっくりな出来事)、会場
で原発やキルトのおはなし会や朗読会を
したこと。

娘との、一年がかりの協働制作のブック
レット『贈りものの言葉』も、やっとやっとそ
の間に生まれました。3年前に出した『ほ

め言葉のシャワー』と、二つで一つの、対
になるようなサイドブックです。前作ではき
ちんと伝えきれなかったこと、ほめるって
一体なんだろう、や、doとbelについても、
想いを深めながら綴った作品です。巻末
には、歌になった「贈りものの言葉」のCD
つき。もし興味あるかたは、こちらをのぞ
いてみてくださいませ。

<http://mai-woks.com/>



◆ 山本 菜穂子 ◆

東京都八王子市生まれ。来年1月には
とうとう50の大会に乗る予定。自分の中
では27歳くらいで年齢が止まっている
が。

本編の中にプレゼンでの話を書いたが、
高校は女子校で、演劇部に所属し男役で
舞台に立っていた。コンクールでは審査
委員から「男にしか見えなかった」と絶賛
(?)された経験を持つ。(自慢にならな
い?)

高校時代に「子どもたちの復讐—開成
高校生殺人事件—」というルポを読み、教
員以外の立場で子どもの味方でいたい
と思い、大学で心理学を学んだ。卒業後は
専門学校で数年働き、結婚退職。大学時
代に知り合った夫とは5年間の交際(うち
遠距離恋愛2年)を経て、夫のふるさとで
ある青森県にお嫁に来た。青森に来てか
ら、県職員だった夫のつながりで、児童相
談所で雇い上げの心理判定員として使っ
てもらった。あまり家事の得意でない私に、
夫が、「家にいるより社会に出た方が少し
は世の中の役に立つだろう」と熱心に言う
ので、♪本当はもっと素敵なことばだった

けれど、秘密♪)公務員試験を受け、28
歳にして何とか県職員になった。採用2年
目から児童相談所に配属になり、児童心
理司、児童福祉司などを経て、続きは本
編へ。

子どもの味方になりたいくて、子どもの味
方になることは親の味方になることだと知
り、児童相談所は自分の居場所だと思っ
て仕事をして現在に至る。(私は自分の居
場所だと思っているけれど、児童相談所
側ではお前はいらないと思っているかど
うか、それは知らない。)

青森県の田舎館村在住。これは文字ど
おり「いなかだてむら」と読む。青森のいな
か♪これはなかなか忘れがたいでしょ。

田舎館村は今、「田んぼアート」でちょ
と有名。我が家からは車で3分、役場の隣
のひろ～い田んぼに黄稲、紫稲、赤米、
黒米など7色の苗で絵を描いている。田
植えから稲が成長し穂が実る、その時期
時期で絵の雰囲気が変わっていく。しっか
りアート! 年々、絵も精密になり。今年は
竹取物語がテーマ。震災から続く様々な
苦しみもかぐや姫が空に持って行ってく
れたらいいのに。よろしかったらどうぞ、この
機会に「東北」にご旅行を。(田舎館村HP
<http://www.vill.inakadate.lg.jp/>
田んぼアートはここからも見られます。

◆ 脇野千恵 ◆

8月初旬、10日間スリランカを旅しまし
た。職場の仲間に、「わざわざ暑い国に行
くの?」と言われましたが、31℃前後でも
湿気がなく、日影に入ると涼しい風が肌に
気持ち良く、実に快適な毎日でした。

今はスリランカですが、私が学生のころ
はセイロンと習った記憶が…。紅茶で有
名ですが、他に香辛料、薬草、カシューナ
ッツなどの産地でもあります。またサファ
イなど原石が豊富に採れ、日本人がた
くさん買って帰るそうです。

2年程前までは、タミル人とシンハラ人
との間に内紛があり危険地域でした。国際
的にはあまり取り上げられていませんが、
多くのタミル人が無差別に虐殺されたと聞

きました。日本人に対しては、とても友好的です。内戦中、戦禍をのがれ日本に逃げにやってきたスリランカ人が結構多かったことも、今回の旅で知りました。

2004年のスマトラ沖地震での津波の犠牲者は3万人とも言われています。津波という言葉さえ知らない人達は、海に向かって走っていったとか。

ひと昔前の日本のような人々の生活に、またぜひ訪れてみたい国の一つとなりました。

◆河岸由里子◆（臨床心理士）

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

子育てのところで、保健師さん達とケース検討をしていると、本当に色々なケースに出会う。先日は、新生児訪問で「犬のウンチはいつまで食べても大丈夫ですか？」と保護者に聞かれたとの話が出た。「普通」に考えれば、「間違っただのウンチを食べちゃっても大丈夫か？」と言うことだろうが、生まれて間もない子どもが、しかもベビーベッドに入っている赤ちゃんが、間違っただのウンチを食べるはずも無い。続けての一言は「6ヶ月までは、母親の免疫があるから大丈夫ですよ？」ときたそう。食えること前提の話？ソコに居合わせたメンバー全員の目が点になったことは言うまでも無い。その話を直接聞いた保健師さんも、なんて言ってよいか分からず、パニックになって、そのことには触れずに帰ってきてしまったとのこと。動物を飼っている家では、子どもが生まれる前から飼っていたからと、動物を優先する家が少なくない。先日の千葉での2歳児の餓死も、父親が猫の方が可愛かったと言ったとか。死んだ犬の名前を子どもにつけた親もいた。しかし、赤ちゃんにウンチを食べさせる話は聞いたことが無い。「普通」は食べないように気をつけるだろう。「普通」が何かも分からない時代なので、仕方ないのか？「常識」と「非常識」もよくわからなくなってきた。このケース、もちろん要注意で経過観察としたが、今後の展開が気になる。

◆岡田隆介◆

近況①: まともな本は最後まで読まず、まじめな映画は寝てしまう。原稿も講演もめんどくさい。旅行も外食もおっくうで、はしゃぐTVにイライラする。1時間以上の会議に我慢できず、スポーツはまるでやる気が起きない。言っておくけど、ウツではない、

近況②: 肉よりも野菜と魚、アルコールよりもヨーグルトと豆乳。横になるとすぐ眠り、体重は維持。仕事は淡々とこなし、おしゃべりはあいかかわらず。努力の自然体だ、念のため。

近況③: 娘が喫茶店でたまたま開いたクーヨン（落合恵子さん主宰クレヨンハウスの月刊育児誌）6月号に、「お父さんの『家族が変わる、子育てが変わる、コミュニケーションのヒント』の書評を発見！」と写メを送ってきた。「ほんまか！？スゴいな」、知っていたけど。

◆木村晃子◆

北海道 当別町 ケアマネジャー

もう一つの連載 ～階段～

脳梗塞で片麻痺が残ってしまった喜男さんの、階段昇降のリハビリ場面にケアマネジャーがやってきて理学療法士に尋ねた。「大丈夫でしょうか？」喜男さんは、理学療法士の方を見た。「何とか、2階までは昇れるでしょう。安全のため、私も一緒に行きますよ。」理学療法士が言った。

ある朝、喜男さん、ケアマネジャー、理学療法士が病院から乗り込んだハイヤーは、喜男さんの住んでいたエレベーターのないアパート前へ到着した。車から降りると、三人は黙って階段に向かった。階段の途中から喜男さんの足はガタガタと震えだした。それでも、三人は2階の部屋を目指して上った。ようやく玄関を開けると、すぐに仏壇のある部屋に入り、両親の遺影を手にした。それを位牌と一緒に風呂敷に包んだ。そして、もう着ることはないであろう古いスーツを箆笥から取り出して荷物の鞆へ入れた。改めて部屋の中を見渡

して、「もう、いいから行こう。」と、ドアに鍵をかけた。三人はゆっくりと慎重に階段を下りた。



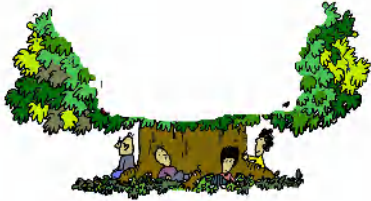
それは理不尽な人生だった。農家の後継者、喜男さんが農業を継ぐ頃には、酒飲みの父親には多額の借金があった。農家をたたみ、都会での勤めで借金を返した頃、両親は続けて病死した。やや遅くに喜男さんが結婚した相手は、年の離れた若い女性だったが、酒が好きで夜はよく遊びにでかけていた。いつの間にか喜男さんの知らないところでの借金が増え、喜男さんが脳梗塞で入院するとどこかへ出て行ってしまった。間もなく離婚届も届いた。「貧乏くじばかり」と嘆く喜男さんは、借金の整理を終え、これからは介護施設に入所することに決めた。病気になってから一度も戻っていない自分のアパートへ、部屋を処分する前に必要なものを取りに行ったのだ。

喜男さんが、これから入所する施設へ持って行く物。両親の遺影。そして、もう着ないであろう古いスーツは、かつて妻が喜男さんのために見立ててくれたスーツだと言う。貧乏くじばかり、と嘆いていた喜男さんが、終の住み家に持って行きたかったのは、本当は生活を共にしたかった人たちの思い出なのだろう。

◆村本邦子◆

今、屋久島に来ている。ダイビング、沢登り、縄文杉、温泉、おいしいもの・・・と休暇を満喫中。海中では、戯れるアオウミガメたちのウォッチング。観音崎の地形はダイナミックで楽しめた。今回、一番気に入ったのはキビナゴの赤ちゃんの大群。キラキラキラキラ、まるで輝き踊って誕生を飲み、命を祝福しているかのよう。海の青が濃い。風と潮のにおいもいい感じ。

沢登りは初めてのチャレンジだったけれど、童心に戻って、1日、はしゃいで楽しんだ。なかなか難しくて、2度ほど滝壺に滑り落ちてしまったけれど、それもまた楽しい。そして今日は縄文杉。年齢を重ねた屋久杉との出会いも感動ながら、道中の緑と光の戯れ、澄んだ水の歌声やさざめきも心地よい。



温泉はやはり尾間。あのヌルヌル感がたまらない。食べ物としては、やっぱりお魚。首折れサバのお刺身、トビウオのから揚げ、お豆腐と屋久いもかな。毎晩、あちこち食べ歩きしている。足がないので、食後は30分から1時間かけて宿まで帰るのだけど、満点の星の下をブラブラ歩くのはこのうえない贅沢。星の光って、何だか私たちにエネルギーを注いでくれているような気がする。

それから、屋久島はお弁当がすごくおいしいのでびっくり。これまで、自分で作るお弁当以外、あまりおいしいと思ったことがなかったのだけど、ここには安くておいしいお弁当屋さんが2軒もある。観光客がみんなお弁当を買って、山や海へ行くので、お弁当屋さんは夜中からせせとお弁当を作り始めるのだ。

最後に人との出会い。屋久島には一定割合の移住者たちがいるが、今回、出会った人たちがみんなとても賢く有能な人たちであることを発見した。そして、人生の優先順位がきっぱりしている。そうか、賢い人たちは屋久島に来るんだと思った。本当はこんな人たちこそ中央へ行って、政治家になってくれたら良いのだけど。最終日の明日は森にしようか海にしようか。縄文杉の予備日にとってあったが、毎日、快晴で不要になった。1年に370日雨が降ると言われる屋久島だが、晴れ女が3人集まっているので最強。いつもながら、こうしてパソコン持ち込みの休暇だが、十

分にリフレッシュしたぞ〜。

◆竹中尚文◆

浄土真宗本願寺派専光寺住職
もう 30 年以上まえのことになるだろう。団さんからよく芝居に誘われた。“シャンハイ・バンスキング”を見たのも団さんに誘われてのことだった。「竹中、生やぞ！ライブやぞ」と教えられた。本当にその通りだった。昨年、ジェフ・ベックのコンサートは5列目の正面の席だった。身体の全ての細胞をサウンドが通り抜けていく感動は、生涯忘れない。

今年はイーグルスに行った。ジェイク・シマブクロはチケットがとれない。エリック・クラプトンは日程が合わない。

◆北村 真也◆

私塾「アウラ学びの森」(<http://tiseikan.com>)
代表。人間科学修士。

この春、私は無事大学院の修士論文を書き上げることができました。お世話になった先生方、本当にありがとうございました。でも実は在学中の2年間に、論文とは別にエピソードを書き続けていたのです。ふと気がつくと、その量は何と 500 ページ近くになっていました。「塵も積もれば山となる」。これはこれで、論文とは別の私の財産となりました。そこで今回、先生方からの提案もあって、この書きためたエピソードを構造化していき、何とか本にまとめていこうということになりました。そしてその原稿作りの過程をマガジンに掲載してみることになりました。ということで、今回から新連載の始まりです。

◆川崎二三彦◆

前号のプロフィール欄に続けて呆け日誌をもう一題。

*

何しろ、物を覚えることができなくなった。すぐに忘れてしまう。まず、人が覚えられない。一度出会った人に再会して覚えていないのは当たり前。3 回目も駄目で 4 回目だって怪しい。こうなってくると相手

に申し訳ないので、何とか知っている風を装い、生返事しながら必死で切り抜けようとする。

本当は名刺の裏に、「申し訳ありません、物覚えが悪いため、次に会ったとき失礼があるかも知れませんが、どうぞご容赦ください」と印刷しておきたいのだが、我が職場では裏側に英語バージョンが載っているので、それもかなわない。かつて児童福祉司を拝命していた頃は、「申し訳ありません。多忙につき連絡が滞ることがあるかも知れませんが、その節には遠慮なくお電話ください」という文言を印刷しておこうと真剣に考えたことがあったけれど（さすがにそこまでは踏み切れなかったが）、変われば変わるものである。

*

そんなある日のことだ。年の頃は三十代半ば、通勤途上でいつも通る横浜駅西口、高島屋デパートの前で、しげしげとこちらを眺める女性がいる。が、誰であるかがいっこうにわからない。

「どこで見かけたんやらか」

気になって通りすがりに振り向いた瞬間、思わず目が合ってしまった。何となく気まずい雰囲気を感じ、私は勇気を出して声をかけることにした。

「あのう、失礼ですが、どちらさんでしたでしょうか」

彼女の返事に、ひっくり返ってしまう。

「遊びませんか」

*

当方、いつのまにか還暦の年の誕生日を迎え、呆け症状が加速している。今後は多くの皆さんに迷惑をかけながら生きるしかない達観しているのだが、かといって悪いことばかりではない。たとえば今後はいつでも映画が千円で見放題。それを糧に、細々と本連載を続けることにしよう。

◆中村周平◆

2011年9月に第7回ラグビーW杯がニュージーランドでおこなわれます。サッカーW杯と同じく4年に一度おこなわれる

ラグビーの祭典…なんですけど今ひとつ知名度が低いことが、いちラグビーファンとして残念でなりません。そのW杯、なんと2019年には日本で開催されることが決まっています。8年後、自分は34歳になっています。17歳で怪我をして17年後に日本でW杯が開催される、そんな何かを感じてしまう2019年までに自分の考えや想いを何かの形にしたい、何か行動をおこしたいと今強く思います。日々の忙しさに自分自身が流されないよう、この短信を一つの誓いとして。

◆早瀬一男◆

臨床心理コースの大学院生の授業の一コマで、健康家族(ボランティア家族)との面接実習を行いました。院生が面接者となって、家族合同面接を体験するというものです。

そもそもは、京都国際社会福祉センター(KISWEC)の家族療法専門課程において、団先生とともに、長年、実施してきたプログラムです。構造的家族療法の創始者であるS. ミニューチン氏がKISWECで講演した際に、家族面接トレーニングプログラムのアイディアとして伝えたのが始まりです。

将来、臨床心理関連の業務に従事するのなら、個人だけでなく、家族も上手に扱えるようにという思いから、大学院でも授業の一コマとして実施してみました。

協力いただいたのは、孫世代が大学生の三世代6人家族、子育て中の核家族5人、結婚間もないカップルというように、家族のライフサイクル、家族構成もそれぞれ異なる3家族でした。

もちろん、ワンウェイミラーからの観察や録画DVDの振り返りなども実施し、「面接」をさまざまな角度から見直してみるということも行いました。

院生にとっては、緊張あふれた経験とともに、非常に新鮮な経験になったようです。さらに、健康な家族のコミュニケーションにも触れることができた貴重な時間となりました。

健康家族との面接の面白さや大切さ、家族の奥深さについて再発見できた春学期でした。

◆西川友里◆

いくつかの学校で、社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士などの専門職教育に携わっているものです。

最近、通信課程の学生のスクーリングや実習教育にもかなり関わるようになりました。自分の母親くらいの年齢の方や、現場でのキャリアを長年積んできた人に、「私が何を教えるねん！」と自らにツツコミながらやっています。受講生さんから教えてもらうことが多く、ああ私もまだまだだなあと思う一方で、「この専門職とはどういうものなのか、伝えることが出来るのは、どんなキャリアの方に対して、どんな年配の方に対して、今、この教室内では私だけ！」と、自分に言い聞かせてやっております。

授業後に配るコミュニケーションペーパーには、嬉しい事もキツイ事も、沢山書いてくださいます。これを読むのが、楽しみです。

◆中島弘美◆

オフィスのある大阪茶屋町付近は、最近、いろいろな建物ができて、にぎやかになっています。大型書店がオープンしてからは、サラリーマンの姿も多くみられ、これまで、二十代中心の街だったのが、平均年齢が上がっています。

本屋といっても、専門書を見つけるにはこの書店、雑誌を立ち読みするにはここ、なんとなくぶらっとのぞいておもしろい本に出会いたい時は、この店、時間待ちをするときに便利な本屋と、目的別に利用できるのもうれしいところ。

雑貨店、カフェなどもおおく、ウインドウショッピングには、もってこいですが、私が喜んでいるのは、大阪駅が新しくなって、周囲のお店も改装続きでデパ地下が充実したこと。毎日、食いしん坊が止まりません。

◆千葉晃央◆

ある方から、半身まひの友人の家にいった話をきいた。そこのお部屋には、大きなざるがあり、天井から複数ぶら下がっていたそうだ。半身まひの方の場合、おれで買物はしやすいけども、硬貨ではにくい。なので、家に小銭が貯まるということ、後になって気づいたそうだ。

私も思い出した。半身麻痺だった祖父。会うとよく、溜まった貯金箱複数をあけて、なかに入っている金額当てゲーム。一番近い人が何割…など、分け前を決めてって、博打風であまり好きでなかった。けれども、そういうことだったのか。秋田と関西で年に多くて2回しか会えない。そんな孫にその小銭…だったのか！私と祖父は、関係断絶中に、祖父は亡くなりました。あれから数年。俺わかってなかったなあ(涙)



◆尾上明代◆

先月、新刊を出版しました。

「子どもの心が癒され成長するドラマセラピー」戎光祥出版

この本は、教師など子どもに関わる指導者たちが実施できるように、私が創った「受容とミラリングの即興ドラマ」(このマガジンの連載で扱っているドラマ手法)の方法・注意点を詳述しています。そして、どのように導いていくかを理解できると、「日常場面での」子どもへの対応力もつくようになると思います。

また、ドラマセラピーの神髄を理解できる点では、DT 必須のバイブルとも言えます。

この本の対象は教育現場、子どもです。しかし、すべての心理療法に従事している方々にとっても、役立つものとなっています。

ます。セラピーや対人援助を行う際に大切な考察と方法を、豊富なケース解説の中で述べているからです。専門的なことを、わかりやすく説明しているので、自信をもってお勧めします！

アマゾンの生徒指導というカテゴリーで、かなりの期間「過去90日間で一番売れた本」となっていて、ちょっと驚きました。特に専門家の方々からは、2章に大きく反応して多くの感想を頂きました。もしお読みいただければ嬉しいです。

◆ 三野宏治 ◆

今年の春から秋田県に住んでいます。3月末に京都から越してきたのですが、その頃はまだ節電で町中が暗く雪が残っていて「色のないところだな」と思っていました。春になり夏を迎え今秋田は色鮮やかです。ただ、大阪生まれ大阪育ちのものとしては、少しスモッグがあって押しの強い関西が懐かしい今日この頃でもあります。

小さい頃、両親や祖父母に「遍照金剛言いなさんな」とよく叱られました。「遍照金剛言う」とはグダグダ屁理屈を言うことで、私には懐かしい言葉です。ホームシックな精神状態と変わらぬ「屁理屈こき」加減からこのようなタイトルにしてみました。

◆ 浦田雅夫 ◆

被災地に行き活動した人たちが多くに語っている一方で、被災地に行っていない人、とくに援助に関わる仕事人たちが恐縮している。行く人が善で行かない人が悪ではないのに、非国民的なプレッシャーを感じている人もいます。

粉骨砕身ボランティア活動を行った人たちは心から尊敬するが、一方、行かない、行けない人たちの語りにも耳を傾けたい。

◆ 中村 正 ◆

NHKに就職してディレクターとして活躍する教え子の二人から期せずして「番組つくった」と連絡があった。北海道の釧路放送局にいる彼の番組は、東日本大震災の後に北海道の浜辺に漂着した様々なも

のとその片づけ場面から思いを馳せるという主旨の内容だった。



もうひとりとは甲府放送局に勤める卒業生。視覚障害者向けの読む絵本の取り組みである。自分がナレーションをしてその絵本を読んでいる。NHKに就職するに際して、ステレオタイプな思考と表現のあるところできかに自由(自分の表現したいこと)に振る舞えるかが大事ではないかと話したことがある。不自由だからこそ何かをその枠のなかで目一杯に言えるのかが問われることになる。今回の連載の中身も同じで、「柵」のなかで何ができるのか、「柵」に気づくこと、どんな新しい「柵」があればいいのか、「柵」はなくてもいいのか、もちろん場合によっては古い「柵」は壊した方がいいし、いつまでもその中にいる必要もないが、そこで納得のいくまでやってみることも次の行動には役立つとも話した。いつも同じことを考えているなと思いながら、教え子たちの活躍を想像していた。連載に記したようにこの夏は別の意味で忙しく、同じように点として日々の時間が流れるが、夏休みだったので、点を結ぶ線の異なりがあり、新発見なのか再確認なのか分からないが面白かった。映画や演劇(能も観た)もたくさん楽しむことができた。暑気払いと称したおしゃべりもたくさんあった。ただ残念なことは、編集長の団さんとはいつも長時間二人きりでおしゃべりすることにしている長期休暇の恒例が、こしははまだ実現できていないことだ。なんとか秋の開講までには実現したいと思っている。

◆ 荒木晃子 ◆

生殖医療施設 & 精神科診療所心理士。立命

館グローバル・イノベーション研究機構客員研究員。

「父」毎年この時期、お盆をはさんで思うことがある。約5年前に亡くなった父のことだ。父は大正14年2月生まれ。第二次世界大戦では、海軍航空隊(特攻隊)に所属、つまりゼロ戦に乗っていた。特攻隊の最年少兵として、終戦直前まで自らの出撃を、いまか、いまかと待っていたという。「終戦があと1週間遅かったら、アッコは産まれてなかったんだよ」戦争の話をするたび、終わりににはそういつて小さな娘を困らせた。ちょっと意地悪で陽気な父だった。いつも、娘に向かって、娘自慢をする父だった。そして最後に言うことばは決まって同じ。「アッコは、お父さんとお母さんのいいところばかり似ているね」。それを言われるたびに、小さな私は、体をよじって喜んでた。母は隣で笑っていた。三人家族のいつもの風景。私のおしゃべり好きは、きっと父親似なんだね。そんな平穏な日々のなか、たくさんおしゃべりすることに、娘はすすくと育っていった。「人間はね、平凡が一番難しいんだ。何事も起こらない人生なんてないんだよ。だから、何が起きても、くじけてはいけない。頑張っていれば、それだけでいいんだよ」忘れはしない父のことば。父からもらったおくりもの。お父さん、娘はいまも、母と一緒にがんばっています。

2011年夏自宅にて

◆ 団 遊 ◆

アソブロック株式会社、有現会社 ea 代表、“家族と子どもを想う出版社”ホンプロック発行人。立命館アジア太平洋大学非常勤教師(キャリア教育)環境に変化と刺激を起こすものづくり”をモットーに、地域活性から企業ブランディングまで幅広くプロデュース。「団士郎家族理解ワークショップ(東京)」を隔月主宰(偶数月第二土曜日)。<http://danasobu.com>

マガジン締切間際の今日も(8/25←まだ執筆中……)、テレビでは世界柔道が放送されています。毎夜毎夜「たくさん選

手があるなあ」「ルーマニアで柔道をしようと思うってどういう人？」など、勝負とは別の感想も持ちますが、楽しんでます。

まだ結果は出てませんが、100kg 超級に鈴木桂治選手が登場します。以前、彼と話をしたことがあります。そのとき「柔道で日本代表になるということは、金メダルを義務付けられるということです。銀以下はすべて敗北の一括りです」と言っていました。北京五輪の前でした。

ところが、旗手もつとめたその地で、彼は一回戦負けをしました。当時の話し振りが「きつと辞めるだろうな」と思っていました。しかし、彼はその後の屈辱を乗り越え、世界柔道に帰ってきました。目指すは来年のロンドンです。

どれだけ頑張っても、上手く行かないことの方が多い。雨のように降り注いでくる上手く行かないこととどう付き合うか、その付き合い方のバリエーションを、彼の姿からも学ばないと、と思っています。

そんなことを思いながら、なんとか彼に金メダルを！と願います。きつと当日はテレビを見る眼にも力が入るでしょう。どうか、彼が思いきった柔道をできますように。

◆ 鶴谷圭一 ◆

夏休み、一週間休暇をとって古い友人夫婦と3人で宮崎、鹿児島へ「波乗りツアー」に行ってきました。今回は大阪まで車で行ってフェリーに乗り、九州を走り回り、またフェリーに乗って大阪経由で静岡まで帰ってきました。

宿は予約せずに、波まかせで移動して、日中は海に入っているか、移動をしているか、車の中で昼寝をしているか……そして夕方頃にビジネスホテルのフロントを尋ねますが、その度に、ホテルマンから品定めをするようにジロジロ見られるのです。ビーチサンダル履きでヨレヨレのTシャツを着た日焼けと無精ヒゲのオッサンがリュックしょって「今夜部屋空いてますか？」とやってくるのですから、警戒するのも当たり前かな。

こんなことを 20 歳代から 20 年以上続

けています。体力は年々落ちてきますが、気持ちだけは 20 代が蘇ってくるツアアなのです。

車は 16 年乗って 16 万キロ走っている国産ワンボックス。もうかなりオンボロですが、一番困ったのはカーナビも 16 年前のもの。新しい道路は表示しないし、長いルート検索はフリーズするし、ナビに慣れてしまったこの頃はナビが機能しないとえらく不安になるもんだと実感しました。大阪の環状線は3周もしてしまいました。

◆ サトウタツヤ ◆

エッセイは暇があるときに書きためないと、ダメだなあと反省した次第。今回も締め切り5日遅れで、2011年8月30日の出来事を書かせてもらいました。8月31日には、カリフォルニア大学・ファンダー (David Funder) 教授が来日。日本が初めてのことなので、金閣寺や竜安寺にでかける予定です。

◆ 大野 睦 ◆

大阪生まれ。日本福祉大学社会福祉学部卒業。屋久島でネイチャーガイドという職を通して多くの方とネイティブ (自然や人が持つ本来の) ビジョン (視点や考え方) を共有したいとエコツアー会社、有限会社ネイティブビジョン設立。

BLOG やくしまに暮らして

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net>

先日、日本で10年ぶりとなる青年会議所 (JC) を屋久島に設立し、副理事長に就任。青年会議所は必ず40歳で引退します。つまり、私の場合早速ですが、賞味期限が短い。だからこそ、やりきれない！そんな気がして何でもやる、という思いです。私たちが考えているほど簡単にはいかないこともずっとずっと大変なこと。これから身に沁みしてくるんでしょうね。

◆ 坊 隆史 ◆

最近、日本の新幹線の技術提供を受けた国の高速鉄道が“独自の技術”として商用化しようとする動きがあるなど、模倣

を超えた知的財産の「パクリ」が問題となっているのはご周知のとおりです。もともとヒトは観察学習や模倣を繰り返して様々なスキルを獲得していく動物であり、良質な文化の模倣はある程度は仕方ないかとも思いきや、なんと今回本文で取り上げた講座企画が、複数の他自治体主催の講座でインスパイア (マイルドなパクリと理解してほしい) されていると耳にしました。

早速ネットで調べてみると、ヒジョーに似ているがビミョーに異なるタイトルの講座の受付がされているではないですか。技術者の知の集大成である新幹線や国民的な大ヒットマンガならともかく、私たちのような駆け出し援助者が試行錯誤でやっている講座がインスパイアされるものだからただただ驚きです。関西人らしいダジャレを効かせたタイトルとリード文が刺激的だったのでしょうか？自分たちが企画したものが注目されている光栄さと「断らないから一言連絡くれてもいいやん」という苦々しい思いが交錯しました。なんだか変な気持ちです。

しかしここで気になるのはインスパイアされている講座の講師たちが私たちの講座に参加していないこと。何を話しているんだろう？これらの講座を自分が受講してインスパイアされたものをパクリ返すとどうなるんだろう？あれこれ想像をめぐらす今日この頃です。



プロフィール欄のURLから、執筆者それぞれの発信に飛びます。Ctrl キーを押しながら、クリックしてください。

この現場への辿り着き方

1 工程@ 1 円～知的障害者の労働現場 006

千葉 晃央

■ランドセルがバッシューン！

B君は走った！「待ってえ～！B君！あ～！！」「バッシューン！！」B君はランドセルを川に投げてしまった。友人が私に近寄って来た「投げたん？ほんならオレ拾って来るわ！」私は「ありがとう」という。「B君と一緒にいてや！」「オッケー、気をつけてや！」「大丈夫！大丈夫！」…と友人とよくやり取りしたような記憶がある。川に拾いに降りるのは私ではなく友人が多かった。川に落ちたランドセルはふたが開いてしまっていた。なかの教科書は川の水で濡れている。濡れた本は、乾かしても、ページがくっついたり、波を打ってしまったりして、もうページは元には戻らない。これが初めてではなかった。これまでも、何度もランドセルが川の浅瀬に投げられた。いくらB君に「待って！」と叫んでも、行ってしまう。腕を一瞬つかんで止めることができて、ふりほどいていってしまう。

これが私の小学校2年生の下校時の経験だ。B君はこないだ引っ越してきた知的障害を持つ友達だ。当時、私はどれだけ理解していたかは分からない。しかし、帰宅す

る方面が同じで一緒に帰ってね！と、学校やB君のお母さんから頼まれていたような気がする。うちの母は確か、少し困っていた。その困っている意味も当時はわからなかった。住んでいたのは、校区のなかでは、多くの人が住んでいない方面。私の住んでいたマンションの向かい側は、もう隣の校区という端だった。なので、学校までの距離は、結構あった。

B君は新幹線が大好き。いつも新幹線の絵を描いていた。今はどうしているんだろう？毎日一緒に帰るのは、嫌ではなかった。B君のお母さんは時々「いつもありがとう」とお菓子やスイカをくれた。そして、B君は、いつもはとても穏やかだった。子ども同士なので、くっついて遊んだり、B君のまわりに友達の輪ができたりして、私もみんなと一緒にワイワイ過ごすことができた。ランドセルを川に落とすのも、今思うと、なんだか、私は困っていなかったような気がする。そういうことがあるのが、ま～B君かな～と思っていた。ランドセルを落とさないで、「なんで、この頃はしないのかな？」と思っていたような気もする。(すいません) B君は小学校高学年になると引っ

越してしまった。私がバイトで酒屋の配達をしていた時、引っ越した先のマンションを訪れて、表札だけは見た記憶がある。もう 30 年近くも会っていない。今はどうしているだろう？私は今こんな仕事をしているよ、と伝えたい。

■物事が進むリズムの違い

中学時代はバスケットボール部だった。2 年からはキャプテンもした。そのバスケ部にも、2 人の知的障害のある部員がいた。私の小学校出身の同学年だった。パスの練習をする。他の部員のように上手にはできない。順番が来るとスムーズに流れてきたパスの流れは止まってしまう。2 か所の小学校出身者から一つの中学になった私が通った公立中学校では、私の小学校出身じゃない小学校の方は、障害を持った児童がほとんどいなかったようだ。私がいた小学校では、ひとクラスに 1 人。障害を持った友達がいるのはもう当たり前だった。なので、物事が途中で止まったり、ちょっとゆっくりになったり、少し一緒にしたりということが毎日だった。そういうことが起こることに慣れていて。というよりも、それが普段の物事が進行するリズム、スピード感だった。

部活では、「勝つ」というのが大きな目標だった。その目標と障害のある部員がいることが両立しにくい場面がキャプテンとしてはあったように思う。私の小学校出身の部員は、パスまわしが止まったりすることに慣れていて、もう一方の小学校出身の慣れていない部員はとても苛立っていた。時にはわざと取れないボール、きついパス

をしていたこともあったように思う。だんだん障害を持った部員の部活参加日数は減っていった。一方で、私たちのチームは時に勝利や、地区大会でそれなりのところまで行く成果もあげ、勝負というところでのそれなりの経験もできた。その影で、障害を持つ友達たちがほとんど参加しなくなっていったことは、よく覚えている。今卒業アルバムを開くと、その友達もバスケットボール部の集合写真と一緒に写っている。そんな部活の状況をうまく対処する方法は、あれから 20 年以上たった今でも、思いつかない。でも、ここでこうして書いて残すことは、意味があるのではないかと思う。

そして、今考えると、なぜ彼らは私と同じ部活を選んだのか？その 2 人とも小学校時代に同じクラスになっていて、私は本当によく知っていた。私がいたから？というのは考えすぎだろうか？そう思うと、自意識過剰かもしれない。でも、援助職側になると少し思う。まんざら、あり得なくもない話だと。

■めぐりあわせのなかで障害者領域へ

私は知的障害者の施設で働いているし、働いてきた。大学の福祉系学部に入學したが、その当時は高齢者領域を志望していた。大学時代は、キャンプリーダー、スイミングのコーチをしていたこともあり、就職先は児童福祉領域を志望していた。児童福祉施設の就職試験を受験するも落ちたり、自分から辞退したり。そして、いよいよ 4 年生 3 月末で就職浪人か？という頃に声をかけていただき、今の職場に何とか、辿りつかせていただいた。そこは知的障害者施設

がメインの社会福祉法人。よくよく考えると、自分にとってはとってもなじみのあるところだった。

今、こんなことを思い出した。スイミングのコーチをしていた時、いつも来る知的障害の子がいた。子といっても、子どものコースに通っているけれども、私よりも大きな体。水を飲むような癖もありながら、じゃぶじゃぶ、とても楽しそうに泳ぐ。泳ぎ方を教えるけど、目も合いにくいし、少ししか頷かない。でも、聴いているだろうと思って伝えたり、時には大きな体だけでも、腕を持って補助もしたりして、マンツーマンで泳ぎを教えた。その教えている様子を見て、そこの責任者であった方に、とても評価されたことがあった。それは、コーチをしている私には本当に励みになった出来事であった。

■対象者ではなく、日常のなかで

こう思い起こすと私の人生には知的障害を持つといわれる方との接点が多い。仕事もいつの間にか、たどりついた形だ。なので、小さいころからボランティアをしてとか、宗教的な活動のなかで、この仕事を志望するようになったのではない。小学校時代の帰り道にも、中学校時代の部活にも、スイミングコーチのアルバイト時代にも一緒にいたのだ。学校やバイトという日常のなかでだ。

そして、以前にも書いたが、就職をして一番長く一緒に働いているのは利用者といわれる知的障害を持つ女性だ。私の実感として、まさしく一緒に働いてきたといえる。時に助けてもらったり、励ましてもらった

り、お祝いをしてもらったり、働きながら多くの感情を共有してきた。その方以上に長く一緒に働いたと思える人が今後の私の人生に現れるだろうかと思う。もうすぐ私も40代。たぶん一生のなかで一番一緒に働いた方なのではないか。私のこんな過去を振り返ると、援助の対象者としてしか、障害を持った人をみていないかのような障害者自立支援法は大の苦手である。

■巻末座談会へ

こんな過去だからこそ、できるものがあればよいと日々思い、現場で格闘をしてきて、もう15年以上過ぎた。こんな過去があるからできることなんて、援助の場そのものにはないのではないかととも思う。でも、書くことは別だ。残すことができる。それは、自分には少しはできるかもしれない。そういった思いもあり、今回の巻末座談会を企画することになった。

日々、知的障害者が働く施設に出勤する。そして、目の前にいる方々と一緒に働きながら、時々思い出す。小学校の時、スイミングのアルバイトの時、一緒だった彼らは元気だろうか？そんな過去を持つ人も働いているのが、知的障害者の労働現場である。

社会臨床の視界

(6)

臨床の知の「植民地化」について

一どんな言葉と文脈で対人援助を考えるかー

中村 正 (立命館大学)

点と線

自由な思索・興味関心、社会のなかの臨床そして大学の仕事に日常は流れていくが、それぞれは個別に点のように散在している。大学が夏休みなので、点と点を結ぶ日頃とは異なる線が浮かび上がる。村上春樹の『海辺のカフカ』、最近観たオーストラリア映画『サムソンとデリラ』、アボリジニの自殺問題や親子強制分離政策を扱った研究、8月に開催された国際犯罪学会での閃き等をつなぐ線が浮かびあがる。いつも思案していることだから関連するのは当然なのだが、今回はそのことから得た事項について書いておきたいと思う。

『海辺のカフカ』の一節である。「すべての文明は柵で仕切られた不自由さの産物なんだ。もっともオーストラリア大陸のアボリジニだけはべつだ。彼らは柵を持たない文明を17世紀まで維持していた。彼らは根っからの自由人だった。彼らの人生は文字どおり歩きまわることだった。歩きまわるとは彼らが生きることの深いメタファーだった。イギリス人がやってきて家畜を入れるための柵をつくったとき、彼らはそれが何を意味するのかをさっぱり理解できなかった。そしてその原理を理解できないまま、反社会的で危険な存在として荒野に追

い払われた。・・・結局のところこの世界では、高く丈夫な柵をつくる人間が有効に生き残るんだ。それを否定すれば君は荒野に追われることになる。」と主人公のカフカ少年が諭される(新潮文庫、下巻、191-192頁)。この小説は、境界、暴力、癒しと救い、複数の物語、家族、母性と少年・男性性、不安、光と影、現実と虚構、想像力と責任等のモチーフに溢れていて、このマガジン連載の話題としてもってこいなのだが、それはまた別のこととして、ここで引用した柵は社会臨床を考えるメタファーとしていろんな思考を深めてくれる。しかしより正確に言えば、アボリジニが荒野へと追われたのは事の半面で、その後、ここで紹介するように「盗まれた世代」として排除されつつ、新しい「管理・統制」へと包摂され、最終的にはジェノサイドとして血を絶やすことが企てられていた。「反社会的な存在」に仕立て上げられた後に、福祉と教育をとおした白豪主義オーストラリアを建設するための同化の対象にされたのだ。この意味では、文明こそが野蛮をつくりだし、それを養分にして主流社会の白人は「有効に生き残ってきた」といえるが、オーストラリアの現在と未来にとってそのことの傷は深く、多文化を標榜する国のアキレス腱となり、社会の統合と包摂についての社会的試

練となっている。

表現は異なるが連載第 1 回目の末尾に同様のことを記した。2003 年から 2004 年にかけてシドニー大学で在外研究をしていたときのことである。生きづらさとして現れ、精神衛生上の問題や逸脱行動問題として類型化され、時にはそれが犯罪となり、そのことで負の烙印を押され、場合によっては自殺に至ることにもなる問題群を社会臨床はどう視野に収めることができるのか、その主要なテーマはアボリジニ問題に表象されていると考えたからである。ナラティブアプローチ、修復的司法、治療共同体、男性性ジェンダー研究、加害者臨床論、臨床社会学実践等のテーマが同心円的に重なる主題のひとつとしてみえてきた。

そして連載第 5 回目となる前回は影の話をした。影とは、社会病理であり、社会的に排除してきた事項が示唆する現代社会の陰面の像として社会臨床の視界には映る。もちろんそうした社会病理現象は解決されるべきだが、臨床の知は単なる問題解決型の知ではない。生じた問題を解決することだけでは事後的すぎると思うからである。結果として生じた問題の解決だけではなく、その問題が生成する初発の事態にまで遡及して「問い」を発し、問題の定義それ自体を再構成することが乗り越えには重要となる。それは基本的な認識や考え方のことでもある。こうした過程を劈開することに社会臨床は焦点を定める。

アボリジニの自殺をはじめとした「精神衛生上の臨床的課題」が多いことをどう考えるべきなのか、その背景にある親子強制分離に示されるような同化政策との関係、そもそも修復と回復が成り立つ和解はどうあるべきなのか等の問いが浮かび上がる。

カフカ少年を取りまくその柵とは、一体、何であるのか、それはどのようにして取り去ることができるのか、除去した後に残る傷はないのか、とカフカ少年とともに少し詳しく考えてみたい。

自殺が多いこと

端的な研究書がある。オーストラリアのアボリジニ問題の研究者であるコリン・タッツ Colin Tatz の著書、“Aboriginal Suicide is Different—A Portrait of Life and Self-Destruction”（Aboriginal Studies Press, 2010）である（『アボリジニの自殺は異なる—生活と自己破壊の描写』）。「自殺は自殺だが、アボリジニの自殺はまた異なるものだ」という。貧困と失業、低い自己評価、モラルの低さ、倦怠、薬物とアルコール依存等はアボリジニかどうかを問わずに自殺問題の背景にある。しかしそれにも増してアボリジニの自殺は多い。ニュージーランドのマオリ族、オーストラリア北東部とニューギニア島の間にある海峡のトレス諸島住民、カナダの先住民（ファーストネーション）、アメリカのネイティブアメリカン等にも共通することである。背景には、トラウマとしての歴史と社会に由来する「否認された歴史」「尊厳の剥奪」「民族のトラウマ」がある。

第 1 号でも紹介したようにアボリジニの現状は厳しい。この研究書はリプリント版で、オリジナルは 2000 年刊行なのでデータは古いが、たとえば、1 年以内の乳児死亡率 1995 年の全国統計では、千人あたり指数 8 に対してアボリジニは 23 であった。これでも 1960 年代の指数は 100-150 だった。北部準州で、アボリジニの平均寿命は 53 歳、西オーストラリア州では 58 歳。白人男性よ

り 25-28 年短いという。ある部族では 40 歳というのものもある。男性は 42 歳から、女性は 53 歳からナースィングホーム、コミュニティケアセンターでサービスが開始される。失業率も高く、1996 年で 22.7%、全国では 8.1%である。収入も白人の半分程度だ。そして逮捕率も高い。さらに、刑務所や拘置所での若い男性の自殺が問題となっている。これを death in custody という。

公共政策としてのアボリジニ政策は、しかし混迷と曖昧さのなかにあるという。たとえば、二つに分かれたオーストラリアを認めることになるアボリジニとの、とくに土地問題をめぐる協約に保守党は合意しない。つまり償わないということである。あくまでも国内問題で、オーストラリアはひとつだという。とはいえ、国際社会の先住民年や民族の未来を自ら決めることへの動きも加速し、変化はすすむ。「謝罪と和解」が政権の課題として常に話題になってきた。

しかし、なお改善の進まない現実にはフラストレーションはつもの。彼は、「希望、調和、和解という言い方はアボリジニの側から発せられた言葉ではない」と厳しい。それでも 1990 年代以降、こうした言い方は主流社会の言葉となっていく。そして謝罪の対象となる親子強制分離政策の調査が進む。この政策を分析するに際して「新しい暴力の概念」を提案する。自殺に追い込む社会の側の、緩慢な、無策であるが故の、精神保健の言葉で定義していくことの、そして犯罪が多く、収監された刑務所や拘置所で自殺することの無念さを表現するための自殺として、アボリジニの生活にそくした理論化を試みようとする。

臨床の知の植民地化

この見地は、臨床や支援を考える上でも刺激的な問題提起だと思う。たとえば、自殺の予防という言い方が示す傲慢さについて指摘している。その言葉は、原因が単一で、医療モデルとして介入すれば防止できるという安直さをもっている。精神保健の言葉が隆盛し、原因が精神障害に帰属されていく。これを彼は「自殺研究の偏向」という。その偏向の最たるものに自殺をはじめとした社会問題現象を把握する際の生物学的決定論がある。たとえば乳児死亡率の高さを根拠にしてアボリジニの母親の養育力については心理-生物学的な弱点があるといい、それを動物学者に説明させてきた。信じられないが、北部準州の 1970 年代の言説である。同じようなことはスポーツ分野でもある。アボリジニのアスリートの能力は遺伝子的に高いのだという。アボリジニをめぐる言説それ自体に偏りがある。優生思想にもとづいた諸政策が行われていたことの証左である。

彼自身は、謙虚に、「自殺の軽減もしくは緩和」といい、多様な自殺の類型を確認する。アボリジニの生活のなかに自殺の背景を探り、自殺と類似の行動、緩慢な自殺、解放としての自殺等の類型を析出する。また、高リスク行動と攻撃性と暴力の関連、15 歳から 24 歳の若年の定義（WHO）とは異なる生活世界があることも指摘する。8 歳から 12 歳-14 歳を区分とした「子ども自殺」を研究すべきことを提案する。アボリジニ社会に特有のライフスタイル、ライフコースや暮らし方の差異を考慮すべきだからだ。

こうしたことは対人援助的な課題を探る際の「臨床の知の植民地化」の指摘だと私は考える。これは日本でもよくあることだ。

なんと言っても、臨床の知にはカタカナ言葉が多いし、臨床技法についての輸入物も目立つ。わが身を振り返ることになる指摘だ。さらに、精神保健という言い方でアプローチする臨床は、アボリジニらしさを固定してしまうと彼はいう。アボリジニ社会には、精神の不健康さが顕著で、薬物の使用や子ども虐待やホームレスが多く、失業率も高い。感情生活面も抑うつ的で、不安が高いという説明をすればするほど、現代社会では、社会福祉、精神保健、教育問題というくくりをとおして問題解決型の知が作動し、そうしたわかりやすい枠組みへと回収されていく。ステロタイプな像が強化されていき、アボリジニからすれば「敵意と離反」の結果となり、さらに不適応が増すという悪循環に陥る。

誰の言葉なのか

同じことは「善意の言葉」にも散見されるという。たとえば弱者を励ます意味で「エンパワメント」という言葉をよく使う。同じように、発展と開発、支援、ガイダンス、教育、エンカレッジ、焦点化、ケースカンファレンス等も多用されている。しかしこれは時として官僚的に不明確な言葉となり、主流社会からみた言葉として機能し、アボリジニをクライアントにしてしまう。そして何よりもアボリジニの語彙にはない言葉群である。こうなると、これらの言葉で理解してきたことを再考しなければならない。精神保健や精神衛生の課題としてのみ自殺を定義しないための基本的な問いが必要なのだ。

こうして、「アボリジニの自殺は異なるのだ」という結論にいたる。コミュニティが自殺を多く体験していることも影響し、連

鎖自殺的な様相も呈する。ある種の感情の共同体を成している。密度の濃いコミュニティに暮らしているなかで、葬式を数多く体験することの特異さをどう想像しうるのか。以前のアボリジニ社会に自殺は少なかったので、喪の作業をはじめとして直面する事態がすべて新しい。そこで政府も本格的な位置づけをする。

こうした指摘を受けて公的な機関も動き出した。オーストラリア心理学会も自殺研究に関してはその偏向に注意を促し、アボリジニの生活についての配慮を求めている。さらに、The Royal Commission into Aboriginal Death in Custody (収監中のアボリジニの死亡に関する国家委員会)の報告書が重要な役割を果たした。アルコールや薬物依存と精神衛生の問題を把握し、「盗まれた世代」問題が背景にあることを指摘した。文化的な混乱、個人的なトラウマ、現在の不利益の持続、人種的民族差別、疎外と排除の総体に関与しているのがアボリジニの自殺問題だと報告した。刑事司法のもとでの自殺問題 death in custody もさらに深刻になっていると認めた。

さらに、飲酒の習慣の蔓延と依存症化、自動車の普及（日本の自動車産業の関わりは深い）とハイリスクな行動と事故の関連も指摘した。部族の生活地から離れて都市に近いところで学校、病院、福祉等のサービスを受けるタウンキャンプでの集合的生活のもつ課題、そして失業している若い男性のリスクが顕著だとした。飲酒一般ではなく、困難な社会的環境のなかで親世代の飲酒と依存が子育てに影響して次の世代への影響を与えるという連関のなかに飲酒問題があると位置づけた。

タツズの研究では、心理的－社会的問題

も指摘している。フラストレーション、疎外と失意のコミュニティ次元の感覚や剥奪されたコミュニティへのスティグマの内面化のことである。だから、自殺を緩和させていくために、まずは「価値と尊厳が剥奪されているのだという認識」が確立されるべきである。後で紹介する盗まれた世代問題をとおして、自殺を精神衛生上の課題として医療化することへの批判が続く。生きることの意味の欠如が慢性的にあること、スポーツやアート以外の承認された役割モデルやメンターが機能しにくいこと、家族の統合が弱まっていること、意味あるサポートネットワークがコミュニティに少ないこと、DV、性的な虐待、薬物とアルコール依存症の比率が高いこと、敵意と嫉妬の感情がコミュニティにあること、自殺が多く悲しみが蔓延していること、社会的経済的な排除や疎外につながる識字問題が深刻なことが整序されていく。

提案をする

タツズは自殺を軽減し、緩和させるための対案を提示している。たとえば、具体的に自立を可能にするアボリジニの組織の活性化のことが紹介されている。非営利も含めたビジネスモデルの提案である。自らの未来を決めていくための、メディア、企業、学校、メンタルヘルスを運営するための法人組織である。

また、確かに、アボリジニ社会にも虐待、DV、大麻、アルコール等の問題は無視できない。そこで「コミュニティジャスティス」が提案される。オーストラリアの主流社会の法の仕組みをアボリジニに適用するのではなく、州や連邦が慣習法をいかに認知するのが重要だと解かれる。「再生と回

復のためのコミュニティジャスティス」である。具体的には、非行や犯罪の社会的背景を考慮し、罰だけではない刑事司法制度の改革である。被告となった場合の支援をおこなう司法連携（コトリエゾン）の活動、拘留施設訪問や友愛活動も重視されるべきだ。しかも、そうしたことをアボリジニ自身が運営することを提案している。

さらに、非行と犯罪対策のための「治療共同体」の形成と運営が紹介されている（therapeutic communityが原語であるが、これを「治療的」と訳すると医療モデル的になってしまうし、「共同体」には負のイメージも日本のなかでは強い。良い訳はないのが、流通しており、対案がないのでこのまま使う）。これは「リハビリテーション（更生）のためのコミュニティ」づくりである。6ヶ月の入所の後、メンターが配置された出身地域に帰すプログラムもある。特に、20歳代までの若者向けには効果があるという。共同生活空間の場をとおしてセラピー的に機能させる必要は、問題行動の背後に性的に虐待された経験のある若者が多いからだ。この「コミュニティジャスティス」は支援的であり、処罰的ではない。刑事司法の改革が前提で、有罪判決後もあれば、裁判前にセレクトされていく場合もある。

また、自殺未遂の若者、遺族、リスクの高い若者向けの「描画的アプローチ」もある。ドットを重ねていくアボリジニアートの伝統的描画法で苦しみを表現する。自殺念慮的な観念形成を客観化させる治療的関与である。これは自殺防止教育の一環として作用する。そこで描かれた一枚の絵が紹介されている。「A paint-your-feelings（感情を絵で表現する）」というユースサービスプログラムになっているという。

また、スポーツも重視されるべきとされる。帰属感、凝集性や一体感、忠誠心の涵養を養うことができる。アボリジニがスポーツで活躍する姿を描いた展覧会に刑務所から一日参観するという取り組みの効果があつた。さらにスポーツ関連の取り組みは、自ら参加の機会が多い。たとえば、レフェリーになる、ファンクラブにかかわり運営する、ニュースレターをつくる、商売をする等である。

対人関係では、コミュニティでの「導師」をつくることが提案されている。尊敬、指導などの役割を学ぶ。

タツズの書物の最終章では、自殺問題への10の提案がされている。①自殺をめぐるアノニマス=AAをつくること、②若者に受け入れられるクールなアプローチ（クールな若者のモデル創出、選択肢の提示など）、③ライフスキル教育などのゴールの明確なプログラムの導入、④ペアレンティングと葛藤解決スキルの伝授、⑤自殺が連鎖するので喪の心理療法の実施、⑥盗まれた世代の苦悩への焦点化、⑦学校のプログラムを地域で実施、⑧スポーツの活用、⑨サポート的な新しい警察活動の創出（ユースワーカーとしてのコミュニティポリス）、⑩地域のなかの識字教育である。オーストラリア政府は2006年-2011年にかけて「精神衛生国民行動計画」をたてている。コミュニティを基礎にした自殺予防政策がメインである。もちろん対処療法も重視されるべきだが、自殺問題の核心にある「尊厳の回復」は、今日の和解reconciliationという主題につながり、後に紹介する長い取り組みとなる。いったい野蛮はどちらの側だったのかという「問いの反転」へと至る。その前に、自殺問題に直結する強制的親子分離政

策をみてみる。

さらにもう一つの課題

そうしたことについて、ではジェンダーというフィルターをとおしてみるとどうなるのかということも無視できない。アボリジニ社会の慣習や文化を尊重し、その自己決定や自立に委ね、コミュニティの価値を大切にすることとは、主流となっている白人文化との関係では対抗的で分かりやすい。文化相対主義としても聞こえはいい。しかし、伝統、慣習、コミュニティはそんなに価値あるものとして信頼していいのかと問うことのできる立ち位置には、女性や子どもの視点がある。たとえばアボリジニのコミュニティにおいてもDV、虐待、性暴力がある。刑務所にいるアボリジニは白人よりも比率が多いとして過剰な逮捕を批判するが、その大半は傷害であり、それはDVに他ならない。また、1989-1998年の全国データによると、女性が殺害された事案の58%は親密な関係性で発生している。しかしアボリジニでみると親密な関係性で女性が殺害されたのは74%にもなる。白人が54.2%、アジア系が16.3%に比べると多い。

また、アボリジニ社会の婚姻文化も女性や子どもには抑圧的に作用している。「約束promise」という制度がある。あらかじめ結婚する人が決められる。2003年に50歳の男性と15歳の少女の「約束」が問題だとして訴えられたことがある。こうした婚姻慣習は普遍的な価値からすると子ども権利の侵害となるが、その時も、この慣習の廃止を誰も主張しなかった。こうしたことを記したJoan Kimmの“A Fatal Conjunction—Two Laws Two Culture” (Federation Press,

2004、『破滅的な結びつき：二つの法律・二つの文化』はアボリジニ社会と文化をジェンダーと暴力の視点から総点検している。女性や子どもの個人に焦点を置いた権利と、集団に焦点を置いた先住民の権利の両立という難題がここにある。だから、単純なコミュニティ主義にも依拠できない。新しいコミュニティをつくるしかない。

「盗まれた世代」問題

その時は、シドニー大学の「ソーシャルワークと公共政策（Social Work and Public Policy）」という大きなカレッジ（学群）のなかにある教育学部（Faculty of Education）にいた。暴力・虐待をめぐる社会臨床への関心は、家庭内暴力研究だけに限らず広い意味での社会のなかの暴力性の研究につながっていたからであり、和解や修復というテーマに直面しつつある社会が暴力をどう扱うのかについての関心があった。1990年以降、急速に、和解という言葉がシンボルにして語られる一連の社会的な取り組みがあることと脱暴力への臨床実践の内実を知りたかった。さらにそれと相補的にすすんでいるナラティブセラピーの発展も学びたいと思った。そしてなんといってもオーストラリアは修復的司法のアイデアが生成したところでもある。

その2004年はオリンピックの年であった。アテネが開催地だった。2000年に開催されたシドニー・オリンピックのことが現地では回顧されていた。アボリジニとの共生を意識した大会であったと記憶がよみを与える。オリンピックのロゴマークにはブーメランが意匠されていた。そして開会式のクライマックスはアボリジニと白人との和解を象徴していた。アボリジニの代表とし

ての女子アスリート、フリーマン Cathy Freeman の勇姿が目立った。彼女は陸上女子四百メートル決勝で優勝した。アボリジニ民族の旗とオーストラリア国旗を手にしていて。国内の聖火リレーの出発はアボリジニの聖地であるウルル（エアーズロック）だった。そして、オリンピック発祥の地ギリシャに戻るための2004年聖火リレー国際ルートの最初の走者は彼女だった。そのフリーマンは、盗まれた世代といわれる白豪主義の親子分離主義政策の犠牲者の末裔である。

この政策の反省は、Peter Read（ピーター・リード）という若い研究者の指摘が契機になっている。彼は、The Stolen Generations - The Removal of Aboriginal Children in New South Wales 1883-1969と題した報告書を1981年にまとめた（『盗まれた世代—ニューサウスウェルズにおけるアボリジニの子どもたちの移住について』。このタイトルで検索すればWebから簡単に入手できる）。オーストラリアの歴史の暗黒の部分を知るみにだした研究である。この政策はアボリジニを白人化する取り組みだったと結論づけた。アボリジニ的な生活様式を放棄させ、白人のように行動させるための政策が組まれた。アボリジニ民族の絶滅にむかう「品種改良」のためのジェノサイドだったという。1969年まで持続していたというから当時の子どもたちはまだ若い（しかし寿命が短いために若いけど、若くない）。

強制的な親子分離の典型例

親子分離政策は、アボリジニ家族がネグレクト状態にあり不適切な養育しかしていないという独善的な評価を前提にしている。

1950年代の「子ども保護」の典型事例として七人の子どもの家族の物語を紹介している。

まず、アボリジニ保護委員会がその家族を訪問する。視察官と執行官のリストに記載された子どもたちを点検した。調査の結果、保護の必要性ありと判断され、病院に八日間いた。その後バスにのり移動したが、家族の誰ひとりとしてどこにつれていかれたのかさえ知らされていない。さよならもいえず、突然、家族をなくした母はショック状態に陥った。回復できない傷となる。数ヶ月間、子どものことは情報なしだった。後にシドニーの白人家族の家政婦として長女は措置されたと聞く。母親はクリスマスのプレゼントを買い、シドニーに行った。母はその住所をみつけだし、家にたどり着いたが、そこに子どもはいない。どこに行ったのかもわからないという。何の情報も得られない。失意の中、母は村に帰った。その間、夫はアルコールに浸っていた。さらにその後2年間、何の連絡もない。最後に分かったことは、子どもの一人は死亡(公的記録では結核)、二人目の子どもは白人と結婚し、子どもをもうけた。3人目は7歳までいた施設の名前までわかったがその後は音沙汰なし。4人目と5人目は不明。単に消え失せたという記録のみだ。6人目は家に帰る。現在、20歳。アルコール依存症で過去を語りたがらない。7人目の少女が家に帰り、子どもをもうけたがその子も生後2週間で保護された。その子どもとは二度と会うことはなく、二世代かけてその犠牲者になったという悲劇の反復である。今はコミュニティで結婚し、生活している。しかし帰ってきた子どもが30歳になっても成人としての成熟はできていない。悪夢

に悩まされているという。その子どもは両親、特に母親を恨んでいる。強制的に保護されたことに責任があるという。子どもたちはなんともできない事態のなかでコントロールできない暴力をふるい、アルコールに依存していく。稼ぎの少ないなかでギャンブルもする。

アボリジニ保護の名の下に実施された政策

虐待から子どもを守るという理由は、しかし実際は逆である。引き離された子どもはいたところで虐げられた。白人の里親からはしつけだといって体罰を受け、雇用主も厳しい。保護の理由は、調査の時にみた子どもの状況である。アボリジニの母親は奔放な子育てをすると判断された。その時の母は七人の子どもを祖母に託して休みをとっていた。祖母はその母親がしているように食事の保護を申請した。子どもの利益のためにだ。六人の子どもに二つのベッドしかないのは貧しいからだ。スーツケースのなかで食料を保存していたことも悪い環境だと判断された。荒れ地のような家の周りも環境が悪いことになる。視察官が質問した。「これでは十分な居住ではないですね」と。そうかもしれないという返答は、分離への家族の同意として記録されていく。

強制移住させられた子どもの心理的トラウマも複雑である。大半は乳児の時から分離されている。施設をでて白人の家庭に入った場合の問題もある。白人のような行動と態度が肌の色を乗り越える、あるいは白人としての自己像形成の努力は自尊心を高めると子どもたちは育てられた。白人文化の優越性を洗脳されたアボリジニの子どもたちは、アボリジニの血を途絶えさせる目的をもつこの政策の犯罪性を理解すること

はできない。アボリジニを冒瀆し、その尊厳を奪う政策であることにこうして巻き込まれていく。分離の結果、口を閉ざす子どももいる。子ども時代を適切に過ごしていないこと、あるいは子ども時代の喪失の後への影響が大きくなる。養育力欠如、子どもをもつことそれ事態の回避、大人となった自分の不適応問題や自尊心の欠如、フラッシュバックする記憶、民族と歴史の否定に悩むこととなる。

和解への道

この強制的親子分離政策は盗まれた世代として定式化されていく。その支援団体「盗まれた世代連合 (Stolen Generation Alliance)」の推計では「盗まれた世代」はオーストラリア全体で5万5000人にのぼるとされる。子どもの強制隔離をジェノサイド行為だとした 1997 年のオーストラリア政府「人権・機会均等委員会(Human Rights and Equal Opportunity Commission)」の報告書は、先住民の子どもの3人に1人が隔離されたとしている。

こうした社会の認識の変化は相当な努力の結果である。まずは、アボリジニの尊厳の回復にとってオーストラリアの大地は誰のものかということが変化を促進させた。1972年のホイットラム労働党内閣は発足時、土地の返還を求めるアボリジニの要求に応えるために、一握の土を民族に返すという儀式を行った。オーストラリアが国としてこの土地問題に取り組んだのは、1992年6月の「マボ判決」である。最高裁判所は、トレス海峡の島に住むエディ・マボに対し、先祖伝来の土地の返還を認めるという判決を下した。初めて、部族の土地所有権を認めたのである。さらにこの判決を連邦法が

追認した。画期的であった。何故なら、それまでオーストラリアは「無主地」、つまり無人の土地と定義されてきたからである。歴史を書き換えることになった。

さらに、1992年、当時のキーティング首相が強制的な分離政策の事実を認めた。1995年、連邦政府は「盗まれた世代」についての全貌を把握するように「オーストラリア人権と機会均等委員会 (Australian Human Rights and Equal Opportunity Commission)」へ要請した。この委員会は“Bringing Them Home”(『子どもたちを家に帰す』)という600頁にわたる報告書を作成した(1997年4月)。この報告書は分離された人々の丁寧な聞き取りを実施し、ライフストーリーをもとにした読み応えのあるものだ。このタイトルで検索すれば入手できる。ナラティブセラピーのいう「ドミナント(支配的)なストーリーの書き換え」作業である。こうした努力の後、謝罪や和解のための活動が数多く実施されることになる。

しかし一筋縄ではいかず振り子が逆にふれる。2000年4月、保守政権であるハワード内閣は「親から無理矢理に分離されたアボリジニの子どもたちは僅かである。なかには必要性のある家族もいた。だからこれは世代と呼ぶほどのものではない」とした。市民は反発し、デモ行進がシドニーのハーバー・ブリッジ上で繰り広げられた。20万人のアボリジニや白人が集まったという。2000年のシドニー・オリンピックでアボリジニのリーダーや選手が自らの権利を世界中に訴えていく背景ともなった。

ようやく、2008年2月13日、オーストラリア政府は「盗まれた世代」政策に関して初めて公式に謝罪した。ラッド首相が政

府および国の代表として議会で謝罪したのである。

しかし先にあげたような数々の社会病理現象としてなおアボリジニ社会は傷跡を残している。文化的トラウマ、トラウマの世代間連鎖などとも呼ばれることもある。社会性を色濃く帯びた社会臨床的な課題はオーストラリアのアキレス腱でありつづけている。

二つの映画ー『裸足の 1500 マイル』と『サムソンとデリラ』のこと

以前、盗まれた世代のことを描いた映画、『裸足の 1500 マイル』（監督・製作：フィリップ・ノイス／2001 年／オーストラリア／1931 年）を紹介した。西オーストラリア州のアボリジニ保護局長ネビルは混血アボリジニの三人の子どもを家族から強制的に引き離し、施設に入れた。混血児を白人の社会に吸収していくためにである。西オーストラリアを南北に分かつ 5000 マイルにもなる 2 本の「ウサギよけの柵」を建設した白人男性が現地のアボリジニ女性に孕ませた混血児が存在したことがこの計画のひとつの源泉でもあるという。映画のなかで「混血児を文明化する、これがその答えだ。人種交配も三代で肌の黒さは消滅する。白人文化のあらゆる知識を授けてやる。野蛮で無知な原住民を救うことになる」とネビルが力説する場面が描かれている。

三人の少女は収容施設を抜けだし、その柵沿いに歩き続け家族のもとに帰ろうとする。彼女らを追跡するのもアボリジニ男性（この男性は最後に追跡を止めるがその際に微笑む姿が印象的だ）。逆に逃げる途中で優しいアボリジニにも出会う。同じように収容施設を終えたあとに白人家庭でメイド

として働く女性にかくまってもらうが、彼女はその家の家長にレイプされる。そうして生まれた子どももまた隔離させられていく。つまり、混血化を重ねることによる白人化とは白人男性のレイプを前提としていた、あるいは無責任なセックスを是としていたことになる。親子強制隔離政策はこうした意味でも罪深い。

さらに紹介しておきたいのは現在のアボリジニの若者を描いた『サムソンとデリラ』（2009 年／オーストラリア映画／ワーウィック・ソーントン監督）という映画である。その舞台は中央砂漠地帯の小さなアボリジニの集落である。祖母とその少女は点描画で生計を立てている。街で祖母の絵は高価な値をつけているが自ら手にするのはわずかであり、搾取がクリアに浮かびあがる。その祖母には持病があるが薬や医者嫌う（これも押しつけ型の医療を嫌悪する記号である）。祖母を看病して暮らす少女と、仕事がなく、きょうだいや家族からも白眼視されている青年が恋をする。彼はいつもガソリンの揮発成分を吸引している。若者に広がっている「ペترول・スニッフィング（ガソリンの揮発物質の吸引）」である。二人は中央砂漠の中心都市であるアリススプリングスにでる。スーパーマーケットで万引きし、飢えをしのぐ。橋の下でホームレス生活をする。少女はレイプされ、交通事故にあい、傷を負う。過酷な試練にアボリジニの現在が重なる。

「サムソンとデリラ」は聖書にでてくる話である。サムソンは破壊的な底力をもった強い男性、デリラはそれをうまく現実社会に着地させる役割をもつ。復讐の物語としてサムソンは最後にそのパワーを暴力で表現する。しかしこの映画で描かれている

アボリジニのサムソンは、その秘めた力を復讐の殺人劇にはしない。「君にはまだ発揮できていない未知なる力がある。アボリジニの将来は確実にその力のようにして潜在的にあるのだ。しかしそれを暴力で発揮してはいけない。和解の世代として異なる役割を果たせ。」という監督のメッセージがこのタイトルにこめられているように思えた。「目には目を、歯には歯を」ということでは、暴力が増幅していくだけである。聖書以降、その繰り返しだったのではないかと文明への批判も込められている。けれどもそうした意味でのサムソンの力はまだ発揮できていない。和解をすすめることを期待される若い世代にとって、将来に禍根を残すことになる暴力は振るえないことはわかっている。アボリジニ青年は別のかたちでその魔力を発揮すべきなのだ。しかしまだ方策は見いだせていない。吸引していたガソリンを棄てるデリラが象徴的である。暴力ではない和解と自立の方策が模索されていくだろうことを暗示して二人のコミュニティでの暮らしがはじまる。未知の力に未来に託した監督のメッセージでもある。

これらを起点に対人援助や支援とは何かを考える

この夏、8月5日から9日まで、「第16回国際犯罪学会」が神戸ポートアイランド・国際会議場で開催された。大規模な学会だったので全体がどうなっているのか俯瞰しにくい。修復、回復、治療という視点から犯罪や非行等の逸脱行動への対応をすべきこと、そうした見地から刑事司法のあり方を考え直すとする発表やシンポジウムが目立った。とはいえ、学会なので、狭い意味でのディシプリンはやはり蛸壺的

に強固であり、犯罪と非行の将来を考えるという全体の主題の学際性と、個々の研究者がもつ狭い専門志向は水と油のようにしてあった。せめて、私たちは対人援助と支援の未来を構想するにあたり、学問の縄張り争いだけはしたくない。

日常から逃れて学問動向を集中的に摂取しようと、私はその学会にへばりつくように参加していた。ずいぶんと有益な話ができ、新たにつながりもでき、また旧知の研究者や司法領域の実践者と交流できた。そのことはおいおい記していくこととするが、なかでも、個人の問題と社会の変容の両面を考えるという社会臨床の立場からすると、修復や回復と、それをささえる新しい枠組みを形成することの重要性を改めて感じるが多かった。3.11を体験した日本で開催されたということの、復興や復旧にかかわる意味も大きく存在感をもっていたこともあるが、被害と加害のかかわりを問う、あるいは被害と加害の連鎖を扱う、そしてそれらをなくす方策を探るための、謝罪、反省、熟慮、和解、回復、治療の具体的な制度、実践、臨床のあり方に関して、いくつかの結節点をもとにして、方向性を帯びた像が線のようにして結びつき、可視化されつつあることの確認が、私なりできたことがとても実り多かった。

また、かかわりのある「奈良ダルク」（薬物依存症の治療共同体）の6周年記念講演のために来日していた「アミティ」（アメリカの治療的共同体）の代表を務めるナヤ Naya と再会した。そして、私が加害者リハビリの理論的モデルにしていたニュージーランドのトニー・ウォード Tony Ward の研究仲間であるアンソニー・ビーチ Anthony Beech（イギリス・バーミンガム大学の司法

臨床心理学者)と性犯罪者処遇の新しい動向の話をしてしながら学会の合間をぬって京都の禅寺を周った。イギリスでは「サークル」という性犯罪者の新しい社会復帰の取り組みが広がっているという。その彼と話をしながら、少年刑務所で取り組む性犯罪者処遇のための認知行動療法的なプログラムの「限界」を日頃感じていたが、それに何を接ぎ木すればよいのかの方向性を模索できた。

また、かねてよりとりくんでいる大阪の児童相談所の「家族再統合」の具体化のためのファミリーカンファレンスを開催し、虐待を乗り越える家族づくりに虐待当事者も参加し、子どもの利益をめざして自ら決める再統合の実践にむけた取り組みが複数の家族を対象にして進んだことも、流れとしては間違っていないと思えた。これらはこの連載で紹介していきたい。

海辺のカフカ少年とアボリジニのサムソン

この連載では「臨床」という言葉を用いているが、内実としては回復の場をつくり、そこに臨むということなので、「臨場」という言葉がふさわしいと考えているのはこうした文脈によるからである。暴力と虐待の加害者向けのグループワークはそうしてできた。依存症者たちのダルク、断酒会にも出かける。家族のやり直しにむかって脱虐待の関係性の輪ができる。別に紹介しようと思っているイギリスの「サークル」も同じ原理である。これらを集めると、世界中で、わりと共通した取り組みがあり、いいものはどこでも定着しつつあることを感じた。

オーストラリアにいたときに、観光で中央砂漠にある「エアーズロック」にいった。

アボリジニたちが「ウルル」と呼ぶ聖地なので登らないことを希望すると書かれていた。だから多くの観光客は登らない(外国からの観光客の多くは日本人である)。アボリジニが活躍するアートとスポーツもよく目についた。しかし他方で、ここで紹介してきたような厳しい生活の現状があり、そしてだからこそ通例の支援、臨床、援助では十分に対応しにくい事への、概念、視点、発想を大胆に組み替えるべきことを示唆してくれる問題群があることの理解をすすめたいと思う。そのために、とりあえず、「臨床の知の脱植民地化」である。具体的な場づくりをとおして回復の事例を積み重ねるしかないのだろう。そうした類似の経験が交流できればよいのではと思った。

15歳のカフカ少年は自ら荒野に飛び出した。アボリジニのサムソンは未知なる力を秘めて荒野で暮らす。二人はこうして重なった。これまで有効に生きてきた人間がつくった柵はどうすべきなのか、いったんつくった柵のなかで生きてきた私たちはどうすべきなのか、柵のなかでできた支援の「思考と概念」をもってしまった臨床の知はどうあるべきなのか、しかしその荒野にも暴力が溢れていることをどうすべきなのか、社会臨床の視界として考えていきたい話題が豊富にある。

なかむらただし(社会臨床学)

ケアマネの出会った 家族たち

6

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

予想外の人生の道のり

悲しみを乗り越え一歩踏み出す

私たちの歩む人生には、「こんなはずではなかった。」というような予想外の出来事があります。何かを失い深い悲しみにくれてしまうこともあるでしょう。そんな時、対人援助職としてどんなことが支援対象者にできるのでしょうか。ケアマネジャーであれば、介護の問題を抱えた人にあれこれと、サービスの情報提供や、サービス利用調整をスピーディに行うことでしょうか。それも間違いではないでしょう。けれども、私たちは予想もしなかった出来事に遭遇した時には、驚きや、不安や、悲しみや、苦しみ、そんな痛みを感じているのではないのでしょうか。その痛みや苦しみは誰が代わることもできません。当事者が乗り越えなければならないことです。けれども十分に悲しみくれ、その感情を自分自身で受け止められた時、悲しみの中から一歩足を踏み出すことができるようになると思うのです。悲しみが癒えるプロ

セスを理解しておくことは対人援助職として大切なことだと思います。

悲しみの中にいる人の状況に寄り添う事にも力が要ります。黙って寄り添う、そして時には悲しみに打ちひしがれて何も見えなくなっているその世界に一筋の光をもたらすことができたなら、それは大きな支えになるだろうと思います。情報の提供、サービス調整を淡々と行っていくだけでなく、悲しみにしっかりと寄り添う支援ができるようになりたいと思います。

予想外の出来事

広さん65歳は妻恵美子さん60歳との二人暮らしです。農業をしながら三人の子供を育てあげましたが、子供たちは家業を継ぐことなく都心へ出て働いています。三人とも家庭を持ち子供を育てながら幸せな暮らしをしています。

そんな子供たちの生活について、広さん夫婦は特別不満や心配ありません。「これからの農業は大変だから、勤め人の方が安心かもしれない。それぞれが元気にしていれば、後は自分たち

が二人で続けられるまで(農業を)続けるけれど、程よい頃に畑はやめるよ。まあ、70位までかな。その後は、母さんと二人でのんびり日本中を旅行して歩きたいな。」近所の人が来る度に広さんは笑顔で話をしていました。

米の収穫も終わり秋蒔き小麦も完了し北海道ではいよいよ冬を迎える11月初旬でした。畑の片づけも目途が立ち、本格的な冬を迎える前に、近くの温泉旅行の予定を立てていた広さんと恵美子さんでした。その日は広さんが「旅行前に用事を済ませて来る。」と言って作業用の軽トラックではなく、自家用車を運転して出かけました。

夕方になり広さんの帰宅を待っていた恵美子さんでした。11月の夕方はあっという間に真っ暗です。その日は雪が降ってくるような寒さでした。恵美子さんが夕飯の支度をしている時に救急車の音が遠くで聞こえていました。そして間もなく自宅の電話が鳴り響き、恵美子さんには嫌な予感が走りました。

介護という孤独との戦い

「温泉旅行に行こうなんて言わなければ良かった。父さんは旅行の前に、タイヤ交換や車の点検をしてもらうから、と出かけたのよ。そんな準備がなければ事故には合わなかったのに。」病院に駆けつけた子供たちの前で恵美子さんは泣き崩れました。広さんの運転する車は所用を終え自宅に向かう途中、やや凍った路面でスリップしてきた対向車が正面衝突してきたのでした。それから、一週間ほど広さんの容体は、危険な状態でした。峠を越えた広さんに恵美子さんも子供たちも一安心です。その後の経過は順調でした。体中の傷も徐々に回復し起き上がる事も、立って歩くこともできるようになったのです。

あの事故から一年がたちました。広さんはまだ入院していました。勿論、傷は全くありません。歩けます。見舞にやってくる恵美子さんとは普通に会話しているように見えるのです。「お元気そうですね。まだ退院はできないのですか。」そんな言

葉を、他の患者さんや家族の方からかけられることもありました。

恵美子さんはその度に心が重苦しくなりました。広さんの体の動きは全く問題ないのです。けれども事故の影響が脳に及んでいました。「高次脳機能障害です。」医師からはそう告げられました。広さんは、脳の極めて重要な部分が事故によって障害されました。日常生活を行うための様々な判断力や実行するための機能が失われてしまったのです。話すことはできていても、その話には妥当性がなく、衝動的に怒ったり泣いたり、突然立って歩き出し「仕事に行く」と言っでは、静止の声も手も振り切ってどこかへ行こうとします。病院内でも目が離せない状況です。それでも、医療的な治療や処置が必要ない段階になりいつまでも入院していることはできないのです。病院のソーシャルワーカーからは退院の話がありました。恵美子さんはワーカーさんの説明も十分には理解できませんでしたが、その勧めに従ってまずは『介護認定』の申請をすることにしました。その結果広さんには『要介護4』という認定がありました。ソーシャルワーカーは介護保険サービスの利用によって自宅生活が可能になるのではと説明しました。そして、退院後、介護保険サービスの利用がすぐにつながるようにと、地元のケアマネジャーへと連絡が取られました。

連絡を受けたケアマネジャーは、退院前に広さんの状況を確認する為に病院へやってきました。そして、恵美子さんへ介護保険サービスの説明を始めました。

「弘さんは、事故の影響で判断や理解力が障害されたようですね。奥さんが一人で介護されるのは大変だと思います。デイサービスや、ショートステイサービスもあるので、そのようなサービスを組み合わせて自宅で生活できるようにしましょう。」ケアマネジャーは、広さんや恵美子さんの意向を確認する前に、介護保険サービスについてスラスラと説明を並べました。これには、広さんも恵美子さんも訳がわかりません。それでも、1年前とは

全く状況が変わっています。どんな生活が始まるのかも予想がつかない中では、何やら詳しいこのケアマネジャーに頼るしかないのです。言われるがまま聞いていました。そして、ケアマネジャーは「自宅での介護は大変なこともあるでしょうが、頑張ってください。」そう言って病院を後にしました。恵美子さんには「頑張ってください。」という言葉がとても重く心の中に残りました。これからの自宅での生活は、大変だけれど、頑張らなくてはならないのか、そう思うと気持ちが重たくなったのです。

恵美子さんの心の準備が整う前に退院日が決まりました。病院のスタッフに見送られ、広さんと恵美子さんは仕事を休んで迎えにきてくれた長男の車に乗り一年ぶりの自宅へ帰りました。

自宅に入り居間のソファに座ると「父さん、懐かしいでしょ。」長男の一雄さんが弘さんに声をかけます。広さんは奇妙な表情をしています。そして急に立ち上がると玄関の方へ歩き出しました。

「父さん、どこへ行くの。」一雄さんが、広さんの腕を掴むと、それを強く振り払い険しい顔つきになりました。「うるさい。」そう言って外へ駆け出しました。広さんを追ってその手を掴まえると、広さんの口調は一段と強くなって「仕事だよ。仕事。」と言います。一雄さんが、なだめるよりは半ば、力づくで、広さんを家の中に連れて戻ります。一雄さんは自分の父親の様子にショックを受けてしまいました。この日から、広さんは自宅にいるという事が理解できない戸惑いに、昼夜を問わず家から出ていこうとしては、恵美子さんに止められ、すったもんだの挙句に家に連れ戻されるという状況です。恵美子さんは夜もゆっくり休めません。冬の北海道、外へ出て行って、家に戻れなくなればどこかで倒れ凍死することだってあり得ます。そんな心配に恵美子さんは心も体も休まる暇がありません。そんな中、初めて利用するショートスティの日がやってきました。ある程度恵美子さんに休養を、というケアマネジャーの計らいもあって、ショートスティの利用は1週間で組み

ていました。最初の2日間は恵美子さんも、疲れが出たのか、日中も夜もひたすら体を横にして休んでいました。3日目の事でした。利用中の施設から連絡が入りました。「広さんがすぐにどこかへ行ってしまおうとするので、施設でも安全に過ごしていただくのは難しい状況です。今回は初めての施設利用でもありますし、あまりご本人にも無理をかけるのもどうかと思うので、予定を切り上げお家で過ごしていただきたいと思うのです。」という内容でした。恵美子さんは、すぐにタクシーを呼び施設に行きました。

施設内では、広さんは車イスに座っていました。歩くことができる広さんが、何故車イスなのか、恵美子さんはしばらく不思議でした。施設の説明によると、広さんは昼も夜もどこかへ行こうとして歩きだす。本人の安全のためには車イスを利用していただく以外、方法はない、とのことでした。恵美子さんは、介護する人の疲労感は痛いほど理解できました。施設職員の説明には反論できません。一方で、しっかりと歩くことができる広さんのことを思うと、車イスに座っている姿を見ていることは恵美子さんにとっては耐えがたいものでした。恵美子さんは、再び広さんと一緒にタクシーで自宅に戻りました。

施設の中で車イスに座ったままの広さんの姿を見ているのは辛かった恵美子さんですが、自宅に戻ると再び出歩く広さんを止めることには一日と身が持たない恵美子さんです。時には夜中に外へ出ていこうとする広さんを力いっぱい引っ張りベッドに連れ戻している途中に「何故わかってくれないの」という叫び声と共に手が挙がってしまうこともありました。妻に手を挙げられた広さんは肩を落とし泣き出すのです。そんな姿を見て恵美子さんも涙が出てきます。広さんに優しくできない自己嫌悪と、長く連れ添った広さんのこれまでとは違う姿に対する悲しみで押しつぶされそうになります。広さんがベッドに戻り再び眠りにつく朝方、恵美子さんは枕に顔をつけて声を押し殺して泣いていました。

朝は、ディサービスに送り出します。どんなに寝不足の朝でも恵美子さんは笑顔です。ディサービスの職員が「奥さん、大丈夫ですか。」と声をかけても「大丈夫です」と元気に答えます。ケアマネジャーが月に一度の訪問に来て「大丈夫です。計画通りをお願いします。」そう言って、ケアマネジャーの立てる計画に同意をします。不満は全く表出されませんでした。けれども、恵美子さんには誰にも言えない深い悲しみが心の奥で溜まっています。ケアマネジャーに病院で言われた「自宅で介護を頑張ってください。」という言葉は恵美子さんが弱音を吐くことを許さなかったのです。介護という孤独との戦い。一人で過ごす時間には、涙が止めどなく流れてくることもありました。

恵美子さんが介護と戦っているある日のことでした。古くからの付き合いのある友人が恵美子さんのところにやってきて「自宅で介護をしている人が集まって、日頃の想いを自由に話し合える場所があるのだけれど、一緒に行ってみない」と誘ってくれたのです。恵美子さんは、その集まりがどんなところかよく理解できていませんでした。けれども、広さんとのこの二人の生活について誰かに話を聞いてもらいたい、という思いがありました。それは、ケアマネジャーや介護サービスを担当する人には言えない悩みでした。介護のことや、サービスに対する多少の愚痴めいたことを言ってしまうのではないかと、という不安があったのです。恵美子さんは友人と一緒に介護者の集うサロンに参加しました。

あなたの夢はなんですか。

その日、サロンに集まったのは6名の介護者でした。その中の一人が話を始めました。「ご家族の介護で日々頑張っておられる介護者の皆様、お疲れ様です。普段の想いを今日はここで思う存分、気がねなく話し合って明日が今日よりも身軽な日になりますように、限られた時間を大切にしましょう。」という言葉のあと、この集いのルールが説

明されました。恵美子さんはやや緊張しつつも、耳を傾けました。ルールは3つあります。一つ目は誰かが話を始めたら最後まで遮らずに聴く。二つ目は、発言者がアドバイスを求めた時以外はアドバイスをしない。三つ目は、この会で話したことは、今日この場限りのことであり他の場所や他の人に言いふらさない、という内容です。そして、説明していた人が自己紹介をしました。「私は、ケアマネジャーの〇〇です。皆様の日頃の想いを聴かせていただきたいと思いますのでよろしくお願いします。ケアマネジャーの立場ですので、もしも、介護保険サービスに対する疑問や質問は勿論、日頃お悩みになっていることがあれば一緒に考えさせていただきますと思います。」恵美子さんは、ケアマネジャーというその女性の顔をしみじみと眺めていました。「この人なら話をしても大丈夫かもしれない。」そんな気持ちになっていました。集いは、そのケアマネジャーの進行によって、参加している介護者が日頃の想いを話始めました。一人が話し終わると、誰が指図するわけでもなく話しが次の人へとつながれます。初めて参加した恵美子さんが話を始める時がきました。恵美子さんは、広さんが事故にあった話、一年間の入院生活の後、どんな生活がスタートするかもわからず、介護のサービスがどんなものかもわからず、ケアマネジャーが何をしてくれる人なのかもわからず、必死の介護を続けてようやく一年がたったと言います。まだまだ毎日が戦いです。ディサービスやショートステイに行ってくれると唯一自分の休息時間になります。毎日、外へ出ようとする広さんを止めては悲しくもなりイライラもするけれど、ショートステイでは、歩ける夫が車イスに座ったままでじっとしている姿を見ているとせつなくて仕方ない。それでも、介護のお世話にならなければ、自分一人では生活は続けられない。毎日が、悲しみの中です。仕方無いですが。そう話終わると、恵美子さんの目からは涙が溢れました。聴いていたその他の参加者も沈黙です。誰もが、恵美子さんの気持ちが自分のことのように理解できるから

こそ、安易な言葉など出ないのです。

「少し、お話してもよろしいでしょうか。」ケアマネジャーというその女性が話を始めようとしてしました。皆がケアマネジャーの方を向きました。「私は、ケアマネジャーです。皆さんの所にも、担当のケアマネジャーさんがいると思います。私たちの役割は、介護を必要としている方や、そのご家族の方が暮らし続けるために、生活上の困りごと、介護に関することを一緒に考えていく役割があります。困っている問題をどうやって乗り越えていくか、望む暮らしのためには何が必要か、一緒に考えていきます。介護が必要なご本人はもちろんのこと、その方を支えているご家族の方の悩みも一緒に考えていく役割があるのです。ケアマネジャーとして、皆さんがご自分たちの望む暮らしの実現のために、ご本人やご家族が最善の選択や決定ができるように、お役にたちたいと思っています。恵美子さん、ご主人が退院されてから、さまざまな戸惑いや苦しみの中これまで介護されて本当にお疲れ様でした。介護の大変さがわかるが故に施設での車イスに乗っているご主人のお姿を目にするのは苦しいことですね。そのお気持は、担当のケアマネジャーさんにお話したことはありますか。」恵美さんは、ケアマネジャーにはそのようなことは言えない。お世話になっている施設に何か気分を害しても、サービスを受けてもらえなくなると、自分も困るので今はまだ何も言いません。と答えました。そして「でも、今日はこうして今まで言えなかった想いを皆さんの前で話すことができたととても心がすっきりしました。また少し明日から頑張ろうと思います。皆さん、介護で毎日大変なのですね。私だけじゃない、と思えることができ安心しました。」そう話す恵美さんの表情は集いが始まった時より幾分明るい表情です。参加者はそれぞれに「またこうやってお話しましょうね。」と言葉を交わしていました。予定されていた集いの終了時間が近づいてきた頃、進行をしていたケアマネジャーが言いました。「今日は、日頃の想いを色々聴かせていただきましてありがた

うございました。最後に、皆さんの夢をお聞かせいただきたいと思います。介護があるから叶わない、ではない、もし叶うとしたらこんなことができたらいいな、という夢です。誰のためでもなく皆さん自身の夢です。」そう声をかけると、少しの間それぞれは考え込むようにしていました。その中で最初に表情が変わったのは恵美子さんでした。その表情を捉え、「恵美子さんの夢はなんですか」とケアマネジャーが尋ねました。「私は、主人が事故にあって入院していた一年。そして退院して介護を始めて一年。この間、受け入れ難い現実を前にしての悲しみと、それでも続けなくてはならない介護に無我夢中でした。自分のことなど考えることすらなかった。でも、今、思い出しました。あの日、主人が事故に合わなければ温泉旅行に行く予定でした。もし、叶うのなら、主人と温泉旅行に行きたいです。」そう話す恵美子さんの表情は生き生きしています。聴いていた人たちからも拍手が沸き起こりました。「きっと、その夢は実現できますよ。そのために、どうぞご主人の夢をケアマネジャーに伝えてみてください。温泉旅行ができるようにきっと良い知恵があると思いますよ。」そう言って集いは終了しました。

さて、その後広さんの担当ケアマネジャーが交代しました。新しいケアマネジャーは、じっくりと広さんと恵美子さんの話に耳を傾けてくれます。「広さんと奥さんの夢はなんですか。」あの時の女性ケアマネジャーと同じ質問をされました。恵美子さんはにっこり笑って言いました。「温泉旅行に行きたいです。今年はまずは日帰りで、来年は一泊で温泉旅行に行きたいです。」ケアマネジャーは、温泉旅行が可能になるように、何が必要か恵美子さんと一緒に考えました。時折「仕事」と言ってはどこかへ歩き出そうとしてしまうため、恵美子さん一人の付き添いでは不安があるとの事です。そこで、恵美子さんに協力者を探すことにしました。協力者がいれば日帰り温泉旅行はそれ程難題ではないと考えました。あれこれ、話しをしながら広さん恵美子さんと古くから付き合いのある方

が協力を申し出てくれ、あっという間に、日帰り温泉旅行は実現されました。次は宿泊も兼ねた旅行が目標になっています。そして、二人が新婚旅行で訪れた観光地へ行く計画を立てました。駅の階段昇降や、舗装されていない観光地でもしっかりと歩くことができるように、広さんと恵美子さんは駅まで歩いたり、階段を上り下りしたり、時には畑の中を歩くなどして、体力作りをしていました。それが、広さんのケアプランなのです。

そして、今年の温泉旅行は・・・無事に楽しむことができました。そう、40年前、お二人が新婚旅行へ出かけたあの土地へ・・・

あなたの夢は、何ですか？

＊プライバシー保護の観点から事例は事実情報を加工しています。



＊長い冬が終わり、雪解けの頃、夫婦が汗水流して働いていた田んぼには、白鳥が飛来します。白鳥たちが羽を休めて再び飛び立っていく頃、広さんと恵美子さんも二人の夢に向かって活動開始です。

街場の就活論

Vol. 6

一新卒採用に今、何が起きているのかー

2012年春入社就職活動が、終息に向かっています。電車の中には、疲労気味のリクルートスーツ学生が増え始めています。彼等を見ると「就職活動は自分に合わない」と結論づけるのもありだぜ、と無責任に思うのであります。

団遊 (だん あそぶ)



講演より公園！ 遊んで気付く キャリアの入り口!?

とある学校から、初年次のキャリア教育プログラムについて相談を受けました。初年次とは、大学1～2年生時のコトを指します。早期に職業観や社会で生きるとは!? を伝えていくことは、どの大学でも今、とても重要なことと捉えられているようです。

「思いっきりみんなで遊びに行くというのはどうですか？」と僕は答えました。別にふざけているわけではありません。「職業観やキャリアは教えることができる」という思い込みから、職員や教員は抜け出した方がいいと思ったのです。

僕は、気付けば5年あまり「キャリア」をテーマに授業をしたりしていますが、一度もキャ

リアを教えるという立場に立ったことはありません。教えるほどの知識蓄積もありません。一時、臨床キャリア論とか言っていましたが、それは誰にでも語れることであって、つまりキャリアは生きることそのものだと思います。生き方を人に教えるなんて、宗教家でもそんなにおこがましいことは言わないぞ、と冷ややかに見えています。

ところがキャリア教育という言葉が広がると、その効果が期待され、やがて結果が求められます。その先で、人生は損得で語られるようになり、「損をしない人生」を指導しようと、就職活動に成功する方法の授業が流行り……と、人の可能性を、キャリア教育という名のもとでどんどん狭めていくようなスキームが描かれていきます。鼻の利く人がビジネス化していく側面もあるのでしょう。頭髪、肥満といった劣等感あり系のビジネスは、劣等感の維持にいつの時代も躍起です。キャリア教育も「最近の若者は

だらしない」という不確かなムードの影響で、世の中が漠然とした期待を持ち、ビジネスというフィルタを通して自分たちがコントロールしやすいようにパッケージしていった。その形が、今日的なキャリア教育だともいえるでしょう。

「思いっきりみんなで遊びに行くというのはどうですか?」。この提案で僕が考えたことは、例えば公園に行って散々遊んだ後に、みんなで輪になり、「公園ってそもそも何?」「これ必要?」などをざっくばらんに話そうぜと思ったのです。そこに、きっと学び（気づき）の種があるからです。



↑これもいい教材だと思う! たぶん。

僕のキャリアの授業はインターンシップ体験を軸に構成されています。行く前と行った後が、いわゆる授業です。その中では、以前も書きましたが、たくさんの先輩にキャリアインタビューすることで「人はいろいろ決断して生きている」ということに気付いてもらおうとしています。

けれど、学生声を拾ってみると「団さんの授業はたのしかった! 役立った!」と言ってくれるものの「どこが?」と聞くと「インターンシップ先で、初日とにかくフロア中の名前を覚えろと言ってくれた」「メモを必ず持ち歩けと言ってくれた」「言った通りやったら本当に可愛がってくれた」など、具体的な処世術が多く出

てきます。

これはこれで、大事なことだと思っているのですが、本当に伝えたかったことと伝わったことは違う、という多くの年配者が感じる感想に、僕もいきつきます。ところが、インターンシップの現場に表敬訪問して 30~40 分ほどのミニ授業をしたときは、手ごたえが違います。緊張感の中、ピンピンに感じているので、聞いていることが違うし、入り方が違うのです。

「担当部長と何とか食事に行きたいと思うのですが、話しかけることすらできません。なぜでしょうか?」

こんな質問は、授業ではまず出てきません。そして、こんな生な会話が、何よりも学生自身がキャリアを考えるきっかけになりえると、僕は考えるのです。

今週は釣りに行きます。来週はバーミヤンでご飯を食べます。再来週は Jリーグの試合を見に行きます。こんなシラバスだったら、講義はきっと大人気でしょう。出席率もきっと高いと思います。でもただ遊ぶだけでなく、遊びつくす中で「さて?」と少し考える。公園で遊ぶことに熱中できない自分と出会えば「それはなぜか」と考える。生きることの縮図が、そこで再現される一面があると思うのです。少なくとも、大教室の中よりは。いつかどこかで、実践してみたいと思います。

団遊（だん・あそぶ）

「課題解決や理想実現に向け、モノやコトをすることで 変化と刺激を生み近づけること」をモットーに幅広くプロデュース活動中。

<http://danasobu.com>

心理療法が始まるまで

(6)

ーコミュニティと病院でー

藤 信子

英国の精神病圏（主として統合失調症）の認知行動療法（以下 CBT とする）のケースブック（Morrison ed. 2002）の抄読会を続けている。毎月 1 回夜の 2 時間を使っているし、メンバーもベテランから若手までと幅広いため、最近のアセスメントのことから古典的な診断についてなど、寄り道しながらゆっくりしたペースだけれど、この幻聴や妄想に対する CBT は、クライアントと問題を定式化して共有しながら進めるテラーメイドなものである。ケースの特徴とセラピーの進め方はよく見えて面白い。ところで、さてこの方法を私たちのクライアントに適用できるか、という話になって、すぐにはできる、という話にならなかった。考えてみると、この本のケ

ースは、妄想で日常生活が制限されていたり、幻聴で困っていたりしている人たちである。私たちの読書会のメンバー（臨床心理士、精神保健福祉士、精神科医）のところに相談に来ている人（受診している人）は、「こんなことを言われるので困っている」とはあまり言わないので、その症状を取り上げる話にならないのだろうか。幻聴で「困っている」とは言わないから、取り上げにくいかなと話していた。

相談機関や医療機関での「主訴」は、来談者のその時の主な訴えで、complaint を辞書で引くと（ジーニアス英和大辞典）1. に「[・・・に対する/・・・についての/・・・という] 不平、不満、泣きごと、愚痴・・・」

とあり 2. に「不平（不満の）種；〔時に婉曲〕（身体の）病気」とあり、3. は法律のことばで「不服申し立て；告訴・・・」とある。困ったことを訴えている、という感じ。ここで病気の主訴を引くと、法律用語と重なることを見た時に、以前若手の弁護士さんたちと話をした時、「電波で〇〇されている」と事務所に相談に来る人がいるが、それは実際の電波ではなく、訴える人がそのように感じたり、思ったりしているらしい、そういう時はどのように対応したらよいだろう、ということだった。このような体験を弁護士さんは結構しているような話だった。

これは、困りごとを訴えることでも、相談する場所が違うことになってしまっていると、法律家も聞いた私もの感じるのは何故だろう。

「妄想らしい」ということ思うのは、話されているような電波を出すことは、物理的には無理だろうというような話が多いからだけれど、何が起きているのだろうか。法律事務所に訴えていくのは、困ったことが起きているのは、それを引き起こす人がいて、そのために自分は困っているからどうにか対処したい、ということだろう。「相手に困らされている」と思っている状態である。ただ、話を聞いていくと、困らせる人や組織が某国のエージェントであったり、テレビで私に合図をしてきたりする、と言われると聞いたほうは「ちょっと話が飛躍している」とか「考えすぎのよう」とか思って、法律上の問題ではない、と

感じることになるのだろう。このあたりが「まさか」というような話と「隣の人が・・・」と言う話しになるとちょっと簡単にはわからないことだけれど、統合失調症の場合は、治療が始まっていない場合、「自分の外で」何かが起きている、と感じる人は多いようだ。これは簡単に言えば、自我境界が脆弱な状態になっていて、自分の不安が外に投影されている状態と言うことになるのだろう。病院や診療所では、自分が「困る」より、他の人に勧められて受診するのは、まだ本人が「困っている」という感じになっていない時に、家族や職場の人が心配して受診を勧めることになることが、多いのではないだろうか。

この自分の外に何か悪い状態になっているということであれば、当然周りをどうにかして欲しいという訴えになるのだけれど、はっきりそういう人は、統合失調症の場合、そんなに多くはなさそうでな印象がある。はっきり周りが悪いというように思う人（被害妄想など）もあるけれど、起きていることが良いことか悪いことか明確でなかったり、こんなことを言えば、普通と思われないので言わないでおこうと不安に思っている人もあるみたいなので、何が起きているのか、わかりにくい（これは多分本人も援助者も）ことがあるようなのである。推測で書いているのは、今まで私が話してきた人達の体験からそう考えているからである。

心理的な相談が始まるのは普通、「人と付き

合うのが苦手」「学校に行きたいけれど行けない」等、自分が困っているからそのことを解決したい、とうことから始まるけれど、精神病圏の場合、「自分がこのことで困っている」ということになりにくいようである。この点に関して、受診を勧められて来た人に、まず眠れているか、食事は食べられるかなどからだの状態を心配して話しかける、「身体化」して考え援助を始める方法（田原 1996）は、参考になる。急性期の人、考えすぎて疲弊している印象があるから有効なのだと思う。

では、それから「幻聴」や「妄想」に対して、どのようなアプローチをしていくかと言う時に、それが自分を悩ましている、と考え相談するまでは、どんなステップがあるのだろうか。私の経験では入院患者さん同士が、自分の状態を話していると、「あのことは幻聴だったか」と思うことにいたった人があった。自分の経験を医療スタッフをはじめ周りの人に話せる場があることは重要なことだろう。そういうことを重ねていくことで、困っていることが自分中に起きていることだと気づきそのことを一緒に考えられるようになるのではないだろうか。

MORRISON, A.P. (ed.) (2002) A Casebook of Cognitive Therapy for Psychosis. Hove and New York, Brunner-Routledge

田原 明夫 (1996) こころ病む人を支えるコツ. 大阪、解放出版社

誌上ひとりワークショップ (中編)

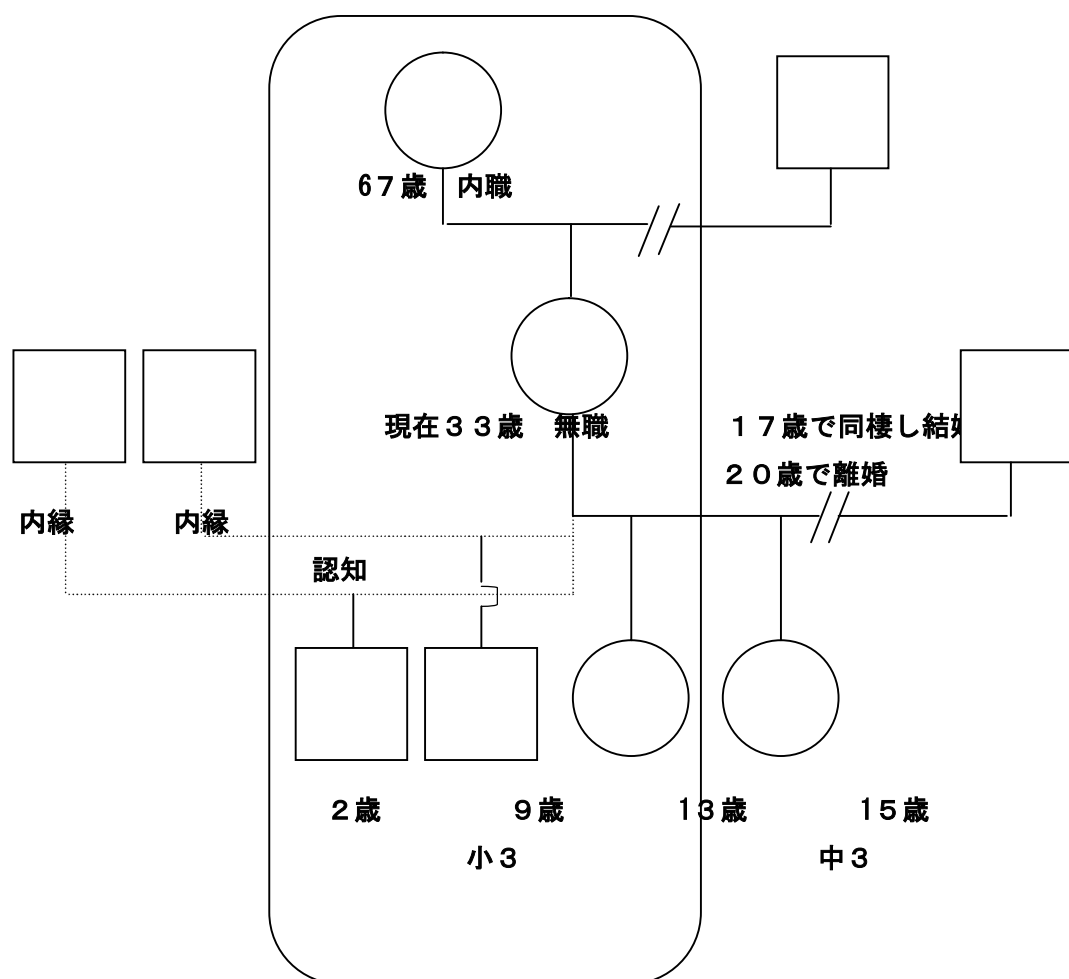
～家族を知る、家族を見立てる～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

「前号に引き続いて、誌上ひとりワークショップを進めていきたいと思います。今回は、ジェノグラムを通して「家族を読む」作業でした。今回は、お手元にお配りしてあるフォーマットに従って「家族を知る」手順をすすめていきます。3ヶ月も前の話なので、ここでもういちど事例検討のためにアレンジした症例をおさらいしておきます」。

演習事例の家族関係図（図1）



「主役は、28歳の男性(A 氏)の部屋で、二人でシンナーを吸引しているところを警察に補導された15歳中3の女児です。Aとは結婚の約束をしているといいます。

本児はやせていておとなしく、影が薄い感じです。頭痛や不眠を訴えますが、幻覚・妄想は認めていません。食事は極めて小食。一時保護中の検査では、知的に軽度の障害がありました。

母は広島県で生まれ、小 1 のとき母方祖父母が離婚、祖母に引き取られました。母も、小学校時代から万引き・深夜徘徊で何度か児童相談所に一時保護されています。中学1年で家出し、臨県に住む祖父のところへ転がり込み、そちらの中学校に転校しました。高校在学中に、暴力団関係者を自称する本児の実父と知り合って同棲し、高校は中退しました。18歳のとき、本児を妊娠して出産。二人目(妹)を出産直後に実父と別れ、祖母を頼って広島県に戻りました。祖父母からすれば、晴天の霹靂です。それ以降、本児の実父・祖父とは音信不通になっています。

翌年、母は二番目の男性と付き合いようになり、毎日足繁く通いました。子育てはせず、本児や妹の世話は祖母がしていました。本児は、二番目の男性を父親だと思っていました。この男性はアルコールが入ると乱暴になりますが、本児に暴力をふるったことはないようです。

祖母は母とは言い争いをしても、孫たちにはやさしかったとのこと。やがて二番目の男性との間に男児が生まれました。しかし認知してもらえず、男性とは疎遠になりました。母は男児(異父弟)を引き取り、祖母に託しました。

このころから徐々に本児が不安定となります。小1半ばには、徘徊・ケンカ・盗み等を頻発するようになりました。しかしながら母はあいかわらず家を空け、学校との連絡はすべて祖母がしていました。当時、本児は『母親とはそういうもの』と思っていたようです。収入は祖母の内職と児童手当で、ギリギリの生活でした。

その後、母は出会い系サイトで知り合った三番目の男性と交際を始めます。そして本児が小6のとき、その男性が住む神奈川県に引っ越しました。本児としては卒業まで祖母宅にいたかったのですが、妹弟が行くというので従いました。

母はその男性とは同居せず、近くに住んで生活保護を受けました。男性は訪問販売をして全国を転々とする人で、不在がちでした。

本児は、この男性を極端に嫌いました。二人きりになることを避け、母親が不在のときは夜遅くまで徘徊しました。この頃、家出・リストカット・怠学等により神奈川県の児童相談所に一時保護されました。しかし児童相談所ではほとんど胸の内を語らず、このときは母が男性と別れることを条件に家庭引き取りとなっています。

やがて、第4子(男児)を産みました。しかし男性が帰ってこないため広島に戻り、また祖母のもとに転がり込みました。神奈川県での2年近くは、実質、次女が異父弟たちのめんどうをみていました。

広島でも、子どもが多く体調もよくないと生活保護を受けました。あいかわらず母はふらふらと出歩き、子育ての中心は祖母でした。家の中はごみが散乱していて足の踏み場もない状態でした。

なお、母と三番目の男性との関係は現在も切れておらず、ときどきあっているようです。あるとき本児は、思い切って男性と別れてほしいと母に頼みました。母からは「そんなことを言うなら、もうあんたの面倒は見ない」と言われ、男性のことは諦めたそうです。

次女と違って、本児は弟たちにきつくあたることはしません。しかし、世話をすることもほとんどありません。次女は言葉遣いや行動が荒々しく異父弟たちにきつくあたったりしますが、面倒はよくみます。そんなわけで本児と次女の関係は悪く、いつもいがみあっています。なお、次女には補導歴はありません。

広島でも夜間徘徊をしているところを補導され、一時保護されました。家庭引き取りとなったものの中学校に溶け込めず、不登校状態となりました。そのころ退学傾向のBと仲良くなり、Bの遊び仲間Aと知り合います。Aは無職で、過去に恐喝や詐欺で2度刑務所に入っています。

やがてAから告白されて受け入れ、Aの家に入り浸るようになります。学校は、A宅からときどき登校する状況でした。母はこのことに無関心で、学校もAとのことは把握していませんでした。

やがてAは、母に対し本児と一緒に住みたいと申し入れます。母は『本児がそれを望み、Aが定職に就くならよい』と返答しました。しかしAは仕事をせず生活保護を受け、昼間からシンナーを吸引してフラフラするありさまでした。

本児は一緒に住むようになって、Aのシンナー依存の状況にショックを受けました。そして、自分が頑張るとめなければAは死んでしまうと考え、説得したりシンナーを隠したり必死で努力しました。しかし、Aは思いとどまるどころか一緒に吸いながらセックスをしようとしつこく誘うばかりで、ついに好奇心に負けてしまいました。本児はシンナーを吸うことにためらいながらも、嫌われたくない、帰るところもない、という思いで同棲を続けていたようです。

あるとき、近所の住民からの通報でAの部屋に警察が踏み込みました。Aは現行犯で逮捕、本児は家庭裁判所送致となりました。この後、本児は初めて三番目の男性からレイプ被害を受けていたことを調査官に打ち明けました」。

「ここで、いまからすすめていく“わたしの家族面接”の流れをざっと説明しておきます。表1の①～⑤が家族を知る手順です。前編でやってもらったのは、この①の部分に相当します。今回は②～⑤をやります。⑥の見立てと⑦以降の手立ては、次編以降になると思います。では、さっそく始めましょう」。

表1 わたしの家族面接の流れ

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 家族関係図から不調和や無理な匂いを感じ、結婚・離婚・問題への取り組み等の行動選択を探る。そこから家族への興味がたかまり、尋ねたいことや確かめたいことが明確になる。② 家族の不安と怒りを知る。③ 解決努力を知り、ねざらいつ問題を維持する相互作用を探す。④ 家族のリスクファクターを知る。⑤ 家族の強み(ストレングス)を見い出してエンパワーにつなげる(来て良かった、聞いてもらってよかった、気分が楽になった)。⑥ 家族の問題理解・仮説を知り、その背後の枠(人生観、信条)を感じる。 |
|---|

4. 家族の不安と怒り

「家族の抱えている不安とか怒りがあらかじめきちんと整理して頭に入っていると、援助対象者のちょっとした心の動きとか言葉からそれを感じることができます。また、的確な質問をすることによって当事者がそのことに気づききっかけにもなります。

この母親は、そして本児は、それぞれどのような不安・怒りを抱えているのでしょうか。そのことを各班で話し合ってください。前編ふう言えば、厚いオーバーコートを脱いでもらうための手続きです。班で話し合ったらフォーマットに書き込んでください。後で、報告していただきます」。

「はい、ありがとうございました。では、各班の意見を聞いてみたいと思います」。

(各班から報告)

「ありがとうございました。みなさんに報告していただいたものをまとめると、表2のようになります」。

表2 母親の不安と怒り

1. 男性との関係が長続きしない孤独感、深いところで影響し合うことへの不安（表面的なつきあい）
2. 母親らしくないと祖母や子どもに言われる意味が理解できない怒り
3. いつも経済的基盤が弱いことへの不安
4. 苦悩や怒りに向き合い、心にとどめることへの不安
5. いつも現在しか見ない（未来に絶望をみることへの不安）
6. 行動の原動力にもなっている祖母に対するあてつけ（怒り）
7. 学校・福祉・司法など社会システムへの基本的な不信・怒り
8. 日々自分に似てきて、やがて自分を脅かすかもしれない本児への不安と怒り

「どの程度まで不安を不安として抱えることができる家族かは、まだよくわかりません。ですが、それは援助面接の中でいろんな形をとって表れるはずです。援助者がこうした作業をしておく、そのときに見逃すことなくしっかり受け止めることができると思います。

では次に、本児自身の不安・怒りを考えましょう」。

「はい、ありがとうございました。では、各班の意見を聞いてみたいと思います」。

（各班から報告）

「では、表3に本児の不安をまとめてみます」。

表3 本児の不安と怒り

1. 母の都合、大人の都合で転々と住むところが変わった不安と怒り
2. 母の都合で出入りする男性が変わる不安と怒り
3. 母である前に女としてあけっぴろげに振る舞う母への不安と怒り
4. 生きていく上での選択肢のない絶望・怒り
5. レイプへの不安・怒り、自分を守ってくれない母への怒り
6. 自分の力のなさへの無力感、怒り
7. あてにならない学校・児相・大人たちへの不信・怒り
8. 学校の同年齢の生徒への違和感や疎外感・不安
9. はじめての自分の意志で決めたAとの生活が壊れることへの不安
10. 愛や熱意だけではAが動かないことへの不安・怒り
11. 人と深くかかわることへの不安

5. 家族の解決努力

「次は、家族なりに努力してきた対応策、つまり解決努力です。先ほども言いましたが、こちらから見ると問題行動で

も、当事者側から見ると解決努力ということはよくあります。同じ行為が改める必要のある問題行動であったり、またねぎらいの対象となる解決行動だったりするわけです。

もう一つ見逃してはならないのは、成果のない解決努力を続ける家族の相互性が、結果として問題を維持する働きをしてきた可能性があるということです。そのあたりも念頭において、各班で話し合っ用紙に書き込んでください」。

(各班から報告)

「皆さんと重なっていますが、私は表4のような解決努力をあげてみました」。

表4 家族の解決努力

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 祖母と次女が母に代わって幼い子供たちの面倒を見、家を守ろうとしている2. 初婚・再婚の際、夫と別れて祖母を頼って広島県に戻っている。いずれも、無責任な夫に子どもを任せなかった3. 過去のいきさつはあったが、祖母に信頼を寄せている4. 母は別れた男性とは距離を置き(初婚・再婚)、子どもたちを混乱させない5. 母が三番目の男性と同居しなかったのは、本児を守る意図があったのかもしれない6. 本児は、Aを立ち直らせて実家より安全な場所を自らの力で築こうとした7. 本児は他人(A)を大切にして嫌われないように努力し、育った家とは違う“家族”を築こうとした。 |
|---|

「2～5は母の男性遍歴であり、育児の放棄です。ですが、もしかしたら母なりの、その時その場で考える最大の解決策であったかもしれません。もちろん、1のように祖母や次女がきちんと家族機能を補完しているからこそ可能となったネグレクトです。解決努力でありながら他方で問題を持続させている相互性ともいえるでしょう。

6～7は、まさに今回の主たる問題行動です。ですが、彼女にしてみれば、母親の生き様との決別という解決行動です。母から距離を置こうとすればするほど男性と近くなり、問題そのものとして持続することになっています。

いずれも望ましい行動ではないし、いい結果をもたらしてもいません。ですから、この種の解決努力に終止符をうつよう働きかけたい。そこでまず、解決行動の動機の部分、そこをきちんとねぎらうことから始めます。その後で、こうした解決策を成立させている問題理解・仮説、さらには家族の相互性に迫っていきます」。

6. 家族のリスクと強み(ストレングス)

「次は、家族の危うさ・脆弱性を見ます。リスクファクターを探る作業は、みなさん、熟達しておられます。特に児童相談所関係の方は、このことに敏感です。子どもの命をまもるための基本ですから。しかし、家族だって指摘されるまでもなく、自分たちの脆弱性にはナーバスになっています。つまり、援助者も家族も同じところにしっかりと意識が向いているわけです。となれば、他に目が向かず正面衝突するのも自然の成り行きといえるかもしれません。

リスクの対極にあるのがストレングスです。探せば、どんな家族にも強みはあるわけで、ただ目が向いていないだけです。援助の対象となっている家族も、もちろん例外ではありません。ところが家族はネガティブでリスクなところを過度に意識し、自分たちに強みがあるなんて信じません。それはわたしたちが歯医者に行くとき、痛い歯以外にぜんぜん意識が向かないのとよく似ています。

家族はそうであっても、援助者が同じであってはいけません。援助者には、目の前の家族にストレングスを見い出

す強い意識が必要です。ネガティブな部分をポジティブに見ることができたら、計算上プラスマイナスで2倍になるわけです。そういったことを念頭に置いて、各班でまず家族の危うさ・脆弱性について話し合って記録してください」。

（各班から報告）

「はい、ありがとうございました。みなさん慣れているみたいですね、家族のリスクや脆弱性をめぐる話し合いはとても活発に行われていました。それでは、報告してくれた各班の意見に私の考えも加えて整理してみます（表5）。他にもあったかも知れませんが、漏れがあったら補ってください」。

表5 家族のリスクファクター

1. 母が今後も同じことを繰り返し、妹以下、新たな問題を起こす可能性
2. 本児が母の生き方を堂々と批判した場合、母はそれを受け止めきれず、祖母・妹次第で家族は崩壊する
3. 母に反発しつつも、自分もさほど変わらないことに気づいた場合の本児のアイデンティティの揺らぎ
4. これからも経済的には不安定な状態が続く
5. Aと引き離された後の本児のケアがなされるかどうか
6. 性虐待の問題は手つかずのままであること

「では次に、この家族のストレングス、強みを見い出しましょう。注意深く探してください、家族援助の一つのキモですから。先ほど行ったように、マイナスをプラスに見ることが出来ないか、そのあたりも念頭に話し合ってください」。

（各班から報告）

「はい、ありがとうございました。驚くような意見もでした。表6に整理してみましたが、1番と4番は2倍ポイントでしょうね。それから、5番もいいですね」。

表6 家族のストレングス

1. とにかくにも、生んだ子どもを見捨てず、引き受ける母であること
2. 母に代わり（黙々と）養育を引き受ける祖母・妹の存在
3. Aとのことを通して、はじめて母に翻弄されず、自分のことを自分で決める体験が出来たこと
4. 男たちに対する母の一方的な依存とは違い、Aのことを考えて行動選択した本児の成長
5. 本児のこれからについて、「人の役に立つ、人を支える」をキーワードとして使える可能性があること
6. 性虐待を打ち明けられる人と出会えたこと

「ここまで、援助対象の家族を知る作業を行いました。不安が強い場合、家族は『もし～じゃなかったら』、『もし～と言われたら』など、いろいろ予想しながら面接に臨みます。歯科の待合室で、磨き方が悪いって言われるだろうなあ、他にも治療が必要な歯があると言われたらどうしよう、抜いたら痛いだろうな等々、不安とともに順番を待った経験があたりだろうと思います。不安のせいで、残りの大部分の健康な歯のことなんてどこかにすっこんでいます。

また怒りが強い家族だと、『自分の苦しみなどわかるはずがない』、『どうせ自分のことを責めるのだろう、悪いのは～なのに』と身構えています。その予想通りのコースにボールがきたら、『ほら、見たことか！！』と思いきりひっぱたくのは至極当然でしょう。

“予想に違わず”には、未知との遭遇がない安心感があっても、新しい問題の理解も新しい解決努力もありません。

従来通り、無変化です。逆に、予想もしていなかったことに出会ったらどうでしょう。確かに最初は戸惑うでしょう。ですが、問題とされた行動を解決のための努力とねぎらわれ、思いもしなかった自分たち家族の強みを指摘され、この状況でよくやっている、それどころか既になんとかなりつつあると、根拠をもって示されたら…。

虫歯の治療中に歯茎をほめられるところの話ではありません。一瞬混乱し、立ち止まり、そして考えます。そこが、変化への入り口です。なにかを問題として固めていた仮説が揺れ始めます。疑念や驚きや期待などさまざまなものが沸き起こり、そこからたくさんの質問が生まれます。「え？なに？それ、どういうこと？」。その一つ一つが腑に落ちて行くと、固定化していた家族の相互交流にも変化が生まれます。

尋ねたいのは援助者だって同じです。『こんなにもたいへんな状況の中 で、いったいどうやってこの程度のことですまされたのか』、『そもそも、どうしてこんなアイデアを思いついたのか』等、ぜひとも知りたいところです。こうした家族の枠の外でやり取りをすると、面接の場だけでなく、家族どうにも新たな相互作用が生まれます。そしてそれは、社会や人生に対する思い込みや決めつけ、生きてきた枠組みにも変化を及ぼすかもしれません。

ちょうどきりがいいので、「家族を知る」を終えたところで二度目の長い休憩を取ります。次は、「家族を見立て、手立てを考える」作業です。では、3ヶ月後にお会いしましょう」。



第6回「いのちの子ども」

ーなんともチグハグな人間世界ー

川崎 二三彦

本誌執筆者のプロフィール欄が充実しているので、これまで本欄に書いていた前置きは、そちらに転居、統合しました。

「紛争が絶えないパレスチナとイスラエル。余命を宣告されたパレスチナ人の子どもを救うために、一人のイスラエル人医師が立ち上がった」

という前振り（実はこれ、予告編冒頭のナレーション）を聞かされると、なるほど映画のストーリーとしては何かが起きるぞ、という期待感がもてる。ところがこの映画、フィクションではなくて完全なドキュメントなのである。パレスチナとイスラエル両方の人が交錯するので、ときに混乱してしまったけれど、監督のイスラエル人テレビジャーナリスト・エルダールが追いかけるのは、余命わずかと宣告されたパレスチナの子どもと、彼を救おうとするイスラエル人医師及びその周辺のたくさんの人たちである。

＊

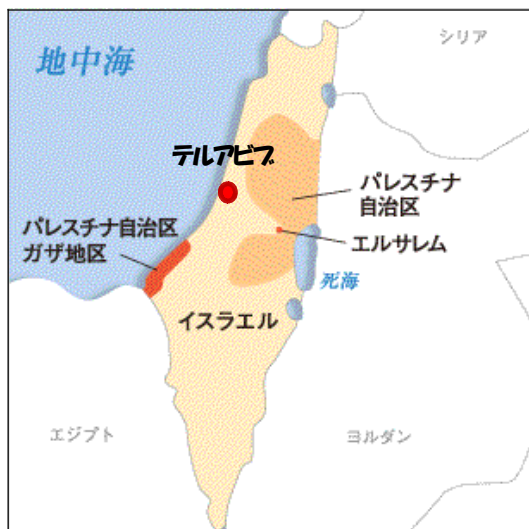
とはいえ、知識少ない私は端から事情が呑み込めない。何しろナレーショ

ンが「イスラエルのユダヤ人とパレスチナのアラブ人をつなぐ唯一の架け橋であるテルアビブ近郊の病院」と言った途端、「へえ、そういうことなの？」と驚くしかないのだから。

そもそもテルアビブとガザ地区の地理上の関係もよくわからず、映画のパンフにもテルアビブは載っていなかったの、後から地図で確認してみた。映画を観ている間は、何となくガザ地区のすぐ隣ぐらいに考えていたのだけれど、思っていたより遠い。ということは、ガザのアラブ人は、治療などのためイスラエル国内にたびたび出かけているということなのか、と考えてみたりする。

余談だが、私がまだ学生だった 1972 年、テルアビブ空港で日本赤軍が無差別に銃を乱射し、居合わせた約百名が死傷するという大事件があった。実はこのとき開かれた学生自治会の大会で、「無差別大量殺人は許せない」と発言した瞬間、私はあっという間に赤ヘル学生に取り囲まれ、ビラを丸めた紙つぶてが飛んでくるわ竹竿で突かれるわで立ち往生するはめに陥った。それもそのはず当時の自治会執行部は、実は日本赤軍と深い関係を持っていたのである。以来、私がパレスチナ問題について語ることはないのだが、今回は本作品に触発され、何十年ぶりかでおずおずと書いている次第。

さて映画は、つまりこのドキュメントは、アラブ人で骨髄移植が必要な生



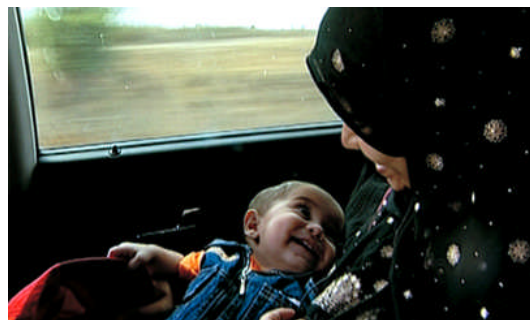
後4ヵ月の赤ん坊を診たイスラエル人医師が、テレビで影響力を持つ本映画の監督に助力を請うところからスタートする。彼はたぶん、要請に応じつつこれをドキュメントに仕立てようと考えたのであろう。

中には匿名を条件とした者もいたというけれど、この呼びかけに多くのイスラエル人が協力し、手術に必要な5万5千ドルはまたたくまに集まっていく。

「ホテル・ルワンダ」という映画にもなったルワンダ内戦では、ツチ族とみるやそれだけでフツ族過激派が虐殺を繰り返したはずだが、ここパレスチナでは、国家的な対立と抗争が長く続いてはいても、こういう形で惜しみない援助がなされるのか、と私はまたまた知らない事実を教えられて感心する。

ところがどっこい、輸血のために親戚がガザから病院へ向かうちょうどそのとき、紛争が勃発してイスラエルによるガザ地区攻撃が始まってしまう。そのため検問所は閉ざされるのだが、そこはテレビの力なのかどうか、何とか切り抜ける。

映画は、一人の子どもの命を救うために必死になっている人々と、まさに同じ時、同じ地域、同じ人々によって街が破壊されていく様子を並べて映し、皮肉でも何でもなく私たちの前に提示する。付け加えれば、イスラエル側にガザ地区の悲惨な姿を生々しく伝えたのは、やはり本作の監督エルダー^{なまなま}だ。彼は、イスラエルで活躍するアラブ人医師が軍医としてガザ地区に入り、自分の娘の死を知って悲嘆に^く眩れる肉声を、生放送で流したのである。一方で石を積み、他方でそれを蹴飛ば



し、また積み上げる。人間はまことにチグハグというほかない。

一方、イスラエル人医師によって我が子の手術を受けるアラブ人の両親は、イスラエルの援助を受けることを、同じアラブ人から厳しく非難される。不安を覚えた母親は、監督のインタビューにチグハグな返答をし、いぶかしがられる。

どうも映画を見、こうして書いていても複雑すぎて理解不足は否めない。とにかく言えることは、たった一人の子どもに対する治療をめぐっても、いわば二千年余り続く民族対立の歴史が象徴的に現れるということだ。

とはいえ、石を積むエネルギーの源は、幼い子どもの命であることに間違いはない。この命を前にすると、二千年の対立も何もかもが消し飛ぶのである。治療の成功を素直に喜びつつ、子どもの力の大きさを思い知った映画であった。

鑑賞データ

2011/07/30 ヒューマントラストシネマ有楽町

* 公式 HP <http://www.inochinokodomo.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/14548>

子どもと家族と学校と

⑥

『カウンセラーが教員の立場で大学生と接すると、、、』

CON カウンセリングオフィス中島

中島 弘美

大学で講義をしはじめて14年が経った。

依頼があった時、教えるというのは私には無理だと思っていたので、家族カウンセリングを専門にしているその現場の様子を伝えるので良ければ、と引き受けることにした。現在、四ヶ所の大学で授業を担当している。

共通教育(教養)科目や資格取得のための科目、専門科目、通信制のスクーリング、受講学生の数も15名だったり、100名以上だったり、講義は一回きりのものから、一日10時間のハード集中講義などさまざまな形式の講義をしてきた。

学生時代は、社会福祉を専門に学び、家族療法のクリニックに就職したこともあって、社福と心理にまたがるような科目を担当している。

多くの学生さんに出会っていると、教育よりも年々支援の割合が増えているように感じる。

大学で支援を実践しているように感じるとそれはそれでとても意義があるように思えてくる。

今回は、カウンセラーが非常勤講師として学生さんたちとかかわるなかで気がついたところを記してみたい。

講義のルール

「10分以上の遅刻は欠席扱いになります。この科目については、現場実習と同じだと受け止めて、遅刻欠席せずに来てください！」

第一回目の講義で、授業のルールや評価基準を説明し、受講態度についても注意事項をくわしく伝える。

私が出講している4大学のうち3大学で出席をしっかりとるシステムになっていて、科目によっては、15回の講義回数の中、4回欠席したら再履修と明確に決まりがある。さらに出欠状況を把握するための会議があり、欠席回数の多い学生への対策が立てられることになる。

一回目の講義に出てこない学生は要注意で、二回欠席したら直接面談するなど、単位取得してほしい願いが含まれている上で、できるだけ遅刻欠席せず、すべて出席するようにと、強調している。

特に、最近は学生が講義に出てこない状態にならないように配慮することが多くなった。

それは不登校の可能性があるので。

不登校というネーミングは、しっかりと知らない人もいることだろう。大学生は、もちろん義務教育ではないので、学びたいと意志があって進学している。不登校

という言い方は正確でないかも知れないが、登校したいと思っても講義室に入れない、昼休みをひとりですごせないなど、高校生の欠席理由とおなじような事情で、講義を休み、大学生活を続けられない学生がいる。

目的意識は？

「この大学に入学したのはどんな目的があったの？」

と尋ねると、推薦で入ったとか、行く大学を早く決めたかったからとか、担任からすすめられたからとか、就職先がなんとかありそうだからとか、目的意識が高くなって入学しているのは以前からか？とも思うが、反応があいまいだ。

「大学に進学することは、金額にすると1200万円の選択をみんなはしたっていうことだよ」

講義中に、ちょっと大げさな話をしてみよう。モチベーションを上げるためだ。

「私立大学の受験から卒業までの4年間にかかる費用は授業料など約300万円とするよね、もしも、高卒で就職をして四年間働いて合計約900万円の収入を得たとすると、大学進学を選択することは、差し引き1200万円也！」

数字を例にして説明をすると、真剣に聞き入っている。

大学に行って当たり前、親が授業料を準備するのは当然だと思っているようだ。中には、自ら授業料を払っている学生もいるが、多くは親任せ。だからこそ、その重みを実感できていないのかもしれない。

かつて、大学に来なくなる学生の中に

は仮面浪人と呼ばれ、一応、授業には比較出席しているが、次のセンターテストの時期にもう一度国立大学などをねらうという人もいた。希望大学に届かなかったら、あきらめて今の大学の二年生になるつもりだ。

そんなややこしいことをしなくても、昨今、大学の編入制度や、入学後の学部変更も場合によっては可能なため、再度受験する人は多くは見られない。

かつて、〇〇大学中退でも、世の中である程度評価されるような時代はあった。入学することができたその実力を認められてのことだった。大学を卒業しても、就職先がないとなる現在は、大学中退はさらに不利になるだろう。

そのため、できるだけ退学しないようにと、学生に理解を求めることになる。担当教員は、出席時間数が不足すると、単位取得の資格が無くなるので、事前に、その可能性があることを予告している。

学生さんからすると、うっとうしいということになり、欠席のことを話題にしすぎると、個人の事情を持ち出してきて、単位落とさないで下さいお願いしますと、頼まれてしまう。

大学生の欠席理由

あと一回欠席すると、単位取得ができなくなることを伝える。

「僕、店長をしているので、休めないんです！」

はてな？何を言っているのか意味がわからない。詳しく聞いてみると、アルバイト先で、責任ある仕事についているので、アルバイトは絶対に休めない。その

結果、大学の講義に出られない。欠席回数のことを言われても、アルバイトが休めないで、落とさないでほしいという。

彼の基準は、アルバイトが中心。あまりにも真剣なので、将来はそのアルバイト先に就職するつもりなのかと確認すると、労働条件がよくないので、就職する気はないという。

アルバイトに責任をもっている姿勢はわかるが、学生の立場だと許してもらえらるとおもって頼んでいるのか、ただわかっていないだけなのか、ちぐはぐな態度に驚いてしまう。

欠席日数が超過しそうになってから、話し合いをしてもどうすることもできないので、講義の最初に念押しの説明をすることになる。

教えてもらってわかること

私が大学生の時に教えてもらって知ったこと分かったことが多くあった。注意されないでいると、そのまま非常識な態度を続けていたことだと思う。

ある総合病院の相談室で、メディカルソーシャルワーカーの助手の仕事をさせてもらうことになった。たいした仕事はできなかったが、それでも電話対応や資料整理などをさせてもらっていた。医療福祉の現場にいたことがうれしくて、私なりに一生懸命だった

朝九時からのアルバイトは遅刻せずに、行っていた。しかし、

「九時までに出勤するではなく、九時までにモップ掛けやテーブルの掃除を済ませてほしいので、もっと早く来てください」と注意を受けた。

契約時間は九時からなので、間に合うように行っていたけれど、それではだめなんだと、わかった。

いまふりかえると、ごく当たり前の指摘だが当時は、仕事のイロハを知らず、このバイトで働く上での基本をいろいろと教えてもらった。

教えることが予防につながる

おせっかいだと感じる学生も多いと思うが、学生さんにエチケットや礼儀のようなものを意識して伝えるようにしている。

「社会福祉施設見学に行くときは、裸足で行くのはだめ。靴下をはいて、かかとのある靴で行くこと。パンツとか下着が見えるような格好もしないでね。わかっていると思うけれど、利用者さんにあったら、ちゃんとあいさつするんだよ」

完全に母親口調になっている。

前もって伝えておかなければ、それぐらいわかっているだろうと思っていいても、勘違いをしている場合もあり、あとで大慌てをすることになる。

受け入れる側もよく心得たもので、特別支援学校の実習生対応をきくと、除光液やかみそりなど用意して、マニキュアをとってひげをそって身支度を整えてから、教室に入ってもらっているという。

誰かがちゃんと教えてあげなくてはいけない、教えられて、わかったことが何かの予防につながることもあるかもしれないので、今は、学生さんが社会人になるまえの準備期間につきあっているつもりでいる。

特別な配慮

ある学生さんが、五回連続で欠席したあと、六回目の講義で初めて出席。

「卒業したいのでなんとかしてください、この科目の単位を落としたら、とても困ります。診断書を提出するので配慮してほしい」

真顔で訴える。

さぼっているのではないというのは理解できるが、そういわれても、非常勤講師になんとかする力量はなく、生半可な返事もできないので、担任教員に相談してくださいと伝える。

学生の中には、身体に何かの障害がある人もいるが、講義に出席している時間中に過呼吸や持病の発作が出て、保健センターに付き添うこともある。絶対に休んではいけない講義なので、高熱にもかかわらず、出席して、倒れてしまう学生もいる。

少し休んで回復するとほっとするが、精神疾患などにより大学生活の継続が、困難になっている学生には、たとえ診断書を提出した場合でも、対応の限界があり、残念ながら休学手続きをとる学生もいる。

退学や休学にならないようにと、平常の講義で、学生の中に何かきになるものを感じると、さりげなく本人から事情をきいたり、

「私が知っておいた方がよい事情などがある人は、言いにきてください」

と伝えている。

休み時間に話にきて、クラスの学生さんが、ある学生さんの気になる事情をし

らせてくれることもある。

あかん彼氏とつきあって、ふりまわされているとか、パチスロにはまって、友達に借金しているみたいなど、親が知ったら、心配するような話も出てくる。

けれど、友人がいて、なんとかネットワークを持っているとわかると、ちょっとは救われる。

キャンパスワーカー

現在、大学では、学生支援のためにキャンパスワーカーを常駐させるところがある。まだまだ広がってはいないが、増加傾向だ。

全ての大学にワーカーがいて、その専門性が発揮されると良いと思っている。ただし実情は、大学の予算の都合で、実現できていない。

義務教育機関にスクールソーシャルワーカーが導入されているので、将来に期待したいものだ。

そのころには、他の教員にとっても、それぞれの研究に今よりも深く取り組むことができることなるはず。

「私カウンセラーになりたいんですけど、」

と学生がやってくる。

「専門性を本当に身につけたいと思っているのなら、大学での勉強では足りないところもあるので、大学院に行くことを考えてみて」

と勧めている。

専門の勉強は大学ではなく、大学院に入学することで、学問とは何かを学ぶことになるだろう。

蟪蛄の斧 (とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第六回

団 士郎

仕事場D・A・N／立命館大学大学院

児童相談所で働いていた頃、誰かに言われたことがある。「団さんは、相談がなくても児童相談所があれば、十分楽しめますよね」。おかしい言い方が本当にそうだった。相談よりも児童相談所が好きだった。業務集団として、どんなことまで出来るだろうかを考えているのが楽しくて仕方なかった。それはその時に始まったことではなく、基本的に昔からそうだった。臨床現場（医療・保健・福祉・教育）で仕事をしている人の多くは、一番大事なものは来談者、利用者だと思っているのだろう。しかし私は、その仕事に従事する集団が一番なのだった。人間関係などではなく、業務が発展、深化してゆくメカニズムが好きなのだ。そこに何かを付け加えていくのが大好きだった。

何が起きるか分からないけれども常に何か起きる。そしてその多くは初めて起きたことではない。これが人の世の原則である。だからまずは歴史に学ぶこと。そしてもう一つは、自分自身がその流れの中にいるのだから、そこで受ける生体としての感覚（予感）に従うことだ。

1993年、不本意ながら異動した知的障害者更生相談所（当時、精更相）は、とても限られた業務だけを負託された機関だった。療育手帳の更新と施設入所判定書作りが主な業務。非常勤職も多く、そのスケジュール管理と予約台帳の管理が私の仕事だった。それをしながら、公的な機関にもたらされる仕事は、どのようにこの世界に登場してくるのが気になった。まだ着手していないことで、今、ここでしておくべき事の存在予感が消せなかった。

その頃、京都造形芸術大学に在職していた野田正彰氏が戦後処理問題に焦点を当てた授業をしていた。ナチスの子ども達とイスラエルの人々との和解をテーマにした話や、高齢化した中国帰還兵の加害記憶の語りへの関心などが焦点だった。氏の著作「喪の途上にて」（岩波書店刊）は、日航ジャンボ機の墜落事故被害者家族のその後をインタビューして書かれたもので、この頃から日本社会では心のケアや喪の仕事のことなどを喧伝し始めていた。

行政機関にとって、こういう役割の準備はどのようにしておかなければならないのか。それを知的障害者更生相談所の場から考えると、どんなデザインになるのだろうと考え、そのための学びをと思い立った。管理職に話して、業務日の昼間、野田氏の講義聴講をと打診してみたが、「言ってることが分からない」と却下された。仕方ないので、毎週時間休を取って半期、受講に大学に通った。

この翌年、1月に阪神・淡路大震災が起きた。児童相談所には支援体制協議や、派遣スタッフの分担が下りてきていた。しかし、知的障害者更生相談所にはなんのオファーもなかった。児相併設の府県も多く、単独設置しているところの少ない出先機関など、誰の眼中にもなかった。在宅の知的障害者が避難指示の理解不十分や、臨機応変な対応からも外れて、ポツンと自宅に取り残されていたことは、後から明らかになったりしていた。

これは二十一年前の京都府京都児童相談所での日々を、相談判定課長職にあった筆者が、当時の日記(ハコ部分)を元に再考したものです。明治・大正や終戦直後と比べるのではなく、ほんの二昔前の仕事の振り返り。そこから見えてくるものは・・・

1990年6月

6/1 FRI S 高校定時制の教員研修で話した。少人数が口の字型に並べたテーブル座席に座っているもので、こちらの視線の方向が定まらず、ひどく疲れた。それにザワザワしていて愉快ではなかった。

ディスカッションするわけではないのに、口の字型に並べた会議机で話をさせられることがあった。後年は、自分が話しやすいレイアウトに変更してもらうよう言えるようになったが、前にはこんな事がたまにあった。

関係機関が一堂に会した協議会などで、大きな口の字型の中央の空洞に、みんなで愚にもつかない意見を吐き出し合う図が今も目に浮かぶ。形も大切だ。

そして教員職の人たちの、受講態度作りの下手さを何度も嘆いた。自分の授業で、そういう態度の生徒が居たら、気分が悪いだろうと思うのだが、いつも生徒たちにやられている仕返しのつもりかもしれないなんて思った。

6/2 SAT 児相研セミナー現地実行委員会。いろいろプランや全体像について意見を出し合う。新しいことがやれそうな気配もある。

夜、中国の漫画展の打ち上げがあったが、明日は施設運動会の応援で出勤のため、気持ちが乗らないので欠席。

児相研セミナー(現・「児童問題研修セミナー」)。発足時点は「児童相談所問題研究セミナー」。途中で名称変更したけれど、今あらためて、「児童相談所問題研究セミナー」に戻すのが、今の児童福祉分野を多面的に再考することになるのではないのかと思う。児童虐待相談所について研究する気は、私には湧いてこない。)の開催を京都で引き受けていた。

こういう全国大会を引き受けると、大抵一年がかりの事務局仕事になった。おろん、それで盛り上がる面があることも否定しない。大きなイベントに向かって一致団結するパターンはそこここに存在する。しかし私はこういう一般化に不同意だった。こんな大会くらい、軽々とやってしまえばいいと思っていた。

そこで、岡田隆介さん(当時、広島市児相長・児童精神科医)と始めた「児童相談所とその近接領域における家族療法・家族支援の実際・勉強会」では、現地準備は最低限でやれるノウハウの開発を考えた。

当日配布の勉強会冊子や、終了後のレポート冊子があつという間に発行出来る方法も考えた。(こういう報告集って、終了後一年くらい経って出るのが通例だった。そして誰も読まない)。今なら、ネット環境が整ったからもっと簡略化の工夫の余地がある。この発想の延長線上に、「対人援助学マガジン」の発行もある。

20年前、「今こそ中国で！」と勧められた漫画展は、終始うさんくさい話で、委託した世話人の言うことがコロコロ変わっていった。最初は南京の博物館でやるとか言っていたのだが、結局、専門学校の体育館のようなところに展示したらしい。

ただし、「マンガ」に関する世界の大きな潮流から、本家の日本は終始立ち後れ気味だった。この後、10年ほど経った頃、我々のマンガグループ「ぼむ」は、中国の新設芸術系大学で「日本漫画・アニメ」の講座を引き受けることになる。そして複数のスタッフが数ヶ月滞在して集中講義をしたりした。私は韓国のマンガを履修する高校生の集まりで、講演する機会を与えられたりした。

「マンガ」に対して一番保守的で、見下した態度をとり続けているのが我が国だ。「国立の漫画喫茶など作ってどうする！」と誰かの政権の新企画を叩きつぶしたのも、マンガ好きのはずの日本国民だった。その引き金が、マスメディアの内在する冷笑的エリート主義だったと思う。日本マンガを馬鹿に出来ると思っているあなたは何者なのか？世界のあらゆる創造活動に、日本マンガが及ぼした影響を一番分かっていないのが中高年の日本人かもしれない。

6/3 児童福祉施設の連合運動会。決勝係りで参加。日差しの中で一日いることなどほとんどないもので、すっかり日焼けしてしまった。腕まくりをしていたところは段がついて、縞模様焼けの腕になってしまった。全く何ということだ。

こういう役回りは、引き受けないことが多かったから、珍しいことだ。我が子の運動会や学校行事にもほとんど行ったことがない。そういう役割を楽しんでできる人が

羨ましいと思うが、できないことは仕方がないと思っていた。

そんな場に立っていると、突然自分がモノになってしまったような気になってしまう（自意識過剰だ）。ゴチャゴチャ思わず、必要ならば引き受けられるようになったのは、やっとこの頃からだった。

同じ頃、暮らし始めた新興住宅の町内会でも、広報紙担当を引き受け、火の用心の夜回りにも出て、数人のご近所さんと居住区周辺を、拍子木を打ちながら巡回した。

あほらしいなぁとも思いながら、こういう楽しみもあるのかと思い、志ん朝の落語「二番煎じ」のことを思い出していた。

6/4 重症児施設から知的障害児施設に移った子どもが、てんかんの発作がひどくなって・・・という一件で動いている。M学園の管理体制そのものが問われるような、後ろめたい失敗が隠蔽されかけたりした。事実解明に担当児童福祉司はよく動いている。

投薬管理をする看護職スタッフがいて、定量与えているはずの錠剤の数に食い違いが起きていた。それを、うっかりしていたという理由で、引き継ぎスタッフに伝えなかった。引き継いだスタッフは、残っているものだけを与えて済ませていて、それが次にも引き継がれたらしい。その結果、発作が起き、原因究明の結果、事実が明らかになった。

当時、とんでもない話だと憤慨したが、こういう杜撰なことは、あちこちで今も引き続き起きている。2011年に事件になったユッケ食中毒の事件も、後で調査すると、とんでもない無責任と杜撰さが発見されたりした。以前もあった食肉の偽装事件や不当表示など、いろんな事を、皆さんも

忘れてはいないだろう。

今回の原発事故のずっと前、たしか放射能汚染水を手作業のバケツでくみ出していたニュースがあったことも覚えている。

つまり人間は、お互いの信頼関係なんて口先言葉で済ませているとこうなってしまうらしい。個人の人間性なんて正体不明な話でごまかさないと、そういう実態を形成しやすい社会システムだと考えるほうが、改良点はいくつも発見できる。

6/5 ひよんなことで、K福祉司と夜十時半頃まで話しこんだ。見破る目と見守る目。好きになることと、好きなことを伝えるための力、そんな話をする。「好いてくれる人を好きになる、それも相手よりずっと少なく」という愛情関係で生きていると語る彼女の話を聞いていて、どんな成育歴なのだろうと思う。

そういえば以前、同僚だったことのある体に障害を持つHさんが、似た感じのことを言っていたのを思い出した。

他人との関係を切り結ぶ作法として、どの程度の自己開示と、相手の自分への意思表示や自己開示度を求めるかは、人それぞれ流儀があるようだ。

相手がどうだろうと私は…と語れる人は強い。逆に、相手が自分をどう思っているかを確認した上で、自分の表明態度を調整するというのは弱い。多くはこの間にグラデーションで存在する。

この態度形成の背景は、親子関係、家族関係に起因するモノが大きいのだろう。そしてこういう感覚は、私生活を支配するだけではなく、対人援助サービスの現場では、しばしば業務関係にも直結してしまう。

過剰な思い入れや、逆の手厳しい批判など、どうしてそこまで…と思わされる仕事

の報告を目にする。ヒューマンサービスの現場にいる者は、自分のことを知っておかなければならないなあと改めて思った。

6/8 人事異動の内示があって、宇治児相の課長が代わる。後任は本庁の福祉係長だという。児相再編時の、「相談判定課長人事は臨床経験者の中で」という約束は早くも、あの時だけのリップサービスだったことになってしまった。

そもそもあの時の人事担当者が見解が、たいした信念があったわけでもないから、その時々でコロコロ変わるのである。私にもそれほど確信があったわけではないが、懸念して予め手を打っておくべきだ、と判定員連中に言っていたことが早くも現実になった。

心理職の重要性など、人事に携わる役人には関係ない。組織の評価担当者さえ関心はないかもしれない。

宇治(中央)児相の新課長が一般事務系職ということは、今後いろいろな影響を及ぼすだろう。本庁係長だった新任のSさんは何もしないでいる人ではない。

しかし何にしても人事異動期は愉快じゃない。私にとっては今のポジションの居心地はベストだと思うのだが、他の人にとっては、私がそのままでは上が詰まっていることになる。京都府への貢献度は高い自分だと思っているが、組織の上の評価までは何ともできん。

20年後の今読んでみて、熱く語っているなあとと思う。やはり人事はストレスだったのだ。思い出しても、一番イライラしたことだった。

組織を離れて独立をして、仕事を始めてから、世の中の評価は案外公平だと実感し続けている。

私だけへの格別な何かを要望していたのではない。妥当な評価のできる人を求めている。(これを甘い！と言って済ませられる人に、組織論を語る資格はない。)

この時の異動は、今考えても私が宇治(中央)児相の相談判定課長になるのが順当だったろう。

無論、何人かは公平だと思える上司、幹部もいた。しかし京都府には二十五年も在職したのに、結果的には組織貢献的だとも、人材育成が上手だとも思ってもらえていなかったようだ。そしてこの時の人事は、今になると分かるのだが、この時点だけのことにはならなかった。私が50歳で退職し、その後も順次、退職が続く引き金になっていたように思う。

本庁から来たSさんと私は上手な棲み分けをしていたと思う。しかし彼を出先公所の中間管理職に出した本庁は、再び呼び戻すことに消極的だった。

そのため、元々児童相談とは何の縁もなかった行政職の課長が、歴代の相談判定課長の中で一番長く居座ることになった。

ポストが空かなければ玉突きもない。私は中央児相の課長になることはなく、他公所の所長補佐職で異動になった。そして児童相談所との縁が切れて、五年後に退職した。

もしあのと時、宇治児相の相談判定課長で異動していたら、五年後の退職決断はなかっただろう。それが私の人生にどうであったかは、選択されなかった方の人生評価に意味がないように、考えても詮ないことである。しかし、もしそうだったら京都府は、今とは少し違っていただろうと思う。

私たちは、今していることが、未来の何に繋がっているのか、想像力を欠きすぎて

いる。予言者にはなれないのだから、せめてその時点で、精一杯の英知で目前の課題に当たっておきたいものだ。

6/09 第二土曜日。すっかり週休二日のペースが身に付いた。だから先週のように日曜日のない14日間を過ごすと、途端に体調を崩してしまった。体力を自慢する歳ではないことをもっと具体的に自覚すること。

これを書いたのは四十三歳の時である。サラリーマンだったのだなぁと思う。去年、六十三歳の私は、最長四十日連続でオフ日なかった。でも、それがストレスや体調不良の原因にはならなかった。自分で計画を立てて、決めて働いているのは、忙しくはあっても、それだけのことだ。

仕事において、させられている感がないのは非常に重要な要素だと思う。自分で決めて、自分で実行する仕事は楽しい。

6/14 THU 複雑な家庭事情を抱えた中学三年の女子の処遇でいろいろ考えている。家出中を保護され、事情があってここに来た子である。夜は宿直担当だったので、その子といろいろ話した。発達と土地と血縁者とまわりの他人、それに自立の時期と甘えへのこだわり、そんなことが渦巻く。限られた選択肢の中から、うまくいきそうな一つを選んでやらなくてはならない。



児童相談の仕事は、子どもだけを取り上げるなら、一生懸命向き合ってやることで、大抵は繋がることができる。

初対面の宿直勤務だったとしても、一緒に食事をして、TVを見ながら、リラックストークをしていれば、和んでくる子が大半だった。

しかしその家族を絡めた展開になると、難しいこと山積みだった。加えて、目の前の十五歳は、十年経ったら二十五歳になっている。その時はもう立派な大人だし、子供を産んでいてもおかしくない。

そんな十年後(わずか十年しかないのだ。成人までなら、五年ぽっきり)になるように、今自分たちの打つ手が、熟慮を重ねているかどうか、いつも気になった。

先のことなど誰にも分からないなどと、他人の人生だからといい加減なことが言いたくなかった。「気楽なセンセやなぁと思ってたけど、良かったわ!」と、もし十年後に再会することがあったら、言ってもらいたいと願っていた。

だから京都児童相談所相談判定課長として、受けた相談の目標達成率予測はいつも100%だった。ケースバイケースじゃない、全部だ!と思っていた。



6/16 SAT 京都府保母会北丹支部研修会で話をするために峰山に行った。昔、六年ほどこの管内で仕事をしていたので、僕を知ってくれている人もいて、楽しく話ができた。帰路は北近畿タンゴ鉄道という第三セクターの会社になって走り始めた、特急丹後エクスプローラーに乗った。途中からとなりの席に、とても礼儀正しいお婆さんが乗ってきた。少し言葉を交わしただけだったが、僕もつきちんとした態度で対応したりした。

礼儀正しいのはとても気持ちのいいことだし、相手への影響力も大きいものだったと思った。中学生達の乱暴さや無礼さは、教師や親との相互作用だなやっぱり…、と思った。

これはそうなんだろうと思う。加えて、「コントロールされる」という学習も、生き物には大切だ。しつけなしの犬より、しつけられた犬の方が、飼い主や周囲の人から可愛がられるし、長生きすると思う。

ペットを生ゴミのように廃棄する日本人の心性と底通している子育ての現状がある。飼い主を鍛えることで、捨てられて殺されてしまうペットは減る。

まったく相似形のことが子育て現場で起きているのだろう。

6/20 WED 久しぶりに家族の初回面接だった。家庭裁判所から送られてきている家族なので、来所の動機が一般のものとは少し違う。どうジョイニングして、継続面接に持って行くかが鍵なわけで、久しぶりに緊張していた。

夜は宿直で先週からいる中3女兒。夜中の1時半頃まで、むかし出会ったいろいろな子供達との話をした。

この家族面接は思い出しても顔がほころ

ぶくらい楽しく運んだ。当然、出だしはストレスフルだったのだが、母親がなかなか胡散臭い人だったので、きれい事は早々と撤収できたからだ。

裁判所からの児相長送致だという締め付けを強調し、安易な対応は許しませんという態度を崩さなかったら、向こうが譲歩してきて、きっちりした継続面接になった。

非行少年の弟と賢明な兄が、自由に生きて来た母親の下で育っていた。良い子よりも、困った子に強くシンパシーを感じている母に会ったことは、今までなかったように思う。

おとなしく良い子は片隅に追いやられ、図々しい子が、要求を振りかざして、母親との間でもアンフェアな権利を獲得していた。

6/21 THU 会議の結果、彼女は教護院で中卒後の進路に向けて再スタートすることになった。

いろいろと経過があった子だが、教護院（現在は児童自立支援施設）退所後、企業内高校に進学し、就職して結婚もし、お母さんになったと聞いた。

6/23 SAT 「大阪からだところの出会いの会」10周年と松井洋子さんの「癒しのワークショップ」出版記念のパーティ。久しぶりにワークのエッセンスに触れて心動き胸熱くなる。

松井洋子さんの「大阪からころ」に毎月のように通っていたのは、この更に数年前だった。「ことばがひらかれるとき」の著者、竹内敏晴さんのボディワークwsに遭遇し、松井さんに会って、目から鱗の体験連発でのめり込んでいった。当時、京都府北部在住だったので、週末は家族放ったらかしで大阪に足繁く通った。

この日のパーティで出会った、「音具」というものを熱く語る非常に興味深かった音楽プロデューサーの事は、拙著「ヒトクセある心理臨床家の作り方」（金剛出版）に書いた。

精神、こころを語る人も、一度は「体」のテーマにしっかり向き合っておくことが大切だ。用心しないと「こころ」が口先言葉でカバーしてしまえる、まやかしの術になってしまう。それを知らないまま大きな壁にぶつかり、反動で身体一辺倒の論者に引きずり込まれてしまう。オウム真理教事件の時、そんな人たちの姿を見る気がして心が騒いだ。

身体はごまかしにくい。誰かの目の前で、まっすぐ立っているだけで、見透かされる自分もある。説明を許されず、他者の目にさらされる自分を覚悟する経験は、知的作業に偏りがちな心理職には良い経験だ。それに、身体実感を伴った言葉もまた、専門業界用語とは随分違ったものだ。

もっとも、身体は身体で又、胡散臭いところたっぷりの世界でもあるから、何事にも用心深く、のめり込まないことだ。



学校臨床の新展開

—⑥「ひとり親」がふつう—

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

スクールカウンセラー大集合

毎年、夏になると「学校臨床心理士全国研修会」が開かれ、全国からたくさんのスクールカウンセラーが集まります。基本的に皆「臨床心理士」（全国のスクールカウンセラー6140名のなかで「臨床心理士」の占める割合は約8割。この研修会は日本臨床心理士資格認定協会、日本臨床心理士会、日本心理臨床学会の3団体が「臨床心理士」を対象に行うもの）です。それが、今夏は京都で行われ、2000人近くが集まりました。日本心理臨床学会の大会などもそうですが、超巨大集団ですので、会場に至る鉄道やバスは、まるで「臨床心理士」特別号になり、大量に会場に吸い込まれていく様は、何とも異様な風景だなあと一群のなかにおいて他人のように思うこともあります。その「学校臨床心理士全国研修会」が今年で16回目を迎えました。この間、学校や子どもを取り巻いては、いじめ、不登校、学級崩壊、非行、暴力、虐待、自殺、犯罪被害、発達

障害、教員のメンタルヘルス、保護者対応、災害などさまざまな課題が絶えず社会問題としてクローズアップされてきました。そしてスクールカウンセラーはこれらの課題に「こころの専門家」として教員とともに向き合い、着々と時を重ね、すっかり学校のなかに指定席を確保した感があります。

一方、近年、「臨床心理士」が多くを占めていたスクールカウンセラーの職に「学校心理士」や「発達臨床心理士」など他の資格保持者なども参入してくるようになりました。また、2000年代後半より貧困格差の問題が注目され、この連載のテーマでもあります、あらたな展開として「福祉の専門家」が「スクールソーシャルワーカー」として入ってきました。こちらは「社会福祉士」を主として考えられるべきところですが、実際には退職教員などを中心にさまざまなキャリアの方が配置されているところもあります。また、スクールソーシャルワーカーが何をするのか、何をしているのかということも、あまりにも差があるようで

す。今後、学校現場で求められる福祉職の知識・技術・倫理について一定の基準が求められます。さて、学校のなかの心理や福祉の専門職。あと15年したら、どうなっているのでしょうか。

「ひとり親」がふつう？

あるラジオ番組で小学校1年生の娘を持つ母からの手紙を紹介していました。娘の同じクラスの約半分がひとり親家庭だそうです。そんな娘がある日「お母さん、うちの家もお母さんだけになるの？」と泣きながら帰ってきたそうです。私自身も保育所や学校でクラスの半分があるいはそれ以上にひとり親家庭がいるんですという話をときどき聞くようになりました。となると、両親がいるほうが珍しいということになったり、この手紙の子どものように感じる子がいて当然だと思います。何がふつうかは時代とともに変わってくるのが当たり前です。もちろん地域差はあるでしょう。しかし、ひとり親家庭が増加していることは事実です。2006年の厚生労働省「全国母子世帯等調査」によりますと、ひとり親家庭になった理由は、構成割合では、母子世帯で約8割（79.7%）、父子世帯で約7割（74.7%）とどちらも「離婚」が最大の原因となっています。日本では、第二次世界大戦後から1967年までは、「配偶者との死別」がひとり親家庭になる最大の原因でしたが、近年は大きく減少してきています。厚生労働省「人口動態統計」によると、わが国の2008年の離婚件数は25万1136件（千人あたりの離婚率1.99）と2002年をピークに近年はやや減少傾向にあります。

それでも依然高い水準で離婚件数が推移しています。

厚生労働省「離婚に関する統計」によると、2008年の離婚件数25万1136件のうち約6割（57%）が子どものいる夫婦の離婚となっており離婚の増加がひとり親家庭の増加に直結しています。また、離婚の増加とともに、再婚も増加しており厚生労働省「婚姻に関する統計」によると年々、夫婦初婚による組み合わせでの婚姻が次第に減少（2005年では74.7%）し、あらたに婚姻するもののなかで概ね4組に1組が夫婦のどちらかが再婚者になってきています。

したがって、離婚や再婚などはそう珍しいことではありません。しかし、ある先生がこんなことを言われていたことがあります。

「中学3年生の男児の親。入試を直前に控えた時期。どうしてこの時期に再婚するんでしょうね。今から名前も変えるって。高校へ行くのが決まってからでもいいのではないのでしょうか。子どものことを考えると胸が痛いです。親は自分のことしか考えてないのでしょうかね。」

ただでさえ、高校入試は多くの中学生にとって人生初めての受験です。当然、ストレスが高まります。この先生の言われるように、あと少し待ってあげることはできなかったのでしょうか。記念日に入籍したり式をあげたり、この日にしたいということがあったのかもしれませんが。あるいは新しい子どもができたのかもしれませんが。世間体のために、あるいは子のために婚姻をがまんして継続する時代ではありません。そし

て、よいパートナーがいれば再婚も自由に行えばよいのです。しかし、この先生同様、子どもの立場から考えてほしいなと思います。

「ひとり親」がかかえる課題

厚生労働省では、ひとり親家庭の全国調査「全国母子世帯等調査」を1998年、2003年、そして2006年行っています。ただし、2006年の全国調査では、母数の少なさから総世帯推計数が算出されていませんので2003年の全国調査をもとにみますと、母子世帯数は122万5400世帯、父子世帯数は17万3800世帯と、1998年の全国調査と比較すると、母子世帯で28.3%、父子世帯では6%の増加となっています(母子世帯数、父子世帯数は「国勢調査」「国民生活基礎調査」など調査によりその捉え方や数値が異なります)。

ひとり親の就労率(2006年の全国調査)は父親が97.5%、母親が84.5%と高くなっています。しかし、その雇用形態については、特に母親において「臨時・パート・派遣」での不安定就労が48.6%と最も高く、「常用雇用者」は43.1%となっています。このような不安定な雇用形態は収入にも影響しており、2006年の全国調査による2005年の母子世帯の平均年間収入は213万円、うち就労収入は171万円でした。同年、子どものいる一般世帯の平均年収額は718万円(「2006年度国民生活基礎調査」)、母子世帯の平均年間収入213万円はその3分の1にも届きません。なお、「臨時・パート・派遣」就労をしている母親の平均年間就労収入は113万とさらに低いのです。一方、

父子世帯の父親の雇用形態は「常勤雇用者」(72.2%)が最も多く、年間収入も421万円と母親よりも約2倍多くなっています。しかし、父子世帯は、これまで長年、「児童扶養手当」の対象外(2010年より支給開始)でした。また父子世帯間での所得格差が大きいことも特徴であり、2006年の全国調査では年間就労収入が300万円以下の父子世帯が約4割(37.2%)もいます。

ひとり親世帯が最も「困っていること」は、母子世帯(46.3%)、父子世帯(40.0%)とも「家計」が最大の課題となっています。

さて、ご承知のように、2009年政府は初めて日本の子どもの相対的貧困率を14.7%(2006年が調査対象)と公表しました。これは7人にひとりの子どもの相対的に貧困状態にあることを示しています。

しかし、そのなかでも特に祖父母と同居していない母子世帯の子どもの貧困率は66%と非常に高いことがわかりました。孤立した子育てや、貧困は家庭での生活の質の低下をもたらすだけではなく、教育機会の断念や、人生そのものにも影響し生きる希望や自己肯定感さえも奪い取ってしまいます。

さて、調査では、このように厳しい状況なのですが、世間からは今でも特に母子世帯について厳しい評価があります。はこんな声はよく耳にします。

「母子家庭って手当をもらったり、生活保護をもらったり、あんなのしてるから自立なんて永遠に無理で、次の世代もまた同じになるのよね。」

こういった声や社会的なコストを減らす

ために、国や自治体でも就労支援に力を入れた政策を進めていますが、なかなかうまくいっていません。確かに、偽装離婚やさまざまな虚偽の申請により生活保護を悪用しているケースも少なくありません。しかし、一方で、ダブルワーク、トリプルワークをして深夜に帰宅せざるを得ない親もたくさんいます。どちらの家庭にも子どもがいます。そして、どちらの子どもの育ちにも少なからず影響を与えているのです。学校の教員たちは、長年このような家庭を目の当たりにしてきました。学校では社会の縮図がいつも展開します。さて、福祉屋はどのように切り込むのでしょうか。

学びの森の 住人たち (1)

学校でもない
学習塾でもない、
〈森〉という
学びの世界が
投げかけるもの

北村真也

(アウラ学びの森、人間科学修士)

1. 学びはどこへ向かうのか？

〈森〉という学びの世界

学校でも学習塾でもない「アウラ学びの森」という学び場を私が始めたのは、2000年4月のことでした。現在、そこには小学生から高校生まで80名、スタッフ12名それに、親たちが共に学んでいます。

〈森〉は、生きています。決して同じことを繰り返すのではなく、日々変化し更新され続けています。それはとどまることのない循環であり、生態なのです。私はそんな〈森〉の姿を学びの現場に重ねてみようと思いました。年々多様化していく子どもたちの生活世界を前提にした時、これまでの教育、学校モデルでは無理がかかってしまい閉塞的な状況を招くしかないと考えたからです。実際、様々な教育問題は構造的な要因をその背後に抱えていると思っています。

新しい教育モデルは、〈学び〉ということを中心据えていきます。いかに教えるかではなく、いかに学ぶかということです。学習者主体のモデルです。そこでは教師自らも学習者でなくてはなりません。学びということを通して、その場に関わる人たちが繋がっていく有機的な組織を私は森の姿に重ねようと考えたのです。そしてこの場を、私たちの生活世界のすぐそばに置くことを前提としました。決して人里離れた山奥にあるコミュンではなく、私たちの暮らしの横に隣接しており、その扉をあければ誰でも違和感なく入っていけるそんな学び場をめざしたのです。

〈汽水領域〉私はよくそんなコトバで表

現します。海の水と川の水が混じり合うところ、私たちのアウラ学びの森はそんな汽水領域に存在しているのです。また汽水領域は、様々な変化を生み新しい命を誕生させる場でもあります。異なるモノ同士がそこで出会うことによって、新しいものが誕生するわけです。それはあらかじめ予定されたものではありません。出会いの中で、必然的に生まれていくものなのです。ここでみなさんは、「あれっ」と思われたかもしれません。「あらかじめ予定されたものでない」ことと「必然的に生まれていく」ことは一見論理的な矛盾のように見えるからです。予定調和じゃない必然性があるのかという問いです。結論から言うと、私はあると思っています。用意された答えに向かう学びではなく、新しいものとの出会いの中で生まれていく答え。それは一見すると何が飛び出してくるかわからないように見えるのですが、実はその場に出会う人たちの中にその答えを組み立てる要素がすでに存在していたり、それらの人たちの中に何かに魅かれてその場にやって来る共通の文脈性があることを物語っているのです。つまりそこにある種の必然性が存在するというわけです。“Planned happen stance theory”というのは、スタンフォード大学のJ.D.クルンボルツの理論ですが、ここで言われている“planned happen”というのはまさにそのことだと思うのです。偶然のように捉えることと、必然として捉えることとは視点の階層に違いがあるだけなのかもしれません。

話が横道にそれたので、少し戻しましょう。学校でも学習塾でもない、あるいはコミュニケーションでもない森という学び場を、私は京都のベッドタウンである亀岡市のどこにでもあるような新興住宅地の真ん中に作っ

たのです。それは私にとっては、ひとつの実験でもありました。新しい学びのかたち、スタイル、考え方がはたしてこの地域に受け入れられていくのだろうか？ 子どもたちや親たちは、それをどのように理解し、変容していくのだろうか？ だからこのアウラ学びの森は、ワークショップ的なプロジェクトでもあったわけです。ただ、私たちはあくまでも民間組織ですのでマネジメントとして成立させることが必須条件となるわけです。だから地域のマーケットの中に受け入れられないと話にならないのです。単なる大学の社会的な実験ではありません。アウラの森自体が経済活動を能動的におこない、私たちスタッフの生活の基盤とならなくてはならないからです。

幸いアウラの森は、少しずつ地域に根差し、それなりの成長を遂げることができました。そして今日、その開校から11年がたったわけです。その間に森はどんどん変容していきました。様々な新しい出会いに影響されながらも、その一方で揺るがない一貫した学びの文脈を育ててきたのです。

この本の中で私は、このアウラ学びの森という場に繰り広げられていく様々な出会いを通しておこる人々の変容とそこから浮かび上がる一貫した文脈を読み解き、新しい学びの形としての〈森〉の可能性を考えてみたいと思っています。

〈学ぶ〉ということがわからない

私が新しい学びの場としての〈森〉を作ろうと思うようになった背景には、私自身の〈学び〉ということに向きあってきた歴史があります。ここでは、そのことに少し触れてみたいと思います。

「こら、そのキミ、何やっとなんだ！」

教室中に試験監督の声が響き渡りました。

それは私が高校1年の時の定期テストの最中に起こりました。私の隣に座っていた同級生が、ノートを机の中に忍ばせカンニングをしていたのです。そして不幸なことにそれが試験監督に見つかってしまったのです。彼はその場で教室から連れ出され、学校の規定によって全教科0点というペナルティを課せられることになりました。でも実はこのカンニング事件、これがその後の私の人生を決定する大事なトリガー（引き金）だったことを、当時16歳だった私は知る術もありませんでした。

私の定期テストは無事終了しました。すべては予定通り、私はテストの前日までに、教科書、ノート、プリント、そして問題集にいたるまで、その内容をほぼ暗記していました。中学時代、「テストでいい得点を取るにはすべてを覚えればいい」と悟っていた私は、ただひたすらどうすれば短時間に多くのことを暗記できるかを考えていました。そしてある集中の仕方をすれば、映像としてまるで写真に撮るかのよう、教科書やノートを脳に焼きつけられることを発見したのです。それには一つだけコツがありました。暗記する内容を理解しようとしなくていい。意味を考えようとすると、その特殊な集中ができなくなるからです。だから、ただひたすら理解せずに脳に焼き付けていくのです。そして何度も何度も、その脳に焼き付けたイメージを思い浮かべては、その再現性を確認するのです。そして当日のテストに臨むのです。

私はほぼ毎回、勝利を手に入れることができました。中学時代は、毎回クラスで1〜2番の成績を取っていたように思います。当時は先生からも高い評価を得、模範生のような扱いを受けていました。でも実は何

もわかっていないということを私自身はよく知っていました。テストが終わると、脳に焼き付けたものがすっかり消えてなくなってしまうからです。しかし、そのことを私はほとんど気に留めることはしませんでした。高い評価がその思いを打ち消していたからです。その方法がどうであれ、テストの結果さえ出していれば私は評価され続けていたのです。ポジティブなラベルは、私に振り返って考える機会を奪っていたのです。しかしあの事件は、これらの文脈をまるで裏側から映し出すかのように、私自身をこれからはじまる深い模索の渦の中へと招き入れたのです。

カンニングで処分された同級生は、その後しばらく学校へ来ませんでした。私は授業中に、空席になったとなりの席を見つめ、あることを考えていました。いや、考えていたというより、気づかされてしまったという方が正確かもしれません。

「あいつのやったカンニングと、僕のやった暗記のいったいどこが違うのだろう？ あいつは、机の中のノートを答案に写していた。僕は、前日までにノートの内容を一旦脳にしまって、それを答案に写した。机の中だったらカンニングと言われ、脳の中だったら優秀といわれる。でも本質的には、やっていることは同じなんじゃないのか…」

私のこれまでやってきた勉強は、カンニングと同じなんだ。けども、私はいつも高い評価を得ている。じゃ、学校の評価っていったい何なんだ。勉強するって、どういうことなんだ。

それはまさにパンドラの箱を開けてしまったようなものでした。次から次へと問いがわいてきました。16歳の秋、この多感な時期に私自身は〈学び〉について考え始め

るようになったのです。そしてそれは同時に、高校生というアイデンティティそのものをも揺るがしていきました。学びの意味を見失った私は、学生であることのアイデンティティさえも見失いかけていったのです。しかしその答えは、そう簡単に出るものではありませんでした。

〈学ぶ〉ってどういうことなのか？ そのことを考え続けているうちに、私は気がつけば 50 を間近に迎える年齢になってしまったような気がします。今になって振り返れば、この 30 年余り、そればかり考えてきたように思います。そしてその始まりがこのカンニング事件だったのです。

「暗記はカンニングと同じである」ということに気づいた私は、それから次第に暗記そのものを否定するようになっていきました。暗記に依存していたら、何も考えられなくなっていくような気がしたからです。しかし、一方で暗記をしないとなると何をしたいのかわからなくなりました。私の中には、〈学び＝暗記〉という認識が断固たるものとしてあったように思うのです。しかし何もそれは特別なことはありませんでした。今の子どもたちだってその多くは、同じように考えていると思います。それくらい暗記はテストに対して強力な学習方法のかもしれません。

「暗記をしない」という箍を一旦自分自身にかけてしまうと、そこから先がでてこない。つまり〈学ぶ〉ということについて、何をしたいのかわからないといった状況に陥るわけです。そして、そうこうしてあいだに再びテストの時期がやってきました。もちろん暗記していないのでできるはずはありません。私は今まで取ったことない成績を手にしました。最下位から数えて 5 番。担任からは「おまえ、何か悩みでもあるの

か？」と気遣われたこともありました。

そんな状況がしばらく続いた後、私はある結論を出します。それは「学習した内容の意味を一つ一つ考えていこう」ということでした。今でも記憶に残っているのは数学です。方程式と関数の関係をグラフ上で発見できた時は感動的でした。その後も、数列、微積へとその意味を拡大して理解しようとするのですが、これがなかなか簡単にはいきません。あれこれ考えていくうちに深みにはまり込んでしまい、先生に聞きに行くのですが、「高校生でそんな意味まで考えなくていい。それよりこの公式を覚えて問題に当てはめるようにしなさい」なんて答えが返ってくるわけです。だから私はだんだん先生にも聞きに行かなくなっていました。

問題の意味を考えるということは、自ずとそこに問いを生みます。どうしてそうなのか、このことと、あのことはどんな風に違うのか、考えれば考えるほど、問いが増えたりするわけです。当時は、もちろんインターネットもない時代でしたから、その答えを見つけるのも至難の業でした。頼みの先生も私の満足いく答えを出してくれそうになかったので、私は途方にくれながらも悶々とした思いで高校生活を送っていたように思います。ただ幸いなことに私の通っていた高校が大学の付属校ということもあり、私はそんな思いを持ちながらも推薦で大学へと進学することができました。

大学に入学した私は、学校に期待を抱いていました。大学には、本当の学びの世界というものがあって、私の問いにもしっかりと応えてくれると、どこかで信じていたのでしょう。しかし、入学して 1 ヶ月もたたないうちに、それは私の勝手な思い込みだったことを思い知らされました。

私の入学した 1980 年、それは学園紛争も終わり大学が一気に大衆化していった時代で、マス・プロダクティブな教育（知の大量生産）の全盛期だったわけです。授業はその多くが大教室で、教授がマイク片手に一方的に講義をおこない、多くの学生はそれに耳も傾けないといった光景が当時の大学の日常風景でした。私はすぐに授業にも出なくなっていました。大学に入っても、また途方に暮れたわけです。学びたいのに、まだ何をどんな風に学んでいいのかさえ分からなかったのです。

そんな私でしたが大学の 2 回生の頃、ふと図書館で手にした本がありました。デカルトです。私は、この難解な本を少しずつ読み解きながら、「答えが簡単に出ないことを考えていることこそが、私が私である所以である」ということを知りました。デカルトと自分自身を重ね合わせながら考えるようになっていったのです。そしてそれから堰を切ったように、西洋哲学を学び始めました。フッサール、ルソー、カント、ヘーゲル、キルケゴール、ハイデガー、マルクス、ニーチェ、ソシュール…と、それぞれの哲学者が互いに影響を受けたり与えたりしたその軌跡をたどるように読み進めては、それをレポートにまとめるといった作業を繰り返していきました。すると、ところどころで彼らの考えが自分自身の考えと重なりあうところがあるのです。私はそこを足掛かりにして、今度は本と対話を始めるようになっていきます。いやもっと正確にいうと活字を媒介として、その哲学者自身と対話を楽しむのです。そしてふと気がつく、その本の内容が自分ごとのようになっていく瞬間を実感するのです。

この図書館での経験が、私の学びのスタイルを形作ったのかもしれない。本と対

話しながら自分自身と対話する。そうすると自分自身と本の筆者とが対話を始める。そして本を読み終えた後、私は自分自身がそれまでの自分と違った存在になっていることに気がつく。つまり、「学んだことの唯一の証は、自分自身がどう変わったのかということである」ということを実感するのです。こうして私の中に少しずつ知の土壌が出来上がっていきました。様々なことを学んでいくための基本の考え方、それをこの段階の私は手に入れようとしていたのかもしれない。

その後、私は 3 回生の時に恩師と呼べる先生と出会います。フルブライトの 1 期生として 1950 年代に渡米し、アーモストそしてハーバードで近代経済学を学ばれた先生は、研究者としても指導者としても一流でした。私は卒業までに、何度先生のお宅にお邪魔したかわかりません。私はいつも先生に哲学のことや教育のことに関する自分自身の問いを投げかけていたように思います。そして先生は「自分は専門じゃないが…」と言いつつも、丁寧にひとつひとつ私の問いに答えてくださったように記憶しています。

先生との対話、それは私の中の知の土壌にまかれたいくつもの種のようなものでした。対話によるその知的作業は、常にライブだったわけです。あらかじめ用意されたシナリオなんかないわけです。私は先生の着眼点や論理の組み立て方、その整合性の図り方、他の論理との関係の構築の仕方などをこの対話を通して習得していったように思います。それは私の学びの世界に、やがて森へと発展していく要素が芽生えた瞬間だったのかもしれない。

その後私は、大学の卒業を間近に控え、これからも学びの現場に身を置こうと決心

するようになっていきました。ただどうしても、学校という用意された現場に身を置くことには抵抗がありました。そこで自分で学び場を作りだそうと考えたのです。それは1984年の冬のことでした。私は京都市内に一軒の民家を手に入れ、そこでアメリカのオルタナティブスクールをモデルにした「フリーディ」という名前の私塾を開いたのです。そこには、当時北海道新聞のジャーナリストだった大沼安史（元東京医療保健大学教授）との出会いが大きかったように思います。彼が著作を通して紹介したアメリカのオルタナティブ教育の実践（『教育に強制はいらない』一光社）は、そのどれもが夢あふれるものでした。少なくとも当時の学生だった私を魅了するには十分な実践がそこには紹介されていました。

「フリーディ」と言う名称は、free-studyに由来する造語です。自由ということは、当時の私にとって、(今でもそうかもしれませんが)大変重要な概念でした。というのも、1984年というのは、まさに「校内暴力」というコトバに象徴されるように学校が大変荒れていた時期であり、学校はそれを押さえ込むために管理体制を強化していったのです。そしてそのような状況の中では、自ずとその管理を称賛する声と、反対に反発する声が同時に生じていったのです。当時の私が反発する態度を取ったことは言うまでもありません。だからこそ、そこに「自由」というメッセージは必要だったのです。アメリカのオルタナティブスクールが、50年代のスプートニックショック以降の旧ソ連との技術開発競争のために管理強化された学校教育に反発する状況の中で誕生した歴史を、私は当時の日本の状況の中に再現させようとしていたのかもしれませんが。

そしてフリーディはその後、1999年まで

15年間続くことになるのですが、この間に社会はさらに大きく変動していきました。その変化は90年代に起こります。バブル経済がはじけ、それまでプラス成長を前提としていた私たちの社会は、ゼロ成長さらにはマイナス成長を引き受けざるを得ない状況を迎えました。しかし、その一方で消費化、情報化はどんどん進み、私たちの価値観が多様化すると同時に混乱し始めたのです。先が読めない社会、不確定であることを担保したポスト近代な特徴を備えた時代へと本格的に突入していったのです。そしてそんな社会の変動の中で、子どもたちの様子も変わっていったのです。

〈コトバ〉が通じない

「キミたちは、いったいどうしたいの？ やりたいの、それともやりたくないの？」

「……」

「どっちなの？」

「別に…、どっちでも…」

こんな子どもたちとのやり取りが増えてきたと感じるようになったのもやはり90年代に入ってからのことだと思います。

以前は私が何かを言えば、「それはいい」とか「そんなの嫌だ」とか、彼らは自分たちの意志をしっかりと主張することができました。少しばかり極端な行動化は見られましたが、私たちが彼らの思いや考えをつかむことは比較的やりやすかったように思います。ところが、ある時期からその反応が返ってこなくなってきたのです。同時に「ダルー」「メンドウ」「ウザイ」…こんなコトバが彼らの会話の中に増えていきました。

私は子どもたちの世界にもニヒリズムが蔓延し始めたことを実感していました。「どうせがんばっても仕方がない」、「がんばる

こと自体がダサイ」そんな感覚が子どもたちの間で広がりを見せ始めたのです。そしてそんな子どもたちの微妙な変化は、これまでの授業の形さえ変えざるを得ない状況をもたらしたのです。

ある時期から、これまでの教師によるパフォーマンスな授業がだんだん空回りするようになっていきました。反応が返ってこないのです。そればかりか、一生懸命何かを伝えようとしている教師に対して「何、熱くなってるの?」といったシニカルな反応さえ飛び出すようになっていきました。私は徐々に子どもたちとの間にコトバが伝わらなくなっていく感覚を覚えていきました。コトバが伝わらないというのは、学びの世界においては深刻なことです。何かを伝える際の媒介そのものが否定されるのですから、これまでの学びの形が機能しなくなっていくことは明白でした。しかし、その一方で、ではどういった学びの形が必要なのかという問いに対して答えることのできない私自身がそこにいました。授業が思うようにいかなかった時には、同じ問いだけが頭の中をグルグルと駆け巡っていきました。

その後 1995 年に、私たちは大きな事件を経験します。阪神大震災です。モノと情報にあふれた生活世界が、一瞬のうちに破壊されていく天災を私たちは目の当たりにします。しかし、そんな中からでも人々は立ちあがろうとしていく。それはモノと情報にどこまでも依存していこうというのではなく、自分の可能性を信じ、他者との関係性に勇気づけられながら、一步一步作り上げていくような、人間性あふれる復興への道のりでした。

そんな社会の変化を傍らで感じながら、私は新しい学びの場の必要性和その実現性

を同時に検討するようになりました。1998 年、私は新しい学びの場の構想に向けて具体的な準備を開始することになりました。そしてそれから 2 年後の 2000 年、21 世紀がスタートした記念すべき年に、「アウラ学びの森」は開校したのです。

アウラの森が投げかけるもの

この本ではできる限り、学びの森の日常世界をみなさんにご紹介しようと思っています。アウラ学びの森は 2000 年の開校以来 11 年が過ぎようとしています。この間、アウラの森では、様々なドラマが繰り広げられていきました。ドラマはそこに関わる人たちの変容の軌跡です。アウラの森という場で、そこに関わる子どもたち、親たち、スタッフたちそして私自身が互いに何らかの影響を受けながら、新しい自分に気づき自分自身を更新していったのです。

アウラの森に関わる人たちのドラマは、やがて磁場となってこの森の中に埋め込まれていきます。「なぜかアウラに来ると集中ができる」、「なぜか自分自身を変えていくことができる」といった伝説のようなものが実感として感じられるようになるのです。そしてその感覚を感じられる人たちによって、また新しいドラマが作られていくといった循環が生じていく、これが、アウラの森の日常世界なのです。

人と物理的な場がそれぞれの意味を構成することで日常世界は作られていきます。それはユクスキュルの「環境世界」と重なるものなのかもしれませんし、絶えず循環する「生態的システム」と重なるものなのかもしれません。そして私は、そんなアウラの森の日常世界をできる限り記述していこうと思っています。複数の理論をそこに

重ねながら、〈森〉という新しい学びの場のしくみを少しでも明らかにできればと思っているのです。

アウラの森は、社会に対する私たちのメッセージであり、これからの教育の世界に提案する新しい学びのモデルです。世界の経済や政治が混迷し、私たちの生活そのものもしだいに不透明感を帯びていくことになってしまった現代社会。私たちは、モノの豊かさと引き換えに何かを確実に失いつつあるのかもしれませんが、しかし、時代の流れを元に戻すことはできません。私たちは前に進み続けないといけないのです。だから、どこかでその方向を変更していく必要があります。そしてその可能性を私たちは教育の世界に見出そうとしたのです。

ただ問題は、その教育の世界そのものも不透明な社会の中に埋め込まれているという事実です。具体的には子どもたちの生活世界と学校教育システムが社会の中にすっぽりと埋没しているわけです。だから、そこから新しい教育の世界を取り出していくためには、自ずと今までとは異なる視点とそれを実践する新しい場が必要となると考えたのです。そして誕生したのがアウラ学びの森なのです。アウラの森は、今の社会と切り離された存在ではありません。どこかで今と繋がりながら、どこかで新しい世界を作りだしていくそんな中間的な場、汽水領域に存在する場としてデザインされたのです。

「学びは、どこへ向かうのか？」

私が冒頭に立てた問い。その答えを見出すために、私はアウラの森を作りました。当初その問いは、私の個人的な経験の中から生まれました。しかし時代が進み、私自身も様々な経験を重ねていくにつれてその問いが社会の流れと切り離しては考えられな

いものだというに気づいていったのです。不透明で不確実なポスト近代と呼ばれる現代社会を私たちはどのように生きていけばいいのでしょうか？ この問いが学びの世界と重なっていったのです。

アウラの森が投げかけるものは、そんな私たちの不透明な未来に対するかすかな希望なのかもしれません。森の中で様々なドラマを作りだしていく子どもたちの姿そのものが、希望の光となっているのかもしれません。

2. 森を記述する

立体的な記述

〈学び〉ということを考え始めるようになってから、もう 30 年以上になりました。この間私自身の中では、幾度となく〈学び〉という定義が更新されてきたように思います。学びの現場に携わるということは、すなわち自分自身の学びを作り上げようとすることであり、それを子どもたち、あるいはその場に関わる人たちと共有することです。そういった意味から考える時、学びは絶えず変容し、更新されていく〈動き〉のようにとらえることができます。

前に私は自分自身の高校時代のエピソードと、90 年代に入ってからの子どものエピソードを取り上げましたが、それは私自身の中で学びの大きなパラダイムが変わる瞬間だったと思っています。しかし学び自体は、日々更新され続けているように思います。

では、その学びの動きをいったいどのように記述すればいいのでしょうか？ 学びの世界は、ある特定の理論で定型的に表現できるものではありません。そこには多様

な学習者の動きと、不確定な社会の状況があるからです。つまりその領域に変数が多すぎて、もはや定型化できなくなっているのです。

「現実には緑で、理論は灰色だ」といったのはゲーテですが、多様な現実を無理やり理論の中に押し込めようとすると、豊かな緑が灰色になってしまうというのです。だからここでは、できる限り豊かな現実を様々な視点から眺めたエピソードを通して描きだし、そのエピソードを重ね合わせていくことで、学びのリアリティをあぶりだせればいいなと考えています。

そういった意味において、ここでは学術的厳密性をさほど問わないことを前提としています。その厳密性を追求すればするほど理論が前面に出てしまい、豊かな緑の現実が灰色に染められてしまうからです。しかし、かといって理論を全く引用しないわけではありません。むしろ複数の視点から映し出される現実を支えるためのものとして複数の理論を取り上げることになりました。特定の理論に集約させるのではなく、複数の理論をメタレベルで統合できる可能性のある理論を模索していきたいと考えているのです。そうすることで、豊かな現実を立体的に記述できるように思うからです。

参与観察によるエピソード記述

学びの世界の現実を立体的に記述するためには、そこに複数の視点が必要になります。そこで繰り広げられている現実を少しずつ違った視点で捉え、それをレイヤーとして重ねていくわけです。ここでは、その方法論として参与観察（participant observation）によるエピソード記述を活用します。参与観察は、本来、文化人類学の

観察法でしたが、アメリカの精神科医、H. S サリバンの報告によって広く知られるようになったものです。

アウラ学びの森においては、もともと私自身が複数の視点を持ちながら、その現場に参加しています。生徒たちに対しては「教師」として、スタッフとして働く他の教師たちに対しては「塾長」として、生徒の親たちに対しては「先生」として、その他にも繋がりのある学校の教師たち、行政関係の人たち、地域の教育、福祉、心理に携わる人たちと日常の中で関わっているのです。そんな中で研究活動を進め、原稿を書くことによって、さらにメタレベルの「観察者」や「記述者」としての視点が加わるようになったのです。

それぞれの視点を持った私は、アウラの森の実践者としてそれぞれの立場に関わりながらエピソード記述を続けます。そしてそのエピソード様々な理論と重ねながら省察的に解釈し、また現場に返していくといった循環的なシステムを構築しながら、日々の実践を続けていきました。

学校でも学習塾でもない、そしてコミュニケーションでもない〈森〉という新しい学びの場に日々繰り返される豊かな緑の現実の世界を主旋律として、そこに透かしのように理論を重ねながら、新しい学びの世界をみなさんに紹介できればいいなと思っています。

（きたむらしんや 2011/8/13 脱稿）

幼稚園の現場から

VI

鶴谷主一

原町幼稚園（静岡県沼津市） 園長

◆2学期の始業式。長い夏休みが明けた日、降園時間にお迎えに来たお母さん方の「長かった～～」「やっと始まった！」という嬉しそうな顔がたくさん並んで久々の井戸端話に花が咲いていました。

原町幼稚園では、毎年8月の最後の週、今年は23日から2学期をスタートさせました。地元の小学校より約1週間早いため、お母さん方からは「幼稚園が先に始まってくれと助かります！上の子の宿題を見てあげられるから…。ホント1時間でも助かるんです！」という声も聞かれました。

そこをねらって早く始めている訳では無いんですが、思わぬところで喜んで頂けるのは嬉しいことです。

◆ネット上に見かける疑問

“幼稚園の夏休み”とインターネットで検索すると、世の中のお母さん方の疑問や不満がネット上にたくさん飛び交っています。

内容を大きく分けると3つ。

1つめ…「どうしてこんなに長いの？」「いつからいつまでが夏休み？」という期間について疑問や不満。

2つめ…「8月は休みなのに保育料を払わなくちゃいけないの？」という月謝に関する疑問や不満。

3つめ…「預かり保育」についての情報交換。

◆8月の保育料って

簡単な疑問から答えていきますと、「諸経費は年額を12等分してあるので8月等長期お休みにも振り分けられます。」ということを予め説明していない幼稚園の保護者の方が疑問をネット上に投げかけているのだと思います。たいていの幼稚園ではどこかで説明しているはずですので、了解済みの方が大半だと思います。原町幼稚園では入園案内に記載しています。

しかし、心情的にはしっくりこないでしょう！幼稚園に行っていないのにお金を払わなくちゃならないからです。経営者としてその気持ちをヒシヒシと感ずることもあってか、8月に一週間程度「夏期保育」を行っている園がほとんどです。「8月もやっていますよ、いちおう」というスタンス。



《夏ならではの活動/ボディーペインティング

専用の絵の具を使って最初は手から…》

教育的側面から見ると、夏ならではの“お楽しみプログラム”を用意して楽しむ園も多く、保育者にとっては「カリキュラムに追われない保育」ができて、子どもたちと楽しい時間をすごせることも多いものです。たとえば、スイカ割りやそうめん流し、ボディーペインティング、夕涼み会などの計画をする園もあります。

また、最初から8月は集金を避けたり、年間数回に分けての分割方式など、園によってそれぞれ保護者の不満が出ないように工夫されていますが、支払回数が変わるだけで総額は変わらないでしょう。



《顔にも塗ってみようかなあ…》

◆次に、夏休みの期間

ってどうやって決まってるの？という疑問にお答えです。

文部省管轄下にある幼稚園では、学校教育法と幼稚園教育要領という法律や規則にのっとり、それぞれの園の休業日は幼稚園の経営主体である学校法人の理事会で承認を得た「学校法人〇〇学園 園則」という規程に定めてあります。簡単にいうと、公立学校に準じて学期や夏休みを設定してきました。それなのに私立幼稚園では、あっちの園は夏休みが長くて、こっちの園は短いし、始業の日もバラバラじゃないですか、どうして？

原町幼稚園の園則を抜粋してみましょう。

第2章「学年、学期及び休業日」の第7条に休業日が定めてあります。こちら→『休業日は、次のとおりとする。ただし、園長が必要があると認める場合には、休業日を変更することができる。』

- (1) 土曜日、日曜日
- (2) 国民の祝日に関する法律に規定する休日
- (3) 夏季休業日 7月20日から8月31日まで
- (4) 冬季休業日 12月20日から翌年1月7日まで
- (5) 学年末・学年始休業日3月20日から4月7日まで

たいていの学校法人の園則には、園長が必要と認めれば変更することができる、という一文が入っているのがミソで、それぞれの園の都合に合わせて長さを決めることができます。

ただし、幼稚園教育要領で規定されている保育日数（年間39週以上／概ね220日）を確保しなければならないので、極端に長い夏休みはありえません。逆に短いぶんには制限が無いので、急進的な園では、夏休みを廃止した園もチラホラ出始めたという話を聞きます。

ちなみに、皆さんご存知のように保育園には夏休みはありません。お盆でも希望があれば保育士が出勤して子どもを預かります。原町幼稚園の向かい側に建つ原町保育園では今年もお盆の間、2～4人の子どもが登園し、2人の保育士がのんびりと保育をしていました。今後増えてくる「子ども園」では、通常保育時間と長時間保育を親が選択することになると思いますので、長時間保育希望者の子どもを対象に、保育園並みに園を開けておくケースが多くなると予想します。

◆一般的「預かり保育」タイプ

ここ数年来、夏休みを完全休業にするのは、主に公立幼稚園か、少数派の幼稚園になってきました。大半は「長期休業日の預かり保育」を行っています。

今は当たり前のようになっていますが、夏休みの預かり保育は、この10年ぐらいでワッと広がった制度です。2004年からしかデータがありませんが、沼津市内23カ園のうち2004年に実施していた園はわずか9カ園。2005年には13カ園。2011年は21カ園で実施されています。急激に増えているのがお分かりでしょう。原町幼稚園でも、ちょうど10年前の2001年から夏の預かり保育を始めています。



《テーブルの上でフィンガーペインティング》

◆教職員の立場から

ここ数年広がってきた夏の預かり保育の流れの中で、利用者からは歓迎の声が上がる一方、勤務する教職員の間からは不満の声もネット上で見かけます。今まで長い休みを享受してきた教職員の理解を得ずに実施を急ぐと不満も生じるとは思いますが、本音でもあるでしょう。

まず年次有給休暇という問題があります。経営的に余裕のある一部の大規模園を除き、クラス担任のピンチヒッターが常駐しているような人的余裕ある園はなかなかありません。そこで幼稚園に勤務する教職員はよっぽどのことでないと通常保育日に有給休暇を取ることは難しくなります。

そのため幼稚園では、夏休み、冬休み等の長期休業日にまとめて有給を取ってもらうように労使で協定をしています。（労働基準法第39条第6項を適用）ですから、年次有給休暇の日数を考慮して、教職員の夏休みの出勤日を決めていく必要があります。

次に、教職という仕事は、常に専門的な新しい情報や理念、保育方法を学習していくことが不可欠です。そのため、夏休みが長かった時代でも有給休暇日数を超えた休日は自宅研修をするという名目で自己研鑽を促してきました。さらに、各研究団体が成果を発表したり、研修会を開催することも夏休み期間中に集中してきます。夏の預かり保育の広がりによってそのような学習の機会が圧迫されていくことは、教育現場としての教育力が低下することにつながっていくので、懸念材料となります。更に教員免許の更新のため10年ごとに所定の研修を受けなければならないことを考慮すると、人的余裕のない（大半の）幼稚園は、ますます仕事のウエイトが増し、苦しくなることも懸念されます。

休暇を個人として楽しみ、リフレッシュすることは仕事への鋭気も養えると私は思いますので、教職員を犠牲にして預かり保育を行うことは避けなければならないと考えています。ニーズに応える経営的な側面と働く人のバランスは常にとっていかなくってはならない肝心なことです。

◆預かり保育システムについて

「預かり保育」をご存知無い方、もっとよく知りたい方のために、このシステムについて解説しておきます。知っている方は飛ばして頂ければ結構です。

「居残り保育」という言い方をしたほうがピンとくる方も多いかもしれません。

各園が自主的に行っていた「居残り保育」時代にはその仕事に補助金はつきませんでした。が、「預かり保育」として事業化し申請し、実績書類を提出すれば補助金が出るようになったのです。

余談ですが「居残り」というイメージが悪いので「預かり」と言ったのか知りませんが、そのままのネーミングを使っている園は少なく、「アフタークラス」や「たんぽぽクラス」といったクラスネームを付けて呼んでいます。原町幼稚園では、いっぱい遊ぶぞ！というイメージで「あそびっこ」と呼んでいます。



《どれどれ？鏡で確認》

幼稚園で子どもを預かる時間は、昼食の1時間を入れてほしい5時間、朝の9時から午後2時が適当ですよ、となっています。平成20年10月改定された幼稚園教育要領によって『幼稚園の保育時間は、幼児の教育時間の妥当性や家庭や地域の生活の重要性を考慮して4時間が標準』とされているからです。

しかし、時代の流れからパートで働くお母さん方が増え、社会的なニーズが高まったことから「子どもを預かる時間を延長したら補助金も出しましょう」という行政の施策が出てきました。沼津市内でも通常保育日の預かり保育は2005年度から100%の実施率です。

そのうち「長期休業日に実施したら補助金を加算する」というオプションがつき、夏休みの預かり保育が急激に増えてきたわけです。「他園がやっているのにウチでやらないわけにはいかない」という経営判断も実施に拍車をかけました。

行政が打ちだす補助金の制度は毎年微妙に変わ
るのですが、『長期休業日加算』と同時に出された
て『休日に実施したら加算』というオプション、そ
して最新の『通常日に5時間以上実施したら1時間
ごとに20万円加算』というオプションも出てしま
した。…ということは、午後7時以降、あるいは午
前7時の早朝もやれる。幼稚園は、やろうと思えば
保育園以上に長時間、長期間子どもを預かることが
できるようになってしまいました。

預かり保育事業は、保護者から頂く預かり保育の
利用料（保育料とは別料金）と補助金で、運営費（ほ
とんどが担当職員の人件費）をまかないますが、利
用人数さえいけばじゅうぶん採算の取れる事業だ
と思います。ただ休日や長時間に踏み切るのは、「本
来保育園に入園するはずの幼児が、入れなくて仕方

なく幼稚園に入園してきて、休日保育を要求したの
で実施を決意した」ような稀なケースしかないだろ
う、と私は思います。

◆具体的な例として

「原町幼稚園の夏休み」をご紹介します。

原町幼稚園の夏休みは、園児用3つのメニューと
小学生と未就園児対象メニューで施設を利用でき
るようにしています。保護者のニーズ、子どものあ
そびたい気持ちにに合わせて選んでももらえればい
いと考えています。

主に卒園児対象ですが、知り合いの小学生でも夏
のあそびっこを利用できます。5年生以上は先生
のお手伝い係として働いてもらうので、無料で預かり
ます。これほどメニューが多いのは、ちょっと珍し
いかもかもしれません。

◆原町幼稚園「夏休み」の5つのメニュー

- ①夏のあそびっこ（預かり保育）★08：30～17：30（有料¥500/回数券使用で¥400）
- ②園庭開放 ★09：00～11：30（無料/雨天中止）
- ③プール開放 ★13：30～14：30（無料/保護者同伴/雨天中止）
- ④未就園児園庭開放&プール ★10：30～11：30（無料/保護者同伴）
- ⑤小学生（①の場合のみ4年生まで有料、自習時間を設ける）

◆2011年・夏の日程表（8/1～19で全メニュー①～⑤実施）

担当職員数と利用人数（内小学生人数）/全園児187人

月	火	水	木	金
7/25	26 預かりのみ メニュー①⑤ 担当職員数→ 職員 3人 利用人数(小学生) 利用64(21)	27 預かりのみ メニュー①⑤ 職員 3人 利用58(26)	28 預かりのみ メニュー①⑤ 職員 3人 利用52(20)	29 お休み 職員 園内大掃除
1 職員 5人	2 職員 5人	3 職員 5人	4 職員 5人	5 職員 5人

利用84(17)	利用102(40)	利用89(31)	利用66(12)	利用84(23)
8 職員 5人 利用74(17)	9 職員 5人 利用71(28)	10 職員 5人 利用74(23)	11 職員 5人 利用53(12)	12 お盆休み
15 お盆休み	16 職員 4人 利用11(2)	17 職員 4人 利用34(7)	18 職員 4人 利用43(6)	19 職員 4人 利用42(10)

◆職員のシフトの入れ方

参考になるかどうかわかりませんが、具体的に実際の作業を解説します。

- 〈1〉まず、夏休み期間中（7/25～8/22）のうち、16日間で夏のメニューを実施しますので、毎年の利用人数から予測して一日の職員の必要人数を決めます。

- 〈2〉次に延べ必要人数を出します。

$$(3人 \times 3日) + (5人 \times 9日) + (4人 \times 4日) = \text{延べ70人}$$

- 〈3〉18人の教職員を経験年数別に分け、出勤日数を決めて70になるようにします。ピッタリ分けることは難しいので、余分はパート職員が担当します。パート職員が勤務日数を増やしたいと希望した場合は、常勤職員の日数を減らします。

そうすると、次のように一人ひとりの出勤日数が決まります。

○経験年数長い職員 4人 × 4日勤務=16

○次にに長い職員 3人 × 5日勤務=15

○新人職員 4人 × 7日勤務=28

○パート職員 3人で残りの11日を担当

計算すると（16+15+28+11=70人）

ここまでの園長の作業。

- 〈4〉このあとは、同じ日に経験の浅い職員が偏らないように配慮しつつ、経験年数の長い職員から、希望日と希望時間（早番と遅番）を入

れていきます。あとは職員同士で話し合いつつ出勤日が決まっていきます。

- 〈5〉名前が入ったら経験のある教員を園長がリーダーに指名し、責任を持ってその日の保育を組み立ててもらいます。

以上で日々の担当者が決まります。

7日間出勤する職員でも、夏に9日間の有給休暇は取れることになります。（残りは冬休み、春休み等で取ってもらいます）

今年のお盆明けは利用人数が予想よりずいぶん少なかったため、3人体制、もしくはお休みにしても良かったと思います。この反省が来年度の日程と人数配置に反映します。



◆小学生が意外と多い

利用人数を見て頂くと小学生の人数が多いことがわかります。前半2週間は6年生の職場体験の子どもたちが7～8人含まれていますが、その他は有料の預かり保育利用児童です。小学生が多くなると、幼児と遊びかたが違うため、困ることも起こるため

広報はしていませんが、口コミで広がって卒園児中心に利用者が増えてきました。

背景としては、小学校に子どもが上がるとパートに出るお母さんも増えます。普段は子どもが学校に行っている間に仕事をするのですが、学童保育を利用していないため、夏休みは子どもの預け先が困るというケースです。主に低学年が多いのですが、学童保育からはじき出される4年生以上の児童の利用もありました。

小学生も行き場所が無いのかなあ、と思います。今年は保育園卒園児の申込もありました。実際に保育園卒園児の小学生ほどニーズは高いと思いますが、保育園は園児が通園しているので、受け入れてあげたい気持ちはあるんですが、部屋はありません。そこで幼稚園で受け入れたという訳です。

6年生、中学生、稀に高校生も**職場体験**で来園しますが、これはとても助かります。

先生達に言わせると、夏のあそびっこより通常保育のほうが楽だと言います。なぜなら、1クラス30人の自分のクラスを保育するのは慣れているし、年齢も同じで子どもの性格も把握しています。しかし夏のあそびっこでは年齢もごちゃまぜで、来園する時間も利用するメニューもそれぞれです。いろんな立場の子どもたちがいっしょにいる訳で、受付して、対応するだけで目が回る忙しさです。

そんなとき、小さい子どもたちの面倒を見たり、コップを洗ったり、お掃除をしたり、ほんとうに職場体験の学生はよく働いてくれると言います。なので、来年度は職場体験をもっと募集しようと考えています。小学生も小さい子どもたちと触れ合うことで、優しくなったり積極的になったり、いい効果が現れてきます。先生は助かる！お互いにメリットがあるのですから。

◆ただし！小学生の受け入れについてはきちんとラインを引き、具体的に要求をしておく必要があります。次の文章は、小学生保護者向けの（実際には在園児に毎年配布している）手紙の抜粋です。

参考までに。



《ケッコウなりきってます！》

夏のあそびっこを利用される小学生保護者の皆様へ

夏の園庭利用に小学生の皆さんがたくさん遊びに来てもらって嬉しい反面、小学生と幼児の遊び方、動きが違いため時には幼児にとって危険であったり、怖くて遊べない状況が出てきてしまいます。そこで、園としては、園児が安心して遊べる環境をキープすることを最優先すべきと考え、次のように小学生の皆さんには利用のしかたをお願いすることになりました。小学生の遊びたい気持ちは良くわかりますが、万が一ケガをさせたりすると重大なことになるのでご理解下さいようお願い致します。

◎行動が活発すぎて、幼稚園児と一緒に過ごすのは難しいと判断した場合は、

申し訳ありませんが利用を遠慮して頂きます。

以上、利用するお互いの安全のためご理解よろしくお願い致します。

夏のあそびっこにきてくれる小学生のみんなへ ※低学年のお子さんにはお家の方が読んであげて下さい。

□夏のあそびっこを利用する小学生は、次のことを守って下さい。

- 小さい子どもの面倒を見て、あぶなくないように一緒にあそんであげて下さい。
- 先生のお手伝いも積極的にしましょう。
 - 自習の時間は、家から持ってきた宿題や本を読んでしっかり勉強しましょう。
 - 小学生同士のボールあそびはしないでください。
 - ブランコやすべり台の上など、小さい子には危険な場所では、
周りの小さい子どもにぶつからないように注意してあそびましょう。
 - プールの時は水しぶきを上げたり、小さい子どもが怖がらないように上手にあそんで下さい。
- ◆ご協力いただける小学生については園庭解放、及びあそびっこにてお預かりいたします。

以上のようなやり方で、今年も夏休みを運営してきましたが、夏休み中1回も来園しない子どももいます。どれぐらいの比率かというと、

年長児58人中22人（38%）

年中児60人中14人（23%）

年少時58人中18人（31%）

満3歳児7人中1人（14%）という結果でした。

年長児が多かったのは意外な感じがしましたが、兄姉のいる家庭がほとんどだったので、家でも楽しく遊んでいるのでは？と想像したのです。

2学期にほとんど全員が揃って顔を合わせましたが、夏のあそびっこの回数に全く関係なく子どもたちは、1学期の友だち関係を再開させていました。



《かわいくペイントできました》

学校法人松濤学園 原町幼稚園

7クラス 現在 187 名在籍

園長 鶴谷主一

幼稚園歴 28 年(内園長歴9年)

<http://www.haramachi-ki.jp>

◆夏休みのメリット

いろいろ夏休みについて書いてきましたが、こんなに書くことがあったかと自分でも驚いています。

しかし今までの話は「大人サイドの話」です。では、いちばん肝心な子どもの成長発達にとっての夏休みってどうなのでしょう？

私自身の経験から、夏休み明けの子ども達が登園してくると、「お、一皮むけたなあ！成長したなあ！」と感ずることが多々ありました。そういう視点で、夏休みが開けの様子を各クラス担任から聞いてみましたので、最後に書き加えておこうと思います。

+++++

「年長組担任の報告」

- 誕生日のメッセージカードを各自書くのですが、文字が書けるようになった子どもがぐーんと増えて、見本もいらなくなりました。
- 朝、部屋に入ったときに「あれっ？」というほどピシッとイスに座って、しっかりこっちを見ていたので驚きました！いっぱい褒めてあげました。
- プールで水を怖がっていた子が、潜ってびっくり。聞いたら夏休みの短期水泳教室に通っていたそうです。
- いつも遅い子が昼食を早く食べ終えたので驚いて聞いたら、野菜も食べられるようになったということでした。

「年中組担任の報告」

- 給食の時間が苦手だった子が、今日の給食では初めて完食して驚きました。
- その給食を食べられた子のことを、グループの友だちが応援したり拍手したり…今ま

では自分のことだけで、人のことまで気が回らなかったのに、成長を感じました。

●1学期、家庭の問題で精神的に不安定だった子が、休み中一度も登園していないので心配していたんですが、不安を訴える時間も激減し、笑顔も見られて安定した様子になりました。よかったです。

●いつもスプーンとフォークしか使わなかった子がお箸が使えるようになっていました。

●あまり喋らなかった子が、夏のキャンプの経験を堰を切ったようにたくさん話してくれました。

「年少組担任の報告」

- 野菜嫌いだった子が、頑張って食べられるようになっていました。夏休みに練習したようです。
- 1学期おしめで通園していた子が、パンツで登園！はじめはモジモジしていましたが、可愛いパンツだね！と励ましてトイレにいき、はじめてトイレでできました！
- 先ほどの子ですが、トイレでできたことで自信がつき、我儘だった態度もソフトになって、昼食のとき、嫌いな野菜にも挑戦する姿がみられ、一つできたことで他の生活面も改善される様子がよくわかりました！
- プール活動になると石のように動かなかった子が、活動に参加できるようになっていました。お父さんと水遊びをたくさんしたそうです。
- 1学期には見られなかった意外な顔ぶれで遊んでいるので聞いたら、夏休みにクラスの友だち同士（グループ）でよく遊んだということでした。

+++++

担任の話から、親が我が子とたっぷり関わってくれた姿が目に見えてきます。

園からも「夏休みのカレンダー」という、週ごとに夏の目標を書き入れる教材（市販品）を事前に配りますが、これも目標を設定するのに効果があったようです。2学期に回収してみると、「トイレをがんばる」「おてつだいをする」「やさいをたべる」「水にかおをつける」など、それぞれ子どもと相談して書き込んだ目標が書かれていて、夏休みを有効に使ってくれた様子が具体的にわかりました。

カレンダーを見ながら担任は「〇〇がんばったね！」と、花マルなんかを書いて、その子の自信とやる気を高めて2学期の保育活動に生かしていきます。



《ペイントに飽きたら水遊び？》

最後の報告は、夏の預かり保育に積極的に通った年少の女の子の話です。お母さんが担任にこう話してくれたそうです。

●人見知りが強く、1学期に決まった友だちとしか遊ばなかったのが夏休みのあそびっこに積極的に通わたんです。あそびっこでは年中長や小学生のお兄ちゃんお姉ちゃんに可愛がって頂いて、たのしく揉まれたお陰で、

人見知りがほとんどなくなりました。よかったです～。

もう1人別の人・・・

●お庭の大型遊具がこわくてできなかったんですが、夏のあそびっこで何回も挑戦してできるようになったんです！よかったです～。

夏休みを子どもの成長という視点で見たときに、もう、これはごく当たり前の結論しか出ないんですが、親が我が子としっかりじっくり向き合うことがどんな状況であれ子どもの成長につながることはハッキリしています。

そして、「幼稚園の夏休み」は、完全休業でも完全営業でもない、なんとなく中途半端でゆるい時間を提供できるメリットがあります。

言い換えれば“教育する場”から“あそび広場”的な役割にチェンジすることで、案外と子どもたちを豊かに育てているのかもしれない。



福祉系 対人援助職養成の 現場から⑥

西川 友理

特徴や性格を活かす

相談援助実習の巡回指導の際に、児童養護施設で実習をしている学生から相談を受けました。

児童養護施設とは、様々な事情で家族と暮らせない、おおむね2歳から18歳までの子ども達が入所している社会福祉施設です。「ちっちゃい子はまとわりついてくるし、かわいしい、関わりやすいねんけど、中高生とは、どう関わったらいいかわからへんのです。」

「そうか…。あなた、自分が中高生の時、あまり親しくない人に対して、どうやった？まとわりついていった？」

「そう、それを思い出すと、別に用事も無いのにキャアキャアまとわり付くということもないやろうなあって…。」

「うん、そう思うんやね。(わかってるやんか)」

「でも、実習やし、中高生についても解りたいから、なんとか関わりたいんですけど、きっかけがなくて…。」

「まあ、しばらく試行錯誤してごらんよ。」というやりとりがあった翌週の巡回指導の際、学生は笑顔で話してくれました。

「先生、高校生でバトミントン部の子がいるんです。その子、この前中庭で練習していたんです。私、小さい頃からずっとバトミントンやっていたから、思わず『ここはこう！もっとこうするの！』って指導してしもたんです。で、そこから仲良くなって、中高生と毎日めっちゃ喋るようになったんですよ！」

学生が、自身の特徴を生かして利用者の方と関わる術を覚えると、自信が生まれます。

利用者の方との関わりや支援の武器になるような、その人自身の経験や性格、特徴を、仮に“ツヨミ”と呼ぶことにします。学生は、自分なりのツヨミを自覚すること、見出されることで、利用者との関わり方に余裕を持って臨めるようです。

また、一見欠点に見える性格や特徴が、思わぬ形でツヨミとなり、よい結果を生む

事もあります。

ある学生は障害者と接したことがありませんでした。この学生が3日間、就労継続支援B型の事業所において、ボランティアをすることになりました。就労継続支援B型とは、一昔前には障害者の作業所や授産施設と呼ばれていたところで、障害者が日中、軽内職などを行っています。

緊張しながら迎えたボランティア初日。

「今、何時？」と、ある利用者の方が訊いてくれたのです。

「〇時〇分ですよ。」と学生は正確な時間を答えました。

それから、その利用者の方は「今、何時？」と一日50回くらい訊いて来られたとの事です。その度に学生は、「〇時〇分ですよ。」と時計を確認して答えていました。

ボランティア最終日の午後遅く、ある職員の方が笑いながら、「キリがないから、そんな真面目に答えなくていいよ。職員は皆、『あーハイハイ』って流してるねんから。」とおっしゃられました。

その日、退出する間際、学生が利用者と職員の方々に挨拶をしました。

「お世話になりました。今日で最後です。ありがとうございました。」

すると、頻繁に時間を訊きに來られていた利用者の方が「いつも、時間をちゃんと言ってくれてありがとう。」と、学生に声をかけてくれたのです。

それを見ていた職員の方々は目を丸くして、『わかって、やってたんや…!』とびっくり。

「時間を訊く事がこの人なりのコミュニケーション方法だとは知っていたけれど、正確な時刻が返ってくる事がこの人にとって意味がある事だとは、考えたこともなかつ

た。」

「私も職員は、慣れで対応していたところがあったかもしれないわね。」

支援のための確かな技術も豊富な知識もない。何が出来るか、出来ないかもわからない。だからこそ誠実に働きかける。それが時にツヨミとなり、支援につながることもあるのだと、学生から教えてもらいました。

特徴や性格＝ツヨミか？

この二人の学生の例を見ると、どんな特徴をもった人でも、どんな性格の人でも、社会福祉の現場ではそれらをツヨミとして生かし、専門職ならすばらしい支援が出来る、学生ならすばらしい実習が出来るという話になります。しかし、実際はそう簡単な話ではありません。

ある学生は、授業で議論する時、皆が感情に流されて、うっかりと現実や制度の枠組みを見過ごしがちな時でも、常に「法律ではどうなっているか」「制度的にそれは合っていることか」という視点で発言していました。他の学生からは、「おおお!」と感嘆の声があがる事もしばしばでした。一方で、“これを言えば相手はどう感じるのか” “こんな時、相手はどう思うだろうか” といったことに対して考える事は苦手なようで、

「人が考えたり感じたりしている事なんて、絶対に自分も同じように感じられへんやないですか。今まで生きてきた人生が違うんやから。」

「じゃあ、あなたの話を、『わかりたい、理解したい』と思って聴く人と、あなたの話なんか『どうでもいいわ』と思いながら聞

く人と、どちらの人と話がしたい？」

「そら、前者ですけど…。でも、本当に聞きたいと思って話を聴いてくれているかどうか、解らないじゃないですか！」

…私は、この学生を実習に出していいのかどうかと悩みました。でも、実習中、何かの拍子に“相手の思いに寄り添う”大切さに気付けることもあるかもしれないと考え、実習に向かわせようと決めたのです。

実習に向かうために、学生には「あなたは対象から一歩引いて考える事が出来るのだから、それを生かして、実習先の支援について勉強してこよう。それと、利用者の方の思いや感情の受容はとても大切だという事は、授業でも聞いて知っていると思う。それはどうして大切なのかについても、考えるように。」と指導しました。

学生が行く予定の実習先には、実習開始前に「この学生は相手の感情の受け止めが少し苦手なんです。ただ、冷静に物事の判断は出来るんです。」と言インフォメーションを入れました。

実習開始後、4日目。巡回指導にいくと、実習担当職員の方が非常に困った顔でおっしゃいました。

「先生、あの学生は、冷静というのとはちょっと違うと思います。全く利用者の心に寄り添おうとしない。利用者と関わろうとはするけれど、その時に発する思いやりのない無神経な発言で、利用者が傷つきます。支援にも支障が出て、困ります。」

学生は言います。

「僕は利用者の方に事実を言っているだけなのに。相手のことを解ろうと、話しかけていたのに。それが悪いんですか？」

「…うん、あのな。正しい事とええ事は違うねん。事実と真実もイコールやないし

な。」

「…。」

「…ていうかな…まず利用者の方が何をどう考え、思っているのかが大切でな…って、こんな言い方やったら解らへんよな、君は…。」

「はい。わかりません。」

「うーん…。」

「ある発言について、職員の方に注意されたから、その都度、ああこれは言ったらあかん事やねんな、とは、理解しましたけど。」

「う…うーん…。」

学生は自分の言動が問題とは思っていない様子でした。学生は、他人とのコミュニケーションという点において、今まで生きてきた中で、思いやる事、思いやられる事についての学びが、まだ充分でない。またそれについて、自覚していない。このようなところから、“問題行動”が生まれているように見えました。

…このときの実習指導は、今、思い出すのも嫌になるほど無茶苦茶でした。

また、こんな事もあります。

ある学生の実習最終日に、巡回指導に行った時の事です。まず実習先の指導職員の方と二人で話をしたのですが、その場で、学生が16日ある実習期間中、2回遅刻し、毎日提出すべき実習日誌を、この日は提出しなかったという事実を知らされました。指導の不行き届きを謝罪し、またそのような状況でも最終日まで実習を受け入れてくださった事に対し、感謝しました。

「今後の学生さんの将来にもかかわってきますしね、先ほど、かなり厳しく指導しましたよ。凹んでるかもしれませんが、もう言ってあげられるのも今日で最後やし

ね。」

「お手数をおかけしてすみません。本当にありがとうございます。」

この後、学生と話をしました。

決められたルールを守れなかった事に対し、学生はどう考えているのか。まずは本人の口から言葉が出てくるのを待とうと思いました。

「どう？どんな様子？」

「あー、面白かったですよ。この16日間、知らない事をいっぱい知れて。」

すると学生は、勉強になった事、新しく知った事について、喋りはじめました。

なるほど、よく理解しています。勉強したと思います。自分の理解が足りないところ、今後勉強が必要な部分についても、しっかり認識できているようでした。そもそもこの学生は、勉強意欲がとても高いのです。そこがこの学生のツヨミだと、私は捉えていました。

けれど、いつまでたっても、遅刻や日誌を忘れたことについての話は出てきません。

とうとうこちらから、水を向けました。

「あのさ。職員の方から、遅刻とか、日誌忘れたとか聞いたんだけど。」

「…ああ。ええ、遅刻は、遅刻する前に電話入れて、5分くらいしか遅刻しませんでした。」

「私に連絡しなかったのはどうして？」

「ああ、5分くらいやったし、別にええかなって…。」

「そうか、そう判断したのね。実習前に、少しでも遅刻する時は連絡しなさいって、指導してたんやけど？」

これを聴いて、ちょっとバツが悪そうな顔になる学生。

「はい。いや、これくらいやったらええか

なって、思ったもんで。」

「そう…。そしたら、忘れ物に関しては何？」すると学生はまくし立てます。

「…だって、毎日しっかり勉強して、ちゃんとやってるのに。それで、昨日もちゃんと家で書いたのに。しっかり書いて、ただ持ってくるの忘れただけやのに、『書いてこなかった』みたいな言い方されて…」

「あのね、そうじゃなくて！今、この場にあなたの書いた日誌がないという事実、2回遅刻したという事実について、あなたは、どう思うのよ？」

「…人間やから忘れたりもするでしょう。」

「え？」

「だから。人間やから、遅刻とか忘れ物をすることもあるじゃないですか。それについては、謝りましたよ、ちゃんと。」

「ちょ、あの、え？悪いとは思わないの？」

「だから謝ったじゃないですか。」

顔中で、『遅刻や忘れ物は悪いことだと解っているけど、自分が悪いとは思いたくない。だって人間だもの、そういうこともあるでしょう？先生や職員のほうが、心が狭いんだ！…という論理で納得して！』…そう言っているように見えました。

思い返せば、実習前から、遅刻や提出物遅れの際にも、平気な顔をしていました。しかも私はそれを注意した事さえあります。

他にも、“無邪気に明るく、誰にでもフレンドリーに接する事が出来る学生”は、実習先から「異性の利用者とのコミュニケーションが著しく近すぎ、利用者集団を混乱させる」、さらには「悪影響」とさえ言われました。

“人懐っこく、だれにでも物怖じせず話

しかける学生”は、実習先から「自分の見て見て欲求を満たしたいだけ。何しに来たの。」と一蹴されました。

実習前に行った指導の際、学生に対して覚えた違和感を無視し、「いやいや、この学生には、こんないい所もあるよ」と、ツヨミになるであろう部分だけ捉えようとしていたり、短所を長所として見ようと色眼鏡をしていた自分がいた事を、思い返して激しく後悔します。もっときちんと、それこそ「今のあなたでは、実習には行かせられない」と厳しく言って、やめさせる事も含めて指導していれば、学生にも、実習先施設・機関の職員の方にも、何より利用者の方にもご迷惑をかけることはなかったのにと。

実習中、問題行動を起こしやすい学生

実習の際、問題が発生したのはどのような時であったのか、振り返ってみました。すると、勉強が出来ない、支援がうまく出来ない等、学習の習熟度が低いために重大な問題が発生する事は今までなかったと思われる。

あくまでも私見ですが、問題行動を起こしやすい学生の特徴を挙げると、“社会人としての常識やルールを理解し、実践しようとしていない”“他者との適切な距離がはかれない”“その場に対するストレス耐性がない”の3点になると思います。学生が、これらのいずれかに該当する状況であると、実習担当教員または実習先施設・機関が認識した場合、『実習が出来る段階ではない』と判断出来ていた事が多かったように思うのです。

この3点について、一定のレベルに達していない学生には、その部分に対する指導が必要になります。

“社会常識やルールを理解し、実践しようとしていない学生”に対しては、社会常識やルールを教え、それを守る意味を教え、それを実践する大切さを伝える。

“他者との適切な距離がはかれない学生”には、まず自分自身が他者とどのような距離をとる癖があるのか気付かせ、その上で利用者の方と専門職の関係性について教える。

“その場に対するストレス耐性がない学生”というのは、例えばある状況で精神的に耐え切れなかったり、身体症状を呈したりするような場合の学生を差します。この場合は、そもそも何に対するストレスなのか、どうすれば耐性ができるか、自分の心や体について知り、時には治療も必要でしょう。

いずれの場合も、自己覚知をしっかりと行うように促した上、利用者と専門職の関係性について教えることが重要になってきます。これらの指導によっても一定程度の成長が見られなかった場合は、実習させないという判断も必要であると思います。

これら3点は、その学生のツヨミを問う以前の、実習に入る準備が出来ているか、いないかという問題です。さらにこの3点以前に、そもそも実習で勉強をしたいと思っていないのに、実習を予定している学生に対して、根本的なところから指導することが必要な場合もあります。

いずれにせよ、実習に対する準備が不十分だと、下手をすれば施設や機関、利用者の方にご迷惑をおかけしかねない。学生も、充分学習出来ない。

ツヨミに着目するのは、こういった一定の準備が出来て、それから先の話になるのだと気付きました。

指導教員がはまる落とし穴

実習指導の中で、学生にツヨミを生かした支援をするよう指導したことで、実習がうまくいかず、実習先施設・機関の職員の方や利用者の方にご迷惑をかけてしまったことがありました。

どうしてそのような事をしてしまったのか。

学生自身のツヨミを活かせるように、教員が学生に指導する教育はあって良いと思います。ツヨミを活かすことで、学生が自分なりの支援の仕方を考えられるようになることがある。これは前述したとおりです。小・中学校においては、ずいぶん前から児童・生徒の長所や良さに着目する視点があると、教育学を専門になさっている大学の先生から伺ったことがあります。しかし、社会で生きていく人になる為の知識・道德教育を行う小・中学校と、専門職の養成を行う養成校では、教育の意味が、似ている様で根本的に違うのです。

また、私を含め、福祉職を養成する教員の中には、学生にひいき目になりがちで、良い所を見ようとし過ぎる人がいます。もっと言えば、なんとか学生の良い所を見つけて、その学生を支援したいという気持ちを持ってしまいがちだと思います。つまり、福祉職の養成にかかわる教員は、社会福祉的な支援というものの見方に親和性が高く、専門職教育を、社会福祉の自立支援と混同してしまうことがあるのではないかと、思うのです。そこから誤りが発生するのは

ないでしょうか。

社会福祉の自立支援は、『自分らしい生活を送れるようにする事』が最終目標です。利用者の方に社会のルールと折り合う必要性を伝える、という場合もありますが、基本的には個別性を重視します。

社会福祉の専門職教育は、『専門職としての価値・知識・技術を体得する事』が最終目標です。学生への教育の手段として個々に合った教え方をする、という場合もありますが、専門職としての一定のレベルや技能習得を重視します。

まずその人ありきか、まず一定の技能ありきか。このように、考え方の端緒が違っているという事実を、うっかり忘れてしまったところから、誤りが起こってしまうのだと思われるのです。

もう1つ、このような誤りが起こるような状況に影響を与えていると思われる言葉があります。それは、社会福祉分野で使われている“ストレングス視点”という言葉です。近年の社会福祉の教科書には、この言葉が掲載されていないものは無いと言えるほど、メジャーな言葉になりつつあります。社団法人日本社会福祉士養成校協会が運営しているサイト『ソーシャルワーカーのための百科 Wiki』によると、ストレングス視点とは、「クライアントの弱点や問題点に視点をあて、その不足や欠点を補うような従来の病理モデルとは異なり、クライアントの本来有する潜在的能力や強さ等に焦点をあてて、協働的な関係の中で問題を解決していく視点⁽¹⁾」とされています。

ところが、ストレングス視点という言葉を使っている全ての方々が、ストレングス視点による支援の理論、いわゆるストレン

グスモデルの提唱者である米国カンザス大学の C.ラップ氏の、本来の考え方を真つ当に理解して、そのままの意味で使っているかという、これは非常に疑わしいと思うのです。

ストレングス視点は、社会福祉分野の人間がなんとなく持っていた“その人の特徴をどのように良いように捉えるか”という考え方にとても通じる部分がある。だからこの言葉は利用しやすいじゃないか、しかも耳にも心地よい横文字だし、なんだかカッコイイ、と飛びついてしまったのではないのでしょうか。もちろん、ストレングス視点をしっかり理解して、これに基づいた実践をなさっている方々もいらっしゃると思います。しかし、多くの方は、舶来の考え方を日本文化の中で利用し易いように恣意的に解釈して、そのまま間違っって認識しているように思うのです。

自分の担当する学生に対する、身内的な意識、「どうにもしようがないやつだが、いいところもあるんだよな」という、表現し辛い思いをどうしようかと思っていたところに、非常に便利なストレングス視点という言葉が米国からやってきた。それを日本の社会福祉分野・社会福祉の専門職教育の現場に流用し、短所は全面的に長所として捉えなおし、さらに短所については見ないようにするという、私が誤用したような考え方が広がっているように思われます。

しかし、これは本来のストレングス視点とは違うようです。あまり詳しく読み込めてはいないのですが、C.ラップ氏の著書には、ストレングス視点は「単なる肯定的なリフレーミングとは違う⁽²⁾」とはっきり書かれています。

これまでの経験から、学生になんらかの働きかけを行う際、まずは学生に対し、なんとかしてあげたい、支援したいと思い過ぎていないかと気を付け、情熱を持ちつつも、冷静に、判断・指導していきたいと思っています。

引用文献：

注1) 社団法人日本社会福祉士養成校協会運営『ソーシャルワーカーのための百科Wiki』「ストレングス視点」の解説より

<http://www.jascsw.jp/wiki/index.php?%A5%BD%A1%BC%A5%B7%A5%E3%A5%EB%A5%EF%A1%BC%A5%AB%A1%BC%A4%CE%A4%BF%A4%E1%A4%CE%C9%B4%B2%CAwiki>

(2011年8月20日 確認)

注2) チャールズ・A・ラップ、リチャード・J・ゴスチャ著 田中英樹訳 『ストレングスモデル—精神障害者のためのケースマネジメント』 金剛出版 2008年12月 300頁

我流子育て支援論 ～ 学 童 期 2～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

小学校後半になると、思春期、反抗期の問題も絡まって、親子関係にさまざまな影響が出てくる。今までは親の権威に従って、子どもたちが言うことを聞いてくれたのに、反抗的な言葉を吐かれて、親は戸惑う。いつまでも、可愛い我が子ではない。それが許せず、親の権威を守ろうと威圧的になったり、子どもの機嫌取りをして、親子の関係性が逆転したりなど、問題行動を生む原因が親子関係にあることが多くなる。

ここ 10 年の相談で増加傾向なのが、父母の離婚・再婚や、継父母との関係の問題である。子どもが小学校高学年くらいになると、ある程度手が離れてきて、親の気持ちも少しは理解できると思うのか、或いは、結婚して 10 年以上経ったあたりが一つの危機なのか、離婚や再婚の話が持ち上がる。

夫婦が離婚の危機にあるということは、

日々、冷たい空気が流れていたり、言い争いが絶えなかったり、或いは物が飛び交うような危険な雰囲気になっていたりなど、子どもにとってはとても穏やかな気持ちではいられない状況になる。DVがあれば、当然虐待に当たるが、学校に行っている間に、「お母さんが居なくなってしまうのではないか」とか「お母さんが大怪我をするのではないか、いや、最悪死んでしまうのではないか」などといった思いの中で、子どもが不登校になる。そこまで酷くなくても、家族が壊れてしまうのではないかという不安の中で、腹痛や吐き気、頭痛を訴える。時には、嘘言やいじめ、暴力などの問題行動を起こして心の叫びを表現することもある。

継父母との関係で、虐待などの相談も増えている。継父母による暴言・暴力や性虐待、ネグレクトなど多々ある。児童相談所もてんてこ舞いだろう。

子どもの表面的な、行動上の問題だけを取り扱っても、夫婦・家族の問題が絡んでいる場合は、簡単に解決には至らない。父母ばかりではなく、祖父母の問題も入ってくると余計にややこしくなる。嫁姑の問題や、祖父母が母親の子育てを子どもの前で批難したりなどは最低だが、度々聞く。

我々支援者としては、子どもの問題行動の裏に、家族の問題が無いかを探る必要がある。学校では、「家族の問題には入らない」としている先生方もいらっしゃるが、そんな時代ではない。学校と保護者の境界は曖昧で、学校に保護者がこれだけ入ってくると、学校と保護者の境界は曖昧で、関わりたくなくても、家族の問題に巻き込まれることも多い。出来れば、繋がりやすい保護者から、家族の状況を聞き取り、その上で支援を考えねばならないことが多い。

以前関わった小学校高学年の不登校のケース。最初は子どもと担任の問題で、父母の担任攻撃、学校攻撃が凄まじく、モンスターのように言われていて、筆者がスクールカウンセラーとして間に入った。確かに父母の様子は、モンスターに近く、攻撃も酷かった。しかし、父母の精神状態にも問題があり、特に母親の状態が悪化していた。一緒に文句を言いに来る割には、夫婦関係も悪かったので、母親の気持ちに寄り添い、母親の頑張りを認めた上で、「休もう」という提案をした。母親が一人で実家に帰った途端に、本児は登校できるようになった。本児には発達障がい疑いもあったが、その後、母親が戻っても、中学で特に問題なく過ごせたと聞いている。

母親の精神的な問題が子どもに大きく影響した例だったが、このようなケースが増えている。特に男児と母親の関係性で、男児が不登校から引きこもりになり（と言うより、母親がそうさせている）、母親が人格障害系で病院受診も効果がなく、学校批判が強烈で、支援を悉く排除するケースに頭を悩ませることが増えた。将来を見据えたら、困るのは保護者なのだが、中々先まで考えられないし、人の意見も聞かない。どうやって子どもを助ければよいのか？

一応 30 日ルール(30 日以上子どもが目視確認できない場合は、児童相談所に通告するというルールで、19 歳の女性がずっと監禁されていた事件を受けて通達された)をたてに、遠くからでも子どもを目視できるようにしてもらったり、或いは、近所や友達などから、目撃情報が無いかなどして、確認するようにしている。又、30 日は守られなくても、虐待が疑われないケースでは、3 ヶ月に一度でも確認できれば好しとしている。

この様なケースは、学校に行かせる義務を果たしていないし、一方的に学校や周りのせいにして、子どもを出さないの、手を付けにくい、厳密に言えば虐待なのではないか。

保護者の精神的、人格的問題が子どもを引きこもらせているケースを虐待として認め、親権停止が出来れば、救える子どもが格段に増え、引きこもり防止に役立つと思うが余計なお世話なのか？ 明らかな虐待でも親権停止が難しいので、そう簡単にはいかないだろうが、法的根拠付けが早急に必要だと思う。

小学校で相談に来るのは殆どが女子で、

高学年女子では、その多くが友人関係のトラブルである。

女子はグループ化が激しくなり、グループに入れない子やグループ内での“はぶき”、或いはいじめの問題などが起こる。

社会性が育ってくると3人の関係が持てるが、幼いと2人の関係に固執し、もう一人が加わることで起こる関係性の変化に馴染めず、意地悪をする子がいる。これは幼さゆえの問題で、昔からある。大人になりたい、大人にあこがれている子には、「3人の関係性を持てることが大人である」と言うのが効果的なようだ。

しかし、大人になりたいと思わない子も増えているので、そういう子の場合、相手の立場になって考える練習をしてもらっている。練習を重ねるうちに、心の成長があり、3人での関係を持てるようになっていく。以前小学校6年生の女児で、仲良しの友達のを盗っては隠すことを繰り返す子がいた。本人は解離状態で全く覚えていない。絵を描かせると二人だけの世界を描く。束縛もここまで来ると病的だが、独占したいという気持ちは、離れてしまうのではという不安の裏返しであり、人間関係に不安を持っているからこそその行動であった。この子の場合箱庭療法が効果的で、最終的には、新しい人間関係を築けるようになり終結した。

ところで、いじめの問題であるが、最近、更に巧妙で嫌なケースに出会った。

先生の前ではいじめないというのは普通だが、役割分担をして、A子が対象児童（C子）と仲良くし、B子がC子を見守る日があるかと思うと、翌日は役割が交代する。C子は、「A子は優しくして

くれるから、きっともう大丈夫なんだな」と思った矢先に、天国から地獄へまっ逆さまに突き落とされる。しかも、1日の中でも態度がコロコロ変わることである。

このような状態で、人を信じられるはずもないし、C子の傷つきは、生半可なものではない。人の気持ちを「弄ぶ」と言う表現が一番しっくり来る。こんな方法を一体誰が小学生に教えたのか？小学生が、大人のドラマを夜遅くまで見ている影響の一つではないかと思う。

小学生は、9時には寝るべきで、大人の時間と子どもの時間をはっきり分けるべきである。大人と子どもの境界の曖昧さが、子どもたちに大人の事情や行動パターンを伝達し、子どもたちの行動にその影響が出始めているということではないか。気をつけてみて行きたいものだ。

話がそれだが、前述のC子は、担任がA子、B子やその保護者側におり、C子の保護者を一方的に批難する。C子の特性である、真面目で頑張り屋の所が、思春期の他児からみたら「ウザイ」のだろう。しかし、保護者が心配して、先生にいじめの話をする、先生は「学級は何の問題もないし、C子も楽しく学校に来ている。お母さんがおかしい」と言うのである。C子は、地域外の中学校に行くことを検討しているが、なぜ、何も悪くないC子が逃げなければならないのか、理不尽さを覚えたケースである。学校と調整していきたいと思うのだが、保護者が仕返しを怖がって、筆者が学校に入ることを頑なに拒んでいる。何とか良い方法を考えて行きたい。

いじめの問題では、被害者が相談に来

ることが殆どだが、筆者は最初に「いじめは年齢や場所に関係なく、いつでも、何処でも起こりうる問題である」ことを必ず伝えている。その上で、いじめをしてくる人間は「ゴミ」みたいなもので、相手にしないのが一番であること、いじめを受けたら大きな声で「やめて」と言っ、て、周りの子に気づかせること、一人で居ないようにすること、本人は何も悪くないが死にたいほど辛かったら休むこと、「学校は命を懸けてまで行くことは無い」と伝えている。時には紙に米粒大の黒丸を書いて、手で叩き潰して見せることもある。いじめる側に立ち向かえない子どもの怒りを放出させる手立てである。怒りを抱えて暮らすことは辛いし、将来嫌な問題を引き起こしかねないので、小さいうちに処理しておきたい。

支援者としては、決して「いじめられる側が悪い」という考え方をせず、事実の把握に努め、被害者の気持ちを受け止めつつも、撥ね返す力を育てる努力をすべきだろう。

さて、次に問題となるのは、生徒指導用語(?)でピンク系といわれる子たちである。

小学生でも家庭環境や溢れる情報の影響もあって、早い子では異性に関心を持ち、援助交際に入る子もいる。栄養状態の良い現代では、身体的成長が著しく、小学校6年生では、高校生並の体格になっている子も居る。お化粧をしたら、いくつかわからないだろう。女子児童に対し、心と体を大切にすること、性病や妊娠について、懇々と、気長に話していくことと、家族関係に問題が無いかをよくよく注意してみることが支援者に求めら

れる。一度甘い汁(安易にお金を稼げる方法)を味わってしまった子は、簡単に元の状況に戻ってしまうので難しい。服装や持ち物、携帯やパソコンの使用状況、外出先や帰宅時間などに気を付けてもらうことが予防の第一歩だろう。

更に、小学校で大きな問題となるのは、発達障がいであろう。

発達障がいについては、特別支援教育事業が大々的に展開されるようになって、学級に支援員が配置されることも多くなった。発達障がいについての理解は、先生によって温度差が大きく、相変わらずのところもあるが、少なくとも診断を受けている子どもについては(もちろん地域格差はあるだろうが)、支援が随分と充実してきたように感じる。しかし、診断を受けていても、対応をちょっと間違えると、高学年では暴力など問題が大きくなる。

先日も、広汎性発達障がいの診断を持つA男が、子どもたちのからかいの繰返しに対し、最初は「止めて」と言っていたが、遂に切れて暴力沙汰になった事例があった。

発達障がいの子どもは、高学年になると、からかいの対象になりやすい。健常児には反応が面白いのだろう。この事例では、健常児の方がするくて、そうやってA男を興奮させることで授業妨害している。しかし、先生の方は、A男の暴力を何とかしようと、健常児側を守る形で立ってしまったのである。

学校は「A男を病院に連れて行って、薬を飲ませろ」と言うし、A男は「僕は要らない人間だ。消えたい。死にたい」と言い出した。保護者は困って筆者のと

ころに相談に来て、「今まで問題なく過ごしてきたのに、何故急にこんな状況になったのかが理解できない、この子は特別支援学級に転校しなければならないのでは」と泣いていた。A 男はIQ も高く、普通学級対象であること、対応次第で変わるであろうこと、集団生活は、元々ストレスフルで苦手なこと、それでも信頼できる先生がいれば何とか頑張れることなどを伝え、学校とも本児への対応について筆者からも伝えてみたいというお話をした。担任が、健常児を抑えることで、A 男は担任との関係を改善することが出来る。担任との関係がよければ、A 男は学校を続けることが出来る。これから先、中学や高校でも、誰か一人信頼できる人がいれば、A 男は頑張れるだろう。投薬については、医師の判断によるので、それは医師に任せるよう伝えた。

A 男のような立場に追いやられている子の話はよく聞く。高学年では、子ども自体も自分の出来ないこと、他児と違うところに気づき始め、自己評価をぐっと下げてしまう。そんな時に、担任との関係が悪くなったら、子どもはただでさえ居心地の悪い集団の中で、益々居心地を悪くしてしまう。真面目な彼らはそれでも学校を休まないことも多い。そうして、何とか中学に進学しても、中学のいじめやからかいはいっとも酷いことが多く、結局不適應を起こしてしまうのである。

高校生以上の発達障がいの人に聞いてみると、小学校高学年くらいからいじめられて、学校は地獄だったと言う子が少なく無い。小学校高学年での対応に気をつけること、発達障がいの子どもに、パニックを起こさせない、暴力行為に走ら

せない、自己評価を下げさせないことが、先生方はじめ支援者に求められる。そして発達障がいを十把一絡げに考えずに、個々のケースについて、その子の特性を、良いところをしっかりと見つけ、認め、伸ばしていくことを父母も先生方も、その他の支援者も意識してもらいたいと思う。

発達障がいで思い出したが、最近の先生方の言葉遣いが気になることがある。自閉系の障がいの子はよく「です・ます」調で、丁寧語を使う。そのため、先生の言葉を気にする子が結構いる。

発達障がいの子どもでなくても、小学校で、「お前」とか「あんた」とか、先生が子どもに使うのはとても聞きづらい。小学校では、出来るだけ正しい、綺麗な日本語を使ってもらいたいと思っているのは筆者だけだろうか？また、先生方に対し、あだ名やニックネームで呼ばせるのもおかしい。その延長で、先生が先生らしくなければ、尊敬は生まれない。先生方も「教育者」としての自分自身の態度、言葉遣い、服装など、よくよくチェックして欲しいと思う。

話がそれたが、もう一つの大きな問題が学級崩壊である。

学級崩壊では、ごく一部の子どもの問題行動をコントロールできず、注意しても聞かない中で、どんどん問題行動が広がり、その中に発達障がい系の子が混ざっていることが多い。先生方の対応にメリハリがあると、あっという間に変化するのを何度も見てきた。大きな、通る声で短く叱り、一方で問題行動をしている子を中心に、お手伝いなどさせ、上手く褒め、認めていくのがコツだろう。

昔から、「飴と鞭」という言葉があるが、今では鞭は打てないものの、「しっかり叱る」ことは、「褒める」という飴と一緒に使うことで効果がある。飴だけでも、鞭だけでも上手く行かない。これは、子育て全般に言えることだと思う。

上手く学級をコントロールできないことで、焦り、更に悪い循環にはまって、鬱になった先生を何人か知っている。何とかしようと考えているのだろうが、これが小学校だから難しいのである。担任は一人で何とかしなければ、先生としての評価が下がると思って追い詰められる。目の前に、問題が山積することで、先が見えない、出来ることも出来ない状況が繰り返される。こんな時こそ、大きく視点を変えるために、外からの助言が効果的だろう。スクールカウンセラーにも相談が出来るのも良いと思う。

他にも、ゲームの問題や、不登校の問題もあるが、この時期からのゲーム中毒は、保護者の力がないと改善できないし、不登校も同様である。保護者の力、父母の協力が強化されるような支援が必要になる。

リストカットの問題も高学年になると出てくるが、これは明らかにテレビや情報 of 弊害だと思う。

虐待では、先生方と子どもの良好な関係性が、早期発見に役立つ。性的虐待なども高学年では起こりやすいので、要注意である。虐待を発見したら、通告義務があるが、学校が二の足を踏む場合も度々ある。躊躇せず、まずは通告してほしいものである。

最後に小学校を総括してみたい。

小学生と言う、まだまだ子どもとして、自由に過ごせるはずの時代に、目立たないように、誰かの批難を浴びないようにと、黒子の様に、じっと影を潜めた生活を続けている子がいる。その子の青年期が一体どうなるのか？考えるだけでもゾッとする。

せめて小学校までは、子どもは子どもらしく過ごさせてやりたい。その為に、学校も保護者もその他の関係者も知恵を絞りあうべきだろう。物が無い中で、人と人がコミュニケーションしながら遊びを作っていく、そんな練習を出来るのも、小学生までだろう。そこらに生えている植物、石ころ、何でも遊びの道具になるのである。木を登ったって良いではないか。木を登るには技術がいる。手足の使い方、どこに足を掛けるか、どの枝が登りやすいかなど頭と体を使える。小さい川で、横エビや小魚を捕まえるにはどうしたらよいか。昆虫を捕まえるにはどうすればよいか。子どもたちは、友達の知恵をもらったり、工夫したりして、覚えていく。都会では難しいかもしれないことも、地方に行けば体験可能だ。虫をみて、キャーキャー騒ぐ子を増産してどうするか？昆虫が生きられる環境は、それだけ自然だということではないか？まあ、ゴキブリは除外したいが……。

授業でも、子どもたちの描いた絵を見て驚くことがある。写真を使った写生や、構図まで決められるような絵画指導では、創造性など育たない。うまく描ければよい、なんでもそつなくこなせればよいという教育ではなく、個性を伸ばす教育が発達障がいを持つ子にも、健常児にも必要だと思う。それは、決して「ゆとり教

育」という考え方を意味しない。〇×式や、選択式の問題ばかりではなく、個々人の意見を反映し、失敗も認め合う教育がもっと必要だろう。小学校で自分の意見を言えるようにしておかないと、中学高校ではもっと言えなくなるだろう。

そして、大人と子どもの間の境界、先生と生徒の境界、学校と家庭との境界を今一度見なおし、はっきりさせるべきと思う。その境界を意識したうえで、保護者が学校に協力し、子どもたちの知識、人間関係、心の発達のために、知恵を絞り合う関係が出来れば、今ある学校での多くの問題は解決できるのではないか。

次回は中学生について書いてみたい。

不妊治療現場の過去・現在・未来

連載 6

～選ばなかった選択肢～

荒木 晃子

友情と代理出産

「そういえば・・・」会うなり、B子さんは語りはじめた。彼女から話を切り出すのは今回が初めてだ。

「不妊治療をはじめて何年か経った頃だったかな・・・親友のC子が、あ、まだ話してなかったかしら？私には中学校時代からの親友がいたの。でね、彼女にだけは、結婚した後も子どもができなくて悩んでいることを打ち明けていた。ず～っと、“だれにも言えない話”を互いに相談しあう仲だったから、彼女にだけは話せたのかもしれない。そういえば、その頃の私にとって、不妊の悩みを話せる唯一の友人だったかもね。で、そのC子がある日私にいったの。『B子の代わりに子どもを産んであげようか』って。ね？すごいでしょう？！彼女の運転する車に乗って、二人で出かける車中だったと思う。助手席でそれを聞いた私は、驚いたのなんのって！おもわず、そんなことできるわけじゃないじゃない！って、大きな声で笑いながら返事したのよ！」

「え？！笑いながらですか？」間髪をいれず、そう聞き返した自分にも、さらに驚いた。リフレミングというより、反射的に思わず口走ったというほうがふさわしい。20年ほど前のそのやり取りは、まさに、今でいう代理出産と同様の発想ではないか。瞬時に、私のなかでは、頭の中にあるB子

さんの履歴ファイルを見直す作業が始まっていた。ファイルといっても、実在するファイルではない。

普段、精神科と生殖医療の病院心理士として面接する際には、カウンセリングとは別に、医師による医療カルテが作成される。精神科の心療カウンセリングは、精神科診療の通院精神療法という保険診療項目にあたり、医療保険適用のカウンセリングを約60分、（一般よりは）安価で提供することができる。これまで10数年間実施してきた、数えきれない数のクライアントとの面談のなかには、要約筆記され心療カウンセリングカルテとして保管されているものもある。そのほとんどは、精神疾患の診断があり、治療のため精神薬の投与を受ける患者のものだ。さらに、医師による医療カルテと心療カウンセリングカルテとは別に、一人ひとり個別の履歴ファイルに保存されているケースがある。精神疾患の診断名がつかず、精神薬の投薬の必要がない、もしくは、一時的な投薬のみ必要と診断された、心理カウンセリングレベルの患者のものだ。大切な個人情報に詰まったそれを、私は“記憶のファイル”と呼び、必要に応じ、実際に面談するその個人と向き合うときに限定し、記憶の棚から取り出し、開くことがある。いま、私は、開いていたB子さん用ファイルのトップページへ戻っていた。

B子さんの“記憶のファイル”によると、1983年国内初の体外受精児が誕生した同年、

結婚後数年たっても妊娠しない彼女は、通院を始めた、とある。彼女が語ったエピソードは、その頃、もしくはその後の出来事なので、おそらく一般の産婦人科医院から不妊治療専門クリニックへ転院したころのものだろう。もしかすると、転院のきっかけになった出来事を語っているのかもしれない。ふと浮かんだ疑問を“記憶のファイル”のクリップボードに留め、いますぐ、彼女に確認することは控える。聞き手のききたいことが、話し手の話したいこととは限らないからだ。おもいが頭をかけめぐるなか、「え？！笑いながらですか？」と返した私に、「そう！笑いながら、よ！」、さらに大きな声でB子さんは即答した。「そうねえ、いま考えても、びっくりするくらいの発言だったわね。まさか、“かわりに産んであげる”とは・・・フッフ、さすが親友のC子ならではの、なんとも・・・ねえ？」いたずらっぽい視線をチラと私に向けたのち、嬉しそうに口元に笑みをたたえ、「きつと・・・そうね、おそらく、C子にとっては、他人事ではなかったんじゃないかな、私の悩みが」そう語り終えた彼女からは、すでに笑みが消えていた。「中学生のころから進学のことや好きな男の子の話、友人関係の悩みとか体の悩み、何でも話せる関係だった。失恋したときや結婚を決めるときも、互いに自分のことのように一緒に考えてきた仲だったから。でも、こればかりは・・・いくら親友でも、かわりに産んでもらう、という発想はできなかったわね。だけど、(C子の)気持ちはずれしかったなあ、うん・・・でしょう？」同意を求めるようなしぐさで首を傾げた彼女を見て、「ちがう。何かが違う」そう思った。確かに、目の前にいるB子さんの語りとその表情に違和感はない。彼女にとって、親友と過ごした思い出は、多感な青春時代の大変な1ページに違いない。しかし、“かわりに産んであげる”－この親友のひとつことが彼女に与えた（であろう）衝撃について、いま、敢えて問いなおす必要はないのだろうか。聞き手が話し手の話を肯定的に聴く、とは、決して、すべての語りに同意・同調することではない。特に、話し手が聞き手の同意を求める際には、慎重に反応することも大切だ。

現在では、第三者の関わる生殖医療技術により可能（日本では規制する法律はない）となった代理出産を、自ら望んで請け負おうとする友人の存在が、かつて、B子さんにあったのだ。

以前、本稿連載②「生殖革命の時代」文中の「今日のトピックス」に、第三者から提供された卵子を用い、夫の精子と体外受精で妻が妊娠し出産したケースを紹介した。ほかにも、最近、特に2008年以降、日本国内での治療を断念し、アメリカや韓国、インドやタイなどへ渡航する不妊当事者カップルが増加しているという。以上は、海外で精子・卵子の提供を受け、代理母による代理出産で誕生した子どもに関する調査報告により明らかとなった（朝日新聞2011.2.19朝刊）。報告によると、インドやタイでは2008年以降、少なくとも30組の日本人夫婦の依頼で、10人以上の子どもが誕生していたという。この背景には、同年、「妻の同意なしに、インド在住女性の代理出産により誕生した夫の子どもが無国籍状態となり、一時出国できなくなった問題」が大きく報道されたことがある。その後、子どもの出国は認められ、夫との特別養子縁組が成立した。夫婦は、その後離婚に至っている。

いつの時代も、やはり、生殖医療にはトピックスがつきものだ。“かわりに産んであげる”－B子さんと親友との友情は、いまなら、生殖医療技術を用い、“子どもの誕生”という違った形で実を結んでいたのかもしれない。“かわりに産む”という発想は、代理出産という生殖医療技術により実現された。彼女は当時、それを選ばなかっただけなのだ。その後、今日に至るまで、代理出産により誕生した子どもの数は、少なくとも百数十例以上あることが明らかになった（代理出産の法整備を進める超党派勉強会『代理出産の現状及び問題点』参考資料 根津八尋2010.4.27衆議院第2議員会館）。B子さんが選ばなかった選択肢は、いま、現実のものとなっている。

カリバラ

今でいう、代理出産の申し出を、なぜ、B子さんは選ばなかったのだろう。

その当時、代理出産という代名詞が日常的に使用されていたとは思えない。しかし、日本では昔から、借り腹（かりばら）と呼ぶ、夫が妻以外の女性と性的関係を持ち、その女性が産んだ夫の子どもを、妻が実子として育てるケースも稀ではなかったという。妻である女性も、子どもを産んだ女性にとっても、いずれも屈辱的な体験であったはずだ。少なくとも、私はそう思う。B子さんにたずねてみた。

「カリバラ？ ああ・・・知ってる。（しばし沈黙の時間が過ぎる）そのことも、いつか話せる・・・かもしれない。いつか、そう、そのうち、ね」意味深なことばを残し、疲れたようにつぶやいた。これも、記憶のクリップボードに留めておかなければ。そのうちB子さんが語る、その時の為に、その歴史的背景も知っておきたい。いや、知ることなしに聴いてはいけないのだと思う。生殖医療技術がまだ普及していなかった時代、生殖医療ではない選択肢を選び、不妊当事者たちが生き抜いた歴史なくして、現在の、そして今後の当事者支援は構築できない。それは確かだ。彼女との対話が進むにつれ、自分自身に課せられた大きな課題が浮かびあがる。それは、おそらく私だけのものではないはずだ。家族をつなぎ、命をつなぐことで刻み続けた歴史が、“いま”をつくったのだから。

B子さんとの会話は、いまのところ終わりが見えない。彼女が生きた50数年間の人生に、しかも、成人し生殖年齢といわれる30年に満たない時間のなかに、いったい、いくつものエピソードが詰まっているのだろう。次々と増えていく“わたしが聞きたいこと”を、まずはひとつずつ整理することから始めよう。B子さんの力を借りて。

背中合わせ

前号連載⑤の文中（生殖革命の物語エピソード2「妻以上母親未満」）、提供精子で子どもを産むことについて、彼女は「（前略）夫以外の子どもを妊娠することなんて考えられない（後略）」と語った。今回初めて、会うなり、自分から語りはじめた内容は、親友との思い出。それは、今でいう代理出産とつながっていた。そこから、代

理出産の原点ともいえる、仮腹という日本古来のゆゆしき慣習を私から提示したことで、さらに、ふたりの対話が新たなステージに移っていく。確かに、そんな予感があった。でも、なぜ、いま彼女はそれを語るのだろう。そこに戻らなければ、そう、確信した。

“親友が私をおもって言ってくれたことばに驚き、同時にうれしく思った”彼女はそう表現した。はたして、それだけ、なのだろうか。この疑念を晴らすずに、このまま話を聞き続けることはできない、そう感じた。

話し手の語りは、例えそれが事実であろうとなかろうと、どこかに話し手の真実がある。その前提に、私はこれまで話し手と向き合ってきた。しかし、ときに話し手を疑うことが必要な場合もあった。起きた出来事に対する、話し手の反応・感情・捉え方など、その認知に違和感を覚えた場合がそれにあたる。親友のことばに笑って答えたB子さんに、その“笑い”について尋ねてみた。

「ん？ ああ、あの時なぜ笑ったかって？ そうね・・・」私に向けていた視線を落とし、右手を自分の胸に当て、しばらく考え込んだ様子を見せた。「そう、突然いわれたことだったから、その場では、さらっと聞き流した感があったかしら。“かわりに産む”なんていう発想に、とにかくびっくりして、咄嗟に笑ったって感じかもね」ふっ、と小さく鼻で笑い、左の口角が上がったまま話しは続く。「いま考えると、なんかフクザツな気分かな？ きっといつか子どもを産めるんだ、って信じて不妊治療を受けていたんだから。信じたい、信じなきゃ、って。でなきゃ、（体が）痛い・（金額が）高い・（こころが）辛い不妊治療は続けることができなかったと思う。みんな、そうなんじゃないかしら？ 不妊治療って、いつかきっと自分も（妊娠できる）、って信じることができなきゃ、続かないと思う。その途中で、かわりに産んであげるって言われても、その頃の私には、“ありがたいけど余計な親切”程度にきこえたのかもしれないわね。だって、独身の時とか、妊娠する以前の、“不妊のことなんて考えたこともない時期”に、『自分の子どもを他人に産んでも

らおう』なんて発想、誰にもないのではないかしら。前にも言ったと思うけど、だれも、自らのぞんで不妊なんか経験したくない。どの人も、なりたくて不妊になったわけじゃない。それでも不妊治療を始めたのは、あくまでも“自分ノ子ドモヲ自分デ産ムタメ”。最初から、自分で産みたくないから、だれかに産んでもらおうなんて、考えるほうがよっぽど問題だとはおもわない？」なるほど、もっともな意見だ。私はただ頷くしかなかった。「それにG子は、いつも私の体を心配してくれていたし、『そこまでしなくてもいいんじゃない？』って、忠告もしてくれてた。そんな彼女のことがだから、笑えたのかもしれない。私の為と言ってくれてるんだって、本当にそう思えた。だから、うれしかったんだと思う」B子さんは、親友が“自分をおもって言ってくれたことば”と受け取ることができたのだ。

通常、不妊当事者の悩みは多様で、かつ深刻だ。そのような、不妊当事者特有の心理状態を不妊心理と呼び、なかでも、対人関係に問題や障害として、強く影響を及ぼすといわれる不妊心理には、大半の当事者が困惑する現状がある。対して、不妊現象にある当事者心理の解明は、いまだに進んでおらず、当事者が自分でコントロールする以外に手段はないといわれている。生殖医療を熟知した医療者であっても、例えば、心理学の専門家であっても、解明できていない心理状態に対しては、その対処法などを提示することは難しい。その解決手段を説いた文献や資料が存在しないのだ。結果、だれも支援策を持たないに等しいということになる。自身の不妊体験に援助者もなく、次々に起こる様々なエピソードを自分なりの方法でやり過ごし、その体験を、いま振り返るプロセスに、B子さんが残してきた課題は膨大な量にのぼるのかもしれない。ならば、納得するに十分ではないが、いま、あえて、この問題を掘り下げることは避けよう、そう判断した。彼女は、思い出の書き換えを望んでいるのではない。しばらく、親友との思い出を愛しむように話す彼女のその穏やかな表情に、ふと安堵をおぼえた、その直後だった。

「実はね！」唐突に、B子さんが切り出した。「その日、家に戻ってから、ひとりで思いっきり泣いたのよ！」きっぱりと、そう言い切ったB子さんに向かって、えっ？と、聞き返した私の目が、「なぜ？、どういうこと？」と、彼女に問いかけたに違いない。「うん・・実はそうなの」私の気持ちを察するかのようにならずき、はなし続けた。「ほんとは、だれにも言わずにおこうと思っていたことなんだけど。この話をしている、思い出したの。その時のフクザツな気持ちを。確かに、G子の気持ちは嬉しかった、それは間違いない。でもね、“かわりに産んであげる”って、言われることは、よく考えると、“もう、私には産むことができない、ってこと？”になっちゃうのよね。その頃はいつも、ひとりになると、そんな風に考えてしまうことが多かった。なんか、まるで被害妄想みたいだし、誰もそんなつもりで言ってないことは分かっているの。何故そうなるの？って、聞かれると答えられないんだけど、その頃は、何でもそういう風に聞こえてしまったの。変よね？」決して変ではなかった。それが不妊心理なのだ、そう思った。「ある時、小さい子連れて遊びに来た子育て中の知人女性から、『子育ては大変よ～！うちは3人もいるでしょ？もう、いらない！って思う時があるの。どれか一人もらってくれない？私なんて、子どものいない頃に戻りたいって、いつも考えてるもの。子どものいないあなたがうらやましいわ～』って言われても、ちっとも嬉しくなかった。だって、子どもができなくて悩んでる人に対して、いくら子育てが大変だからといって、“イナイ貴方ガウラヤマシイ”と言われて、喜ぶ人はいないと思う。それに、子どもはほしいけど、誰でもいいわけじゃない。それに、その気もないのに、簡単に“要らないから子どもをあげる”って、その子の前でいう親にも腹が立ったしね！そういえば、誰かに何か言われるたび、よく腹を立てていたわね～あの頃は！」珍しく声を荒げ、一気に話し終えるうち、いつの間にか、いつものB子さんの笑顔は消えていた。「その頃は、ほんとうにフクザツな気持ちだったんですね」、そう返すのが精いっぱいだった。全身で怒りを表現しているように見

えた彼女を、「怖い」と感じていたからだ。「あ？ごめんなさいね。決して、あなたに怒っているわけじゃないのよ〜」やっと思返した私のひとことに、しまった！と言わんばかりに、少しあわてた様子で、にっこり笑って謝罪のことばを添えた。

B子さんは、その頃の怒りをいまも忘れてはいない、そう感じた。そうだ、以前にも、同様の出来事が私たちの関係に起きたことを思い出す。彼女がかつて言ったことば。「(前略) 悲しくて、苦しいの。悔しくて、悲しいの。こんなに悲しいことが、この世の中にあるのか！って信じられないくらい、悲しかったの」この意味が、いま解りかけた気がした。悲しみと怒りは、常に背中合わせなのだ。そして、彼女はこうも言っていた。「(前略) もし、あなたからみて、私が辛そうに見えるならば、それは、その頃の私の姿だと思って頂戴ね。私は、いま、あなたにきいてほしいと思ってるの。誰もきこうとしてくれなかった話を(後略)」さらに、きき続けなければ。彼女はきいてほしいのだ。

回想

「そういえば、以前、『もし、あの時、C子が私の子どもを“かわりに産んでくれていたら”どうなっていただろう』って考えたことがあった。そう、あれから、もう10年もたつたよね、C子が亡くなってから」遠くを見つめ、まるでひとりごとをいうように彼女はつぶやいた。一瞬にして体に緊張が走った私は、目を見開き、無言のまま微動だにせず聴き続ける。「C子はね、結婚して3人の男の子がいたの。知的障害児が通学する養護学校の教師をしていた。ご主人と共働きしながら、障害を持つ子どもたちを、自分の子ども以上に可愛がってたなあ」顎をあげ、視線は空を仰ぐ。彼女のこころは、いま、ここには無い。「養護学校の遠足や運動会に、自分の子どもたちも連れて行ったりして・・・ほんとうに子どもが大好きだったんでしょね〜破天荒なところもあったけど、おおらかで明るい女性だったのよ。その彼女に悪性腫瘍が見つかったのが40歳を過ぎたころだったかしら・・・何度も手術を繰り返したけど、その

たびに転移が見つかって、最期には悪性リンパ腫、つまり、血液のガンよね？になって・・・骨髄移植も受けたんだけど・・・結局亡くなってしまったの。44歳の誕生日を迎えたころだったかしら・・・私の同級生だから・・・」間違いなく、涙をこらえているのがわかる。私は銅像のように、ただそこに座っていた。「思い出せば切りがない。いつも、そう。いくら悔やんでも、誰も、何もできなかった。それは分かっているんだけど、やっぱり悲しい。彼女が亡くなった時、一番下の男の子はまだ小さくて・・・残された子どもたちにもご主人にも、かける言葉がなかったのをおぼえている。ねえ、私になぜ、いま、あなたにこの話をしたかわかる？」わからなかった。理解できるのは“子どもをかわりに産んあげる”とまでしてくれた親友への回想、ということだけだ。私は、B子さんから視線を離さず、首を小さく左右に振った。

「わたしね・・・C子のことを思い出したび、いつも思うことがあるの。ああ、あの時、『かわりに産んでもらわなくて良かった』ってね。不思議でしょ？」不思議というより、まだ、話の趣旨がつかめていない。「もし・・・もしも、あの時、かわりにC子が“私の子どもを産んでいた”としたら、きっと私は、いま頃後悔してもしきれない気持ちでいたと思う。だって、女性が子どもを産むって、命がけですもの。子どもを産んではいないけれど、それくらいは分かる。その大切な命をかけて、もし、私の子どもを産んでいたとしたら・・・それが、彼女の死期を早めたんじゃないか。それがなければ、彼女はもっと長く生きられたんじゃないかって、きっと、後悔していたと思う。いま以上に。それと・・・」何か言いかけて、顔が曇った。「それとね、これは本音なんだけど・・・もし、彼女に“私の子ども”を産んでもらっていたら、その子に彼女の死をどう伝えただろうか、って。そして、私はおそらく、彼女の死によって、“産まれた子どもを失う恐怖”に襲われただろうな、って思う。素人考えだともうかもしれないけれど、その子を産んだ母体の影響は、考えなくとも、拭おうとしても、しきれないほど付きまとってくるもんだと思うの。DNAにしても、C子が死んでしまったという

事実にしても。ずっと、その子に残る・・当然よね。その子にとって、それが真実なんから。それに、例え、“かわりに産んでもらった”としても、産まれた子に対して、“あえて、そのことを告げる”ことはしなかったと思う。もし、言うことができて、『この人は私たち家族の親戚なの』くらいだったかな。なにを、どう考えても、あの時の私の決断は間違っていないと思う。いまとなっては、大切な思い出ね〜C子へのおもいと共に」静かに、そして確かに、B子さんの語りが自分に浸透していくのが分かる。ほんの少し前に感じた「B子さんのこころは、いま、ここには無い」といった感覚は消え、いま、私のなかに“そのおもいが流れ込んでいる”体感覚を覚えた。「そう、このことを考えるたび、私はなんて自分勝手なんだろう、って。かわりに産んでくれるとまでいった彼女に対して、その最期を知っているからこそ、親友だったからこそ、おもってはいけないことなのに、“やっぱり、かわりに産んでもらわなくてよかったんだ”って思う。いい意味でも、悪い意味でも、そう思うしかないのかもしれないけれどね」泣き笑いーその表現はふさわしくない。悲しそうな瞳が涙のなかに浮かんでいる。いまにも泣きだしそうな口元はほころび、まるで微笑んでいるかのようにも映る。私のボキャブラリーでは、これ以上、目の前の彼女を表現することはできないし、ことばも浮かんではこない。ただ、「彼女を映す鏡になりたい」、こころからそう思った。

次号へつづく

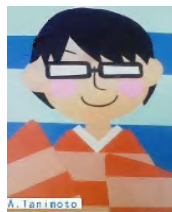
<世界のトピックス>

京大の研究班が、マウスのiPS細胞（人工多能性幹細胞）から精子を作り、卵子に注入（顕微授精）し、生殖能力を持つ成体へと成長するマウスの子を誕生させることに世界で初めて成功した。今後は同様に、卵子や精子幹細胞の作成、サルなどを使った研究にも取り組むという。日本では、昨年5月まで、ヒトのiPS細胞などから生殖細胞を作ることは禁止されていたが、“受精させないこと”を条件に解禁されたという（2011.8.5 毎日新聞朝刊）。

いつか、科学がヒトの生殖の代理手段となる日が来るかもしれない。その時、あなたはiPS細胞で自分の精子・卵子をつくりますか？

対人援助学&心理学の縦横無尽(3)

アーサー・フランク先生、 三度目の来日(滞在記)



サトウタツヤ@立命館大学

カルガリー大学教授・アーサー・フランク (Arthur W. Frank) 先生がこのほど三度目の来日を果たされました。彼は『傷ついた物語の語り手: 身体・病い・倫理』などで知られるナラティブ研究の第一人者です。

子どもの頃に一度来たという話を聞いた気もしますが、それを除けば、学者として最初に来日したのが、第二回・日本質的心理学会(東京大学)での招待講演の時です(2005)。京都にもきませんか、ついでに京都に是非どうぞ、とお誘いしたのが、立命館大学との縁でした。立命館大学 GCOE「生存学」創成拠点(立岩真也教授代表)の招きで再来日を果たしたのが 2008 年のことで、そして今回も同じく GCOE「生存学」創成拠点の招きで三度目の来日となったのでした。

最初の来日の時はゼミ生と一緒に奈良にいたりもして、名前さながらのフランクさに私はすっかり魅了されてしまいました。学生がカナダでインターンシップをしたいと言ったところ、あとで書類の添削までしてくれました。彼は自分自身のことをアート、と呼んでくれということで、以下ではアートと書くこともあります。

アートは今回、外部評価の一環として来たのですが、そんな内輪の仕事だけではモッタイナイ(今や国際語)ので、公開講演会も開きました(2011 年 8 月 28 日)。

“Holding One’s Own as an Art of Living: Reflections on Companion Stories and Narrative Analysis”

というタイトルです。講演の内容そのものについては論文として本拠点の“*Ars Vivendi Journal*”に掲載されるはずなので、それを楽しみに待っていてほしいのですが、簡単に説明すると、「Holding One’s Own」を文字通り訳せば「自分を下から支え持つ」ということになります。英語的には意味が転じて「自分らしくあることを守る」「**には屈しない」という意味の口語的表現になるそうです。「Art of Living」は生の技法。じつは GCOE で用いている「生

存学」という単語の原語が「Ars Vivendi」なので、それと合わせてくれているわけです。こういう気遣いがうれしい。「companion stories」は、同伴者としての物語、とか、その人と共にある物語、などと訳されます。ただし、複数形になっていることに注意したいところです。以上をまとめると、タイトルは

生の技法としての「自分を持ちこたえること」

同伴者としての物語とナラティブ分析についての省察

となるわけです。今回の講演でさすがと思ったのは、同伴者としての物語が必要な場合も多いが、この物語によって、他者との関係が切断されてしまう可能性についても批判的に捉えていたことです。自分を守ることが他者を傷つけることにならないようにしなければいけないことを私たちは深くとらえる必要があります。

難しい話はこれまでにして、今回もアートと一緒に少しだけですが京都巡りをしました。といっても、既に2回来ているわけですから、場所には迷いました。結果的に、マンガミュージアムと細見美術館に行くことになりました。



マンガミュージアム、日本語が読めないから退屈するのではないかと思ったのですが、まず、多くの展示に英語が表示されていました。これは驚きました。また、京都精華大学の協力を得ているので、研究書があったり、各国に翻訳されている日本のマンガがあったりして、英語で読めるものもそれなりにありました。しかし、アートはそういうものよりも日本のマンガそのものを堪能していました。アートは日本語が読めないなりに、各年代ごとのマンガをちゃんと味わっていたのでした。そして、1970年代以降の日本のマンガは基本的に変わってないのではないか、という感想と、攻殻機動隊などは少し違っているのではないか、という感想を私に対して述べたのでした。私はマンガの知識などないのですが、現代のマンガが手塚治虫によって作られその影響をうけ、脱しようとしつつも脱しきれない、というような宣言的知識はあるし、アキラとか攻殻機動隊の位置も少しは知っていたので、ちょっと驚いたのでした。

もう一つ



というようなコーナーがあり、ここで興味深い話を聞かせてくれました。ここには

Manga is a kind of story-telling, which unfolds the narrative by means of sequential frames, or panels.

というようなことが書かれており、Story と Narrative という語が両方でできます。ストーリーとナラティブってどう違うの？ということは私ならずとも気になるのですが、アートの定義はこうです。

ナラティブは、時間の経緯とともに出来事がおきる、ということで、一般的な構造のようなもの。それに対してストーリーは、登場人物がいて、オチがあって、わくわくするようなもので、具体的なもの。

彼の定義において、ナラティブの典型の一つが天気予報。時々刻々と事態が移り変わっていくものもナラティブに入るというわけです。先のパネルに戻ると、一枚の絵や写真はナラティブたりえない。しかし、そこからストーリーを読み解くことは不可能ではない、というようなことを言っていたのです。彼自身もこの定義だけが絶対ではないと言っていましたが、こういう考え方も一理あるでしょう。彼がナラティブの類型と言って、ストーリーの類型と言わないのもこうした定義に依拠しているからということのようです。

難しい話はオシマイといいながら、また戻ってしまったので、話題を転換。有馬啓太郎という漫画家とその作品『月詠 (つくよみ)』というマンガをご存じの方はいますか？



この方は、今回のアートの来日にあたって、通訳などを務めてくれた有馬斉・東大特任助教のイトコさんだということです。せっかくだから、見てみようと思って司書の方に聞

いたら、なんと開架で読み放題さわり放題という扱いではなく、閉架に保存されていたのです。研究用ルームがあり、そこで閲覧希望を出さないと見ることができないのです。せっかくだから、出してもらいました。先客の方は『ガロ』を請求して山積みにして研究ノートをとってましたが、こちらに来たのは何の変哲もないマンガ。何がすごいのだらうと思ったら、なんとこのマンガは女の子の「ネコミミ」をマンガ界にもたらし、ひいては日本文化にもたらしたマンガの一つだということです。またアニメ化にあたってもしろいろと実験的なことがなされた、ということで、歴史的な作品なのだそうです。たかがネコミミ、されどネコミミ、でしょうか。何事にも始まりはあるのですが、ちょっとびっくりしました。

なんてことを書いているとキリがない。細見美術館は記念写真だけ。小さいけれど、若沖の特別展があったりして楽しめました。



小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー

5. プロセスの進化(深化)と「性的」問題

尾上 明代

このマガジンでは、被虐待児たちへのドラマセラピー治療について、A 児童養護施設で継続的に行った事例を連載している。具体的なプロセスの提示を通して、ドラマセラピーという「対人援助」法について知っていただければと考えている。(各子どもの家庭状況と合わせて、その子どもの即興ドラマを考察すると、その意味がより良く理解できるのだが、それらの記述は割愛する。)

イチゴちゃん、リンゴちゃん、アンズちゃん、マツオ君、スギオ君、という5人の小さな「怪獣たち」と開始した連続セッション。前号では、主にイチゴちゃんの変化と、グループ全体の成長という点で、大きな前進があったことについて記述した。

きょうは大きな流れとして、子どもたちとのプロセスがさらに進化する様子、その一方で浮上してきたセッション内での「性的」な言動について記述する。数回のセッションを重ねてきて、小さな「怪獣たち」は、主に他者をひどくいじめる感情を表現し続けたが、今号の6-9回では、それが確実に収束してきた。五人のこれまでの環境や今の状態が違うので、全員同じように進むのは難しいが、それでも数々のドラマを楽しみながら、グループとして良い方向に前進してきた。・・・というところで、当

然ながら、一難去ってまた一難である。「怪獣たち」がくれた次なる「攻撃(?)」は「性的」問題であった。

* * *

第六回セッション

再び床屋のドラマ！

前回ヒットした「床屋のドラマ」(床屋が、私扮する若い男の客を変な髪型にし、その男が翌日小学校へ行って子どもたちにバカにされるというプロット)をまず行う。浩二さん(助手の施設職員)に床屋になってほしい、と子どもたちの「浩二さん、浩二さん！」コールが起きる。

浩二さんは、彼らのリクエストに沿って「ぼけた爺さん」「ぼけた婆さん」「ぼけた曾爺さん」の床屋を演じる。「ぼけている」ゆえに、手元が狂って客の髪型がどんどん変になっていくという部分は、浩二さんの創作だ。三回ともほとんど同じストーリーだが、この「繰り返し」は、セラピーでは大変重要である。ごく簡単に説明すると、例えば苦しい場面や悲しい場面は、繰り返しながら螺旋的に上昇することで、やがてそこから抜けだし、新しい解決方向へ発展していく。(ただし、対象者の状況や感情レベルを見ながら、負の感情が強化されすぎ

ないよう、ドラマセラピストが導いていかなくてはならない)。また今回の床屋のような楽しい場面は、みんなと一緒に繰り返すことで、良い気分で協力・信頼関係を増強させるプロセスになる。

散髪場面が終わると、毎回すぐに子どもたちは、待ってましたとばかりに、「キンコンカンコーン」とコーラスして（ここがみんな大好き！）、学校の場面を作り、男を見て「きもーい！」と笑う。誰かをいじめるというエネルギーは減り、みんなで共通の目的に向かって団結しているのが楽しいようだ。

4回目には、イチゴが床屋になると言い、男は五千円も払ったのに、怪我させられたあげく、ひどい髪型にされた。「ひどーい！きもーい！」とみんなも大騒ぎ。アンズが「こわーい、父ちゃん」と言って男を見て逃げる演技をした。彼女はそれまで、ほとんどが「その他大勢」としてそこにいて、突出したせりふを言ったことはなかった。「どさくさに紛れて」父親に頼るような言動を表現してくれたのは、印象的だった。実はアンズにとって父親は、大変重要な人物なのだ。

その後、警察が来て、何故か男は捕まり牢屋に入れられた。「ひどい。髪型が変なだけで牢屋に入れられた。」と私（男）が言って、そのドラマを終えた。

マツオ（自転車屋）と私（子どものお客）

お客：あ、「マツオ自転車」って書いてある。自転車くださいーい。

自転車屋：分かりました。何がいいですか？

お客：子どものお小遣いで買えるやつ。

これまでマツオは、逃げ腰だったり、ふ

ざけたり、攻撃的だったり、なかなか普通にしゃべってくれなかったが、彼のセリフ回しが、これほど「まとも」なのは初めてだった。自転車屋が、お客のほしい自転車の値段は「100万円」だと言うので、高すぎて買えないでいると、そこに億万長者と称する人（イチゴ）が飛び入りで出てきて、これ見よがしに（？）即金で買ってすーっと乗って行ってしまった。すごく楽しそうに。（私は相変わらず、貧乏くじを引くような、やられる役ではあるが、いじめられることはなかった。）彼女らのエネルギーが善意的になった感じを受ける。

リンゴとアンズの「ソーセージ屋」

二人がセットで出てくる。アンズは誰かにくっついてやるだけで、私とはメインで対峙することはない。（前回、初めて私と二人で行う即興ドラマに出てきたのは進歩であったが、私との接点はないまま、眠っているだけの隣家の人を演じたのみであった。）アンズは必ずリンゴと一緒に出てくる。性的なジョークも、この二人が一番するし、その点でも気が合っているらしい。二人はソーセージ屋。「浩二さんのおちんちんをいっぱい、何十本も（やきとり屋のように）焼いて」売っていた。私は買って食べる場面をやらされる。

このころから、まるで強迫観念のように、セッション内での性的な言動が頻発するようになる。ドラマの中、そして想像の時間には、みんなが性器や性的行為を表すことばを発する。私は、子どもとしての単なるおふざけのレベルと、それを超えているものを、見極めようと努力しながら、頭ごな

しに否定しない（つまり、これまで通りドラマ内では、受け入れる）という基本姿勢は保ったままで、一方ではどうしたものかと悩んでいた。施設入所前の子どもの生活史に関する情報を整理するとともに、職員と話し合ったり、また何より大切な、今日の前にいる子どもが発している感情・様子・雰囲気から自分が感じることに、それまで以上に集中した。

想像力・創造力の重要性とセラピーにおける効果

クールダウン（セラピーのクロージャー）の時間は毎回、まず部屋を暗くして床に寝転び、目を閉じて「想像」の世界にいくように導いている。

想像力や空想の遊びがどれほど大切かは、ユングを初め、歴代の心理療法家たちが、多くの論考を提供してくれているので、今更述べるまでもない。

芸術療法、特にドラマセラピーにおいては、そもそもドラマという架空の設定で行う方法が、想像力なしでは成り立たないという性質上、被虐待児など特に想像力が乏しい対象者には、それを開発することと平行してセラピーを行うことは必須である。ある子どもが、想像できるかどうかと、ドラマを楽しんでできるかどうかは、ピッタリと一致する。そして、想像できるようになると、即興でドラマが創れるようになる——つまり今度は創造力がつくのである。（日本語の音が同じなのは、偶然とは思えない。）そして、この創造力こそ、治療の鍵、そして人間の魂が癒される鍵だと強く確信している。

何か新しいことを生み出す・創造するこ

とができたとき、人はとても良い気分になる。ドラマを創るアイディアを出したり演じたりして、認められるという成功体験は、たとえば鬱、依存症、神経症など、またセルフ・エスティームの低いクライアントたちに大変良い影響を与え、現実生活での自信につながることを、日々の仕事の中で、リアルに実感している。この楽しさは、「魂が喜ぶ」という形容詞があてはまると感じる。生み出す行為そのものから来るポジティブな感情と、そこに認めてくれる他者の存在があり、楽しさを分かち合う仲間がいるという組み合わせは素晴らしい。子どもの場合で言えば、即興ドラマで自分が創り出したアイディアと演技をみんなに誉められたときの感情は、たとえば算数の九九が言えたとき、漢字の書き取りができたときなどとは、まったく違う種類の満足感だ。また認知症が進んでいるとき、施設で初めて描いた絵が認められ、絵の上達とともに症状も改善されることもある。（実話の一つとして、「折り梅」という映画がある。）

逆に言えば、このような創造性が十分開発できれば、セラピー・プロセスは半分以上、終わっていると言っても過言ではない。苦しい思いを抱えてセラピーにきた人々は、その苦しみを芸術に変える過程で癒されたり、またその作品そのものが他者を癒すものとなる。ベートーベンが聴力を失ったあとに創った第九・喜びの歌をここで例に挙げずとも、歴史上の偉大な芸術作品はすべて作者の苦しみの所産と言える。

ところで6月、トラウマと心のケアの世界的権威と言われているボストン大学のベセル・ヴァン・デア・コルク氏の講演を聴く機会があった。その中で特に印象に残っ

た話がある。9 1 1テロのときに惨状を目の当たりにしてトラウマを受けた子ども（直後に両親に保護され、ケアされた子ども）に二週間後に絵を描かせると、テロ時の WTC ビルの様子を描いたという。ビルの下に描かれているものが、何かわからず質問すると、子どもは、「トランポリン。これがあるときあったら、多くの人たちが助かったのに」と答えたそう。ヴァン・デア・コルク氏は、「このような創造性が出れば、この子はもう大丈夫」と判断したと述べた。そして、「創造性を創ることも、トラウマを受けた人にとって大切なので、自分はドラマも取り入れている」とのことだった。このように、ドラマが創造性を刺激し発現させる力を彼も利用していることがわかった。

話を A 施設に戻そう。とにかくこの5人の子どもたちには、何とか想像力を使うような場面設定にして、その力を呼び起こしてもらおうと、クールダウンの活動には、必ず「想像の時間」を取り入れていたのだ。

この日、特に印象に残ったのは、いつも目を閉じて一番良く想像ができるイチゴが、目を開いたままだったことだ。アイスクャンディーをなめる動作。性的な行為を意図しており、「わかる？」とマツオを見て、二人でニヤッと合っていた。

その後の一人ずつの感想の時間は、前回にも増して、大変「まとも」で、誰のどこが面白かったかきちんと言いかうことができた。もちろんその都度、私も同意したり褒めたりした。この時間だけ取りあげれば、まるで私が彼らの「性的」言動に悩んでいたことと逆行するように、今日は非常に大きな向上・変化を感じた日であった！

第七回セッション

私が夏休みをとったため、いつもより間隔が空いたことと、施設の都合で普段と違うホールだったので、彼らはいつもより解放された雰囲気でもとまらない。でも、「今日ドラマやる気ある人？」と聞くと、みんなは「はい！」と言っていたので、楽しみにしていたのだろう。

これまで架空の設定のドラマを続けてきたが、そろそろ現実的な場面も取り入れてみようと思い、実際に夏休みの出来事を話してもらってそれをドラマにしてみようと提案した。現実をドラマに取り入れることによって、その先、彼らの現実の問題を直接扱えるようになるかもしれないという期待があったからだ。浩二さんと私が具体的な例を演じて方法を伝えた。しかし、子どもたちの反応は鈍く、誰も夏休みの出来事を言ってくれなかった。その後のセッションでも、何回か架空から現実に近いと意図したことがあったが、目に見えない抵抗を感じた。このグループでは、結局最後まで、架空のドラマが貫かれた。

対象者がどのようなクライアントであれ、現実的な題材をドラマで扱わなくてはいけない、ということは実は全くなく、それを無理にさせる必要もない。対象者の状況や性向、希望、セッションの目的によっては取り入れることもあるが、むしろ架空のメタフォリックなドラマを扱うことこそ、本来のドラマセラピーの意図である。

それで、この日はある程度子どもたちに任せてみた。当時、子どもの間で流行っていたテレビドラマの場面を、イチゴが中心に

なり、みんなは楽しんで演じていた。私だけそのドラマを見たことがなかったので、一人で観客になっていると、リンゴやマツオが、何でも適当にやればいからドラマに入れ、という。私も一緒にやって欲しいという気持ちだと思い、すなおに嬉しく感じた。少し一緒に演じたあと、次回セッションまでに、そのドラマを見ておくことを約束して終わる。

誰からともなく、学校で練習している運動会の応援歌を歌い初め、とても大きな声でのコーラスになった！かなりのエネルギーが発散されたと思う。今回は、夏休みということもあって、不思議と「番外編」のようなセッションだったので、いつものようなプロセスにはならなかったが、ちょっとした息抜きになったように思う。

セラピー後、それぞれの子どもが、施設敷地内にある自分が所属する建物に帰る際、アンズが、「怖いから送って行って」と言う。このような弱音じみた発言は、決してなかった子どもなので、はじめは本気と取らなかったが、真面目に頼んでいることがわかり、しっかり手をつなぎ歩く。アンズとのこのような時間は初めてだ。夜は「後ろが怖い」のだそうだ。それに共感しつつ安心させながら送り届けた。

第八回セッション

またまた床屋

セラピーの部屋も通常に戻り、再びみんなのお気に入りの「床屋」のドラマから始まった。私が床屋、マツオがお客になり、

彼は「チンコのー」というセリフでドラマを始めた。

私は、「チンコは今までいっぱいやったからいいよ。やめようよ。」と、初めて受け入れずに、却下してみた。

もちろん、内的な理由があって、性的な言動が起きていたと思う。だから、当初の何回かは受け入れて、その発展の様子を見ていた。（しかし、そこからただちに、内面や過去の問題点を導き出すようになる段階ではなかった。）とにかくおふざけで話していることでかなりの「負」のエネルギーを発散できているように思えたが、おふざけの形にせよ、何度も吹き出していた。そうになると、繰り返すことによって、その言動が強化・拡大されてしまうばかりで、変化、昇華、収束の方向がすぐには見えなかった。（これまでのエネルギーの発散で良しとして）一端、他の方向へ子どもたちを向けさせたいと思ったのだ。

するとリンゴたちは、そのことには触れず、「明代さんがお客がいい！」と言い、マツオと交代する。結局、ぼけた床屋の爺さん（浩二）とお客（私）で、おなじみのドラマを子どもたちに見せることになった。「キンコンカンコーン！」学校でまた、「キモーイ！」と。みんな楽しそうだ。イチゴとアンズは「きゃー、マジックだ。眉毛がつながっているよ！」などと、想像的なせりふを言い、マツオは、「カッコイイ！」と言うので、男は「嬉しい！ 始めてカッコイイって言ってくれた！」と喜んだ。

続いて浩二さんが、「床屋」という苗字の植木屋だった、という筋書きで、私の頭に

作業して、頭上に綺麗な林ができあがり、私が「きれーいッ！」と言って終わらせた。

読者の方々は、もう飽きてきたのではないかなと思うこの床屋のドラマ、ほとんど繰り返しの中で、少しずつ変化しているのをお気づきだろうか。私へのいじめが、明かに消えてきて、さらには肯定的な感情が表れているのを。このように、繰り返すことにより、負の感情が充分に発露され、いつのまにか今までの負の感情の発露対象の存在が相対的に少なくなり、他の面への関心や集中に変化してきている。いわゆる、浄化、昇華につながったとも言える。

テレビドラマ

次に、私が約束通り見て来たテレビドラマの場面をドラマにする。私は学校の先生の役（怖い先生の設定）になったが、みんなは生徒役で、わーわーと楽しそうに騒ぎ、また本気っぽく反抗したりする。私へのいじめの感情が収束してきたのは良かったが、代わりに性的なことへの固執がやはり続いている。たとえば、

イチゴ：先生のおっぱい揉みたい！

私：そんなこと許されません。

アンズ：先生のチンコをー

私：私は女性なのでそんなものはありません。じゃ私は、もう行きます。

マツオ：はい、勝手に行けっ！！（とても憎らしい感じで）

という具合である。

みんなはこのあと「卒業の歌」を歌う。もうメチャクチャに叫び、動物園みたいな騒ぎだ。とくかく音量がすごい。歌の途中で、みんなは私の記録用のレコーダーのマイクに向かって、チンコをもみもみ、明代

さんのチンコ、おっぱい・・・口々に吹き込んでいた。（私があとで聞くことを知っている。）

初めて叱る

突然、スギオが「明代が交通事故で足をなくして、みんなは医者。手術をする病院。」と提案する。そこで、まず自動車役の子がぶつかってきて、私が倒れる。スギオたちは、大丈夫ですか、と言って私を助け、オペ室へ。机をベッドに見立てて私は寝かされる。みんなで寄ってたかって、私に手術をしている様子である。（私は当然ずっと目をつぶったまま。）すると、私のズボンのチャックを降ろされた。

上述したように、今まで、このようなことばやドラマ内でのアクションについて、ほとんど全てを受容するというスタンスでやってきた。それは、以下のような理由からだった。

- ・私がどこまで受け入れてくれるかのお試し（たとえば、初めのころ、ドラマの流れと全く関係なく「おちんちんと言って」などといわれて、即リクエストに応えていた。）

- ・そのような言葉を言ってストレスを解消（これは一般の大人でも、「くそっ畜生！」などと言うことはごく普通にある）

- ・子どもゆえの遊びの一環（ウンコなどということばは子どもは普通に言う。さらにみんなで言い合うのは楽しいという側面がある。性器をことばに出す、などもしかり。）

しかし、だんだん思春期に向かっている歳でもあり、さらに一般の子どもと全く違う家族史、生活史をもっていることを考慮

すると、このような事柄をすべて受容するのは、もちろん良くない。頭ごなしに、それはダメ、それは言うなという方略は採らないが、それに関しては、マイルドに受容を辞めていく必要があった。しかし、前出のマツオに「それはもう辞めようよ」と言った場合とは違い、今度は、チャックをおろすというような現実的な行動に出たわけだから、「ドラマの中では実際にぶったりしない」というお約束に準じて、ここはしっかりいけないことを伝えるときだ。ここを外したら、現実的に行動を起こす可能性まで受容してしまうことになる。

私：（目を開けて素に戻り、かなり本気で叱る）誰？謝って！

みんな：リンゴ。

私：正直に言って。言ってくれたらいいんだから。本当にリンゴなの・・・？

みんな：・・・。（私が怒ったのを初めて見たからか、神妙な顔つきをしている）

私：じゃ、どうする？このあとどうするかみんなで決めてください！

それ以上、叱ることはしないかわりに、このドラマは中断することをこのような方法で伝え、その後の対処をみんなに委ねた。

マツオ：動物園ごっこ。

私：それでいい人？

みんな：はい。

マツオ：明代さん、飼育係！

動物園のドラマ

叱られた時間は、短時間でも子どもたちにはインパクトがあったと思うので、その後はさっと気持ちを切り替え、マツオの提案を受け入れた。みんなは沢山の椅子を使

って檻を作る。動物園だから当然だが、ぎゃー、ウォーとすごいエネルギーで、全員鳴く！私が追いかける！みんな逃げる！大混乱！

アンズとリンゴは、ゴリラの檻に二人で入って、アンズがリンゴの上に乗って「交尾」していたが、飼育係が来るとすぐ逃げる。浩二さんも飼育係になり、麻酔銃で動物たちを一瞬眠らせる。でも、みんなすぐ起きる。撃たれて一瞬眠る麻酔銃を彼らは大変気に入ったようだ。騒ぎが収拾つかなくなってきたので「止めよう。OK、終わリー！」と私が叫んだすぐあと、下の階にいた事情を知らない人が何事かと入ってきた。みんな、シーンとなる。

その後、アンズが気持ちよさそうに運動会の歌を歌い始めた。みんなは横になり、寝ているところを、一人一人私が足を引っ張って床を滑らせてあげる遊びをした。どの子もキャッキョと嬉しがって、幸せそうだった。特にマツオが一番喜んだ。

絆ができる

「じゃー寝よう。たまには、チンコじゃないことも考えて。いつもそれじゃつまんなよー。」意図的に方向を変えるために、この発言で、私は再び介入した。そして、今日初めて用意してきた「コロは屋根の上」（子どもらしい歌詞のかわいい歌）のCDを流す。この子たちにはウケないかも・・・「何こんな歌！」なんて言われるかも、と内心思っていたのだが、彼らが静かに落ち着いたことに少し驚く。今日は、今までで一番、ギャーギャー大声をいっぱい出して、発散できたからかもしれない。何が奏功したの

かは、断定できないが、初めて彼らの心身が落ち着いているところを見た気がする。

以下は、この日の彼らの想像の中身である。ここでも私は、いつも当然ながら、どの子のどの発言も基本的には何のジャッジもせずに受け入れ、ごく自然な雰囲気で包み込む。

マツオ：俺が、金持ちになった。

私：あー、いいねー。お金持ちになったんだ。

スギオ：おれ貧乏の生活している夢。

リンゴ：ピッカピカの家。

イチゴ：自分の好きなものに変身して、鳥になって空飛んで、野原に行った。

アンズ：何にもない。

私：何にもない、っていうのもいいねー。

アンズだけは、やはり想像させることが一番難しい。スギオも、やはり難しい子どもである。今回はマツオのことばに反応して発言したが、本当に「想像した」とは考えにくい。

一番良かったところの感想としては、やはり「動物園」で逃げ出して騒いだところという子が多かったが、リンゴは、何と「チャック降ろしたところ。」と言ったのだった。

私：（優しく）やっぱりそうなの！？ 正直でよろしい。許してあげる。

リンゴ：別に許してくれなくていいよ。

私：（リンゴが照れ隠しで言ったのがわかったのでニコニコと）そんなこと言っちゃって〜。

するとアンズが、とても落ち着いた平和な感じで「自分が初めにやった。」と話してくれた。

私が「二人とも正直でよろしい。二人とも

偉い！褒めてあげる。」と言うと、僕たちもやった、俺も・・・とみんなが言い始めたのだ。嬉しい気持ちが静かにこみ上げてきた。リンゴとアンズが、少し私に近づいてきたというか、この出来事で、絆が少しできたように感じる。

帰るとき、マツオが初めて「明代さん、ありがとう。」といったので、浩二さんが「あの子がお礼を言うなんて」と驚いていた。足を引っぱってあげる遊びがよっぽど楽しかったのだろうか。

そして、この回以降、動物園のドラマが大流行し、毎回セッションのお約束となったのは、言うまでもない・・・！

第九回セッション

絵のドラマ化

マツオが体調不調で欠席したので、他の四人と行った。

きょうは、気分転換の意味も込めて、床に敷いた巨大な模造紙に、みんなで絵を描くことから始めた。それぞれが自分の好きなものを好きなところに描き、その後、人の描いた絵も見て、一緒に書き足したりしても良いと伝えた。特にイチゴやリンゴはとても嬉しそうだった。それぞれが描けたら、浩二さんと私も含めて、一人ずつ説明する。私は太陽と7つのハートを象徴的に描いて、「ドラマセラピーを7人で楽しくやっているところ」と説明した。

特にアンズの発言に興味を惹かれた。大きなウンコ、ゼリーになっている木、虫を描いたのだが、それぞれの間の関係はないというのだ。たとえば、「この木の下に虫が来てウンコした」などのような、絵と絵の

関係を知りたかったのだが、何度聞いても「知らねー」とか「ない！」と答える。しかし最後には「浩二さんの描いたロケットと関係がある」と言う。彼女は誰とも関係を持ちたくないが、唯一、浩二さんとは持ちたいのである。(浩二さんは、とにかくどの子どもにも人気のある職員なのだ。) 彼女が私との一対一のドラマに初めて出て来た前回も、隣の家の人の役として単に眠っているだけで、私とは一切関係を持たなかった(持ちたくなかった) のと同じことに思える。

スギオは、やはり彼のドラマと同じように、創造的ではなく、人の真似をして描いたり、描くことそのもの(表現すること)に気が進まないようだったが、最後に、アンズの描いたウンコの上方に、それを今まさに踏もうとしている人の足を描いた。その発想が面白くて個性的、と指摘して褒める。全体的にどの子どもの話もいつも通り、何もジャッジせずに共感的、支持的、ポジティブに聞いた。

そこからみんなでストーリーを創って演じようというのが、私の意図だった。しかし、目の前にある絵(限定された材料)を使ってストーリーを協力して創るのは、彼らにとっては難しかった。私は自分も演じながら優しく導き、結局ほとんど全部に介入してやっとできたというものだった。

6人の役：

モグラのおばあさんーイチゴ、
毛虫のケムンパスースギオ、
スーパーウンチ君(イチゴが創ったキャラクター)ーリンゴ、
犬ーアンズ、
ロケットの花ー浩二、

少年ー私

モグラのおばあさんが種を見つけて埋める。

(ここはイチゴが創った。良いスタートである。) ロケット花が咲き、通りがかりのケムンパスが出てくる。そこに犬が来てウンコする。少年が来て、それを踏んじやって大騒ぎする。小川が流れていてそこで洗ってハッピーエンド！

プロットは至ってシンプルであるが、絵も含めて、初めてみんなで創りあげたドラマであった。大盛り上がり、というほどではなかったが、みんなで落ち着いて行い、結構楽しく出来たことを考えると、実はとても良かったと思う！ 私が驚いたのは、このような「まるで子どもらしい」ドラマが、この子たちとみんなで作れたことだ。殺しや攻撃やいじめも一切出て来ないドラマ。それにしても、ウンコを私が踏むというところまでストーリーが進んだのに、一向にそれ以上私が惨めになるような流れにはならなかった。それどころかウンコには無反応だった。(特にイチゴの) いじめエネルギーは消失した(出切った) ようにも思われる。

絵を描かせたこと自体も良かった。(子どもも楽しんだし、そこから私がそれぞれの子どもの傾向を確認できた。)

やはり動物園

結局、このあと「動物園タイム！」になる。

トラの夫婦(リンゴとアンズ)、象→いつしかワニ(スギオ)、カラカル(イチゴ)というふうに、凶暴な動物が多い。アンズはやはりどうしても単体ではいられず、誰かと一緒に(夫婦)である。みんなが檻から逃げ

たり、浩二さんと私が飼育係になって捕まえようとしたり、えさをやったり麻醉銃で撃ったり、前回と同じことが繰り返された。お絵描きのときに床を保護するために敷いた大きなビニールシートがあり、みんな逃げてその下に入って隠れるのがすごくワクワク楽しかったようだ。最後は四人が一丸となった。世話係の二人対四人のようになり、彼らは逃げる。と言ってももちろん「追いかけてほしい」「気にしてほしい」「かまってほしい」という意味だ。

ギャー—、ギャー—と叫んで、同じことの繰り返しと大音量に、こちらの大人二人は少々疲れが出て、飽きてきていたが・・・でも彼らはエネルギー発散させた。

このような遊びは、例えば床屋のドラマのストーリーを楽しむのとは、随分違う種類のおもしろさである。一人ずつよりみんな一緒、というのが好きな子どもたちだし、さらに動物になって浩二さんと私からケアしてもらえる、逃げたら捕まえに来てくれる、というのはとても嬉しかったはずだ。セラピストや施設職員としてではなく、「飼育係」として「動物たち」のケアをするという構造が、現実からの距離感があってドラマセラピー的だ。

象になったスギオ（仲良しのマツオが休みでちょっと寂しそうだった）は、ケアしてくれるのは嬉しいようだが、突然、かわいい雰囲気にもまったく似合わない怒鳴り方をする。（マツオにも同じ傾向がある。）「何だ、うるっせー！バカ野郎！」などと怒りを突然ぶつけられると、「可愛いやんちゃな、私を慕っている男の子」というイメージが一瞬で吹っ飛び、その刹那だけ「この子の

中に私を憎んでいる感情があったのか」と思ってしまうことがある。もちろんそれは、明らかに、私を憎んでいるのではなく、彼らは別の人間への感情を出しているにすぎないのだが。（二人の男の子へのケアにはまた課題が多く残っている。）動物、特に獰猛なものになるということは、奇声を発して叫ぶようなこと、また怒りを爆発させることがオフィシャルにできる利点でもあるので、彼らは気に入っているのだろう。

クールダウン

前回から始めた歌の時間に、歌詞を持って行き見せると、みんな集まって歌おうとした！　かわいい、子どもっぽい歌詞の歌を彼らが歌おうとしているのを見ると、今までの言動から感じていたものと違い、かえって意外な印象を受けた。彼らの「攻撃」や「性的言動」にドラマの中で直接関わってきている私としては、本来の「子ども」としての感情や生活の体験が乏しかった彼らが、「子どもみたいな歌」を「子どもみたいに」進んで歌おうとしているのを見るのは、感慨深いものがあった。

この日の想像の時間は、イチゴの発言から始まった。（私は、また現実に戻される。）

「さあ、きんたまの夢、行こうかな。」

私：自由だけど、なるべくきんたま以外にしてよ。」

前回の想像の時間は、静かに「寝て」いたが、今日はまた、お互いふざけてごろごろ転がったりしていた。イチゴとアンズが、二人で内緒で話合ったのか、「楽しかったね」「チンコの世界に行ってさ」などと言っている。

このあと、イチゴは、性器の名前を使い、それをたこ焼きにして食べた云々と発言した。それに続き、アンズは、ある具体的で特殊な性行為の様子を「想像の世界」の名の下に、話し始めた。さらに続けて、「私はセックスの村に行ったの。そこではみんなセックスしてるの。」と言う。イチゴもそれに乗って、「そう！そこではうふーん（動作して）とか言ってみんなしてるの。」

まるで、「想像の世界」の話という形なら、私も否定はできないだろう、とばかりに、とどまるところを知らない様子である。

アンズ：あとね、良い世界もあった

私：良い世界は？（この時の私のレスポンスの仕方は、内容に対しては、しっかりと中立的な態度を維持しつつ、受容的に優しく、暖かく包み込むように聞いていた。実際、彼女たちが話す中身を聞いて、叱ろうという気持ちはまったく起こらず、また、すぐに口をふさいで辞めさせたいというような気にもならなかった。本当に彼女たちの心と身体を包みこんであげたい感覚だった。）

アンズ：アメリカに行った。

私：あ、えっほんと！？

アンズ：英語でしゃべってね、チンコのこといっぱいしゃべった。チンコの英語しか覚えてないから。

（とうとう他の題材がでてくるのか、と期待したがやはりダメだった。アンズには、私の期待をちゃんと知っていて、ふざけてからかっている気分も入っている。）

リンゴ：チュッチュ（セラピーの見守り役としていつも置いてあるぬいぐるみの名）と一緒に森に行って一緒に食べて終わり。

スギオ：嘘つけー

リンゴは本当にそんな空想をしてくれたのか、それともやはり私をからかって、期待されている“答え”を言ったのか。とっさに私はとても良いとすなおに信じた（そしてその自分の感覚を信じたい。）が、直後にスギオが、嘘つけーと言ったので、スギオの方がリンゴの本当の意図を見抜いたのか。またはスギオ自身がひねくれたことを言ったのか、わからない。

スギオ：何もない。

なかなか一筋縄では行かないことは、もとよりわかっている。

以前にも書いたが、このころ、毎回のようにアンズの笑い声が気になった。人を馬鹿にしたような、カタカタカタカタというその響きは（もちろん、おかしいよ～という気持ちは表れ出ているが）あまりに均一、画一的でロボットか笑い箱のようだ。ボタンを押すとその笑い方をするだけ、それ以外にはない。自分が本当に友達とふざけて楽しんでいる時も、ドラマの中で私が馬鹿にされているのを見て、あざ笑うときも、自分がエッチな冗談言ってその後笑うときも、全て同じ笑い方。普通は状況に応じて笑い方は変わる。人間らしく変化してほしい。彼女の心からの、機械的に響かない笑い声を聞きたいと思う。

6回目から9回目の4回のセッションでは、内容と行動に顕著な変化が表れた。一つは、攻撃性（人をいじめる、殺すなど）が、明かに減って（子どもによってはほとんど消滅して）いったこと。そしてその分、私の演じる役とみんなの演じる役との間に、

意味のある話しの展開ができはじめた。一方、もう一つは、いじめ、攻撃感情の代わりに、性的な言動の模倣、感情、それへの意識が表面化してきたことだ。それは最初、子ども一人のこだわりの行動、感情であったものが、全体に広がった感じだ。

ここでの受容する度合いには、とても慎重な判断が必要だった。このような題材に関して、共通の「倫理」的感觉をどこに定めるかは難しい。マルキ・ド・サドまで行けば、また別の世界になるが、日本人とヨーロッパ、アメリカとは相当に感覚が異なるし、日本人の中の多様さも同じように広い。そして、「通常感覚」を超えるのがドラマ、ドラマセラピーであるのだから、一般的倫理での切り捨ては極力避けたい。

「ウンチ、おしっこ」の時は、できるだけ付き合った。しかし、性的なことを直接表現するのは、一定のエネルギーを発散させた後は、一端、休止に持っていくようにした。

どちらも社会では、禁忌とみなされる分野であるが、前者は仮想空間であれば許容できることとし、後者は仮想空間であっても、一定の禁欲性を維持した。

その感情のエネルギーをある程度発露させつつも、包み込んでいく行程はしばらくかかるだろうと思われる。前思春期の子どもたちでもあり、また、家庭・生活環境にも関わっているのも、丁寧に扱う必要を強く感じる。

(次号に続く)

家族造形法の深度

家族造形法を使った事例検討 その6

早樫 一男

〇はじめに…

私自身が進行役を務めている家族造形法を使った事例検討としては、定期的な研修会（ふるかわ家族カウンセリング研究所主催 月1回 京都キャンパスプラザ）と不定期な研修（女性ライフサイクル研究所）があります。

今回は、女性ライフサイクル研究所で行われた研修後に実施した、当日の参加者による座談会の様子を報告します。題して、「家族造形法の面白さと難しさ、あれこれ」です。参加者の構成はAさん、Bさん、Cさん、Dさん、今回は初めての人から数回という参加状況です。Eさん、Fさん、Gさんはここでの研修が始まった頃から参加しているベテランです。そして、私に加わっています。

「家族造形法の面白さと難しさ」について、あれこれと思ったことを自由に語ってもらいました。

〇家族造形法の体験は…

A「クライアント役になってみると湧き上がってくる感情というものがある。頭で考えていたことと、実際にからだで感じ

ることが違うという新鮮な体験をした」

B「初めてですが、自分というスタンスから見たときに、家族がどういうふうに見えるのかということを立体的にとらえられると思った」

G「研修なんかで使う時があって、その時には、20人に一人ぐらいの割合で、さっぱりわからんという人がある。最初から、すべての人がすぐわかるというわけではないが、一方で、抵抗する人があるのも事実。こんなのは、勝手にその人が作っただけだという感じで、反発したり批判をしたりする。頭で考えるタイプの人は、なんか脅かされる感じがあるのか…。しかし、何回か体験してみると、じわーっと入っていく人もあるのだが…」

B「例えば、家族4人をどのように配置するのかがすごく重要になってくるのではないか」

G「その時に、批判的な人は彫刻家役が勝手に配置しただけだというのだけれど、そんなことを言ったら、文字情報のケースレポートも主観だ。それよりも、彫刻家役（援助者）がキャッチしている情報が視覚的に置かれることで、文字情報で選んだよりかは、情報が多いかもしれない

いとも言えるが、ある種の抵抗を感じる人がある」

C「自分が彫刻として置かれて感じることはあるのですが、それが、実際の家族の人とまったく同じではないとも感じる。しかし、一方で、家族役のフィードバックをきいて、実際の家族と重ね合わせることができるのは、提出者かなあと思う」

G「家族の実際の感じと重なるかどうかというよりも、家族造形法というツールを使って事例検討をこの場所でやったことによって、援助者が新たに見えてくるものがあるということが大きい。これまで、DVケースの事例検討等にも使っているが、実は、援助者がケース理解を深めるといった意味において、援助者自身のトレーニングの側面もあるのではないかと感じている」

C「それぞれのコメントは、可能性の一つとして受け止めるということですね。絶対視はできないということですね」

G「家族造形法を使つての事例検討をチームで実施することによって、援助者自身の理解が深まることが大切。その場で話し合った通りにいかなくても、いろんな視点で検討したことが次にいきる」

早樫「検討するときに、これまでのペーパー中心と違うところは、立体的、視覚的であること。これは、他の検討の仕方とは決定的に違う。ただし、提出者のイメージで作っている。各メンバーからのフィードバックについては正解を求めているのではなく、どんなふうに感じますか？ということをきいている」

C「むしろ、言語化されたケース報告を見

るとイメージが湧かないことがある。臨床像が描かれているが、どんな人？っていうのが浮かんでこない、意味がわからないというのが結構ある。しかし、造形法という形にすると、こういう関係の中のこういう位置なのか、こういう感じのこの人ねというのがわかるから、造形法は結構いいなあと思う。理解が深まると思う」

○役に入る…

早樫「いつも、造形法の終わりには、それぞれ引き受けていた役を降りる、自分自身に戻るという意味で、簡単な役割解除を行っています。具体的には、それぞれ引き受けていた役割に合わせたコスチューム（衣装、上着）を脱ぐということをイメージしてもらっていますが、そのことについては…」

D「さっき、服を脱ぐという話があったが、前は服が何を意味しているかがあまりよくわからなかった。家族造形法だけでなく、クライアント像を作ること、自分の視点も、距離を持って考えられるという経験もした。言葉によらないというのがすごいなあと思った。一番最初に身体的なイメージがきて、そこから、キャラができていく感じがした」

早樫「さきほどの抵抗にもどるが、役に入るというのは、難しく感じますか？」

G「全然感じなかった。いつも、造形に入る前のケースの簡単な紹介の際、最初はそんなこと信じられないという感じがあっても、そこに置かれると不思議とわかる、感じる。頭で考えると、なんってい

う人だ！、こんな人わからへん、信じられないと思っていても、その役として置かれるとわかるのが本当に不思議」

D「対人援助マガジンの家族造形法について読んでいて、何でこうなるのかと疑っていたが、実際に、そこに置かれたらすごく感じるなあと思うことがある。ただ、そこにいるだけなので、動きがない分、演じる必要ない分、かえっていろいろと感じることができるし、楽でもある」

G「楽だから、苦手感とか恥ずかしさがないし、その分、じっくりと感覚に集中できる」

A「演じるというよりは、役が染み入るという感じ」

早樫「演じることを求められると、得手不得手とか苦手意識、羞恥心が生まれる」

G「造形法は、ただ置かれたままでじっとしていたらいいという教示だから、役割を引き受けたものも簡単とも言える」

A「ロールプレイだと、どれぐらい自分のキャラが役割にはいつているのかなあと考えながら進めているという感じがある。造形法はじっとしていて染み込んでくるものに集中していくということで入りやすかった」

○難しさ…

E「5年ぐらいになるかなあと思うが、馴染むのに苦労した。頭で考えるタイプなので。演じないといけないと受け止めて、役に入りにくくって。その中で、からだを感じるということを徐々に学んでいったように思う。また、ほかの人のフィードバックを聴くと、自分の感じ方の幅が

広がっていった。最初は苦も無くできたのではなくて、自分の中の感性をゆっくりと育てていったという感じ。わからないという感じが最初にあったが、反発はなかった。ある時、DVの加害者役をやったことがある。やる前に頭で考えていた時は絶対に共感できないと思っていた。しかし、造形として体験してみると、誰も自分のことをわかってくれない悲しみを感じたという印象的な出来事があり、しばらく、貴重な体験として持ち続けたことがある。それから、自分の感じ方が一面的なものから多面的なものへと変わっていったような気がしている。この研修で育てられた感がある」

G「そういう意味では、造形法を体験することによって、実生活ではまったく共感できない人がわかるようになる。造形法で想像もできなかった人の役割を担ったことがあったが、やってみるとよくわかる！といった衝撃的な出来事もあった。そういう意味では、他者理解に対して、許容度が広がると言えるかもしれない。共感度が増えるといった方がよいかもしれない」

○家族造形法は共感のトレーニング

F「共感のトレーニングの場合だった。からだから共感していくという訓練だった。そもそも、頭の人だから、最初は変に考え込んでしまって、その役割で置かれてしまった時でも、自分の感じたことで話していいか、それとも役割になった自分として話したらいいのか等、戸惑いがあった。ケースを提出した場合でも、役割

を引き受けた人は一生懸命言ってくれているのだが、好き勝手に言われているといった受け止めをしたりして、抵抗の人だったと思う。抵抗が強かった。頭で考えてしまって、みんなが好きに言っているだけという感じしかなかった」

G「好きに言ったらいい！という感じがある」

F「後になって、造形法がわかってくれば、好きにいってもらった方がケースのためにもなるということも段々わかってきた。どこで、変わってきたのかはわからないが…」

G「そういう風に考える人は、正しい答えがあると思っているのではないか」

F「そうだと思う。ここで、ケースを出すのは、自分の感じ方や見方の幅が広がればと思っている。一つのところしか見えていなかったのが、他のところが見えたり、感じたりできることで、自分自身が広がっていけるから、面接の中でもいろんな角度から見えるようになってきた」

G「実際に、正しい答えなんかない」

F「ここで、何度かケースを出してきたが、不思議なことに、造形を通してみなさんが感じたことがあてはまることがある」

G「一人だけで想像するよりは、チームとして、みんなで広げることが非常に大きい」

F「今回提出したケースでも、提出前に感じていた父親像と提出することによって変化した父親像があり、それは、実際の面接でも変化があった。造形法による事例検討を通して、見方と感じ方が広がる。共感の幅が広がる」

○改めて、特徴は…

G「非常に便利なのは、忙しい援助者にとっては、準備がいらないというのは大きい。ケースレポートをしようと思えば、記録を読み返し、文章化しないといけない。造形法は準備は不要だし、それに比べて、得るものは多い。提出者の負担がないし、みんなが参加できるし、すごく面白い。一方、これまでいろいろなところで使う中で、難しいと思うのは、女性相談、DV問題の場合、担当者が混乱することがある。女性の視点に立って、家族全体を考えるという枠組みがあるので、造形法の場合、夫の気持ちがわかってしまったりというようなことになると、何のために、どの立場から支援するのかといった面から、混乱を感じることもある。そこで、説明するのは、全体の立場、それぞれの立場から考えてみた上で、もう一度、その女性の立場に戻って考えてみることの大事さである。とは言っても、みんなの気持ちが分かりすぎると混乱するようだ」

早樫「対人援助マガジンで紹介しているが、造形法の説明については？」

C「この研修の前に、マガジンを読んでいたもので、こういうことを感じればいいのだなあというイメージはあった。特に、抵抗はなかった」

G「役に入っていて感じるのが、自分自身の固有の反応かどうかと思うことがあるだろうが、それよりも、その人自身の共感性とか感受性とかが大きいかなと思う。援助職者で造形法を実施すると、

それなりに共感性があるのでやりやすい。それでも、個々の感度がある」

早樫「その通りで、その場がうまくいくかどうかは、役割を引き受けてくれた人の感度によるところが大きい」

G「個人的要因というよりは、その人の感性、感度は大きい」

E「講演をしていて感じるのは、うまくいく時はその場の空気をよく読んでいるとか、聴衆を引っ張るとか、空気感を読む力かなあと思う。自分なりに、その力は付いてきたと思う。造形法の時に、役割を与えられて、置かれて、その人物にどこから入るか、進めるかというもの、その場の空気を読むということからかなあと思う。造形法とはこういうものと教えられなかったからよかった。自分が感じるのが苦手なところも含めて、少しずつ、開いていったような感じがしている」

○家族造形法の持つ新たな一面

早樫「援助者にとってのトレーニングというのは改めてよくわかった。その人なりに援助者として、開かれていく、磨かれていく上でのツールとしての位置づけとすることを強く感じた」

G「感受性のトレーニングとしては、かなり効率はいいと思う。自分がこれまで理解したことのないような人について、造形法を通して理解できるのだから…」

早樫「事例検討を通しながら、援助者、参加者の感受性訓練をしているということやね」

G「それから、視点を広げるとか、いろん

な視野から家族を眺めてみることの大切さなどを体感的に味わうことができる。

個人臨床がメインであれば、家族をシステムとして見る訓練にもなる。家族を視野にいれてシステムとして考えてみると、一対一で出会っている時には見えなかったこと、感じなかったことが出てくる。また、援助者も含めた造形によって、家族にとって、援助者が及ぼしている影響も見えやすくなる」

B「そもそも支援者のためのプログラムですか？」

早樫「元々は、家族療法の相談場面で生まれ、相談家族に対して用いられた技法。特徴は視覚的、体験的、非言語的なコミュニケーションに焦点をあてている点など。私自身は、事例検討としてアレンジして使ったり、援助者自身の自己覚知のプログラムの中で、団先生とやっている」

○「家族造形法の面白さと難しさ」をふりかえって

急に、座談会をお願いしたにもかかわらず、みなさん、積極的に発言していただきました。

限られた時間の中で、事例検討法としての家族造形法の面白さや難しさについて、とても率直で新鮮なお話が伺うことができ、興味深い座談会となりました。

ありがとうございました。

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

⑥ マスコミとのつきあい

村本 邦子

ごく最近、久し振りに TV 番組への撮影協力をした。現在では、よほど真面目に準備して制作しているもの以外は、まず断ることにしている。忙しいというものもあるが、それによって出ていくものと、入ってくるものを考慮すると、それがいちばん懸命であると学んできたからだ。今回は、虐待をテーマにする NHK の番組だったが、制作担当の方がとても熱心に勉強されており、ずいぶん前に番組作成への助言をした。最近、送られてきた番組の DVD を見る限り、言ったことを理解しようと努力して作成してくれたことが伝わってきたからだ。

当日の打ち合わせでは、関係者の理解度に濃淡はあったが、おもに性的虐待をめぐる時代の変化を痛感すると同時に、時代の変わりなさをも痛感することになった。まずは、変化の方だが、今回の番組では、

取り上げられた虐待サバイバー3 人全員が性的虐待を含んでいた。以前であれば、性的虐待はタブー視され、避けられていたことだろう。3 人中 1 人でも取り上げられたら上出来だった。時代の変わりなさの方は、「家庭内に性的虐待が存在するなんて」という今更ながらの声だ。「もう 20 年も前から、このことについては情報発信してきたし、NHK にも何度か撮影協力してきましたよ!」と言ったが、番組製作にあたって先輩から後輩への受け継ぎはなされていないらしい。

振り返ってみれば、マスコミとのつきあいは案外あった。積極的に宣伝したことはなかったが、何となく話題性があったのか、時々、マイナーに取り上げてもらっては、そこから関係を広げてきた（基本的に、い

つも時代を先に行きすぎて、なかなか理解してもらえないという感じを持ってきたが、今では、時代は後から連いてくると言うことにしている)。初期の頃におつきあいしてきたマスコミ関係者は、女性の生き方に関心を持つ若い女性たちと、子どもの問題に関心を持つ若い男性たちだった。同じ目線で、長い間、親しくしていたように思うが、たぶん、業界では一定の年齢を超えると管理職ポジションになるからだろう、今は多くが現場を離れ、違うことをしている。

開設当初、女たちが子連れで心理支援をする研究所を立ち上げましたよという紹介が続いた後、1992年に発行した年報2号(性的虐待の特集号)が全国各地の新聞で広く紹介され、通信物を中心にしていたFLCネットワークにつながってくれた市民や専門家たちが結構あった。これは、NPO 法人FLC安心とつながりのコミュニティづくりネットワークに引き継がれ、今なお会員でいてくれる人もある。また、この頃、力を入れていた虐待防止教育は新聞やTVで紹介され、CAP養成講座の前身となった。

この時期に発表した「女性3人に1人が性被害経験あり」という調査については、新聞やラジオで何度も報じられた。とくに、写真入りで大きく掲載されたひとつの記事については、思い出すと面白いエピソードがいくつかある。その1。この時、関西で某学会が開催されたが、人が集まらないので、一部を市民に開放して宣伝したいということで、誰か紹介して欲しいと頼まれた。親切心から紹介して、新聞紙上に学会の告知をしてもらったのだが、この記者さんが私の報告を聞きに来て、記事にしてくれた。

ところが、なんとびっくり、このことで、私は、後々、「売名行為」と非難されることになった。当時の私は、とても不愉快に思い、腹を立てていたが、年を取った今なら、日本の学会で期待される行動様式とともに理解できる。たぶん、あの頃は、理解できなくて良かったのだろう。若いうちから、いろんなことがわかりすぎると、臆病になってしまうものだ。

その2。どうやら、この時の私の顔写真は、「闘う女」のイメージだったらしい。今、思い出しても愉快で笑えるが、この写真を見た知り合いたちがひどくショックを受けた。身近な仲間たちには笑われ、若い男性たちには、「村本さん、どうしてこんなふうになってしまったの!？」と嘆かれ、先輩女性には、「予めちゃんと良い写真を撮っておいて、それを提供しなきゃダメよ」とたしなめられた。彼女自身はフィルム1本使って自分の写真を撮り、一番映りの良いものを取材の際に使ってもらっているのだという。へえ！ところが、自分では、その写真を見ても、さほど違和感はなかったし、試しに夫や子どもたちに聞いてみたが、当たり前のように、いつもの私だと言われた。私は当時、家で闘っていたのだろうか。ちなみに、最近、外向けの写真に関する家族のコメントは老けているというもの。このギャップは、いったい何を意味するのやら!?

その3。この記事を見て、立て続けに数人のサバイバーたちが来てくれた。なかには、「この話は決して誰にも言わず、墓場まで持っていくつもりだった。でも、この記事を見て、時代は変わったんだ、今はこの問題に取り組んでくれている人たちがいる

んだ、自分だけではなかったのだと勇気づけられた。一度、会って話したいと思って来た」と言う年輩の方々がいた。この声は、きっと氷山の一角だろう。直接、反応を知ることができなくても、報じられることで、隠れた被害者たちに密かな応援のメッセージを送ることができるのだというのは大きな発見だった。これは、パワフルなコミュニティ介入のひとつだと思う。もちろん、逆効果もしかり。

その 4。後に弁護団に加わることになる『蘇る魂』（高文研）の穂積純さんもその 1 人だった。ちょうど、弁護団に臨床心理士が必要だから探すようにと言われて探していた時、彼女はこの記事を見た。とくに写真を見て、「この人なら信頼できるかもしれない」と、思い切ってコンタクトする決意を固めたそうだ。何がどんなふう to 作用するかわからない。いずれにしても、この記事がなかったらこの出会いはなかったということがある。それは単なる偶然ではなく、ある程度まで報道の設定によるので、最初にした「出ていくものと入ってくるもの」のバランスを予測して選択する方が良いと思う。

その 5。最後のエピソードは、この記事に限らないが、マスコミは一見、科学的に見えるデータに弱いという話だ。この時のデータは、若い女性の性行動に関する調査に付加したスチューデント・サンプルの単純な数値にすぎなかったが、「3 人に 1 人」となるとマスコミは飛びついてくる。それは驚きでもあり、怖ろしくもあった。私は、これを「数字のマジック」と呼んでいる。学生時代、私は統計が大嫌いだった。当時は、臨床心理学の研究法は統計というのが

お決まりで、誰も統計など信じていないのに、あたかもそれが世渡り術のように語られることに強く反発していた（これも、年を取った今となつては、日本における臨床心理学の歴史とともに、了解可能である）。この時初めて、統計調査は、社会啓発の手段として、とても有効なものなのだと知った。後に、社会学者の石川義之先生と本邦初のランダム・サンプリングによる大規模な性被害調査をすることになったのも、この学びゆえである。そして、この調査を通じて、私は、コミュニティ支援という重要なテーマに行き着くことになる。

それから、子育てや家族関係についての雑誌記事。夫婦関係では「セックスレスカップル」が話題になっていた。あの頃は、妻の側が理由のセックスレスが話題だったが、最近では、夫の側が理由のセックスレスの方が耳に入ってくる。ちなみに、日本家族計画協会の調査によれば、セックスレスカップルは増加する一方、2010 年には 4 割を越えたというから驚きだ。もはや話題に上らないほど普通のことなのかもしれない。そして、父娘関係と母娘関係。多くのライターや編集者と関わったが、ここには、とても優秀な人たち（女性の方が多かった）がいた。人の話をスポンジが水を吸うようにそのまま吸収して、新たな形で語り出すのは新鮮だったし、優秀な編集者が木の中の仏を見るようにエッセンスを掘り出していくのには感心させられた。ただし、TV の編集は事前に確認できないうえ、どうにでも編集可能なので要注意だ。

そして、新聞の連載。94 年 3 月～95 年 9

月にかけて読売に連載したリレーエッセイ「女から吹く風」(全8回)や、97年7月～10月の「子育て最前線」(全17回)など。中村(正)さんを最初に知ったのは、このコーナーでご一緒したことからだったような気がする。その他、ちょっとした雑誌や公的機関のニュースなどにもエッセイを書く機会があった。赤ちゃん和妈妈社には、「お母さんのカウンセリングルーム」(『赤ちゃん和妈妈1・2・3歳』、1998年～2000年)、「ママのホットステーション」(『赤ちゃん和妈妈』2000年～2004年)と、長年にわたって毎月書いていた。これらは、伝えたいことを一般の人にわかりやすく語る訓練になったと思うし、コンパクトなので、印刷して配ると、講座の資料に使えた。

時々、カウンセリングの情報が女性雑誌に紹介されることもあったが、女性雑誌を見てカウンセリングに来るケースは、あまりカウンセリングに向かない層で、継続しない傾向があった。もちろん、継続するばかりが能でなく、シングルセッションで十分に有効な援助は可能だが、要するに手応えを感じられない層という意味である。他方、著書等を読んで訪れる層は、内容的にフィットするため、カウンセリングにつながりやすい。もっとも、最近ではネット検索で訪れる層が急増し、そもそも間口が広がっているのも、一概に言えないかもしれない。

母娘に関しては、今なおコンスタントに女性週刊誌から取材の依頼があるように思うが、今は引きうけておらず、2000年代に入ると、幼児から小学生をターゲットとし、男性をも巻き込んだ子育て雑誌が登場し、

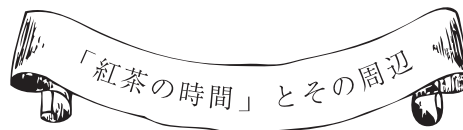
執筆や取材の依頼も増えたが、他のスタッフに回すようにしている。今さら私が言うべきことはないような気がするし、これらがどのような効果をもたらしているのか、手応えを感じたことがないのだ。それから、ポップサイコロジーのジャンルに入るようなテーマの雑誌やTVの依頼。時間に余裕があった頃は、ちょっと面白くて、気が向いたら引きうけていたこともあるが、今はやめた。一貫して断ってきたのは、その場限りの事件のコメント(事件の背後にあるテーマを追った特集は別)。これはまったく無意味だし、無責任だと思う。思い入れのあるテーマを追ったものであっても、担当者が勉強していない場合も断る。なぜ、いちいち時間を割いて初歩的なことをレクチャーしなければならないのか腹が立つてくるからだ。

そんなわけで、最近ではマスコミとのつき合いはめっきり減った。時代の変化もある。かつては、もっとも手堅いクチコミを除けば、マスコミがある意味で社会につながる窓口であったものが、これだけ情報が大衆化されると、必ずしもマスコミを介さなくても情報発信は十分に可能になった。2002年以降は、研究所のホームページを充実させて、さまざまな角度から情報発信している。ネット上に立ちあがる世界は、意外なことに関係者のコミュニティを形成する。ごく小さな例外を除いて、一方的な情報発信が中心であるが、ここに人が集ってくる。ネットを通じて私たちのことを知ってアクセスしてくれる人々もいれば、しばらくそこでじっと観察を続け、少しずつ接近してくる人々もいる。カウンセリングを

終了した人々が、私たちが相変わらず存在していることを確認しては、安心の基盤としている場合もある。講師活動で全国に赴くが、エッセイやブログを通じて、つながり続けている人々もいる。最近では、ツイッターやフェイスブックが主流になりつつあるが、個人的には、今のところ、これ以上、手を出さないことにしている。

マスコミに入るかどうかかわからないが、このところまったくできなくなってしまったのが自分自身の本を書くこと。書きたいことはいろいろあるが、今の生活をしている限り、どう考えても無理だ。やりたいのにできないと思っているとストレスなので、潔くあきらめて、また、その時が来たらと考えることにした。いずれにしても、もう十年一生懸命働いたら、半分引退して自分のことをしようと考えている。そこから十年は、せっせと書くのだ。マスコミとのつきあいは、情報をめぐる時代の変化と自分のライフスタイルによって選択していかざるを得ない。拒否するでなく、振り回されるでなく、賢明におつきあいしていきたいものである。

きもちは、 言葉を さがしている



第 5 話

水野 スウ

奇跡みたいな日常

「紅茶の時間」から生まれたコミュニケーションの学び、「ともの時間」の練習風景を、マガジンでこれまで何回か綴ってきた。前ははその話をお休みして、チェルノブイリ後の「紅茶」で語りあわれたこと、20 数年前から発行してるミニコミ「いのちの未来に原発はいらない通信」のこと、原発に関心を持ち出してからの私の内なる変化や、3.11 後の今現在、私が思ってること、などについて書いた。

今回の出来事は、8,000 キロのへだたりと距離感があった25 年前とは違い、日本中がある意味、現地となり、すべての人が、多かれ少なかれヒバクの当事者になってしまった、ということなんだろうと思う。

地震と津波と原発震災のあとの、まだ早い段階で強く感じていたのは、それまでの何気ない日々のいとなみ——その多くが、水と土と空気に依って立つところの——や、いつもそばにいることを

当たり前と思っていたひとの存在、そして、今度いついつ会おうね、と約束して、その約束通りにまた誰かと会える、ということ、などがほんとはどれも奇跡に近い、すごいことだったんだ、ということ。

それまでも私なりに大切にしてきたつもりの「一期一会」の意味が、格段に深くなり、貴重になった。はじめてのひとと不思議なご縁で逢えた時、または懐かしいひとと再会をはたせた時、別れぎわに思わず、何かもうひとこと言わずにおれなくなった。次に会ったとき言えばいいや、的なきもちの伝え残しはなるべくせずにおこう、遠くのひととも、一番身近なひととも。

そんな風に思っている私の日々は、きっと前よりも少し密度が濃い。そしていっそう、きもちを伝えること、伝えあうことが大事、って感じている。そのためのささやかな練習の場を続けていくことも、前以上に、大切な意味がある、と思えている。

きもちを仲間に

東京の、不思議なレストラン、ことクッキングハウスでのSSTに私がたびたび参加していたことと、わが家に集う仲間たちの間で、コミュニケーションを学びたい、という声がいくつかあがったこと、それが7年前の「ともの時間」の出発だった。

SSTの中でもとりわけ大事な、相手の等身大を認めることやほめること。そのひとの今できていることを、具体的にシンプルに、きもちを添えて伝える、ということ。たったこれだけのことで、ともの時間のみんな、慣れない最初のうちはすごくむずかしかった。家族ときもちのいいコミュニケーションをかわせるようになりたくて集まってきたにもかかわらず、そんな言葉を仲間うちで言うのも言われるのも、照れくさくて、はずかしくて、ぎこちなかった。

クッキングハウスの練習風景を何度も見てきて、スタッフからメンバーさんへ、またはメンバー同士、あんな自然にちいさなほめ言葉がいきかうのは、慣れももちろんあるだろうけど、それ以上に、声かけする言葉のハードルを世間にあわせてないこと、相手を実によく見ていて、その人のいいところや今できているところを見逃さないこと、そこがポイントなんだ、って、ともの仲間たちのリアクションを見ながら、逆に実感した。

スタートはそんなだったけど回を重ねるうち、とものメンバーたちもだんだんと仲間への言葉かけが自然にできるようになっていく。

「そんなつらいことがあったんだ。長いことよくよくがんばってきたね」

「仲間になってくれてありがとう」

「ここで逢えて、うれしい」

「今日、すごくいい笑顔だよ」

「あなたの今の言葉で気づかされた。いいヒントもらえた、ありがと！」

といった風に。ひとの話をよく聴くことと、自分のきもちを表現することを、毎回のともの時間の練習で、仲間たちは少しずつ身につけていったように思う。

いいところ見つけはむずかしい

そうやって仲間うちでは言えるようになって、次にそれを家族に返していく段になるとまたまた、むずかしかった。

「この前、ともの時間から帰ってさっそく息子をほめてみたんだけど、何だよ、わざとらしい、とってつけたみたいだ、って言われちゃって……」と翌月、報告するお母さんのへこんだ様子に、みんな大笑い。今までおよそそんなこと口にしてこなかった分、言葉から態度から、もろ、借り物なのが息子さんにバレバレだった、というあたり、とても他人ごととは思えなくて、みんなで笑っちゃったのだった。

「だけどトライしたことはすごいよ、これまで自分がしてこなかったことにチャレンジしたんだもん。はじめてだからうまく行かなくて当たり前、だからここで練習してるんだし」と、私。

もう十分に大人の、しかもそれぞれに悩みや苦しみをかかえて足踏みしてる息子なり娘なりを「ほめる」って、それはそれはむずかしいに決まっている。そもそも、なにをほめるか、相手のどこを見るか、息子／娘、または家族の誰かの、今できてるいいところ、って何か。

ともの仲間たちに最初のうち共通していたのは、ほめる＝いいところをほめる、いいところ＝人よりできる、すごい、がんばっているところ、というのが、誰かをほめる時の尺度だったこと。英語のdo とbe というなら、相手のdo を見つけよう見つけよう、としていたことだ。

その目でみると、つい、世間一般や同じ年代のほかの子たちと比べたくなる。または、その子がしんどくなる前の、親の目から見ればいいとこいっぱい輝いていたようにみえる、高校時代や会社で働いていたころと現在を比べて、あのころはできることがあんなにいっぱいあったのに、今のあの子は、あれもできない、これもできない、と思いたくなってしまう。

たまたまそんなきもちの時、とりわけつらい体験をしたとも仲間の誰かが、「でもさ、いま息子

さんが生きてるってことが、もう十分にすごいことじゃない?」「そうそう、現に死なないでいてくれるって、相当にがんばってることだと思うなあ」などと言ってくれることで、世間的いいことの評価から、本質のいいこと——いのちがある、いる、be、存在していることへと、ほんの少し、子どもの見方を変えられる。少なくとも、ともの仲間という間だけでも。

やがて、「そういえば……」と前置きつきで、この前、あの子こんなこと言ってた、こんなことしてくれた、と、少しずつ見つけはじめる。見ようとしなければおそらく見えてこなかった、子どものいいところ。相手のきもちをわかりたい、とこちらが願わない限り、気づくことのできなかった、その子のやさしさや哀しみや切なさ。

「ほんととは、家族中であの子が一番やさしい、ってわかってきた」

「いつも私を気遣ってくれてる、見ててくれる。家の中に一人でもそんなふうに自分を気にかけてくれる人がいるのを知ってる、ってうれしいことだよ」

「ともの時間に行ってきていいよ、って今日は娘の方から言ってくれた」

「外に出れない時期もあったけど、ほんととはあの子、ひとが好きな子だったんだ」

仲間の前で素直に、自分が見つけたわが子のいいところ＝すてきなところを、こんなふうに教えてくれるお母さんたちの顔は、どの顔もとってもいい表情だ。

見つけるのも伝えるのも、練習が必要

いつも思うけど、人のいやなところや気になるところは、どうしてこんなにたやすくいっぱい見つけられるんだろう。いいところは、その人に関心や愛情を持たないと、そしてよく見ないと、なかなか見つけられない。

とりわけこれまでdoの部分しか見てこなかった人には、beを含む、ちいさないいいところ見つけの感を磨く必要もあるみたいだ。その分、見つけられた時はそのうれしさが自分に還ってきて、それ

をともの仲間たちに話す時、いい顔になるのだと思う。

そうやってわが子のいいところを発見しても、今度はさあ、どうやって伝えよう。さりげなく、何気なく、自然に。ともの時間ではその練習もした。自分で言ってみてどんなふうに聞こえたか、仲間たちにコメントしてもらおう。時には、自分が息子役、娘役をしてみて、どう言われたらうれしいか、心に響くか、それともわざとらしくなかったか、それも体験してみればじめて気づくことだった。

あるお母さんがこんな話を聞かせてくれた。
——いいところ見つけのコツ、みたいのとはなんとなくわかってきたんだけど、家で実践しようとするといつもタイミングをはずしちゃう。娘が部屋を出てった後で、あ、今あれを言えばよかったんだ、このことも言えたのに、って何度も失敗。

でも失敗したら余計に、次は言うぞ、言いたい、きつと言う！って思えてね、ついに言えた時、うれしかったあ。今思えば、全然なんてことない言葉なんだよ。「あら、うれしい、お茶入れてくれたのね、ちょうど飲みたかった、ありがとう」とか、「針目が、前よりずいぶんていねいに揃ってきたね、とてもきれい」とか。

ごくちいさなことでいいんだよね、見つけたら、思ったら、そのまま言えばいいだけってわかってきた。こんなに簡単なことなんだけど、いいところ見つけるにも、伝えるにも、けっこう練習が必要だったんだね。

そうそう、こういったちいさな試みが、段階を踏んで、それぞれのおうちで活かされていくのを、その後何度も聞かせてもらった。はじめのうちは、いいところ見つけるのとそれを伝えるまでにだいぶ時差があったけど、慣れてきたらどんどんその差が縮まってきた、というあたりも楽しい。

そのころからもう数年たって、先のお母さん、今はとくに意識もせず、娘さんの等身大を認める言葉を贈り、娘さんもお母さんの前でとてもリラックスしているらしい。娘さんが、お母さんのいいところを見つけて言ってくれる時もある。たわいもない話に親子でもりあがって、大声あげて

笑いあう時間もいっぱいふえたそうだ。

チャンス逃さない

普段は部屋にこもっている息子さんが、ある時めずらしく下に降りて来て、お母さんとなにげない茶飲み話をいっぱいして、また自分の部屋にあっていったという。

「あとで時計見てびっくり。2時間もしゃべってたの！あの子のほうからほそほそ話したので、横どりしない、邪魔しない、指示しない、まっすぐに聴こう、って自分に言い聞かせて、うん、うん、って聴いていたらそんなに時間がたった。すっごく平和で、いい時間やった、ここで聴く練習してきたおかげやわ～」

とうれしそうにとも仲間たちに話してくれた。こういう「うれしい」をみんなで分けあえる時間もまた、いい。

「よかったねえ～、そりゃ貴重な時間だったね。で、息子さんが席を立った時、なんか言ったの？」

「え？……あ！忘れてた！うれしすぎて、言うの忘れてた、う～ん残念！」

ここでまた、みんな大笑い。ありがとうを言うチャンス逃さないようにしようね、ととも時間でよく言いあってるけど、日ごろ言っていないとやっぱりとっさには出てこないものなんだ。

一緒に笑った後で、このお母さんがしみじみ言った言葉が印象的だった。「家族間で、こんな場面に、ありがとうとか、なにか言うとか、そのきもちを言葉にする、って発想が、そもそもうちにはなかったんだね」、と。

仲間たちに話さずにおれないくらいうれしいことがあった時、そんなきもちにさせてくれた当のご本人に、そのうれしさを伝えられたらいいよね。そんな場面、ひょっとしてまたあるかもしれないから、ちょっとやってみようよ、とその場でさっそく練習してみる。

次に同じようなことがあった時、何て言いたい？

「あんたにしちゃめずらしい、今日はいっぱい話したね、っていうかな」

そっか……でもそれってちょっといやみっぽい

かも。前の部分は無しにして、ただ素直にわたしメッセージで言ったらどうかなあ、と仲間からつつこみがはいる。

よくあるよくある。普段めったにしないことを家族の誰かがしてくれた時、内心うれしいのに、なぜか口をついて出てくる言葉は逆のことが多い。「へえ～めずらしい、雪降るんじゃない？」とか、ちょっとしたことをほめた時に「別に何も出ないからね」とか。

ため 体で験すること

そんなことによるこぶほどお人好しじゃないよ。そのくらいのほめ言葉、真に受けてうれしがったりしないから。それは照れ隠しだったり、あるいはそうやって自分を守ってきたのかもしれないけど、少なくともきもち見せあう仲間の前では、きもち交わしたいと思ってる家族の前では、もっとシンプルでいいんじゃないかと思う。そして、そういうややこしいコミュニケーションが身につけるひとは、それをシンプルにしていくにも、またまた練習がいる。

「あら、もうこんな時間、いっぱい話したね」

「いろいろ聞かせてくれてありがとね」

「いい時間だった、また話そうね」

いくつか出された言葉を自分から、息子役をしてる何人かに言ってみる。おおげさでなく、さりげなく、でも本当のきもちを添えて。

練習の中で自分の口から出た言葉が、自分にとってもし心地よかったら、その心地よさをからだのどこかは覚えていて、ある日、日常のどこかでふいに言えちゃうことってけっこうあるものだ。実際に言ってみて体験するのと、こう言えればいいんだな、って頭だけで理解することとは、確かに違う。体で験^{ため}したことって、かなり後まで残っている。

とも時間でよくする、最近の「ちいさなうれしい」を話す／聴くをしていた時、「息子が、今日は飯いらない、ってめずらしく外から電話をくれたこと」というのがあった。言われたお母さん

は、その電話がうれしかったのに、返したのはいつもどおりの「あ、そ。じゃ気をつけてね」だった。

そうか、この時も、「連絡くれてありがと」って言えたんだ。考えてみたら、こんな場合にありがとと言うなんて、これまで思いつきもしなかった。あの子ともっと話したい、といつも思ってるのに、こんなとこが抜けてたんだね。そう気づいたこのお母さん、それからはずいぶん、ちいさな「ありがとう」を言うことがふえたそうだ。

ありがとうを言う発想のなかった人が、ありがとを言う。これまで出してこなかったうれしいきもちを、少しずつだけど、今は言葉や表情で外に出している。たったこれだけのことなのに、家族の中で何かが変わってくる。現にこのお母さんと息子さんの会話が、前とは少し違ってきたとうれしそうに話してくれた。

家族って、必ずしも連帯してなくても、連動している有機体だ。ぴりぴりしていた家の空気が誰かのありがとで、ほんのすこしやわらかくなることだってきつとある。ともの仲間たちは、家族間のささやかな変化やいいとこ見つけをするのが、そして、ありがとうを言うチャンスをつかむことも、ゆっくりゆっくり、本当に上手になった。

ありがとうのリレー

心の病気のご家族を持つ方たちのところへ、コミュニケーション・ワークショップの出前に何回か連続でうかがった。出前先ではいつも、毎月のともの時間でしているようなことを順を追ってしてみる。仲間たちが実践して気づいていったことが、ほんのちょっとでもみなさんのヒントになればいいなと思いながら。

ある時、お子さんが言ったことやしてくれたことで、何かうれしかったことってありますか、ちいさなことでいいので、思い出して書いてみてください、とお願いしてみた。書いたことをそれぞれ発表した後で、今度はそれを自分のせりふにして、最後に「～ありがとう」で終わる文章に書き換えてもらう。

あえてこんなめんどくさいことをするのは、何

か具体的な場面がイメージされていないと、せっかくのありがとが、単なる記号になってしまう場合もあるからだ。ましてその日は、お年を召した方が多くて、ワークショップにもなれていない様子、手順をはしらないでいていいにしたい方がいいと思ったのだった。

みなさんが書いてくださったのは、お子さんへの、いわばちいさなラブレター。いったん集めて、シャッフルして、それから束にして、こうお願いした。どなたか何人か、前にでて、この紙に書いてあること、私と一緒に一枚ずつ読んでいただけませんか。

はい！と一番に手をあげたのは、前回は参加してくださった70歳くらいの男性の方。最初は気難しい顔してらしたのが、前回の終わりごろには表情も柔らかくなって、コミュニケーションの時間を楽しんでくださっていたのがわかる、その変化が印象的な方だった。

前に出た4人で順番に、ここにいる誰かが書いた、わが子に贈る言葉を読んでいく「ありがとうのリレー」。何巡かしてまたその方の読む番が来た時に、あ、と小さく声をあげて、こう言われた。

「自分の書いたのが来ちゃいました、どうしましょう」

「そうですか、もしもお差し支えないようでしたら、ご自分で読まれます？」

はい、とおっしゃってその方が読みはじめた。昼夜逆転の息子さんにむけての言葉だった。

「このごろ時どき、お父さんのことを気遣って、眠らせてくれることがあるよね。お父さんはそのことに気がついていよ——ありがとう」

最後のありがとう、に行きつく前に、その方は涙ぐみ、言葉につまり……。それは、とってもやさしいありがとうだった。あたたかいものが胸に満ちてきて、私までなんだか泣きそうだった。その部屋ぜんたいが、参加してるひとたちからのあたたかなため息で、やさしい空間になった。

この日参加されたみなさんの書いた言葉が、直接、相手に伝えられる、その可能性はもしかしたら少ないかもしれない。ありがとう、を言い慣れていない家族の間では、ありがとう自体が、ハードルの高い言葉なのだろうから。

だけど、こういったありがとうのきもちが自分の中にある、とご自身が気づくこと、それを一回でもこうやってみんなの前で外に出したこと、それだけでもすごいことじゃないか、と私には思えたのだった。

キルト「ちきゅう」

さて、話は変わって。



ここにある一枚のまあいいキルト、名前は「ちきゅう」。ミチコさんという「紅茶の時間」仲間の一人が今から22年前に縫ったキルトだ。

彼女と私は、原発のおかげで出逢った。チェルノブイリ後の紅茶の時間では、おさな子を抱えたお母さんたちが毎週集まってきて、原発や放射能の話をつづいて聞いていた。以前から原発に強い危機感を抱きながら、でもそんな話のできる場ってどこにもないしなあ、と思っていたミチコさんが、ひとつづてに紅茶のことを聞き、文字通りずっと来て、仲間になったのだった。

針と糸の得意なミチコさんならではの発案で、キルトでも原発に意思表示できるよ、「かざぐるまフレンドシップキルト」づくりにあなたも参加しませんか、と紅茶から出している通信でよびかけた。20センチ角の布に、一人一人が原発や核に対するメッセージを縫い込み、それを4人分縫い合わせると、その合わせ目が4枚羽根のかざぐるま

になる。そうやって100人分をつないだたて横2メートルのおおきなフレンドシップキルトは、最終的には1万人以上のひとが参加して、80年代の脱原発の、知るひとぞ知る、ささやかなムーブメントになった。

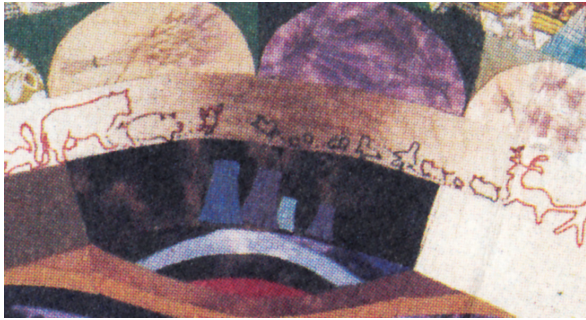
当時の空気は今とだいぶ違って、原発に異を唱えるのは一部のとくべつなひとたち、といった見方が普通だった。それだけに、キルトでも原発にNOって言えるんだ！というあたらしい発想からずいぶん勇気をもらえたとし、また実際にキルトとキルトをつなげる、という細かい手作業をとおして、私たちは日本各地のひと、とくに女性たちと、エールや情報や連帯感をいっぱい共有しあったのだった。

1枚目のフレンドシップキルトが出来あがってほどなく、ミチコさんは「ちきゅう」をつくりはじめた。

太陽にもマグマにも羅針盤にもみえる真っ赤な輝きを中心に、写真ではおそらくはっきり見えないだろうけれど、その外側が幾重もの輪になっている。魚たちの輪、連なる波のうねりの輪。地球46億年の「せいめいのれきし」の輪は、さながらバージニア・リー・バートの絵本のキルト版だ。

地球上のいきものたちがひと筆書きのように手をつないでいる「いのちの輪」。その次の輪は、四季の草花、それから山の本々。キルトのてっぺんの、午前0時、3月、北の空からはじまる一年の暦、12ヶ月のものがたり、めぐる星座、そして地球をふくむ太陽系の惑星たち。

私たちの星はこのおおきな宇宙の中にあって、いのちの輪で描かれているように、ひとと動物も虫も草花たちも、すべてのいのちとつながって、支えられ、助けあって生きている。だけどよく目をこらせば、「せいめいのれきし」の最終章に出現する人間が歩いて行くその先に、原子力発電所があり、そこで爆発がおき、放射能が飛び散ってしまったせいで、いのちの輪のつながりの一部分だけ、断ち切られている、ヒト、コドモ、ニワトリ、ブタ、タマゴが……。海の波も魚も、収穫の麦の穂も、放射能の汚染で色が変わっている。



文字も言葉も使わずに、これが、私たちのいま生きているチェルノブイリ後の星なのだと、そしてフクシマ後の星なのだと、まさしく曼荼羅の「ちきゅう」キルトは、見るものにいろいろなことを考えさせ、同時にとても深いメッセージを送ってくれている。

キルトからの贈りもの

もし今年の3.11がなかったなら、「ちきゅう」がこのページに登場することもきっとなかったろう。私自身もだいたい長いこと、原発の問題から遠のいていた。けれどこの春以降、原発のおはなしの出前にまたお声がかかるようになって、4月からはできる範囲であちこち出前に行っている。

その時はいつも、20年前もそうだったように、必ずこの「ちきゅう」をミチコさんから借りて、キルトと一緒に旅をする。原発のこと、言葉だけでなく、感性でも感じ取ってもらいたい、と願う私にとって、「ちきゅう」は昔も今も、大きな助けだ。

今年の春、ミチコさんは、治っていたはずの病が再発して、病院で必死に闘っていた。少しでも調子がいい日は、「今日も院内脱原発運動してるよ、チェルノブイリより後に生まれた若いナースさんや、話せそうなドクター相手にね！」などとメールがくる。私は旅の先々で「ちきゅう」とツーショットを撮っては携帯で写メールを送った。東京から、川越から、京都から、時にはすごく近い金沢から。

そんな5月のある日、ミチコさんは「ちきゅう」を、紅茶の時間に託してくれた。「こんな古いキルトがまた誰かの役にたてる、ってうれしい。しあ

わせ。もうこのキルトは、私だけのものじゃなくて、みんなのもの。だから紅茶に寄贈したいの、受けとってね」と。

その後、前回の「紅茶の時間とその周辺」で書いた原発の話を、団編集長からお許しもらって、そこにさらに文章を書き足し、大急ぎで『いのちの未来と原発と』という小々冊子にまとめた。在庫はたちまちなくなり、次につくる改訂版にはきっと「ちきゅう」を入れるからね、とミチコさんに勝手に約束した6月のその日、彼女は逝ってしまった。

7月末、東京近辺に原発のおはなしの出前に行く前日。私たち親子の作品を扱ってくださっている銀座の画材店さんに、お土産がわりにお持ちしたのが、「ちきゅう」のカラー写真とこの曼荼羅を読み解くものがたり付き、『いのちの未来と原発と』改訂版の冊子だった。背中のリュックの中味はもちろん、本物の「ちきゅう」。



「ちきゅう」を見た若いスタッフから突然、思いがけない言葉が降ってきた。「スウさん、このキルトの前で原発のお話をしてください、ちょうどお盆のころ、うちの画廊があいてるんです！」

え？何を言ってるの？私は目を白黒させた。スタッフさんは本気だった。彼女自身が、あの日以来、原発のこと、これからの生き方のこと、すごく真剣に考えるようになったという。「お店に見えるお客様もです、みなさん、あの日から何か変わってきてらっしゃるように思うのです。考え方というか、方向性とか。だからこそ、ギャラリーでのおはなし会、ぜひしていただきたいのです」と、わたしメッセージで迫ってきた。

大きな深呼吸を何度かして、少し頭を冷やして考えてみると、これって実にものすごい提案だと思った。大切な亡き友のキルトが、東京の銀座でいろんな人に見てもらえる、しかもこの年の、今この時期に。

今号の最初に、「奇跡みたいな日常」と書いたけど、こんなまたとない奇跡はとくに逃してはいけない。よしっ、それなら、ミチコさんの遺した賢治の童話世界のキルトもかざろう。わが家で預かっているかざぐるまフレンドシップキルトも全てかざろう。娘のこれまでの作品も、生まれたてのブックレット『贈りものの言葉』も、私の古い本たちもならべよう。私は「ちきゅう」キルトの前で原発を語り、「よだかの星」のキルトの前で賢治のその童話を読み、ミチコさんのことを語ろう。タイトルは、そうだ、「つながる3人展——紅茶の時間 in 月光荘」だ。

wonder が、いっぱい

そう決めて、出前先から戻って、3人展の搬入の日まで10日しかなかったけれど、まわりの誰もが、そして東京近くの紅茶仲間たちも、びっくりしながらめっちゃめっちゃよろこんで、いっぱい力を貸してくれたおかげで、無事に実現することができた。そして3日間の会期中、思いがけないほどたくさんの方が見にいらして、キルトからのメッセージをそれぞれ受けとってくださった。

その中には、「僕は行けないけれど」と最初言っていた、ミチコさんのおつれあいさんもいらしたのだ。ちょうど新盆でもあるし、そんな時期に泊まりがけで家を空けられないのは常識からすれば、百も承知。だけど、もしももしも見にきていただけたなら、どんなにミチコさんはよろこぶだろう、誰よりも彼に見てもらうのが一番うれしいにきまっているもの、と実は内心ひそかに願ってもしいたので、「行きます」と告げられた時は、私も飛び上がりたいくらいうれしかった。

その東京行きのわけ、について、あとからこんな風に話してくださった。

——これまでの僕は、感情を表に出すってことをあまりしてこなかった。でもミチコは何かうれしいことがあった時、いつもからだ全体で、うれしい！って表現してたでしょ。そのこととね、今回、東京に行こうと決めたことと少し関係がありそうに思うんで、ちょっと聞いてもらってもいいです

か。

ミチコが亡くなってしまった。これは事実。今はまだ全然その実感はないけど、でもこの先、僕はいったいどのように生きて行ったら、ミチコと一緒に生きているという感覚をずっと持ち続けていけるのだろうか、ってことを考えてみたんです。

スウさんと月光荘さんのおかげで、ミチコのキルトが銀座にかざられる。こんな時、ミチコならどうするだろうか。文句無しに、行くに決まっている。そして、あ、そうか、と思った。彼女ならここでどう感じるかな、どう判断するかな、そうやってミチコのきもちになって僕がその行動をとることで、もしかしたら僕の中でミチコを生かし続けていくことができるかもしれない——ふっとそんなふうに思えてきて、僕は行くことにしたんです。

あ、でも誤解しないでくださいね、ミチコがとるだろう行動を僕の規範にする、っていっても、別に自分を無しにするとか、自分を変えようとか、そんなことまったく思ってませんから。

すみませんね、どうも変な話しちゃって。僕の言ってること、わかります？

はい、と私は深くうなずいた。おつれあいのきもちが痛いほど伝わった。わかる気がした。娘の幼いころから、家族ぐるみでつきあってきたミチコさん夫婦。このご夫婦なら、遺された者がそんな風に思うことも、行動することも、とても自然なことに思えた。

その上、こんなことを言うおつれあいだから、なおさらそう思えるのだ。

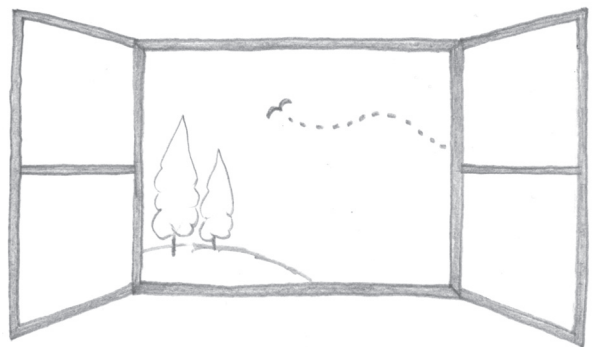
「たくさんの方が、ちきゅうキルトやよだかの星のキルトを見て、すごい！って言ってくださったけど、あのキルトはミチコのdoであって、僕にとっては、それよりもミチコのbeが、まさに存在そのものが、っていつも思っているんです」

人生の日々は、不思議がいっぱいだ。wonderに満ちている。そのwonderには、うれしいことも悲しいこともつらいこともいいこともさみし涙もうれし涙も、いっぱいいっぱい入っている。だからwonder + ful、って思うのだと思う——という

話を、3人展のおはなし会でさせてもらったけど、それを聴いていたミチコさんのおつれあいには、この言葉にすごく共感してくださったようだ。

おつれあいがミチコさんのきもちを想像しながら行動するようになってからというもの、毎日、不思議なことや奇跡みたいなことの連続なのだと言う。これまでは出してこなかったきもちを外に出すことで、今までしてこなかった行動をとることで、きっとこれから先もまだまだ知らない自分を発見していけるのだろう。それはまた、おつれあいの中で生きるミチコさんが見せてくれる、あたらしい世界なのかもしれない。

2011.8.25



やくしまに暮らして

ネイチャーガイド 大野 睦

番外編

ひょんなことから実現した巻末座談会を終え、自身の幼少期からの育った環境を振り返ることになった。

■幼稚園時代

ベビーブームに生まれた私はまず公立の幼稚園に入園出来るかどうか抽選であり、見事にハズレを引いてしまったらしく近くの私立の幼稚園に入園した。その幼稚園で過ごす2年間、私は自閉症児として扱われている。毎日のように送り届けてくれた母に泣きすがり先生にご挨拶の出来ない子供。

今その当時のことを思い出そうとしても本当に記憶にあることなのか、またこんなことがあったんだと聞かされてきたから知っているのかわからないことも多いが、ふたつの出来事が鮮明に記憶に残っている。

幼稚園での2年目つまり年長になってからも朝の「おはようございます」が言えない。ある先生が私を叱り、年少のクラスへと連れてゆく、泣きわめく私、というシーン。それがひとつ目。もうひとつは何のきっかけだったのか突然そのご挨拶「おはようご

ざいます！」を口にする。先生が泣いて喜び抱き締めてくれたこと。

今思い出しても、どうしてそれほどまで嫌だった幼稚園に私は通い続けたのだろう。その記憶はあまり蘇らないので数年前母に聞いたことがある。行きたくなかったら辞めても良いよ、と家族で話し合ったという。それでも私は行くと言ったのだと。母曰く、一人だけ私が心を開いていた先生がいたから楽しいこともあったのではないかと。ただ、母にとっては他の先生方からもいろいろ言われたりして良い思い出のない2年間だったようである。親の心、子知らずで30年後に知った事実。道理で当時の写真がほとんどないわけだ。

■小学生時代

同じ幼稚園から同じ小学校へ入学する友達がいなかった私は、幼稚園時代からの人見知りの激しさをかかえての低学年時代。2年生くらいまでの記憶が殆どない。覚えていることと言えば給食を食べるのがとても遅くて昼休みに外で遊ぶことが出来ず一

人で食べていたこと。3年生くらいから少しずつ楽しかったことが思い出される。ようやく友達が出来てきたのだろうか。卒業する頃にはすっかり今の私から想像出来るような活発でちょっとゴンタな子供になっているが、それまでにはとても寂しい日々があったのである。

■石原先生との出会い

今回、私たち元教え子の願いを叶え座談会に応じてくれた石原先生との出会いは5年生の時。それから2年間石原学級で過ごした私は、小学校の時の思い出のほとんどがその2年間にある。私たちの学校、学年には障害児が複数人いた。石原先生は、その彼らとの付き合いを真正面から私たちに問いかけ、また様々な提案、チャンスを与えてくれた。その度にクラスでは話し合う時間があり、個々の自主性もさながら個性が明確になる。いろんな出来事が今でも鮮明に記憶に残っている。それを先生はドラマ作りをしたかったと云う。確かに、30年近く経った今でも当時のことはドラマの1シーンのようにひとつひとつ思い出される出来事ばかり。障害を持つ同級生と私たちと同じ時間を同じように過ごすためにはどうしたら良いのか。同じクラスの同級生の中には障害を持つ友達と積極的に関わる人もいれば避ける人もいる。そんないろん

な気持ちをぶつけ合って過ごした2年間の中で私は自分の意見をはっきりと言えるようになったと感じている。私は自分の当時の石原先生は今の我々の年齢くらい。今の私が小学生に、またその親に向き合えるだろうか。今回の対談は今の自分にもまた大きな刺激を与えてくれた時間となった。

■小学校を卒業後

記事の中にもあるように中学生になった私たちは同じように過ごして来なかった隣の小学校からの同級生との温度差など環境の変化により葛藤が生まれている。今となってはそれが今の社会の現実なんだと思いき知らされた時なのかもしれない。

長い年月を経て今、当時のことを思い出しながら今私たちが出来ることは何だろうか。それは当時の私たちの思い、先生の思い、それをあらためて問い、知ることであることを多くの人に伝える、ということでした。

ここに対談を提案してくれた同級生の千葉くん、きっかけを与えてくれた鶴谷さん、教え子の無茶ぶりを受けてくれた石原先生に心より感謝いたします。ありがとうございました。

お寺の社会性

— 生臭坊主のつぶやき —



竹中尚文

1. ラスト・リゾート

今年の3月の初めに大阪でイーグルスのコンサートに行った。お気に入りの“ラスト・リゾート”の演奏がなかったのが残念だった。この曲についての思い出は、1980年代の頃だった。当時、院生を対象に研究費支給の募集があった。パキスタンの仏教遺跡を調査したいと希望を出したら採用になった。そんなわけで、パキスタン領のアフガニスタン国境沿いをウロウロした。そこは当時も政情・治安不安定な地域であった。毎日、銃声を耳にしていた。ある日、自分の身体の近くを弾丸が通過する音を初めて聞いた。死ぬかもしれない、と思った。パキスタンのペシャワールの街角でカセットテープを一本買った。アラビア文字で

書かれたイーグルスのヒットアルバム“ホテルカリフォルニア”だった。どのような機械でダビングすれば、こんなに悪い音質になるのだ、と思いながらも持参のウォークマンで聞き入った。このアルバムの中で、特に気に入ったのが“ラスト・リゾート”だった。

曲はロック・バラードである。歌詞はおよそこのような内容である。

彼女は夢を持って旧世界から出てきた。山の中で素朴な人々が微笑んで暮らしている。彼らはそこをパラダイスと呼んで愛した。ある時、金持ちがやってきてその土地を買い占めた。そして繁栄した。カワイイ人たちが戯れ、権力を貪り、金持

ちが土地を買い占め、醜悪な箱を作った。神の子はそれを買ってパラダイスと呼んだ。彼らは主が来ると言い、日曜の朝には、神の名の下にそれをたたえ、パラダイスと呼んだ。どうしてそうなるのか解らない。そんなものには、もう別れを告げよう。

英語の歌詞に対する私の誤解もあるかもしれないが、このような歌詞である。当時、私は打ちのめされたような思いで聴いた。私は何処に行けばいいのか、私は何処に帰ればいいのか分からないと感じていた。一緒に大学を卒業した友人達が結婚をし始めた頃だった。そんな年頃の私は荒涼たる土地に一人で「自分には帰る家がない」と言うようなことを思っていた。「還るところ」と言うのは、多くの宗教が人々に提示しているものである。また、その概念が多くの人々の琴線に触れるのだろう、いくつかの歌詞で **promised land** という語を耳にする。

一方、この“ラスト・リゾート”はキリスト教、と言うより仏教も含めた既存宗教への痛烈な批判であると私は思った。純朴な人々の心を利用する宗教という構図が示されたように思えた。このアルバムのヒットは 1980 年前後だったように思う。これは社会

が宗教や教団を信用しなくなった時代を映しているのかのようである。

この頃から、ある人は無宗教を標榜し、ある人はカルトに入ってしまった。1990 年代に「オウム真理教」が問題となった。その原因の一つに既成宗教のあり方を指摘された。その批判は当然のものであった。一方でカルト宗教と無宗教も表裏一体の関係ではないかと想像する。その原因としてはやはり既成宗教の態度であろうし、私たちの暮らす社会の変質でもあろう。

2. 個人的な宗教

社会の流れを俯瞰的に見ていく中で、宗教の存在価値を見いだせず無宗教を標榜する人たちが増えた。人生に於いて、宗教の必要性を感じることなく生涯を終える人もある。

大きな災害があったときに、人知を越えた力が愛する人の命を奪っていく、と言う表現を耳にした。愛する人の命が失われるのはいかなる時にも、私の力を越えている。自分の力で抗することが叶うなら誰しもがそうする。死は私にも、愛する人にも訪れる。妻の死、それだけは勘弁してくれと言いたい。ありがたいことに妻は健在であるし、妻の

死などと言うものは想像もしたくない、と言うのが本音である。

そんな私が、いろんなお葬式に呼ばれる。子供のお葬式にも呼ばれる。親は20代であったり、80代であったりする。親にかける言葉をさがすが、いつもこれと言った言葉が見つからない。計り知れない悲しみの中にある人に、どんな言葉を語りかけようとも通じないような気がする。

数年前、20代の男性のお葬式に呼ばれた。まず遺体が家に帰ってきて、私は枕経に参った。三人兄弟の兄二人は泣いていた。母親は茫然自失であった。父親は涙をぬぐいながら母親の状態を気遣っていた。私は、言葉をかけるどころかこの家族の誰一人に対しても正視すらできなかった。翌日の通夜、翌々日の葬儀、私はお経をあげる外に何も出来なかった。

話しはそれるが、私は「お経をあげる」と書いた。お葬式で私はお経を読まない。この場合 read ではない、sing でもない。chant なのである。別の説明をすれば、「如是我聞」を「われかくのごとく聞きたまいき」と言えば、経を読んでいるのである。「によぜがもん」と言えば、お経をあげているのである。

話しを戻そう。お葬式が済んで、七日参りが始まった。七日参りと言うのは、お経をあげて「法話」をする。法話というのは仏様について、仏法について話すのである。私は自分が何を話しているのかではなく、聞き手の心持ちを想像するようにしている。この時、改めてこの家族の悲しみにたじろぐのだった。

三七日(みなぬか)か四七日(よなぬか)のことだった。母親に、時間の経過が慰めになると言うこともあるが、息子さんが亡くなった悲しみはずっと続きますよ、というようなことを言った。私は50年も60年もの間、子供のことを思って手を合わせている親の所にお参りしていることを話した。

息子が「ただいま！」と言って元気で帰ってくれば、この母親の悲しみは消えるだろう。『阿弥陀経』に西方十万億仏土という距離の所に極楽浄土があると説かれる。それは、私という人間が会いに行くことが出来ない距離である。また、人間として帰ってくることも出来ない距離を意味するのである。死を取り消すことは出来ない。

また、この経典は極楽浄土の様子を語る中で、「赤い色は赤い光をは

なつ」と説く。あたりまえのことを、あたりまえに受け入れる、というのである。私たち人生の中で“あるがまま”を受け入れることのすばらしさを学ぶ。しかし、愛する人の死を受け入れることはたやすいことではない。

仏教というのは、「仏になる教え」である。あたりまえと言えばあたりまえなのだから、仏教の特性を表す言葉である。キリスト教は「キリストは我々がいかに生きるかを教えた」のである。いかに生きるかと言うのだから、生き方に是非がある。仏教は「仏に成る」と言うのが究極の目的であるから、それに至る方法はいくつかある。それぞれ頂上を目指す道は自分の歩む道が最も優れていると思っているが、他に道はないとは誰も思わない。とにかく、仏教の目的は成仏なのである。

「あなたは仏に成りたいか？」と尋ねると、「分からない」と答えが返ってきそうだ。「あなたに死が訪れる時、あなたは仏に成りたいか？」と尋ねても、「分からない」という答えかもしれない。「仏と成ったら、人間を救ったり、見守ったりすることができるよ」というと、答えは変わるかもしれない。愛する

人間をのこしてきたら、私は仏に成りたい。私が妻を遺して死んだなら、必ず仏に成って見守っていたいと思っている。

あなたの愛する息子だからこそ、仏と成ってあなたを見守るのである。

3. ティアーズ・イン・ヘヴン

エリック・クラプトンのファンは多いし、この“ティアーズ・イン・ヘヴン”をお気に入りあげる人も多いだろう。事故でなくなった4歳の息子に語りかける曲である。

天国で会ったなら、僕のこと分かるだろうか？天国で会ったなら前と同じだろうか？そのためにもそこにふさわしくない僕は強くなれないといけないし、頑張らないといけない。

と言うような歌詞である。天国で再会するのである。仏教でも再会を説く。『阿弥陀経』で「供会一处」（一つ処に会うことともなりき）と言って極楽浄土での再会を説く。再会というのは、遺族への慰めではない。愛する人の死に際して、「なんで死んだの？」「何処に行ったの？」

の問いをよく耳にする。一方は死の意味を問うのであり、仏教的には生死の意味を問うのである。また、本当に愛する人が何処に行ったのかを問う時、私も同じ処に行きたいと思う。それは、死に対する私の意志である。時々、「天国に行ったお父さん」と言っておいて「ご冥福をお祈りします」と言う人に出くわすことがある。不覚悟である。

エリック・クラブトンは息子が天国に行ったと思っているのだろう。

“ティアーズ・イン・ヘヴン”で私が好きなのはこの視線である。天国の息子が自分を見ているのである。多くの場合、私が死んでしまったかわいそうな息子を見ている。

我田引水。仏教の場合で話しを進める。「私が死んでしまったかわいそうな息子を思う」と言うのは、思いが私から息子への一方通行である。死んでしまった息子をどうとらえるか。息子は仏と成った。私が息子を思う時、私から仏への矢印が出来る。同時に仏から私を見るまなざしを、仏から私への矢印と考える。つまり私と仏の間で相互方向の矢印ができています。これが大切なのである。私は“ティアーズ・イン・ヘ

ヴン”にこれを感じた。仏の眼差しの中で生きる私がいる。

仏の眼差しの中で生きるとは、「お念仏に生きる」と言える。私には耳にタコができるような言葉である。それは、老人が風呂に入りながら「あ〜、ナンマンダブ、ナンマンダブ。極楽やな〜」と言って、放屁してまた「ナンマンダブ、ナンマンダブ」と言う光景を思い浮かべてきた。生活の中の念仏である。念仏というと、口称念仏を思う。口に出して称える念仏である。

文字通りだと、念仏とは念ずる仏と書く。仏を思うことである。だから「お念仏に生きる」とは仏を思いながら生きることである。すなわち、仏の眼差しを感じながら生きるのである。そこには、仏と私の相互方向の思いがある。絶望して泣いた人が消えることの無い悲しみを持ちながら、新たな世界を生きる姿を目にする。それは死の意味に出会い、生死の道を歩んでいるのである。

私はそこに居合わせたありがたさを感じる。

「ぼちぼち・」

不登校は病気？

脇野 千恵

以前は学校に来ない、来られないことを「登校拒否」と言っていましたが、今は「不登校」と言います。どう違うのかわかりませんが、いつの間にか、どの学校にも「不登校児（生）」がいるのは当たり前になってしまいました。

担任をしていた頃、自分の中の学級目標は、“毎日全員揃って学校に来る！”でした。「休むと損だぞ！」と、学校に来させるための色々な工夫を考えたものです。

しかし、病気や、怪我、忌引きなどで欠席するのはやむを得ませんが、なにかのきっかけでだらだらと休み始める子がいると、何かとてもやっかいに思えてなりません。まじめな教師の悪い癖で、なぜ？原因はどこに？だれにあるの？私なんか言ったかな？とあれこれ考えてしまい、形は見えていても味も匂いもわからない食材を前にして、どう料理しようかという心境でした。

ある年、小学校1年生の5月からずっと

卒業するまで不登校児だったK介を担当することになりました。教師がクラスを選ぶのは、生徒指導上の様々な事情によると前号で述べましたが、これもまた、私にとって“持たされた！”感がぬぐえないものでした。

「反社会的」はわかりやすく、やりやすいのですが、「不登校」となると…。

苦手とする者としては、

- ・ どうしたら学校に来させることができるのだろう？
- ・ 家庭にはどんな暮らしがあるのか？
- ・ 今まで小学校の先生は一体何をしていたのか？

と怒りまでが湧いてきました。

たいてい私が持つクラスは、

- ・ 欠席する子がない！
- ・ 体育大会など、学級対抗の競技は必ずと
いっていいほど優勝する！

といったクラスになっていったものです。

しかし、入学式当日から誰も座らない席

が一つ。それを見るたびに、ため息が出るばかりでした。やがて生徒たちは不登校生に慣れてくると、こんなことを言い始めます。

「なんできーひんのや？」

ええなあ、学校さぼれて」

「どうせ来るわけないやん。

机、使ってもええやろ」

「一体どんな顔してるんや？」

空いた席が日常化しないように、少しでも理解してもらいたいと、K介の情報を学級通信に載せたり、帰りの会などでも話をしました。しかし、教育的配慮とは裏腹に、K介の状況は全く変化していませんでした。

当時の私はそれほどいろいろな知恵を持たない頃でしたので、いるようでいない生徒を抱えての学級経営は、本当に何かやるせない思いでした。

とはいえ、私は義務感のように毎週一回は必ず家庭訪問をし、学力をつけるために簡単な計算や漢字練習などの勉強をみていました。

彼はおとなしく寡黙な子でした。こちらの質問には頷き返事をするのですが、会話がほとんど成立しませんでした。いつも母親が横に座っていたことも原因していたかもしれません。

生徒指導部は学校の要の組織ですが、今や教育相談部も重要な役目を担っています。様々な子どもの問題についての対応、保護者面談計画など多忙な仕事となっています。そのためのS C（スクールカウンセラー）が配置されていますが、K介も教育相談のケース会議にかけられ、特別にS Cが家庭

訪問をするといった対応がとられました。何でも自分で取り組みたい私は、たとえS Cという“心の専門家”であってもすぐに成果がでないことに苛立ち、「なんだかなあ」と自分の力のなさを嘆くばかりでした。

2年次になり、母親の不安の一つであった「発達の障がい」という悩みを解消するために、S Cの提案で発達検査をする事になりました。

家から出られない子にどうやって検査をするのか？といった疑問がわきましたが、自宅に検査道具を持ち込んでの検査となりました。それって本当の検査？とまたまた疑問がわいてきた私でしたが…。

検査の結果は、自閉的傾向？が見られるとのことでした。知的には問題がないとの診断。小学校の時に、担任から「ひょっとして発達障がいかも？」と言われたことが、母親の中でずっとトラウマになっていたようです。早速、S Cから心療内科への受診を勧められました。しかし、K介を外へ連れ出すことの困難さから、たった一回の通院で終了しました。

そうこうするうちに3年次になりました。中学校での3年間はあっという間です。もう卒業後の進路についての話をしていかなければなりません。K介との関係はいよいよ3年目に突入しました。

K介の家族は父母、3歳上の姉の4人家族でした。姉は、中学3年の後半より不登校となり、単位制の高校に進学していました。実は家庭訪問をする中で、いつも父母の仲がどうなのかなあと気になっていましたが、ある日突然、母親から離婚の報告を

受けました。母子家庭となったK介の家は、風穴を明けたように今までとは違う空気が流れていました。

正直、不登校生への進路指導が一番難しい課題です。何せ出席日数が半端なく0（ゼロ）に近いのですから。それでも卒業させてしまうことに、いつも残酷さを思う私です。中学校から高校への進路に必要なのは内申書ですが、K介は出席をしていないので、肝心の成績がつけられていませんでした。

「内申書」（子どもたちは見ることができないものですが）。生徒たちが3年生になると一番に意識するもので、「内申書」のためなら、何でも頑張る子が本当に多くなります。

K介は、他の生徒のように公立高校を受検することは難しく、かといって単位制の私学を選択することは経済的に不可能でした。

学年での話し合いの末、進路先の一つとして「養護学校」という案が持ち上がりました。「特別支援学校」というネーミングに変更されたときでしたが、

不登校によって

- ・学力がついていない。
- ・集団行動の経験がないため社会性が身につけていない。

といった生徒も受検することができるというニュアンスの文言にひかれての提案でした。

当初、普通高校を希望していた母親でしたが、養護学校の体験入学を勧めてみました。体験中に、K介が今までにないほど色々な作業に熱心に取り組む姿を見ていた母親

は、K介の進路先を養護学校の高等部にと決めたのでした。進路担当者としては、「これで安心！」といった思いだったことでしょう。

K介は、きちんと小学校に通えていたら、しっかりと学力のついた子どもでした。中学校でも、きっと勉強に部活に忙しい生活を送ったことだろうと想像できました。

彼の進路先が本当に養護学校でよかったのかどうか？心から喜べないのが正直な気持ちでした。果たして毎日通えるのだろうか？もしまた不登校になれば、それこそ社会から孤立し、いわゆる「ひきこもり」になってしまうのではないだろうか？色々な心配事が湧いてきました。

3月、K介の卒業式は校長室で行われました。

3年間担任をしたけれど、進路先が決まったとはいえ、私は彼を学校に来させることができなかった…。中学校生活での様々な行事にも参加させることができなかった…。後悔と自責の念ばかりでした。

3年間K介の家に通い続けたこと、K介親子と共有した時間だけが、深く心に刻まれていました。

今学校では、本当に不登校が増え続けています。不登校は長引かせない、初期対応が重要であるといったことが、最近ようやくわかってきた私です。

予算削減の中、週数時間内でのSCの来校。残念ながら、継続的な対応に期待できないのが現状です。SCの力を借りることも大切ですが、あまりにも自分の無力さを

さらけ出し、問題を丸投げしてしまうという教員がいることがとても気になります。学校に来られないことが、“心の病氣”であると思い込んでしまうことも、とても危険な判断だとも思っています。

さらに今流行のアスペルガーや、ADHD、LDなどの発達的な問題があると診断をされることで、「やっぱり！」と妙に納得してしまう教員や親も危険だなあと。

幸いK介の場合、心療内科での投薬治療には至らなかったのですが、学校から関係機関へ繋ぐルートの一つとして、病院への通院が増えていることも気になっています。薬を飲まないと眠れない、落ち着かない子が、保健室にたくさんやってくるのも事実です。

思春期において、成長にともなったホルモンの分泌による気持ちの不安定さはつきものです。子どもから大人に近づく姿をみると、日々悩み、もがき、今怒っているかと思えばもう笑っている。そして自分という正体に、日々葛藤しながら生活しているのです。

学校へ行きたくないと訴えるのも、思春期だからこその症状だと考えられます。本当に病氣かもしれない、薬も必要かもしれないけれど、子どもをちゃんと見る目をもつ大人が、もっともっというほしいと願うばかりです。

その後のK介…

9年間自宅からほとんど出たことがなかったK介は、卒業後、水を得た魚のように休まず養護学校へ通うようになりました。

スクールバス通学から、1か月後には電

車通学に。養護学校は作業が中心ですが、園芸や陶芸など何をしてもしリーダー性を発揮しました。学習への意欲も高まり、学力をつけるために放課後は塾へも通うようになりました。クラスでは学級委員。バスケットボールクラブに入部し、なかなか運動能力の高い生徒とほめてもらっていたそうです。

もう一つ、彼をさらに大きく成長させた出来事がありました。それは“恋愛”です。これには、私自身も大変な驚きでした。

同じ高等部の一つ年上の女子との交際。介護が必要な彼女とデートする姿が、街で何度も目撃されました。その彼女も、K介とつき合うことで、身体的自立が向上したと聞いています。

進路を考える2年生の終わり、K介から、メールが届きました。

「先生、実はどうしても卒業後に進学をしたいのですが、可能でしょうか？」

といったことでした。

養護学校は、高等学校の教育課程とは全く異なります。大学進学となると、大検しかありません。とても厳しい道です。

K介は、福祉の仕事をしたいのだと打ち明けてくれました。養護学校での色々な経験や体験が、大学という進路希望へと導いたのでしょうか。

今K介は、希望通りの福祉学科に入学し、大学生としての生活送っています。やがて、福祉現場で働く姿を見ることができるようそう遠くはないでしょう。

(中学校教員 脇野千恵)

これからの男性援助を考える

第4回

男のコミュニケーション

= 男の講座から考える =

坊 隆史 松本 健輔

はじめに

2名の筆者によるリレー方式の本連載。筆者間で現場や対象は異なり、実際のアプローチが異なることもある。しかし男性ジェンダーを意識した対人援助を行っているということ、男性援助の意義と方法を文字として綴りたいという目的は共通している。見切り発車で始まった本連載は、筆者らの対人援助経験の未熟さも加わり、核となるメインテーマを模索しつつ揺れ動いている。例えば第1回では「硬派路線でいく」と意気込んだものの今回は、硬度を低下させている。こうした柔軟性および流動性もリレー連載の利点であろう。読者諸氏には本連載そのものを未熟な援助者の成長過程として見守って頂ければありがたい。

第4回は男性のコミュニケーションについて考察する。男性の対人援助を考えるにあたって男性特有の行動様式を把握しておくことは重要であり、コミュニケーションはその最たるものの一つだからである。コミュニケーションという言葉

語学、心理学、社会学など様々な学問体系を切り口にして考察できるが、今回は筆者が近畿のある自治体で行った男性のコミュニケーションに関する市民講座の実践を紹介し、男のコミュニケーションについて述べていく。これは統計データや学問的規範を紹介して考察を導くものよりも、筆者が男性たちへの援助や援助場面での語らいを通して感じていることを述べていく方が対人援助学マガジンの理念に合致すると判断したからである。

1、男性のコミュニケーション

Sullivan, H.S.が精神病理は対人関係と関係していると考えたように、対人関係におけるコミュニケーション不全が起点となっている対人援助上の問題は多い。男性問題でいえばDVや虐待などの暴力、ストーカーなどの逸脱行為など、反社会的な関係性の病理がその一例である。男性ジェンダーの視点から男性援助を考える場合、文化に埋め込まれた男性のコミュニケーション様式も考慮することが大切である。例えば、1970年代の高度成長

期では「男は黙ってサッポロビール」という三船俊郎が登場するCMが大ヒットするなど、「男は弱音を吐くな」、「男は背中で語るものだ」というように感情や言語を表現しない内に秘めたコミュニケーションが美德とされてきた。

こうした当時の男性のコミュニケーション観を男性相談実践に励んでいるシニア産業カウンセラーの吉岡俊介は、水前寺清子さんの当時のヒット曲「大勝負」

（作詞：関沢新一）の歌詞が如実に言い表していることを指摘している。『一つ男は、勝たねばならぬ 二つ男は、惚れなきゃならぬ 三つ男は、泣いてはならぬ

（歌詞一部抜粋）』とあるように感情を抑制した競争モードがこの時代の男性の理想の姿であったことがよく見えてくる。また男性向け電話相談や父親の子育て支援実践を行なっている濱田智崇は伝統的な男性のコミュニケーションを形成する自己概念を維持する傾向を「カニ的コミュニケーション」という言葉で説明している。これはカニをはじめとする甲殻類は柔らかな身を守るために堅い殻で覆われていて、それは内面の弱さを防衛するために過剰な攻撃性を示すことがしばしばみられる男性のコミュニケーションにも通じていることを比喻している。濱田は男性のコミュニケーションをカニ型以外にも回避傾向のタコ型、何事にも無関心なクラゲ型の3つのパターンに分類している。こうした濱田の分類も男性のコミュニケーション様式を的確に表現できているように思われる。

ところが、多様なライフキャリアが容認されてきた現代において、男性の生き方のみならず、男らしさも多様化してきた。例えば「もっと男らしくなりたい」、「力が欲しい」という伝統的な男らしさに向かおうとする男性もいれば、「主夫に

なりたい」、「出世競争がしんどい」と伝統的な男らしさとの葛藤に悩まされている男性も増えてきている。良くも悪くも男らしさの画一的なモデルがなくなることは男性のコミュニケーションの画一的なモデルも存在しない。コミュニケーションが大事と言われても、男性たちはわからない。学校でも就職活動を通してでも男性のコミュニケーションは学ばないからだ。第1回で述べてきたことと通じるが、旧来の男らしさを使ったコミュニケーション（黙る、泣かないなど）を否定こそされても、現代社会に即した男らしいコミュニケーション様式が示されていない。そこが男性にとってコミュニケーションを苦手と感じさせているのかもしれない。男性のコミュニケーションを考慮するにあたり、こうした社会文脈的な背景を考慮することも求められる。男性への対人援助を行う援助者もこの点を理解することは重要であろう。

2、男性のコミュニケーション講座

望ましい男性のコミュニケーションの回答を示すことは、筆者の力量では正直少々荷が重い。ただし、何かのヒントになるようなものは提案できるかもしれない。そこで冒頭でも紹介したように、某自治体の男女共同参画センターで行った男性のためのコミュニケーション講座の実践を報告する。さらにそこから見えてきた男性のコミュニケーションについての考察を報告したい。

まずは簡単に経緯と枠組みを紹介する。この自治体の男女共同参画センターで催されている女性のコミュニケーション講座が例年好評のため、男性講師による男性のためのコミュニケーション講座を実施することとなった。そこで男性ジェン

ダーを意識した援助者である濱田智崇さんと筆者に声がかかり 2009 年度から現在まで毎年開催している。今年で3年目だがタイトルや回数、中身は変化をつける工夫をしている。例えば初年度は 2009 年は、『男が職場でイキヌクためのコミュニケーション論 ～生きぬく・息ぬく・活きぬく～』というメインタイトルで3時間×2回の講座を土曜日午後を実施した。各回約 40 名ほどの参加があり、働き盛りの世代が多いものの 20 歳代から 60 歳代まで幅広い年齢層の参加がみられた。

①コミュニケーション講座を受ける動機
行政による無料の市民講座ということもあり、毎回年齢および職業も幅広い男性たちが参加してくれている。そのため受講動機も様々である。表 1 は 2009 年度の受講者の受講動機の一部をまとめたものである。この年は仕事にテーマを絞るようなタイトルにしたことから仕事に関する受講動機が多くみられたが、コミュニケーションに惹かれた受講者も多い。

表 1、参加者の受講動機的要約（一部）

- ・人間関係がうまくいかない（20 代）
- ・今の社会に本当に必要なテーマ（30 代）
- ・コミュニケーションが苦手な誤解されたりする（40 代）
- ・仕事がキツくて本当にイキヌキタイ（40 代）
- ・部下との円滑なコミュニケーションをとりたい（50 代）

上司が苦手な部下が参加しているかと思えば、部下と満足したコミュニケーションをとれていないと感じている上司の参加もあった。それぞれの立場で講座に対して各々の期待があり、“男性”と“コミュニケーション”というキーワードで偶

然一同に会している。こうした偶然の出会いというのも一種のノンバーバルコミュニケーションといえるのかもしれない。

②プログラムの実際

参加者には上司もいれば部下もいる。正規従業員もいれば非正規従業員や求職者もいる。相反する立場の参加者が混在しており、プログラムの構成には細心の注意を払った。具体的には特定の立場を攻撃する形にならないよう、「男性であること」という共通項を意識し、どの世代や立場でも汎用できる内容を心がけた。以下、筆者担当回で実際に行ったワークの一部と受講者の反応および筆者の考察を紹介する。

【バースデーサークル】

コミュニケーションには言語性と非言語性の 2 種類があるということ、普段は言語性コミュニケーションにずいぶん依拠しているということを実体験してもらおうためのワークである。まずは 2 種類のコミュニケーションを説明した上で、参加者全員がノンバーバルコミュニケーション（非言語性）のみを用いて 1 月 1 日から 12 月 31 日までの誕生日順に並ぶ。この時、講師もワークに参加すると受講者との関係性が深まりやすくなる。

始めはとまどいながら冷ややかであるが、誰か一人がジェスチャーを使って誕生日を示しだすと次々とノンバーバルコミュニケーションを用いての交流が始まる。そして少しずつ長い列となる。個々の参加者が言語を用いずに一つの集団へと凝集性を高めていくこの過程は何度見ても心地よい。筆者の経験だと 3 分～4 分ほどでできる。過去に女性を含めた 100 名ほどの集団で試したことがあるが、100 人でも 5 分ほどで列が完成した。列

が完成すれば、一人ずつ誕生日を発表していく。この時、誕生日がその日であれば全員で拍手をすると凝集性を促進できる。完答率は意外に高く、20～30人であっても完答か1人間違える程度である。

ここで解説をして終わるのはもったいない。筆者はこのワークを隣り合った2名でペア作りにも使っている。ペアで着席してもらいワークの感想を交換してもらう。感想は最も多いのは「普段言語に依拠していることを再認識した」であるが、「最初は何させんねん、と抵抗があったが、やってみるとおもしろい」という感想もしばしばある。いかにもワークが苦手そうな男性からこのような感想が語られたとき、よい講座になる手ごたえを感じるものである。

【レポートトークとラポートトーク】

レポートトークとは事実を客観的に述べる語りで、ラポートトークとは自分の感情を含める語りある。仕事の場面で客観的な報告が求められる場合は前者、日常的な情緒を通したコミュニケーションの場合は後者を意識した方がよい。働き盛りの成人男性の場合、生活時間の多くを仕事に費やしているため、論理性と事実を重視したレポートトークを家族や友人などのプライベートの人間関係のコミュニケーションにも用いてしまう傾向がある。情緒を省いたコミュニケーションほど家庭で面白くないものはない。家でも会社モードの親父たちはいつの間にか家族から孤立してしまう。こうした心あたりをペアで話し合ってもらってもよい。

一通りの説明の後、実際に講座日の直近の時事ニュースを課題にしてそれらをレポートトークとラポートトークを使い分けてパートナーに表現するというワークを行った。表2は2010年7月の講座

で用いた課題である。当時の最新の2つの時事ニュースをペアで表現しあい、感想を交換するワークを行った。

表2

レポート&ラポートトークのワーク

ここで練習です。

レポート&ラポートのトークでパートナーにニュースを伝えましょう！

どちらのパターンも試してください。

- ①民主党代表選で菅直人代表が再選
- ②阪神タイガースの矢野燿大選手が引退を発表

参加男性たちの声としては、「いかにレポートトークを多用しているか気づいた」、「どちらもバランス良く使いこなすことが大事」という狙い通りの反応が返ってくることが多い。このワークは会社モードでないコミュニケーションとその重要性を知るきっかけとなっている。なかには「自分はずっと『君の話はようわからん』と言われ続けてきたが、ラポートトークばかりだったことに気づいた。事実をきちんと伝えることも大事と気づいた」との感想を述べた男性もいた。感情表現が豊か過ぎる女性にレポートトークを学んでもらうことにも応用できそうだ。機会があれば試してみたい。

【目指せ！平成の色男】

この平成の世の中、数多くの色男たちがいる。色男や男前の価値観は多様で何が色男かは一つのベクトルでは表現できない。それを説明した上で、コミュニケーションの上手さという点での色男は著名人の中で誰が思いつくかを考えてもら

う。出してもらった名前とその理由を発表してもらっただけで、フロア全体が笑いの渦に飲まれることもある。

ある程度、参加者の考えを聞いた後、筆者は石田純一さんを紹介する。石田さんは非常にあいづちが非常にうまく、彼の話の聴き方は心理臨床でいうところの傾聴のエッセンスが凝縮されている（と筆者は感じている）。石田さん自身もあるテレビ番組において「自分はあいづちばかりうっている。でもそれで（コミュニケーションが）上手くいくんだ」という旨の発言をしていることがあった。石田さんがよく使うというあいづちを紹介した上でペアになってもらい、語り手が自分の自慢話をする一方で聴き手があいづちを入れ続けるというワークを行ってもらう。一定時間がくれば役割交代をして、同じ作業を繰り返す。

このワークの感想は「あいづちなど考えたことがなかった」、「あいづちをいれてもらえて話しやすかった」と新たな気づきを得た肯定的な意見が大半だった。しかし一部では「変なあいづちを入れられて話しにくかった」「あいづちをうつことに気をとられ、うまく聴けなかった」という感想もあった。語り手の息つきや話の切れ目などにあいづちを入れるといった会話上の社会的スキルが関係しているように思われる。相手に勝るが良し、という従来の男性モデルでは相手に共感してはならないので、相手はうまく語れるようなあいづちとは相性が悪いのかもしれない。そうだとすれば、現代男性のコミュニケーション力向上のためにはあいづちをいれて聴くというトレーニングは効果的ともいえよう。

③講座からみえた男性のコミュニケーション

初年度のプログラム検討段階で講師2名と男女共同参画センターの担当者（もちろん男性）での打合せでは、コミュニケーションに関する知識を座学で学びたいと希望する人が多く、ワークに乗り切れないのではないかと予想し、「座学：ワーク＝7：3」程度に設定した。ところがそれは杞憂だったようで、

「ワークが楽しかった」、「もっとワークがしたかった」などワークの評価が高かった。対象がこの類の講座の参加者だったということを差し引いても男性も語りたいという需要が多いということに気づかされた。男性は知的理解を好むという言葉に講師である筆者たちも惑わされていたのは大きな発見であった。以降、2年目の講座や他の男性支援でも知的理解と体験ワークのバランスを心がけるようになった。筆者の感覚では今のところ「座学：ワーク＝5：5」のバランスが全ての受講者に受け入れてもらいやすいような実感がある。

男性だって語りたい。でも“男らしさ”の縛りによって語れない。いやむしろ語る術を知らなかったりすることがあることが見えてきた。そのため男性のコミュニケーションを考えると、ラポールトークや初歩的スキルから初めることも意義がある。感情を介した情緒的交流の機会が少なく発達を遂げてきた成人の男性にとって、こうした基本的な社会的スキルの実習を兼ねた心理教育的な講座プログラムはコミュニケーション力向上に有益であるように感じた。

3、これからの男性のコミュニケーション

今回は「男性のコミュニケーション」

を筆者たちが実施した男性のための市民講座の実践を通して述べてきた。参加者はまさに現代日本の男性たちの縮図のように様々だった。参加者たちはコミュニケーション場面で起こりうる葛藤や難しさも講座内で実体験してもらい、何らかのヒントを持ち帰ってもらえたようだ。

しかしあくまで成人の男性に絞った講座であるため、女性や子どもを混ぜた現実社会に即したコミュニケーション場面とは異なる。講座ではうまく語ることができたが実生活ではうまくいかない参加者も多いのではないかと推察される。ただし、これは男性援助に特化したことではない。筆者は男性援助以外のフィールドでの対人援助を行なっているが女性や子どもであっても同様であると実感している。繰り返し基本的な社会的スキル向上に関する実体験が必要かと思われる。男性のコミュニケーション講座を複数回行ってきたことで、一見気難しそうな男性でも、思うように語れないだけで本当は語りたいだろうし、効果的な講座（訓練）次第でコミュニケーション能力はある程度向上する可能性を見出せた。

これは臨床的問題への応用も期待できる。例えば暴力男性は変わらないという言葉説があるが、それは変わるためのコミュニケーション様式を備えていないだけで、これまで紹介してきたような当事者参加型で主体的な関わりのできるプログラムであれば変容の可能性は大いにある。今後の課題といえよう。

さらに筆者はもう一つ欲張って講座の発展版も考えている。例えばライフサイクルごとの特徴に合わせたより決め細やかな男性講座やイベントを催していくと、より深みのある取り組みができよう。例を挙げれば「独身男子の会」、「明るくハゲます会」などアプローチは多彩である。

テーマは違えど根本は語る（＝コミュニケーション）である。筆者らはこうしたある特定の層に絞った集団男性援助の実験的試みとして「ヤングメンズの会」なる小グループワークを実施したことがある。10代～30代前半の若年男性を対象にした若い男たちの語り場である。正社員になりたい、モテない、結婚できない、友達が欲しいなど現代青年期男性のテーマにダイレクトに沿うことができた。筆者も一人の後期青年期の当事者としてどっぷりとグループに浸ることができ、メンバー間で一体感を味わうことができた。残念なことに筆者がもう青年期とはいえない年齢になり、ヤングメンズの会は休止しているはあるが、朱夏の時期ならではの熱気盛んなグループを催すこともできよう。最後は大きな希望を語ってこの辺りで終えたいと思う。

今回取り上げた講座の共同講師である濱田智崇さんには今回の執筆についてご快諾頂きました。心より御礼申し上げます。

文責：坊 隆史

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(2)



中村周平

今回も、事故に遭うまでの私の過去について触れていきたいと思います。高校でもラグビーを続けたという気持ちをもちながら、将来の進路も考え進学した京都成章高校。しかし、「部活と勉強の両立」は自分が想像していた以上に厳しいものであることを痛感していきます。前回に引き続き、研究仲間の北村さんに協力していただいた、「私へのインタビュー」で交わされた会話の内容を手がかりに私の心境を書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュアー)=Iとする。

3 悩んだ末の進路選択

「これからもラグビーを続けていきたい、でも自分のラグビーに全く自信がもてない」。一人で考えていても良い結論が出るはずありませんでした。「高校でもラグビーを続けて大丈夫だろうか…自分の正直な気持ちを監督に相談してみようかな」。厳しいことを言われるのは、ある程度覚悟していました。

S:「あと自分の中でラグビー続けたいなっていう気持ちがあったので、その時に監督に相談してみたら、『お前でも高校までやったらラグビー続けられるやろ』。その時、体ちっちゃかったんですけど、たぶん160cm ぐらいしかなくて」

I:「そうなんや」

監督からの答えは意外なものでした。そして、その日を境に、私の「ラグビー熱」はさらに高まっていきました。進路を考える上で、それまでまったく入っていなかった「ラグビーができる高校」という選択肢が増えたのです。

また、その頃、漠然とはしていたのですが、将来福祉の道に進みたいという思いを持っていました。

S:「悩んだんですけど。高校の進路も最初は地元の公立高校に進むつもりでいたし、どうしようかっていう…あと福祉の勉強もしたかったんで、高校の時に」

I:「なんで福祉の勉強がしたかったん？」

S:「あの、ちょっと話がかわっちゃうんですけど、中2の時にばあちゃんが死んだんですね。(中略)母方のおばあちゃんとはもともと石川の人で、じいちゃんとは大阪に40年住んでいたんですけど、結局死んだのって、病院やったんですね。ベットの上で。何回かお見舞いにいったんですけど、病院ってすごい自分の中で、こう、時間は管理されてるし、自分のしたいことはできひんし、そんな場所が終の棲家になってしまうことが、中学生ながらにすごくショッキングで。ばあちゃんがそこで死んだっていうのがすごい自分の中で感じた時に、もし自分が死ぬ場所が病院だったらイヤだな、どうせならできる限り自分の住みなれたところとか、自分の生まれてきたところの近くで人生終わりたいよなって、なれたらいいよなって。めっちゃ簡単なんですけど、その時に深く考えたことなかったんですけど、その時にそうしようと思ったら今何があるんかなって思ったときに、ちょうどそのころ介護保険が始まったところで、何かニュースとかでもグループホームの話とかでてきた時で。こんな1人では難しいかもしれないけど、できたら自分の死にたいところで死ねるんちゃうかなとか思って。逆にそういう人のお手伝いとかできるんちゃうかなって思って。で福祉勉強してみたいなと思ったのがちょうど中学校卒業のころ」

祖母という、親しい人間の死に初めて直面したことは、私に大きな影響を与えていました。知らない土地、知らない病院で息を引き取ることとなった祖母を不憫に思いながら、「できることなら自分の住み慣れた地域で終われたらいいのに」と感じていました。そのためには何が必要なのか。子ども心に「グループホーム」というものがあり、それは「福祉」という分野であるということを知りました。「高校で将来の進路を決めるのもいいけど、大学からでも遅くないのでは」という周囲のアドバイスもあり、京都府下の公立高校の福祉科への進学は断念したものの「福祉はしっかり勉強したい。でも、ラグビーも続けたい。じゃあ、ラグビーをしながら大学への進学も考えられる高校を探さなきゃ」と考えるようになっていきました。

そして、悩んだ末に中学からお世話になっていた「京都成章高校」に進学することを決めました。

S:「その福祉のことを捨てたくなかった、というか考えたかったので。ほな大学のことも視野に入れながら、ラグビーも続けられて、できれば近いところがいいよねっていうことで、いろんな選択肢を足していったところ、近くに成章高校があって。中学校のころから何回かお世話になっていた高校でもあったので、ほな、そこ行ってみようかっていう」

中学時代の監督と、京都成章高校の監督とはつながりがあるようで、毎年夏ごろには、京都成章の高校生に混じって練習していた「縁」のある高校でした。また、その当時から、精神論ではなく「メンタルトレーニング」「体の軸を作るセンタリング」など科学的なトレーニングを取り入れていました。

S:「僕がラグビー続けたくなくなったもう一つのきっかけっていうのが、あの僕らの3つ上の代になるんですかね、3つ上の代の、そのとき京都代表やった伏見工業高校が、全国制覇したんですね。(中略)その時の決勝戦のスコアが、確か21対7で相手佐賀工だったんですけど。その時の京都府の全国大会予選で、成章と伏工が決勝であつたんですけど、15対0なんですよ。このスコアを見た時に、トライは一本もとれへんかったけど、全国大会の決勝に上がってきた佐賀工よりも伏見をロースコアで抑えてる。実際にそのビデオも見て、すごい展開の速いラグビーを見て、中学校から通ってる時も、その監督が科学的なラグビーを教えてはったんですよ。勝利の方程式じゃないですけど、野村監督みたいに、根性論一辺倒に感じられがちなラグビーの中で、そんな科学的な指導があるのかなって。もしかしたら、自分に合ってるんじゃないのかなって思って、そんないろんなことが重なって成章高校に行こうと思った」

I:「なるほどそっかそっか。それもある意味運ばれて行っていると言えば、運ばれていったわけやね、成章高校に」

S:「はい」

「体が小さい僕でも、大きい選手と戦えるんじゃないか、中学時代に感じていた不安や劣等感を、頑張っていけば払拭していけるのではないか」。京都成章高校の「科学的な指導」に大きな期待を寄せていました。

4 入学後の違和感

ラグビーに、将来に、様々な希望や期待を持ちながら京都成章高校に進学しました。最初は慣れない高校生活の緊張感と余裕のない毎日で気付かなかったのですが、徐々にこの高校の現状に体がついていなくなっていくます。

I:「高校1年の自分の成章高校でのクラブ生活、というものを中村君が総括したらどんな感じ？高校1年生はどういう年やったん？」

S:「高校1年生の時は、まず(ラグビー部に)入って自分が思い描いてたラグビーとちょっと違うなあって」

I:「そうなんや？」

S:「はい。その科学的な…というのを売りにしてはったので、そういう練習が待ってるんかなと思ったんですけど」

I:「根性根性ではないみたいなの？」

S:「僕ら二つ上の代が初めて花園に出たんですけど、それまでに春の大会で伏見に勝ったっていうのが一つあって。ただ、伏見工業高校は春負けても、必ず夏の合宿で鍛え上げて、冬には勝ってくるっていう鉄則がここ何年かあって。(中略)実際に、成章高校も、その先輩ら(初めて花園に出た)が出る何年か前にも伏工に勝ってる時があつたんですね。でも、結局秋にひっくり返されて全国に出れなかったっていう苦い思い出があつたみたいで。春勝った後に、監督もその時は気を引き締めていろいろ考えはったとは思いますが、練習がどんどんどんどん、ハード化していったというか。最初の方はすごい科学的なこと言っはったのに、どんどんどんどん、練習が根性的にというか…。それまで週に一回あつたオフも、ミーティングやってことで無くなってしまったりとか」

(中略)

I:「なるほど、せやけど自分が入っていったら成章のラグビーの方向性みたいなのも変わってきた？」

S:「と思うんですよね。(監督が)すごい焦ってはるなあというか…」

科学的な練習を謳っていたラグビーは少しずつ、精神論で乗りきろうとする「古き良きラグビー」と代わり映えのないものになり、休みも少なくストレスの溜まる時期が続きました。「絶対に全国大会に出なければ」という部活内に漂う雰囲気が大きく影響していたように思います。

それに並行して、それまでなんとか凌いできた勉強も、部活がハードになるに連れついていけなくなり、授業に支障をきたすようになりました。

S:「実は話がもう一つあって…ラグビーの方では様子が違うなって思い始めたのと、あと勉強の方ですね。(中略)もし、成章高校でラグビーしようと思ったら、予備校に通いながらラグビーするようなもんやということは親からも聞かされてて。やっぱり進学校を売りにしている部分があったので」

I:「遅うまで電気付いてるしね。9時とかね」

S:「それでもラグビーやりたかったし、勉強も手抜きがなくなかったから、大丈夫って言って行ったんですけど」

I:「結構勉強が大変やったわけや？」

S:「勉強が大変で…しかも一番辛かったのが、テストで合格点を取らないと部活に行かせてもらえない。(中略)勉強せな部活行けへん。でも、勉強し続けたら部活の時間無くなるし。部活頑張ってたら勉強できひん、平均点取れへんみたいな…。途中で勉強と部活の両立ができなくなって、一時期高校行けなくなったときがあったんですよ。そんな長い時間じゃなかったですけど」

I:「登校を拒否ってしまってたわけ？」

S:「教科の授業出たら耐えられへんようになってしまった。部活も自分が思い描いていたものとは違ったので、ちょっとしんどかったのと、勉強は勉強でキツすぎて…これはちょっとついて行けへんってことで、勉強もラグビーも自分の中でしんどくなり

かけてたのが高校1年でした」

「予習を怠れば部活に行かせてもらえない」、そんな不安にいつも悩まされていた高校生活でした。入る前に思い描いていた「部活と勉強の両立」に失敗し、現実から逃げるために学校に行けない日も。今考えれば「自分が行くと言い出しておきながら」という己の弱さが許せなかったのかも知れません。

一度はラグビー部を辞めることも考えました。そうすれば全てが楽になると思ったからです。

I:「でも、クラブは辞めようと思わへんかったんや？」

S:「高1のとき、1回思いました」

I:「どんな？学校行けへんかった時？」

S:「学校行けへんかったときですね。これは何かを捨てなもうあかんと思ったんで。高校やめなアカンと思ったぐらいやったんで。秋ですかね、たぶん11月くらいにちょっとこれは無理かなと思って、成績も落ち始めてたので。そう、辞めようと思ったのは秋ですね」

I:「まあそやけど、またなんとか思い直して学校にも通い、なんとか高校1年も終わったって感じ？」

S:「そうですね。3学期に三者面談があって、そのとき英語の先生が担任やったんですよ。(中略)その先生が、『成績が落ち始めている』『このままいくとヤバイ』という話をされて、で『勉強かなんかで悩んでるんちゃうか』と知ったはったみたいで、『人間何でもできひんから、とりあえず一個捨てろ』と言わはって、しんどくなってるのを…。そうじゃないと、いろんなことが全部ダメになってしまうからって言われて、でその先生に全部中身は伝えられなかったんですけど、心の中で『あっ英語捨てよ』と思って」

I:「ハッハッハッハ (笑)」

S:「これが捨てられたら楽になる」

I:「そいつはクラブを捨てろと」

S:「クラブか別の教科かなんか分からないですけど」

I:「君の中では英語捨てたろと」

S:「変な話なんですけど、今まで友だちのノートとかまったく見たことなかったんですけど、英語は割り切って友だちがやってたやつをそのまま写させてもらって、それでなんとか乗り切ってたですね。自分

でわかるところはやってたんですけど、時間的にどうしても追いつかなくて、友だちに見せてもらえるところは…。それでちょっと気持ちが盛り返しましたね」

ちょうどその頃、進路についての三者面談をおこなっていました。勉強不足はすぐに成績の悪化につながり、そのことを心配した担任が、今抱えている悩みを整理していくことを助言してくれました。「あっ、頑張り過ぎなくてもいいんや」と少し気持ちが楽になっていきました。

5 掴みかけた自分のペース

その後も、部活と勉強との両立が上手くいかない日々が続きました。1年生の終わり頃、練習中に負傷した膝が悪化、手術を余儀なくされました。部活もしばらく休むことになったのですが、それが偶然にも、張り詰めて今にも破裂しそうだった私の精神面に、大事な時間を与えてくれることとなったのです。気持ちの整理もでき、心に少し余裕も生まれ始めました。また、もう一つ私を追い込む原因になっていた、普段の勉強時間の不足も、友人の協力を得て少しずつ打開策を見出していけるようになります。

S:「1年の終わりごろに膝の怪我して、左膝を手術したんですね。先輩らが引退されてからやったから…2, 3, 4月と休んでたんですね。その間は部活もそんなにしんどくなかったし、その間に勉強も…英語も捨てたので他の教科が集中できるようになって。復帰したのが5月の合宿のときで、それまでラグビーしんどかったのも、なんとか勉強の方でついていけるようになった。あと、自分の中で気持ちの切り替えができるようにもなりましたね。家に帰ったらスイッチがOFFになって寝てしまうっていうことがずっとあって。これは家に帰ったら寝だけの生活になってしまうから、とりあえず学校にいる間の集中力を活かそうと。部活が8時に終わって、そこから筋トレして9時過ぎ、10時くらいから部活やってないメンバーが勉強会してるんで…(中略)だから、友だちとそこから1時間くらい勉強付き合ってやって言っ

て(学校に)残るようになったんですね。そのとき明日の単語テストの勉強とか、絶対覚えなアカン暗記も何とかをお互いに問題出し合ったりして、それがちょっとずつ効果出だしてましたね、高2の中頃になってきたときに」

I:「ということは、高校1年の時はある程度学校で組まれた形の中に自分が入って、結構しんどいなみたいな状況やったんやけど、高校2年になると自分なりに自分の生活のリズムみたいなものを、あるいは自分の居場所というか…そういうものを自分なりに工夫して、自分なりの生活リズムというか、より快適なものを作っていこうっていう…ほなそういう意味では結構充実してたわけや?」

S:「そうですね、一番あの頃が高校の中でなんとなく自分でもペースに乗ってきたかなと思ってましたね」

I:「なるほど。クラブの方は高校1年の時にだんだん根性の方でずっといってて、それは高校2年になってもそうなの?」

S:「その体制自体は、高校2年になっても変わらなかったですね。それに自分が慣れてきてた部分もありましたけど。うまいこと怒られんようには…」

I:「手え抜くところでは手え抜いて。そういうことも2年になってきたら分かるようになったわけや」

最初は、「睡眠時間がさらに削られるだけでは」と思うこともあったのですが、予習した日の授業の理解度や小テストでの平均点が上がるなど、その効果は少しずつ表れ始めます。2年生の秋頃には、自分なりの高校生活のリズムを掴み出していました。「これなら、なんとか乗り切れる」、そのようなことを感じ始めていました。

それでも「遍照金剛言う」 ことにします

第 1 回

福祉の概念・言葉の解釈について①「居場所」

三野 宏治

はじめに

——何を書こうとしているのか

「精神障害者福祉においても障害者本人と支援者である専門家の関係の対等性が強調されるようになっている。また、従来の専門家による直接的な支援の他に、セルフヘルプなど本人の力に注目し、その活動へのはたらきかけを重要な支援の方法として捉えようとする考えもある。しかし、実際の支援の場面で、例えば作業所や授産施設で行われる活動で、本当に「対等」は可能であり、実現されているだろうか。またそれは常に望ましいものだろうか。例えば自他に対して加害的な行為がなされる場合がある。本人たちに委ねる場合より、作業や組織の運営にとって明らかに有益な別の選択肢があることがある。どうしたらよいか。また、実際には対等でないのに、対等な関係の下でなされているゆえにある対応が正しいとされるなら、その対応は本人に対する加害ともなりうる。」

精神保健福祉分野の専門家と当事者の対等性とはいったい何か。この問いを社会福祉法人心生会地域活動支援センターみのり

を利用している当事者と専門家とともに考えた。2009年度の財団法人大同厚生事業団「地域保健福祉研究助成」の採択事業であるこの意見交換は約10ヶ月間にわたり行われた。冒頭の文章は助成申請を行った際、申請書に記した文章の一部である¹。

筆者は1996年から精神保健福祉分野に携わっている。現在は秋田県の大学で教員をしている。大学では主に精神保健福祉士・社会福祉士養成課程の講義を担当し、ソーシャルワーク論などを学生に話している。福祉実践を経験した者と議論をする時、経験年数や実践分野が異なる場合でも自らの考えを伝えることは難くない。また、相手の話に関しても自身の経験に重ねることで

¹ 研究の成果は、三野 宏治 20110214 「精神障害当事者と支援者との障害者施設における対等性についても研究—当事者と専門家へのグループインタビューをもとに—」『立命館人間科学研究』第22号:7-18に全文が掲載されている
<http://www.ritsumeihuman.com/publication/files/ningen22/p007-018.pdf>

理解することが出来る。他方、ソーシャルワーク実践に関してほとんど知識のない学生に対してテキストの内容を伝えることは困難だ。文献に記されてある内容を体験的に理解し改めて体系化する作業が必要なのが原因の一つであろう。そしてそれは福祉実践が「名付ける」ことを頻繁に行うが細かな分析は行わないという特徴にも起因している。その上、「名付け」で用いられる言葉の多くが重層的な意味合いを持つことから、結果として福祉実践者にはイメージとして伝わり、福祉実践の経験がない者には言葉の多義性によって各々が納得のいく解釈が可能となる。ただ福祉現場に赴く学生に対する教育の場での話であるなら、あまり曖昧なことも言えない。冒頭で述べた「対等性」という言葉も福祉現場で多用される言葉である。だから、長い時間をかけて考えた/考えている。同様のことはたくさんある。これからの連載では、福祉実践で多用される言葉や概念、理念について、それがどのように使われ始めたかについて述べ、どういった要因によって意味に変化が生じたのかについて考察する。

例えばどういうことか

精神（保健）福祉現場に支援者として係わり数年が経過した頃、「その人らしさを支援する」という言葉よく耳にした。筆者自身もこのフレーズを市民向けの勉強会などで多用した覚えがある。しかし同時に「その人らしさ」という言葉と「支援」が素直に結びつかないと直感した。「その人らしさを支援する」とはどのように説明が可能だろうか。例えば、「障害（その他）によって制限のある状況が生じる。そして自身の

望む生活が困難である。よって障害（その他）を起因とした困難や不都合に抗したり不自由がないように手伝いを行う。」という説明は可能であり、現場ではそのような意味合いで使われていた。では、そう言えばよいのだが実際はそうではない。同じようなこととして、仕事を始めた当初「その人の病や障害ではなく健康な部分と付き合おう」と先輩職員からアドバイス（指導だったかもしれない）をうけた。初めのうちは疑問もなく過ごしていたが、健康な部分とだけ付き合うならば特に支援者という存在は必要がないと考えるようになった。これはおそらくストレングスモデルに依拠したものであろうが、その表現や意図するところも正確ではない。

この種のエピソードは福祉実践では多く見られる。筆者が在籍した職場に特有のことでもない。前述した「対等性研究」の実施場所である地域活動支援センターみのりで筆者は精神保健福祉士数名のスーパーバイズを担当した際、同じような言葉/概念の使用が散見された。例えば「自己決定」が支援者の促しや支援方針を支える理論的な根拠として用いられるのではなく、会議などの結論として使用されていることがある。

「彼/彼女の決定だから仕方ないよ」という結論は日常会話では成り立つ。しかし、会議で使用されると「支援困難な状況であるのでなにもしない」と同義である。支援場面では「何もできない」ことは少なくないが、何もできない状況を「自己決定」という言葉で纏め上げることは、「現状ではできないが当該ケースは継続中である」と本来認識すべきことを、「本人が決めたことにより終了」とその質を変化させてしまう。ま

た「地域生活を支援する」という表現あり頻繁に使用される。しかし実際は地域生活のどの部分を支援できるのかについて悩む福祉実践者は少なくない。

「対等がよい」といわれるが、何を持って対等とするのか。またそれは可能なのか。「その人らしさを支援する」こととはどういうことか。「自己決定」は良いことだろうが、その「自己決定」をいつも素直に支援できるのか²。

これらの「対等性」や「自己決定」、「地域生活支援」とは何かを正面から考えるには困難がある。仮に正面から考えるとしても言葉のもつ重層的な意味合いと多義性によって翻弄される。だから福祉実践は眼前のクライアント/利用者に対応し、そうすることによって言葉に翻弄されず実践を前進させてきた。この対処/行動の積み重ねを纏めるために「名付け」が行われた。そしてこの繰り返しが福祉実践の歴史であり多くの実践を生んできた。そのことについては敬意を表するものであるし異議は無い。しかし、研究者はその「名付け」に終始するのではなく、それがどのように行われたかについて集積・分析を行う必要があるという認識も同時に持つ。

「名付け」のどこに問題があるのか

福祉実践に名前をつけることによる弊害は何か。一つはそれが支援者によってなされているという点だ。自らの実践を殊更説明するよりは、名前をつけたほうが実践者には伝わりやすく当事者にも希望が生まれ

² 「その人の不利益を呼び込むであろうことが専門家に予測できた場合、その人の「自己決定」に対してどう行動するだろうか」という問題は思いつきやすい。ただ結論は出にくい。

るという利点は否定できない。ただそれは様々な誤謬の起点ともなる。

クライアント・利用者の状況やニーズを支援として行動に移す場合、ある程度の支援者の解釈が介在する。緊急の場合を除いて、表出されたニーズを満たすため直ちに新たな福祉サービスを開始することに違和感を覚える実践者は多いだろう。ニーズの把握からサービス開始までの課程としては、①ニーズが本人にとって有益であるか否かを判断する。②ニーズが表明された理由や背景について調査する。③同様のニーズを持つ人がどれほどいるのかを確認する。という手続きが思い浮かぶ。これらの判断や調査・確認は利用者・クライアントと協働することもあるが、支援者の固有の仕事であることには変わりはない。専門家の判断の連続であるこれらの過程、つまり福祉的配慮³については当事者からの批判や専門職者自らの戒めが多い。そしてそれは倫理的・職業的なジレンマとしても紹介されている⁴。これら専門家によるパターンリズムを含んだ解釈・福祉的配慮の過程で「名づけられた言葉」が使用されていたならば「名付け」についての議論の余地はある。

本稿では具体的に「居場所」という言葉を取りあげる。「居場所」と「名付け」られた（＝機能を持たされた）作業所、精神科デイケア、精神障害者地域生活支援センタ

³ 『生の技法——家族と施設を出て暮らす障害者の社会学』では福祉的配慮についての言及がある。脳性まひ当事者の自立生活と施設批判について当事者の口からの語りが収められている。

⁴ 本人のニーズがそのまま反映されない場合は多いだろう。入所施設で提供される食事を例にあげると、糖尿病であるその人のニーズが高カロリーメニューであってもそのまま提供されるとは考えにくい。本人のニーズが福祉的配慮によって充足されない。

一について、それぞれの設立の経緯と変遷（どのように「居場所」という名前がつけられたのか）、活動の特徴（「居場所」という名前は正しく当てはまるのか）を述べる。その後、クラブハウスモデルについてふれ「居場所」についての考察を試みる。

「居場所」と「名前」がつけられる背景

その1 作業所について

筆者が精神障害者福祉の分野で働きはじめた前年の1995年（平成7年）に、障害者基本法が改正されている。同年、精神保健福祉法（障害者基本法精神保健及び精神障害者福祉に関する法律）も新たに制定された。当時、精神保健福祉の支援の中心は保健所の精神保健福祉相談員、精神科病院・医院のソーシャルワーカー、精神障害者作業所の職員などであった。筆者も精神障害者作業所の職員として雇用され、精神分野のソーシャルワーカーと仕事をした。

当時在籍していた作業所は80年代の前半に設立され活動していた。中心的な活動はものであり、作業の内容はショッピングバッグや小学校教材の袋詰めといった内職作業であった。それらの作業を利用者とともに行った。1996年頃、この作業所は限られた人の出入りに限定されていた⁵。この限られた人しか出入りしないという特徴は「安心した状況を確保する」され必要なものと関係機関と支援者には認識されていた⁶。ただ、数年の後にはボランティアや福祉

大学などの実習生を多く受け入れ、限られた人が出入りするという要素は薄らいだ。この変化は作業所＝「居場所」として考えるときに重要である。

黎明期の精神障害者作業所の役割を支援者たちは「居場所」としてきたようだ。しかしその活動内容や考え方の変化に伴い、「居場所」だけではない別の意味をもった作業所を設立するようになった。筆者の修士論文に精神障害者作業所と身体・知的障害者作業所の設立の経緯の違いについての記述がある⁷。長文になるが当該部分を引用する。

『ひろがれ共同作業所』によると作業所は、「養護学校を卒業はしたものの働くところがない」、「学校に通えるようになったがその後の保障がない」といった当事者、家族の思いをもとに作り出された。つまり「何故、作業という手法を取り入れたのか？」とか「作業所における作業の意味とは？」といった類の問いは、黎明期においてはナンセンスであり、「作業所＝働くところだから作業をする」または、「作業所しか働くところがない」と、とても解りやすい答えが返ってくる。

ただ、精神障害者にとっての作業所の意味を考えると、作業所は今まで述べた作業所＝働くところだから「仕事をしたい」、「何らかの理由で仕事をしなければならない」といった明快なものや若干色合いを異にする。まず多くの精神障害者作業所の立ち上げは、医療以外のサービスがなかった時代に始まっている。精神障害は中途障害である

⁵ 意図的に利用者、職員等の支援者、家族と限定した側面だけではなく、「用事がないので訪ねてくる人がいない」という消極的な理由によっても限定的な人間による場所となっていた

⁶ 2006年に書いた修士論文に「安心した空間が特徴である」旨の記載がある。執筆当時筆者は前

掲の作業所に在籍していた。

⁷ 2005年度 立命館大学大学院応用人間科学研究科・対人援助領域 修士論文「精神障害者小規模作業所における作業の意味分析」に全文が掲載されている。

<http://www.arsvi.com/2000/0603mk.htm>

から、学校（養護学校）等の福祉が無かった。第2に精神病という疾病と障害が並列して存在しているが故、長年において障害者としてみられることはなく、病者としての扱いがなされていた。作業所を設立する場合も、医師や医療機関のソーシャルワーカー、保健所の保健師や相談員などが家族と共に活動したことが特徴といえる。このように精神障害者支援の黎明期には家族や地域の医療関係者が中心であり、牽引役であった。福祉関係者やソーシャルワーカーなどは、あとになって関わったという経緯がある。

大阪府N市の作業所の黎明期を知る人によると、80年代前半に精神科のクリニックの談話室にて、家族が中心になって患者を対象に手内職を始めた。ここでは福祉的就労や就労訓練といったような目的意識は無く、医師の指導のもと作業が行われていた。その後クリニックの業務が忙しくなり、作業をする場所を近所のアパートに移し、作業が続けられることとなったが、その際の費用や専任職員の給与や家賃もクリニックの医師と家族が出し合った。全ての精神障害者作業所の黎明期がこのような経過を辿っているとはいえないが、精神障害以外の作業所の黎明期に養護学校の先生が深く関わっているように、精神障害の場合、医療機関が深く関わっていた。このことは特に珍しいこととは思えない。その人がどのような障害や疾病、あるいは特徴を持ち、その人にどのような支援者が関わっているか、ということである。現に家族という存在が、どの障害者作業所の黎明期にもみられる。家族は障害をもつ当事者にとって、一番身近な存在だからである。」

数年前の論文で文章は稚拙ではあるが、記述の内容に大きな誤りは無いだろう。精神障害者作業所黎明期において精神障害者は家庭と医療機関以外の活動の場所をあま

りもたなかったようだ⁸。そして家族や医療機関関係者は家庭・医療機関以外の居場所の必要性を感じ作業所作りがすすめられた。

しかし、この時期の作業所の設立目的は「居場所」であったが、中心的活動である作業が多様なものになるにつれ「居場所」から「働く場所」という意味を変えた。ここで注目すべき点は作業所に「働く場所」という意味を持たせたのは利用者であったということだ。作業を仕事として捉えようとする利用者のニーズは支援者に伝わり作業内容を多様なものへと変化させた⁹。例えば、内職作業から原料を加工し自主製品を製造し販売する作業がある。喫茶店や食堂などの形態をとり接客や調理を作業として行う例もある。

筆者が作業所の職員をしていた頃に「作業をせず、利用者が過ごす場としての作業所」というものが少ないながらあった。発想としては黎明期のそれと同じであったがそれほど増えなかった。筆者はその実践例を利用者に提供し意義を問うたが、大多数の利用者は「作業をしないならば来ない」という考えを示した。このエピソードは支援者が「居場所」として「名前」をつけることから、利用者が活動内容について意味付けることへ変化した結果を示している。作業に各自が意味を見い出してやってくる。そうすることで彼らは「居場所」を得たといえる。

作業所が利用者の「居場所」であることに変わりは無いが、「居場所」が与えられたものから自ら得たものへと変質している。

⁸ もちろん、福祉の枠で考える「居場所」に限る。この点については稿を改めて考えたい。

⁹ 三野(2006)で詳しく述べている

そしてこの変化が作業によるものであったことは、福祉の文脈で語られる「居場所」を考える場合重要であろう。

その2 精神科デイケア

作業所利用者は作業をすることで「居場所」を得る。換言すると、頻度の差はあるが作業に参加することが「居場所」作りの前提となる。他方、作業などしたくないが行くところは欲しいという人がある。その人達の要求に応える場所として精神病院や医院の精神科デイケアが機能していた。

精神科デイケアの起源は 1946 年にロンドンとモンリオールでそれぞれ個別に同時に始められたという¹⁰。日本では国立精神衛生研究所の加藤正明らが 1959 年から 1 年ほど週 2 日程度の頻度で開始し、1963 年加藤らによって本格的な研究が始まった。1974 年には医療点数化され、翌 1975 年には保健所デイケア¹¹が開始された。

当初、精神科デイケアの目的は精神科病院からの退院後のアフターケアであった。加藤は著書の中でデイケアの機能について「デイ・ケアの治療機能はデイ患者（メンバー）を自立させることにある。もちろん、これまでにデイ・ケアについて論じられてきた際、デイ・ケアの目的は「患者の挫折を防ぐ」、「対人関係の障害を改善する」、「社会再適応を助長・促進する」、「前就業訓練

をして就労を容易にする」、「就労援助と職親の開拓——試験就職をさせる」などのことにありとされてきたが、これも相互に全く無関係なものではなく、また、「自立」とも無関係なことではない」と述べている。

加藤・石原（1977）

加藤は精神科デイケアの当初の目的について再入院の予防や社会生活に向けてのリハビリテーションと述べ、具体的なプログラムについて紹介している。その後、精神科デイケアのプログラムは軽作業や室内でのレクリエーション、外出などのほか食事の提供などの幅広いものとなった。利用者はこれらのプログラムへ参加をしたり談笑したりして過ごす。

作業所においても食事時間に友人と話しをしたりレクリエーションプログラムに参加することもありえるが、精神科デイケアではプログラムに参加することより、デイケアという場に通うことに重きが置かれるようだ。平成 21 年 6 月 4 日「第 18 回 今後の精神保健医療福祉のあり方に関する検討会」の資料によると、デイケア利用の目標（担当者による評価による）は再発・再入院予防が最も多く、ついで慢性期患者の居場所となっている¹²。

¹⁰ 加藤正明 1974 「デイ・ケアとは——その発想と意義」『デイ・ケアの実践』pp5-16 牧野出版から。また加藤は「1927 年ソ連（当時）のハリコフで始められたというが、どのような考えではじめられたか不明である」としている。

¹¹ 精神障害者回復者社会復帰相談指導事業が保健所がおこなう地域精神保健事業として開始された。吉川武彦 1996 『これからの地域精神保健——病院看護と地域看護の連携を求めて』医学書院

¹² 平成 21 年 6 月 4 日「第 18 回 今後の精神保健医療福祉のあり方に関する検討会」の資料によると、実施されているプログラムは家事等・日常生活技能の習得が最も多く、症状や再発サインへの対処スキルの獲得、疾病と治療についての理解、復職支援、服薬アドヒアランスの向上、その他の特定の目的となっている。

再発・再入院予防、慢性期患者の居場所について、薬剤処方についての相談・調整、回復期リハビリテーション、就労支援、在宅急性期医療の一環、と続く。平成 20 年度厚生労働科学研究補助金「こころの健康科学研究（「精神保健医療福祉の改革ビジョン」の成果に関する研究）主任研究者：竹島正、分担研究者：須藤浩一郎 からの援用である旨の記載がある。

しかしこの精神科デイケア利用目的の変容について精神（保健）福祉は「精神医療の囲い込み」と批判する。福祉現場でよく聞く批判としては「デイケアは医療行為の場であり「居場所」として機能させるのは問題である。「居場所」は医療行為ではないので福祉に「居場所」の機能を委譲していくべきである」というものである¹³。精神科デイケアを特定してではないが、社団法人日本精神保健福祉士協会が「2005年5月11日「障害者自立支援法案」についての見解」のなかの「精神障害者福祉政策に関する個別課題」で「精神医療の囲い込み」批判についての言及がみられる¹⁴。退院するとデイケアに通い、病状が悪化すると入院をする。その繰り返しは「精神医療の囲い込み」である。精神（保健）福祉領域はこの点を批判する。

では、入院から退院そして生活という医療という枠組みでの過程に福祉が用意した「居場所」が加わることで「囲い込み」問題は解決するのか。この点について、精神障害者の「居場所」を意識して創設され活動している精神障害者地域生活支援センタ

ーを取り上げ考察する。

その 3 精神障害者地域生活支援センターについて

精神障害者地域生活支援センターは1997（平成9）年「精神障害者地域生活支援事業」制度化され、1999（平成11）法定化された。精神（保健）福祉分野においてこの施設の創設は大きな出来事であった。

精神障害者地域生活支援センターが創設された前後の時期、精神保健福祉領域のソーシャルワーカーのなかには「福祉がやるべきことが精神医療領域によってなされており、それを福祉に分離・委譲させるべきだ」という考えをもつものがいたことは述べたとおりだ。この考え/感情は医療機関に所属しているソーシャルワーカーにも少なからずあった。それは前述した作業所作りの経過からもわかる。

地域生活支援センター以外の精神障害者社会復帰施設には「精神障害者生活訓練施設（援護寮）」、「精神障害者福祉ホーム」、「精神障害者授産施設」、「精神障害者福祉工場」がある。これらの施設は市区町村社会福祉法人や医療法人によつての設置が可能である。ただ、多くの精神障害者社会復帰施設は医療法人が設置主体となっており地域生活支援センターも1999年の法定化以前は医療法人が設置主体となることが多かった¹⁵。理由として、1999年まで精神障

¹³ 精神医療に限ったことではない。この場合批判する側である（精神保健）福祉に対しても同じような批判はある。指摘として『生の技法——家族と施設を出て暮らす障害者の社会学』、小田敏雄[2011]。また、「囲い込み」という言葉を適当なものとして使用するは否かは別に、福祉の同様の問題については稿を改めて考察したい。

¹⁴ 社団法人日本精神保健福祉士協会 HP 〈精神障害者福祉政策に関する個別課題〉
<http://www.japsw.or.jp/ugoki/yobo/2005.htm>
2. 市町村における精神障害者生活支援体制整備への国の役割と責任を明確化すること
……精神医療の地域偏在や精神医療による福祉的な囲い込みは歴史的で政策的に福祉政策の遅れを招いてきた。この軌道修正をすべて市町村の責任で行うことには困難が伴う。……

¹⁵ 厚生省保健医療局長通知の「精神障害者社会復帰施設設置運営要綱」に社会復帰施設の設置及び運営主体は、都道府県、市町村、社会福祉法人その他の者とする。との記載がある。要綱の冒頭の記された都道府県知事あての依頼に「貴管下市町村長、社会福祉法人及び医療法人等の関係機関に対し、貴職から通知されたい。」とあり、その他の者として医療法人が考えられ

害者地域生活支援センターは既存の精神障害者社会復帰施設に付置する形で制度化されていたため、作業所等の精神障害者福祉を担う多くの団体が法人格を持たず社会復帰施設をもてなかったことがあげられる。

1999 年以前、社会復帰施設の設置主体の多くは医療法人であったため、精神病院の敷地内や近隣に施設が建設され運用されていた。そのため社会復帰施設に付置する形で作られた地域生活支援センターの多くは精神病院の敷地内にあり、福祉領域あるいは精神科診療所のソーシャルワーカーは良い評価を下していなかった¹⁶。その後、病院の敷地の外に医療法人以外が設置運営する精神障害者地域生活支援センターが多く作られるようになる。

では、精神障害者地域生活支援センターの活動の目標とは何であろうか。精神障害者地域生活支援事業実施要綱¹⁷ではその目的を「地域で生活する精神障害者の日常生活の支援、日常的な相談への対応や地域交流活動などを行うことにより、精神障害者の社会復帰と自立と社会参加の促進を図ること」としている。

具体的な事業内容は、(1)日常生活の支援、(2)相談等電話・面接及び訪問により服薬、金銭管理、対人関係、公的手続等日常的問題、夜間・休日における個々人の悩み、不安、孤独感の解消を図るための助言、指

導、(3)地域交流等（場の提供）、(4)その他地域の実情に応じた創意工夫に基づく事業の四つである。四つの事業内容の中でまず注目したいのは(1)の日常生活の支援である。具体的にはどのようなことを言うのか。前出の要綱によれば「住居、就労、食事等、日常生活に即した課題に対して、個別・具体的な援助」とある。実際にセンター内で行われている日常生活支援の事業で多いものは「実費負担の食事の提供」であろう。これは筆者の現場経験に由来するのだが、様々な精神障害者地域生活支援センターのホームページでは実費負担の食事の提供（サービス）が記されている。栄（2008）も精神障害者地域活動支援センターの日常生活支援について、「訪問サービス」88%、「入浴サービス」54%、「昼食サービス」42%、「夕食サービス」38%（2000 年 10 月 31 日から 1 月 25 日に 204 箇所の地域生活支援センターを対象として実態調査）と述べている。

また、(3)地域交流等（場の提供）については明確に「居場所の提供」としているセンターが多い。

ここで「居場所」は提供されるものかという問いを立てる。言い換えると、かつて精神（保健）福祉領域から精神科デイケアに対する「精神医療の囲い込み」批判と同様なことが起こっている可能性はないかという問題提起である。

「居場所」が作られた後さらに食事や風呂が提供される。利用者の意味付けが希薄な「居場所」であるという点と実施サービスの内容において精神科デイケアと同質である。何を行うかによって名付けられた「居場所」脱し各々が意味付けた「居場所」へ

る。

¹⁶ 筆者が参加した精神障害者地域生活支援センターのフォーラムでは「医療法人立の支援センターが批判されているが、活動内容が正しければ設置主体や設置場所などは批判の対象とはならないはずだ」という主張が医療法人立のセンタースタッフより発せられた。

¹⁷ 厚生省保健医療局長通知（平成 8 年健医発 573）各都道府県知事、指定都市市長宛 「精神障害者地域生活支援事業実施要綱」

変化させることはあり得るが、「居場所」を作りそれを提供すること続けること（端的に言うと、福祉施設で出された食事を取り、何もせぬまま1日を過ごしている）は精神科デイケアに対する批判した点と同じであろう。医療から福祉へある機能を委譲させるとき、或いは専門家が預かっていたその人の主体性を本人に返す時に重要な要素として、誰が何を行いどのように参加するのかとい点があるだろう。必要なことは「居場所」という空間そのものではなく、「居場所」を各々が得るための取り組みである。空間としての「居場所」やそこでのプログラムは環境の一つに過ぎない。「居場所」作りは継続的な活動でありその取り組みは専門家の行いだけでは成し得ないものだろう。

2010年10月14日に行われた「第8回 民主党障がい者政策PT」でNPO法人全国精神障害者地域生活支援協議会（通称：あみ 以下、あみとする）は「障害者制度改革のあり方について」を提言している。その中であみは「居場所」機能の強化を謳っている。この「居場所」機能の強化を求めるあみの主張とこれまで述べた「居場所」に関するこの問題提起は立場を異にしない。「居場所」機能を利用者の活動によって各々のものに変容が可能であり、そのための条件整備の為にプログラムや場所が必要であるという主張に意義はないからだ。あみの主張は「障害者自立支援法における「就労」「訓練」への偏りを改善するため、従来の小規模作業所や精神障害者地域生活支援センター等が地域の中で担ってきた「居場所」としての機能—「安心」「安全」の確保—について、新たな個別給付事業の制度化

を含めた検討を行うべき」というものだ。これは制度によって「就労」「訓練」と福祉サービスが限定されることは、当事者が意味付ける余地を奪う事に抗するものであるとも理解できる。ただ、この主張をいかに捉え実践に移してゆくかについては更なる議論が必要だろう。

まとめにかえて

「精神医療の囲い込み」について精神（保健）福祉の立場からの批判と、精神障害者地域生活支援センターの「居場所」には共通する点が見られることは述べた。そして利用者が何かをする事によって「居場所」を得て行くこと、そしてそれには空間やプログラムが大きな役割を果たすことも指摘した。

ここで精神障害者のリハビリテーションモデルの一つであるクラブハウスモデルを紹介する。

クラブハウスモデルは、アメリカ・ニューヨークで始まった精神障害者の自助活動による相互支援を基盤にした活動である。

[……]

クラブハウスモデルの特徴は、「仕事に律せられた一日」という考えを基にしたプログラムをもつこと。本人の意思によるプログラムへの参加と、メンバーとスタッフのパートナーシップをそのプログラムに反映したこと。プログラムは療法ではなく「仕事」であることを明示したことなどが上げられる。

[……]

クラブハウスの活動は通常、月曜日から金曜日の1日8時間である。「仕事」は外部からの委託ではなく、クラブハウスの維持にとって必要

な仕事をメンバースタッフの区別なしに行う。

また、「過渡的雇用」(Transitional Employment: TE)という独自の一般就労に向けてのプログラムをもつ。

三野 (2009)

以上のようにクラブハウスモデルの取り組みの中心は仕事であるが同時に利用者の「居場所」をことさら強調する。クラブハウスでは利用者がクラブハウスに来ることや一度離れて後に還ってくることを権利として明文化している。また同時にクラブハウスモデルは意味のある仕事を提供し、意味ある人間関係を作るという権利も利用者に対して示す¹⁸。これらの権利の他にクラブハウスモデルは国際基準というものをもつ。クラブハウスモデルは全世界で実践されているモデルであり、そのベースとなる考えから大きく外れないために、活動やメンバースタッフの関係、立地条件などの考え方が国際基準として存在する。ここまで述べただけでもクラブハウスの活動が規定や基準によって定義付けられている事がわかるし実際にそうである。しかし、クラブハウス利用者は「クラブハウスは自分の居場所です」と異口同音にいう。しかもそれは自ら得たものとしての「居場所」である

18 ・ “The right to a place to come”

(来る場所への権利)

・ “The right to a place to return”

(帰る場所への権利)

・ “The right to meaningful work”

(意味ある仕事への権利)

・ “The right to meaningful relationship”

(意味ある人間関係への権利)

と主張する。その理由を筆者はクラブハウスにおける労働と関係があると考え¹⁹。クラブハウスでの労働は無給である。ただ、働くことで仲間や協力して仕事をするというスキルを得る。労働の対価として得るものがある。また、定められた規定は、全世界にある 400 箇所のクラブハウスが同一のものをを用いるが、各々のクラブハウスにおいてその基準についての解釈や矛盾点に関しての話し合いが行われる。そして世界大会において改定がなされる。もちろんそれぞれのクラブハウスの意見が必ず反映される保証はない。しかし全世界のクラブハウスに対して意見を述べる権利を持っていることが彼らの活動の根幹にある。クラブハウスがもつ規定された活動とその活動を自らのものにしていく仕組みは大変巧みである。これらの要因から利用者はクラブハウスを自らが所属している場であると言う。

「居場所」という言葉は冒頭に述べたように福祉実践者や実際に利用しているものや関わりのあるものが会話の中では使用する場合において便利なものかもしれない。ただ、それではマジックワードのようなものだ。「居場所」という多義的な言葉に実際の活動を回収させてしまうと、その活動の過程や現在の取り組みそこに集う人々の泣き笑いが隠れてしまう。さらに利用者にとっては与えられた「居場所」を自ら得た「居場所」に変化させるための多くの工夫と長い時間が必要になる。極端に言う「名付け」る主体が専門家であるならば当事者の動きの足かせになり得るということだ。この与えるものから自ら得るための支援をするという考えは現在の福祉に潮流であろう。

19 三野 (2011) で詳しく述べた。

ただ、ここでもやはり「自立支援」という耳障りの良い言葉に実際の「困難さ」が隠されている。

大学の講義で「居場所をつくるとはどういうことでしょうか」や「自立を支援するとはどういうことでしょうか？」といった質問を受けたときにどのように回答できるだろうか。知っている福祉実践を例示せずに答えられるだろうか。そのような動機で書き始めた。結局、結論めいたものは出なかったし、今後も出ないかもしれない。ただ、読んでくださった方がそれぞれ考えてくださるきっかけになればと思っている。筆者も考えるきっかけのつもりで書いた/書いていきたい。だから、異論や反論はぜひ伺いたい。(三野:nennemusi アット (←@に変換してください) gmail.com)

今回は「自立を支援する」ことについて考えてみたい。

参考文献・URL

- 安積 純子・尾中 文哉・岡原 正幸・立岩 真也
1995 『生の技法——家と施設を出て暮らす障害者の社会学 増補・改訂版』, 藤原書店
- 吉川武彦 1996 『これからの地域精神保健——病院看護と地域看護の連携を求めて』 医学書院
- 加藤正明 1974 「デイ・ケアとは——その発想と意義」『デイ・ケアの実際』 牧野出版
- 石原幸夫 1977 『精神科デイ・ケア』 医学書院
- 三野 宏治 2006 「精神障害者小規模作業所における作業の意味分析」 2005年度 立命館大学大学院応用人間科学研究科・対人援助領域 修士論文
- 2009 「アメリカ合衆国：社会福祉の現

状,IV地域精神保健福祉」『世界の社会福祉年鑑2009』 pp190-200,旬報社.

——— 2011a 「精神障害当事者と支援者との障害者施設における対等性についても研究—当事者と専門家へのグループインタビューをもとに—」『立命館人間科学研究』第22号:7-18

——— 2011b 「クラブハウスモデルの労働とは何か?」『生存学』Vol.3:174-184 生活書院

小田 敏雄 2011 「精神障害者支援におけるパートナーシップとエンパワメントに関する研究——退院促進支援事業の当事者支援員と専門職へのインタビュー調査から——」 『東洋大学大学院紀要』第47集、pp285-303

栄 セツコ 2008「精神障害者の地域生活支援——障害者自立支援法施行に伴う精神障害者地域生活支援センターの移行に関する一考察——」『桃山学院大学総合研究所紀要』第34巻第1号 p p 57-71

厚生省 平成21年6月4日「第18回 今後の精神保健医療福祉のあり方に関する検討会」
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/06/dl/s0604-7b.pdf> (2011年8月14日 閲覧)

厚生省保健医療局長通知「精神障害者社会復帰施設設置運営要綱」
<http://www005.upp.so-net.ne.jp/smtm/page1501.htm> (2011年8月14日 閲覧)

厚生省保健医療局長通知(平成8年健医発 573) 各都道府県知事, 指定都市市長宛 「精神障害者地域生活支援事業実施要綱」
<http://www005.upp.so-net.ne.jp/smtm/page0901.htm> (2011年8月14日 閲覧)

社団法人日本精神保健福祉士協会 HP 「障害者自立支援法案」についての見解〈精神障害者福祉政策に関する個別課題〉
<http://www.japsw.or.jp/ugoki/yobo/2005.htm> (2011年8月14日 閲覧)

「ほほえみの地域づくり」の泣き笑い ～青い森のほほえみプロデュース活動奮闘記～



山本菜穂子

<知事へのプレゼンテーション>

とうとう次は私たちの番だ。

大きな円卓に並ぶ知事、副知事、各部の部長。企画政策部の面々。

案内され、プレゼンターの位置へ。
(足がもつれそう)

パワーポイント準備完了。

「それでは、次のプレゼンに入ります。どうぞ。」

♪チン♪ プレゼンスタートのベル。

クルッと背を向ける。沈黙一呼吸。振り向きざま大きな声で

「何度言ったらわかるの！もう帰ってこなくていい！！」

私の怒声が会場に響き渡った。部長たちがビクッと背筋を伸ばし、次の瞬間「あ～びっくりした～」と知事の気さくな笑い声。(よし！成功！)

「そんなお母さんの怒鳴り声が隣の家から聞こえてきました。さあ、皆さんならどうしますか？このお母さんに、なんと声をかけてくださいますか？」

きまった！つかみはOK！

青森県職員庁内ベンチャー制度(以下「ベンチャー」という。)。職員が提案し、直接知事にプレゼンテーションし、知事からOKを得られたら、その職員自らが事業を実施する仕組み。平成18年度、当時県の本庁に籍をおいていた私はひょんな事から、そのベンチャーの仕組みで事業を提案しなければならない状況に追い込まれていました。私自身は、それほど積極的な押しの強い人間ではありません。むしろ、慎重で石橋は叩くうちに渡らずに壊しかねない人間です(と思っています)。ですから、もし、追い込まれていなかったらこんな新規事業を考えることもなかったでしょう。

でも一方で、やるとなったら頑張ってしまう性分でもあって、「どうせ何か提案しなければならないのなら、本当にやりたいと思っていたものをぶつけてみよう。」と考えるに至ったのです。それが「青い森のほほえみプロデュース事業」でした。

<なぜ、書くのだろう・・・>

はじめまして、私は現在青森県中央児童相談所でこども相談課の課長

をしています。夏の短い青森ではクーラーを持たない家庭も多く、暑くて窓を開ける季節になってくると泣き声が聞こえて心配だという虐待通告が増加します。最近では、「児童相談所です」と訪ねて行くと、突然絶望したかのように母親に泣きだされることもあります。いまだき児童相談所はよっぽど怖い機関なのかなとちょっと悲しくなったりもします。さて、今回このマガジンで書かせていただきたいと思ったのは、「青い森のほほえみプロデュース」という取組でのよしなしごとです。地域に、チェックマンを増やすよりは、安心してSOSを聞いてあげられる人を増やしたい、それによって児童虐待の発生を予防できるようなそんな地域づくりはできないか、そんな思いから立ち上げた事業です。

【青い森のほほえみプロデュース】

青森県を「ほほえみ」と「笑い」で満たし、子育て中の保護者に精神的ゆとりを生み出すことにより、子どもを産み育てやすい青森県を創り上げたい。

この事業は、虐待通告への対症療法に追われることで疲弊していた児童相談所での勤務経験から、虐待の「発生予防」のために役立つことをしておきたいという発想から始まりました。

虐待問題の背景には「孤立」と「精神的なゆとりのなさ」が必ず見られるとの指摘がなされています。では、「孤立させない」「精神的ゆとりを生

み出せる」そんな環境を整えるために何かできることはないのだろうか。

平成18年度、全国ではじめての「ほほえみの地域づくり」を提案し、県の事業として認められ開始したのが平成19年度でした。東京医療保健大学の高柳和江教授に支持し、先生がつくってくださった「ほほえみの7か条」(自らがほほえみ、周囲にほほえみを生み出すための7つのポイント)を県民に伝えながら、学んでくれた県民には一緒にほほえみあふれる地域を創ることに協力してもらう。そんな仕組みで先生と県民と一緒に進めてきた取組です。

「寄り添ってほほえむことから始めよう」そんなキャッチフレーズで講習会の受講を勧奨し、事業開始から5年目の今9月で、「ほほえみの7か条」を学んでくれた「ほほえみプロデューサー」が5歳児から90代までのべ30,000人を超えました。青森県民約138万人の46人に一人は、自らほほえみを広める人＝“ほほえみプロデューサー”になったのです。

「青森県が児童虐待関連事業として実施した『青い森のほほえみプロデュース事業』は、ポピュレーションアプローチとして第一級のものだったと評価している。なにしろ、他人の悪口を言い、他人のあらをさがし、否定的な視点でしか物事を見れない青森気質に敢然と立ち向かったのだから！」

現在、青森県むつ児童相談所の所

長であり、青森県臨床心理士会の会長でもある関谷道夫氏が昨年度、ありがたいことにこの取組をこのように評してくれました。(青森気質が本当にこのようなものかどうかについては、青森を愛する青森県人としての彼自身の自嘲的匂いが半分か。よしんばそんな傾向があったとしてもそれって青森県人に限ったことでもない気がしますね。ちなみに私自身は結婚して青森県人となった元都民、現在は南津軽郡田舎館村(いなかだてむら)の村人(むらびと)です。)

そんな取組について今回、団士郎さんにお話し、書かせていただくことにしました。私の中では団さんからの影響は少なからず。この取組が芽を出すための土壌には、団さんからもらった肥料がたくさんたくさん混ぜ込まれていたのですが、あのときのあのことばがこんなものを生み出したんだと話しても団さんは「そんなこと言ったか？」といつもそうおっしゃいますが・・・

私がこの取組の種を手にしたのは平成9年度。種を蒔いたのは平成18年度。「願い続けていたら必ずかなう」って言ったのは団さんでした。(よね。ですよ。)だから、忘れずに願い続けていました。そうしたら種を蒔く時期が訪れました。

事業開始以降無我夢中で走り抜けてきたこの5年あまり。何の必然で？何の幸運で？この事業が形にな

り、発展したのか、実は私自身にもわからないことが多いのですが。難しいことは書けないけれど、「初めて」のことを作り上げながら(初めてって、想像以上にたいへんでした。)大切にしてきたこと、捨ててきたこと、守ってきたこと、守られてきたこと、感じたこと、考えたことを、残したい、伝えたい。そして、もし、何かしら参考にしてもらって、誰かが次に進む勇気の素になったら嬉しいなとそんな気持ちです。

本当は当たり前のことだけれど、10年後は今この瞬間に始まっているっていうそれが私の実感です。

これを読んでいる皆さんも、大事だと思えることは忘れずに実現を願い続けましょうよ。きっとかなうから。これを実感と共に伝えられる様になったこの5年間です。

さてまずは、この事業の氏素性についてお伝えするところから始めたいと思います。

事業の種を手に入れた平成9年度のお話からです。

<ほほえみ事始め 黎明期>

平成18年度に事業を組み始めたとき、周囲から「青森県でお笑い芸人でもつくるのか？(宮崎県ならいざ知らず・・・)」そんな声を何度聞いたことか。でも、これは、いたってまじめな挑戦でした。

平成9年度、児童相談所に勤務していた時、所内の自主研究活動として管内の保護者約1,000名を対

象に虐待に関する意識調査を行ったことがあります。

その時、調査の主要部分とは別に、こんなことを自由に記述してもらいました。「虐待をした保護者をどうしたらいいと思いますか？」「子育て中の保護者が虐待に至らないために必要なものは何だと思いますか？」

一番多かった回答は、「虐待をした親は罰すればいい」というものでしたが、約1割が「親だってたいへんなのにわかってもらえない。」「責められるような気がして相談に行きにくい。」「援助を求めると、自分が求めている以上の要求をされる気がして嫌だ。」「あたたかい地域が欲しいのに。」というものでした。当時「まるで『北風と太陽』だな」と思っていました。相談に来て欲しかったら、相談しやすい環境をつくること。それがとても大事だと思えました。

そこから約10年、青森県における児童虐待防止対策は、早期発見、早期対応から始まり、平成17年度からは家族再統合の取組に力を入れるという経過をたどって着実に進めてきています。

でも一方で、個人的には先ほど説明したアンケート調査の結果がずっと気になっていたのです。保護者が望んでいた「責めないで、辛さをわかってくれる、あたたかい地域」。そこには何も手が着いていない。そんな地域づくりができれば、きっと、虐待の発生を未然に防止するための大きな力になるはずだと思えるのに。でも、どうやって・・・

その想いを平成18年度までどこかで引きずったままの私がいきました。

＜実は大きかった個人的因子

ほほえみとの出会い前夜＞

私、神様（人の意志を超えた思惑？）っているって思うんです。ほほえみの事業を形にする前に、生半可でなく本気で取り組みたいと思えるように、神様はいろいろな試練を用意して、後々の決意を強めようとしていたんじゃないかと今になれば思うのです。

平成15年度に私は定例人事異動で児童相談所から引き離され、41歳にして（お～～堂々と年齢を書いてしまった）初めて県の本庁に勤務することになりました。

それも、児童福祉とは直接関係のない部署。「健康福祉政策課企画政策グループ」という健康福祉部主管課の中の企画部門。その時、本庁に勤務することなどまったく想定していなかった私は、その名前を聞いただけで萎縮！だって、これまでの対人援助職としての経験が活かせるとは到底思えず、予算？議会？何もわからず。そして行ってみたら本当に「ことば」が通じないのですから。それまでの児童相談所勤務で少しはあったはずの自信もすぐにどこかに行ってしまう、「誰の役にも立てない自分」という新たな自己イメージがだんだん強くなり。夏くらいには、いなくなってしまうたら楽だな～などということも頭をよぎったり。上司

は私に「あなたは自分のことを駄目だと思っているかもしれない。確かに周りには本庁慣れしていて、予算も議会对応もなんでもこなせる職員がいるだろう。でもあなたには、彼らにない出先機関での経験がある。出先を知っていてそれに基づいて本当に県民にとって必要なものを形にできるのはむしろ彼らでなく『あなた』なんだよ。」とそうことばをかけてくれました。(素敵な上司でしょう。こうなりたい。)

そう、一人一人に価値があるって、これまで私だって多くの子ども達にそのように伝えてきたはず。でも、いざ自分がそれを見失う立場になると、そこから立ち直るのはとてもたいへんで。それから私は、一生懸命愚痴を言うようにしました。これ以上自分がまいってしまわないように。そしてできる限り笑顔をつくる様にしました。形から気持ちが変わる(これもかつて団さんから聞いたけど。)ことを信じて。そしてもう一つ、この経験は覚えておこうと思いました。「人は誰の役にも立てないと感じたとき、ひどく力を落とすものであること。逆に誰かの役に立てると感じられたらそれが生きるための大きな力になるはずだということ。」このことを覚えておいたら、きっとこの状態から立ち直ったとき、何かの役に立てられるはずだと。私自身が、形だけでなく心から笑えるようになったなと感じたのはその年度の2月でした。

もう一つ、平成15年度に神様がくれた試練は、夫の病気でした。血液のがん。「もしこのまま薬が効かなければ余命1か月です」と宣告されたのは秋でした。その時、夫の友人が熱心に話してくれたのは、笑うことで免疫力が高まるということでした。もともと素直な！私は、とにかく笑っていようと決めました。そして、夫と一緒に落語のDVDを見て、子ども達の日々の様子を楽しく語り。泣くのは病院から家までの車の中だけと。詳しくは書きませんが、なかなか効果が見えなかった薬が効き始め、結果、夫は今も生きています。(最近はお酒の飲み過ぎが気になるくらい。)笑ったことにどのくらい効果があったのか、それは確かめようもありません。でも、それは「ほほえみ」を組み立て始める3年も前に、確かに私が経験したことでした。

平成15、16、17と3年間、とにかくにも、企画政策グループで「企画」して「予算」を組んで、「財政課」に説明して認めてもらって、「議会」に向けて事業説明を行うなどという経験を積むことになりました。それは「ほほえみ」を創るにあたり、基礎となる知識経験となっていました。

そして平成18年度。私の計画では、本庁でのつらい3年間の苦役を終えて、児童相談所に戻っているはずでしたのに、本庁にいたまま隣の部屋の「こどもみらい課」へと転勤になるのです。

そこで、「ほほえみ」を創ることになる最後の試練が待っていました。

その試練は、こどもみらい課に転勤になって早々の4月にやってきました。

<ベンチャー事業組みへ>

実は、こどもみらい課で、私は、その時青森県が重点的に進めることにしていた「家族再統合」事業の2年目を担当することになっていました。そして着任早々の私の役目は、事業の1年目に実施した海外先進地視察（青森県も頑張っているでしょ！）の報告を知事に行くことでした。課長と一緒に出向いた知事への報告。その終わりに知事から発せられたのが「児童虐待防止対策をベンチャー事業で組んでみたらいいのに」という一言でした。課長は「そうですね。」と軽く（そう聞こえた）答えています。あれ？今、何か言われた？それって誰がやるの？何をするの？まさか・・・

しばらくすると、「菜穂子さん、そろそろ考えないと間に合わなくなるわよ。」ん？？

あの時感じた不安は、やっぱり。

そこで、忙しさが更に倍増するという泣くに泣けない腹立たしさの中、私の「どうせやるならいい加減なことはしたくない。意味があったと思えることをしたい。」といういつもの悪い（？）癖が頭をもたげ。あの、ず〜っと引っかかっていたアンケート結果を形にできないかと考え始め

ることになりました。まあ、ここの産みの苦しみの詳細はおいておくとして。

今、おそらくどこの地方自治体も財政的にゆとりのある状態ではないでしょう。その中で新規事業に予算をつけてもらうということは実はとてもたいへんです。その中でベンチャーという仕組みは、意欲のある職員にとっては（私のように追い込まれた者にも、かな）想いを形にできる数少ないチャンスとして意義の大きいものと思います。何せ知事に直接ものを申してお金と人をつけてもらえるかもしれないのですから。

さあ、事業の形を整え、現状、課題、目的、方法、新規性、県がやるべき理由などをペーパーにまとめ、まずは、政策調整課のチェックを受けることになります。前例はある？ないです。効果はなに？あたたかい地域。ターゲットは誰？県民全員。おいおい！そんな事業あり？という中身なのです。行政的には。政策調整課や財政課は当然厳しいのです。この事業に大事な税金を使って県民から納得を得られるのか、という視点ですから。でも決して敵ではないのです。みんな少しでも県を良くしたいと思っている仲間なのです。そのことは過去3年で学んでいました。そして担当してくれた職員は皆一生懸命、こちらの真剣な想いを聞いて理解しようとしてくれました。その時、ベンチャーで提案されていた事業が何本あったのか、詳しくはわかりません。でもまずは、知事へ

のプレゼンテーションの権利を得られる5本に残れるかどうか。それがこの政策調整課へのヒヤリングにかかっていたのです。最後、「想いはわかったけど、結果がイメージできないんだよな～～う～～ん」と。そりゃそうでしょう。だって、初めてやることなんだもん。提案者の私にだって何が起こるかわからない。でも、これが大切だということだけはわかるんだもん！！と、そんな気分で。そこで禁じ手「でも、知事がベンチャーで事業を組むようにって言ったので、せめてそこまでいけたらな」とボソッとつぶやき。・・・ハハハ、そんな言い方は女性の強みかしら。何とか温情で残らせてもらいました。

<知事へのプレゼンテーション>

やっとそこまで行ったのに知事プレゼンを前に私は萎縮していました。知事の前でプレゼンをする。きっと本庁経験の豊富な、行政マンとして優秀な人たちは、統計や様々な分析データを持ってきてきれいにグラフや表を使って整理するのだろうな～。私もまがいなりに本庁に籍をおく人間だ、それをしないと格好悪いのだろうな～～。私にもそんなことを期待されているんだろうな～でも、どうしようかな～、できそうもないしな～

「健康福祉部からベンチャーで事業提案するのは、今回が初めてだ」とかそんな雑音も聞こえてきて、何だかこれを通すことが部の威信に関わるかのような気分になったり。

そんな見栄と迷いで何日も暮らしていました。

あ～～もう間に合わなくなるぞ～～せっぱ詰まってきました。で、ふと思ったのです。

私はこの事業をどうしてもやらなければならないの？いや、できないならできない方が、これ以上忙しくならなくていいじゃない。知事がやってもいいと言えやればいいし、やらなくてよいと言えやらなければいい。そう開き直ったら、知事プレゼンの見え方が変わってきました。せっかく知事に直接児童相談所のことを伝えられる機会ができたんだ。私が伝えるべきは「この取組にはきっと意味がある」と、児童相談所を経験した私自身が思っているということ。児童相談所で仕事をしているとこんなことを感じるのですよという、私が知っているけれど知事は知らないことを知事にわかってもらうこと。あれ？これって地域関係者に対して行う研修会と同じ感覚じゃない。そうか、じゃあ、とにかく、私の持ち時間の8分の間、知事に興味を持ってちゃんと話を聞いてもらえ工夫をすればいいんだ。

見えた！何をすればいいか、何をしたいか。

練習を重ね、時間もピッタリ。そうなってくると、今度は当日が楽しみに。

順番は5本中3番目。別室での待ち時間、一緒にこの事業提案に名を連ねてくれた関さんと掛け合ってい

たことばは、「今日でおしまい。私たちのこのプレゼンの目的は、知事や各部長達に児童相談所をわかってもらうこと。事業自体は突拍子もないことを考えているのだから、駄目で元々。この事業のことを考えられるのも今日が最後。だから、思い切りやってこようね。」ということでした。

最初の仕掛けがうまくいくかどうか、気分はドキドキと、そしてワクワク！でした。

そして、冒頭に書いたようにつかみはOK。つかみがOKなら、たかだか8分。興味を離すはずもなく、と、気持ちはそんな勢いでした。でも、さすがに緊張。

伝えたのは、「虐待」とレッテルを貼ってチェックをすることも必要なときはあるけれど、一方で安心してSOSを出させてあげる地域がほしい。そんな地域の関係を「ほほえみ」を広めることで作っていききたいということ。

終了後、居並ぶ各部長からのコメントは「家族や地域の温かさか。忘れていた大切なことを思い出させてもらったよ。」「県職員にもこんなプレゼンのできる人がいたんだな～」

そして知事からは、「こういう突き抜けたものが欲しかったんだ。」「笑うことでとんでもなく悪いことが起きるということは考えにくいよね。」「現時点では行き着く先が見えなくても、やっていくうちに何かが見えてくる取組のような気がするよ。」と

いうことでした。(緊張していて、しっかりと覚えていないというのが本当ですが、確かこんなニュアンスのことを言ってくれたのです。)

とても嬉しくなりました。何がかという、「結果、結果」と、近視眼的に結果を求められることが当たり前になっていると感じる昨今、知事は、「過程の中で何かが見えてくる、それが大事だ」と言ってくれたのです。過程に意味がある、それはまさに、現場にいて感じていたことでした。

私は、こんな風にこの提案を応援してくれた知事に、勝手ですが信頼を感じました。そして、この信頼には、何とか報いたいと思ったのでした。ほほえんで温かい地域をつくることによって。単純な人間ですから。さあ、奮闘記の始まりです。

◎青い森のほほえみプロデュース事業概要について、詳しく知りたい方は下記でご覧いただくことができます。

＜青い森のほほえみプロデュース事業—青森県庁HP内—＞

<http://www.pref.aomori.lg.jp/life/family/hohoemiindex.html>

＜青い森のほほえみプロデュース推進協会公式サイト＞

<http://hohoemiaoimori.web.fc2.com/>

■ 巻 末 座 談 会 ■

鶴谷主一氏の「幼稚園の現場からⅣ」を読んで、

障害のある友達と過ごすとは？

インクルーシブ教育、統合教育を考える



元小学校校長 「幼稚園の現場から」 「やくしまに暮らして」 「1工程@1円～」

石原 恒 + 鶴谷主一 + 大野 睦 + 千葉晃央

大野、千葉の元学級担任

原町幼稚園園長(静岡)

ネイチャーガイド(屋久島)

社会福祉士(京都)

26年前、大阪府豊中市では、障害をもつ友達とたっぷり一緒に過ごす学校生活があった。26年後の現在、静岡県沼津市に障害を持つ幼児を受け入れはじめた幼稚園がある。時間も地域も違うこの2つの実践現場。今回、障害を持つ友達と一緒に過ごすという共通の経験から話してみようと集まった。国がインクルーシブ教育（特別なニーズを持つ子どもも可能な限り、地域の通常の学校に在籍し、そのニーズにあった支援を受けながら、他の子どもたちと共に学ぶ教育）の方向を検討している現在、これからも同じような場面が存在するのは確かだ。障害を持つ子どもたちがいて、共に過ごす生活。そこでは、過去に何が起こってきていたのか、今何が起こっているのか、未来に何が起こる可能性があるのかをここであらためて取り上げてみたい。

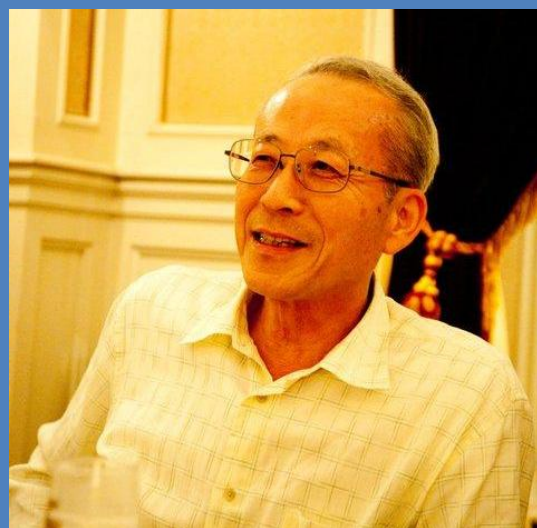
対人援助学マガジン第4号の「幼稚園の現場からⅣ」（鶴谷圭一著）を読んでいただきたい。この連載を読んで、障害を持った子と一緒に学ぶ教育（統合教育、インクルーシブ教育）が日本のごく限られたところでしか行われていないということに触れた記事（福祉新聞 2010年10月18日号 1面 「論壇 インクルーシブ教育との隔たり」 嶺井正也）を思い出した。そこには、行われている地域として、大阪府豊中市があがっていた。対人援助学マガジンに連載中の大野睦さん、千葉晃央が育ったところは豊中。そこから、一気に頭の中はタイムスリップ。26年前に、ある先生が私たちの小学校に赴任してきた時にさかのぼる。ちょうど数ヶ月前に、当時の担任、その石原愷先生と26年ぶりの再会をはたしていた2人は、自分たちの体験と鶴谷園長の体験が重なるところの多さに驚き、時の流れに左右されないものを探してみたいと感じた。

福祉新聞2011年7月18日号1面の記事によると、地域の小学校中学校で障害を持つ子どもも学習するインクルーシブ教育を進めようということを、現在、国は検討中である。では、これまで及び現在、障害を持つ子どもと共に学んできた学校、幼稚園をみることで、これから起こるであろうことが予測できる。予測できることで対応の準備もできるのではないかと考えた。

会場は、兵庫県の宝塚ホテルの会議室。静岡、屋久島、京都から、4人が手弁当で集まった。

石原 鶴谷先生の対人援助学マガジン第4号の連載を読ませていただいて思ったのですが、幼稚園で説明会の時に「障害を持つ

た子どもがクラスにいます」ということを、きちんと伝えていこうということをやりはじめたことに関して、とても大事なことだと思いました。時代や、クラスや、学校によっては、「障害のある子がいることを伏せよう」ということがあった時期がありますからね。



いしはらひろし 満州生まれ。大阪府の教員として、豊中の小学校を歴任。教頭、校長も務めた。現在、自治会長を務め、子どもたちに向けた公園での遊びの会「おーい遊ぼおーよ」を継続し、地域に向けた活動を精力的に行っている。大野、千葉の元学級担任。

障害を隠す

鶴谷 それは今もありますよ。卒園児の話しですけども、卒園してから自閉症という診断が出たんです。小学校の在籍している学級で、お母さんは子どもに障害があることをカミングアウトしたくて仕方がない。

けれども、先生がカミングアウトに関しては駄目だという。そんなことを言ったら大変なことになると。先生にしたら、他の親からクレームが来るんじゃないかな、という懸念があるようです。結果、カミングアウトさせてくれています。多分、クラス



(写真)

つるやしゅいち 京都市山科生まれ、3歳から中学まで九州宮崎市育ち。田舎を飛びだして高校は新潟のミッションスクールに通い、大学受験に落ちて実家の幼稚園を手伝っているうちに幼稚園が面白くなり、東京の専門学校で幼稚園免許と保育士資格を取得、そのまま東京の葛飾みどり幼稚園に5年勤務、その後恩師の誘いにより香港のオイスカ日本語幼稚園に2年勤務、帰国と同時に東京時代に結婚した妻の実家（原町幼稚園）に勤務して現在に至る。

の先生にもよると思うのですが、学校全体の方針ではないようです。その話をきいて、ちょっと残念だなと思っています。今も昔も変わってないなあと。ただ僕も、障害を持った子がいますと明言する幼稚園の方針を出す前までは、もっとどこにでもある一般の幼稚園でした。障害を持った子どもをなんとなくは受け入れていたけれども、こういうふうにはっきりした方針は出していませんでした。そのことへの私の反省の上で、方針を出した方がいいだろうと判断しました。

反対！

鶴谷：反対派も、もちろんいて「園長に直訴しよう」という動きが保護者からありました。職員からはなかったです。その保護者は「障害児をどんどん入れたら、たまらない」ということで署名をしようという動きでした。それが、僕の耳に入ったんです。けれども、その人は署名が始まる前に、「どうしても黙ってられない」と私のところに来られました。お話をして、だいぶ納得されて、実際には署名活動はありませんでした。ちょうど今は、障害を持っている子も成長して、トラブルのようなことが起きなくなっていました。

千葉：子どもがちょっと変化したからですね。

石原：子どもが変わると、親御さんの気持ち動くからね。

経験に左右される意見

鶴谷：年少の時に、障害を持った子に暴力的なこと等をされたと感じているお母さんたちは、やっぱりマイナスのイメージを持っています。そういうことがなかったお母さんたちは、そうでもないです。クラス替えがあつて、担任に家庭訪問で、全ての園児の家庭にきいてもらいました。「障害を持った子がいることに関して、どう思っていますか？」と。やられたと感じているお母さんは、やっぱりちょっとこわいと応えました。何となく頭ではわかるけれども、気持ちではなかなか…ということでした。以前、そういった接触がなくて、新しいクラス編成で障害を持つ子と一緒に組になったお母さんは、幼稚園の障害を持った子に関する方針をみて「何かいい経験をさせてもらえんと思っています！」と仰ってくださいました。だから、自分の経験で、障害を持った子にやられたという印象を持っていなければ、結構受入れはしてもらえます。ただし、障害を持った子が、また同じ子どもに対して、何度も同じような関わりを繰り返すようなことになると、また、保護者の方々の意見もくすぶり出しますね。

障害の問題にすり替わる

千葉 普通に、仲が悪い子ども同士もいますよね。障害があることで、相性の問題かもしれないのに、相性ではなくて、障害を持っているからだとして「すり替わる」のが、



おおのむつみ 大阪府豊中市出身 日本福祉大学卒。屋久島に移住し、ネイチャーガイドを務め、有限会社ネイティブヴィジョンを設立 代表取締役。ウミガメの保護活動にも従事。「やくしま森祭り」「東京森祭り」等も主催し活躍をしている。

難しいところですね。「障害児問題」みたいなところに。

鶴谷 普通の子どものいさかいと同じように考えればいいんだけどね。

千葉 障害の有無に関係なく、相性が悪い子たちもいますもんね。

鶴谷 そう。

石原 保護者の気持ちの中で、障害を持っている子がいるから教育環境がよくないのではないかと、ずっと思っているところもあるね。だから他の子に叩かれたことは何も言わないけれども、障害がある子が叩くと「そんな子が自分の子のクラスにいるから…」という意識が出てくる。障害の子が何かしたことをきっかけにして。ケンカはどんな子でもするからね。咬む子もいるし、蹴る子もいるしね。そうとらえないで、障害を持った子がいるから…ととらえるというところが、まだまだありますね。

鶴谷 障害のある子の問題にはしないという感覚を、自然に持て！ということはやっぱり難しいかもしれません。だから、園の方針として出すことにしたんです。

石原 大事やと思いますね。園がしっかり方針を示すことで、保護者も安心しますね。

千葉 「障害児を受け入れません」と案内に書いている幼稚園もありますよね。

鶴谷 もちろんあります。幼稚園に入園をいっぱい断られてきて、私の幼稚園に来る障害を持った子もいます。私のところは幼稚園と保育園と隣にあって、現在、保育園にも障害のあるお子さんを入れて欲しいというのがあります。けれども、経営との兼ね合いが難しいです。どんどん入っていただくというわけにはいかないのが現実です。

経営の難しさ

鶴谷 私立は難しいところがあります。どうしても、営業、経営と幼稚園の評判というものが一体になっていきます。今のところ、私の幼稚園は「あったかい」、「なんか面白いことをやっている」、「楽しいことをやっている」という感じで保護者の皆さんに支持されています。けれども、「障害児を受け入れる」というような噂が広く出てしまっていて、障害がある子ばかりが来たら、それはまた困ったことになります。

この前、障害を持つ園児のお父さんが電話をくれました。発達に関して、病院で調べてもらったら、驚くような発達をしているといわれて喜んでおられました。悪いところは何もないといわれました、と仰っていました。その話を聴いて、残念だったの

は、自分が経営者じゃなかったら、よかったですね！と率直に喜ぶことができます。けれども、もちろん、喜んでいる自分がいるんだけれども、障害児として診断書が出なければ、今度は幼稚園の経営としては補助金が来ないということになります。補助金が来ないと、今加配の専属で、その園児さんについてもらっている先生の人件費が出ないというような問題が出てきます。そうすると、あんなに喜んでいるのに障害がありますという診断書をもらって欲しい、というお願いをしなくてはいけないんです。

一同 あー、なるほどね。

鶴谷 けど、その専属の先生をつけないと、やっていけないというのは事実です。いくら医者が問題ないと診断しても。そのジレンマで、悩みますね。

石原 それは園長という立場としては悩むところですね。



ちばあきお 大阪府豊中市出身。社会福祉士。立命館大学大学院 応用人間科学研究科 臨床心理学領域 修了。社会福祉法人京都国際社会福祉協力会、京都造形芸術大学 勤務。知的障害者施設支援員、教職、家族面接スタッフ等として従事。

鶴谷 それを園の経費を削ってでもいいからやれ！ということは、もちろんできるけれども、引き受けた以上、退園はさせたくない。加配の先生に「ごめんね、雇えなくなった」となると先生へのシワ寄せが出てきます。先生も悠々と子どもを保育していらなくなります。職場が大変になってしまうと、みんながギスギスしてしまいます。そうはならない制度があるといいなと思います。障害があるから保育料を2倍いただきますというわけにはいかないわけですから。私の幼稚園の担当行政では5月～9月に障害を持った園児がいるかいないかを出さないと加配の補助金対象にはなりません。そういうふうに線を引いてきます。

石原 先生が一人いるか、いないかでだいぶ違いますからね。

鶴谷 やっぱり、補助金の対象にならないと幼稚園全体の負担は増えます。経営者として、その環境に関しては最終の責任がある立場です。そうすると、先ほどの喜んでいる保護者の方に対しては申し訳ないけれども、「障害があります」という診断をもらってきて欲しい、とお願いするしかないのかと悩みます。

石原 なるほどね。

鶴谷 そうすると嫌じゃないですか、園長は金のことばかりいってとなるとね。結局は、そういうジレンマです。例えば、私の園は、先ほども触れたように保育園も運営しているんですが、先日保育園に入園希望で来られた方のお子さんで、明らかに一人診断書をもらっていないのですが、明らかに一人では集団の中で過ごせない様子です。その保護者の方に、診断書をもらってもらえますか？もらってくれと入園できます、

ということになります。

大野 必要なんでしょうけれども、そこは行政にきっちりサポートをしてほしいね。そういうストレス。

鶴谷 そのストレスで、幼稚園はみんな悩んでいます。だから、そんな手間のかかることをするのなら「障害を持つ子の入園に関してはお断りします」ということになってしまう。

千葉 障害者雇用と似ていますね。補助金制度があるかないかで、現状が左右されるというところが。

大野 だから経営者としては、できる責任を自分のところでみる。それができるだけの経営的な体力がなければ…ですよ。

鶴谷 そうなんですよ。それで、障害児を受け入れて、なおかつ保育効果が上がらなければ、評判は落ちてしまうわけですね。

千葉 悪循環になりますね。

鶴谷 そうそうそう。

大野 なんのために？ってね！

鶴谷 そうなんです。

千葉 大事なところですね。

大野 そういうことが障害者に限らず世の中のいろんなところで起こっているのだろうなっていうところやね。

鶴谷 現実的な悩みです。今のところ、うまく回っていますけれども、診断書をもらわないと行政の補助が受けられないというところがね。いくつかあるハードルの一つですね。

千葉 そういうことを私たちが知っておくのがまず大事やね。

ノーマライゼーション？

鶴谷 幼稚園で、障害児を引き受けることは、子どもたちのノーマライゼーション意識を育てる上でメリットがあります。でも実際に専門知識も無い僕らが受け入れるということは、経営的、保育的に結構高いハードルがあります。経営的な面は先ほど話しましたが、保育的にも苦勞があります、障害のある子どもの発達を保証するための個人プログラムを立案出来るような保育者は一般の幼稚園にはいない訳です。ただ預かって、その子が居心地のいい環境を作る。そして先生と子ども同士の関わりで発達してくれることを期待するしかないんです。「たぶん一緒に保育すれば発達する」と思っても、根拠は経験しかない。一生懸命やっているからいいでしょう！という訳にはいかない、障害のある子どもを含めてクラスの子どもたちみんなが成長発達していくための良い保育をしなければならぬ義務があります、大きなトラブル無しで。

そんな私立幼稚園の状況で、メリットとデメリットを天秤にかけたとき、なかなか釣り合わないと考えて障害児の受け入れが進まないのではないかと思います。

大野 理想論でいえば、こういう現実に関する発信があることで行政を変えるような、動きになるといいけどね。

鶴谷 以前の別の自治体では、障害があると認定すれば、その時点で補助金対象として認定するというシステムを取っていたそうです。だから、幼稚園も障害を持った親御さんたちも、みんなが喜びあえる。今は5月の段階で人数を行政に報告をして、その予算枠を決める。何人で、いくらですと。

だけど、本来は予算枠なんて決められるわけない。途中から、わかることもありますからね。

同じじゃなくていいよ

鶴谷 うちの幼稚園の下地として、「みんなが同じじゃなくていいよ」という考え方がベースにあります。だいたいの幼稚園は、みんなを同じにしがります。うちは、例えば給食を週2回していますが、毎日お弁当でもいいんですよ。弁当で貫き通したいお母さんは弁当にしてもらって全く構いません。ひとクラスのなかに、お弁当を食べている子あり、給食を食べている子あり、そのような風景をつくりたかった。それに慣れて欲しい。みんなが同じではない場面をつくると、みんなが一緒じゃなくてもいいんだ、という意識が子どもたちに自然と育つからです。そういうものが育っていないと、障害がある子たちが入っても、みんなと違う！ってなってしまう。

誕生会は、誕生日を迎えた子がみんなの前で、舞台の上にあがってインタビューしてもらうんですけども、障害を持った子の誕生日の時は本人もいつもと違う場面です。なので、なかなか落ち着かないこともあります。それでも、みんなは落ち着いて、待っているんですよ。きちんと説明もしていたので。

千葉 子どもたちには、どうやって説明したんですか？工夫とかされていますか？

鶴谷 みんなに説明しています。園児たちにわかる言い方なので「〇〇ちゃんは、まだ少し赤ちゃんだから、みんなが座ってい

る時に座ってられないこともあるよ」という話をしています。それをしないと比べる子がいます。「あの子は遊んでいるのに、僕はなんで遊んじゃいけないの？」と。それがきっかけの一つになって、クラスの雰囲気は乱れてしまう時もあります。それでも、時間がたつとその障害を持った子との付き合い方も、だんだんわかっていくんです。その子がこうなっている時には、こうした方がいいかなとか。

今回、原町幼稚園の園便り『はらっぱ』に障害を持った子の保護者からの手記を掲載しました。そうすると他のもう一人の障害を持った子のお母さんも「私も入れて！私も書きたい！」「いいたい！」という話も出てきました。他の健常児のお母さんからは「よく分かりました！」というようなメールをいただきました。そういった反響を今もらっています。少し変化が出ているという感じです。手記を書いてもらってよかったと思っています。



石原 なるほど、のびのびしているから、子どもの良い面が出やすいですね。押さえつけたり、子どもをみんな一緒にしようとしたりしていないと。よく梓にはめてし

まうからね。(大野、千葉をみて) 君ら、梓にはめられんでよかったな〜。

一同 (爆笑！！)

大野 思いっきりはまっていない、感じ。

千葉 そうかも。

怒って退園

鶴谷 市内の他の幼稚園でも障害を持った子を受け入れていますけど、私たちのような方針は出していません。僕も、方針を出したのは今年の3月です。毎年、障害を持った子が1人、2人はおられますが、数年前はそのあたりはタブーという空気がありました。ずっと前に、幼稚園側からみて障害があるのではないかと思った子どもがいて、そのお父さんが養護学校の先生でした。だから分かっているだろうと思って、お父さんに、「ちょっと診断を受けてみられたらどうですか」という話をしたら、怒って退園してしまいました。その頃はカミングアウトなんて、とても難しいと感じていました。「ちょっとあの子は、あれらしいよ」というまま受け入れて、みんなにはだんだんわかっていくような雰囲気でした。先生たちはもちろんわかっているけれども、でも親にまでははっきりとはいわない時代が最近まで続いてきました。僕はあのショックなこと(※)があったから、「はっきりしなくてはいけない！」と思いました。あの時、保護者の方に、そういさせた(※)のは私の責任だと思いました。(※ 幼稚園の行事のあと、障害を持った子の親が「あの子とは来年同じクラスになりたくないね。」と話しているのを鶴谷園長は偶然耳にした。)

大野 でも変な言い方ですけども、それが一つのきっかけになったわけですね。

鶴谷 そうです。そのきっかけがなければ、今まで通り、何となく障害があるかもしれないという相談を、個人的に受けて、個別的に「じゃあ、どうぞ」となんとなくしてきていましたし、今もしていたかもしれません。でも、一方で限界を感じてきていたのは事実です。そのショックな出来事がある前、一学期の保護者会の時に、障害を持った子の保護者の方に、皆さんの前で「あいさつしてもらったりだとか、「こういう障害があります」ということは口頭で伝えたりはしていたんです。だけど文章化して、他の学年とか、他のクラスにまでは言っていませんでした。クラスのお母さん方には、理解してもらおうと思っていました。かみついたり、たたいたりということがあったので、障害を持った子のためにも、みんなから排除されるといけないからということでした。「よろしくお願いします！」というようなことを伝えたけれども、今のように公には出していませんでした。その事件があってから、一生懸命方針を考えました。なので、もともと統合教育とか、理解があってやってきたわけでも、研究してきたというわけではありません。本当に一般の幼稚園でした。

親が許せるか？

千葉 私は、鶴谷先生の園の方針のなかで、「許す」というのがとても面白かったです。

鶴谷 どう書いたら親が納得するのかなと思って。

千葉 「許す」というのは、心理学的な視点からみても紛争後の人々の心情の問題においても、「許す」ということがずっとテーマになるとききます。幼稚園の段階で、それを上げているということは、すごいことじゃないかなと思ったんですよ。紛争などの国際関係という観点、歴史的観点から、大事なキーワードの「許す」ということが含まれているのがすごいなと。

鶴谷 これは僕の名前を見るとわかるんだけど、牧師の息子です。「許す」というのは、キリスト教では、当然の当たり前のことで、それが僕に身につについて、それがここに出てきたのかなっていうような気がします。許せる方が気が楽になるっていうことで、みんな納得してくれると思うんですけども。

子どもはケンカをしていても、途中から笑ってしまっている子もいます。だから、問題は親が相手を許せるかどうかです。うちの子ばかりやられているとか、子どもは許しているのに、親が許していないことも多いです。そういう状況があるから、子どもと同じ目線でいきましょうよ、ということをおきたいなと思いました。そこからの視点だったんです。

担任はやりたくない

千葉 あらためてですけども鶴谷先生の対人援助学マガジンの4号の連載を読ませていただいて、私は本当に心が動きました。石原先生と過ごした、自分の小学校の時代を思い出したような気がしたんです。

石原 ずいぶん昔のことなので忘れていますが、私も重なるところが

ほとんどでしたね。鶴谷さんが学校とか、園とか、担任の方で、どんどん悩みが出てくるなかで、いろいろ取り組んでおられるのをみると、昔を思い出して、一緒だなと思いました。障害のある子がクラスに来るというのは、そのクラスの担任を希望するという先生が少ない時期でした。

千葉 クラス担任は希望できまっていたんですか？

石原 そうです。クラス分けは、校長先生がこのクラスは、例えば 5 年 1 組なら、〇〇さんという障害を持った子がいると、まずは先生にきいて、担任を決めますからね。先生にどうか？ときいてね。豊中の場合は、学年の担任の先生になる先生たちが集まって、あとは誰が持つかという話しをすることが多かったですね。校長が決める時もありました。その時には、校長から事前に「持ってくれますか？」というのがありました。いずれにしても障害を持った子がいるクラスを担当することを敬遠する先生が多かった時期があったのは事実です。

千葉、大野 そうなんですな。

石原 障害の有無とかに関わらず、みんなと一緒に生活しようということでやっていたね。この新聞（先述 福祉新聞 2010 年 10 月 18 日号）にも書いてある通り、豊中は進んでいたと思いますよ。全てのクラスで障害を持った子を受け入れようという教育の姿勢でしたな。普通の子どもたちと同じようにしていこうというのが、基本的にはあったけれども、まだまだ障害児教育というのが広がっていない面もありました。

障害を持つ子が、やっぱりクラスに入ると、クラスが悪い方向にいった場合、担任の責任ということになります。その時には、

親から意見がしっかりとあがってくるから、そのあたりの結末を先生たちはよく知っていましたね。だから、自分は避けようとしている人も結構いました。やっぱり苦労はあったと思います。

大野 だいたい、クラスに 1 人障害を持った子がいましたね。学年に複数いたので。

石原 そうです。

鶴谷 それは豊中市がそういうふうにするといっていたんですか？

権利要求ばかりではなく

石原 市も、先生方も、ある意味ではしっかりしていたところがありました。先生方も、権利要求ばかりではなくて、何かを要求しようと思ったら、教育の中身も作っていかないといけないというのが、基本にありました。私が若い時はそういうふう感じてやっていましたね。その中で実践を充実しようということで、いろんな研究会等をつくって活動したのは事実ですね。私らの先輩の人がその土台をつくってくれていました。私がたまたま新卒の時に勤めた学校が、人権教育の推進校でした。校区に同和地区があるところでした。そういう意味では、人権教育の基本的なことを、徹底的に学ばせてもらったというのはベースにありました。しかし、そのときはまだ障害がある子が来ても、一人の先生が別の部屋で関わるかたちをつくってやっていましたね。

大野 私たちの時は、どうやった？

千葉 一日の 2 時間ぐらひは、障害を持った子は特別学級で、他は一緒に教室で、障害を持った子は別の課題とかをしていまし

たね。

大野 それを、なくすことについて話し合ったことがあったなあ。全部、障害を持った子と一緒に授業を受けるために、どうしたらいいのかを話しあったことがあった。

千葉 クラスで話しあったん？

大野 そうそう。

千葉 すごいな。小学生の課題とは思えない。

大野 何がきっかけやったかな。今思うと、画期的よね。そういうことを自分たちで話し合ったということが、学校生活がやらされているのではないと感じたでしょうし、別の特別学級にいくということがどういう意味なのかっていうのを考えて、話しあったんだろうと思います。なぜ、分けなきゃいけないのか？とかを考えますよね。

クラスの居心地

石原 その当時、そのことについて悩みながら書いた5年1組の学級新聞「GOGO新聞」を持ってきました。

【A君と心が繋がるのはいつ？】

GOGO新聞（1983年〇月×日発行）から抜粋

水曜日の3時間目は図画の時間で、みんな外で下書きをしていた。A君も書いていた。チャイムが鳴って、休み時間になった。全員靴箱に行った。授業が終わって、靴を置いて教室に帰って来た。そのとき5、6番目にA君も来ていた。そして4時間目始まりのチャイム。ところが、A君は席にいない。4、5分先生は黙っていた。さすがに

タイガー班の人から、「おいAくんはどこに行った？」という声がきこえる。何人か探しに行かせた。ふとドアのところを養護担当の先生が顔をのぞかせる。「実はA君がたけのこ学級をのぞきに來ているんだけど、どうしましょうか？しばらく様子でもみましょうか？」「A君たけのこ学級に行っていましたか？そうですか？では4時間目はそうしてもらいましょうか？」と私は言い、養護担当の先生は帰られました。しばらく黙って、先生（石原）は学級目標を書きながら、みんなの様子を見ていた。先生は白い色をその時塗っていたが、先生はその色よりも寂しかった。4月から5年1組がスタートして、初めてA君が席にいない。誰にも言わずに行ってしまった。心の中にはきっとA君なりの不満なりがあるのだろうと思うと寂しくてたまらなかった。そして、何分かたっていった。「A君は何をしに、なぜ、別の部屋に行ったのだろう？言ってごらん？」沈黙が続く。ぱっと書いている手が止まり、鉛筆が止まる。こちらを見つめる。うつむく。何人かの顔つきが変わって来た。みんなの表情が変わって来た。思ったより多くの人の様子かわる。ああ真剣に考える人がいて、よかったと思った。しかし、まだ誰も先生の問いに答えてくれない。先生よりも、4年間長く付き合ってきた仲間だから（※当時、石原先生は転任してこられた初年度。大野、千葉がいた5年1組を担当していた）きっと、いろいろ言ってくれるものと思っていた。ずーっと静かな時が流れる。先生は学級目標の「クラスをつくる 自分をつくる」の色を塗り終わろうとしていた。（※クラスの目標として大きく掲示されていた目標の掲示物）今は

この言葉は、本当に言葉だけだなと思いがち。が、突然Y君が立った。「A君は寂しいから行ったと思います」続いて、6、7人が次々言った。誰もが似たようなことを言った。次に、「これから、みんなどうすんねん？」という私の問いに対して、寂しくならないようにいろいろみんなでするという意味のことを、また7、8人の人が言った。もっと多くの人が言って欲しかった。心の中のをみんなに言って欲しいと思った。そうしているとチャイムが鳴った。A君がドアを開けた。みんな一斉に見た。A君は、とてもうれしそうな顔で入って来た。先生はショックだった。やっぱり今は、5の1よりも、たけのこ学級の方がよかったのか？と思うと、次の言葉を言うのがためらわれた。言葉がすぐ出なかった。そのあと黒板に図を描きながら、ずっとA君は5の1よりも外に行くことの方が楽しそうに見えると考えていた。残念だけど、はやく5の1にいる方が、うれしくてたまらないようにしたいな。果たして何人の心に響いてくれただろうか？不安と期待の入り混じった出来事であった。この日の出来事を、1組の1つの階段として、1段1段登っていきたいと思い、1組の目標に書いてあった「クラスをつくる 自分をつくる 輝く目になれ 動ける体になれ そして 心を開け 信じあえ 認めあえ そして ともに高まれ」この目標の意味をこれからつかみ、そこを目指して前進したいと思う。この日の何人かの人の思いを見てみよう…。(※この続きには、この当日の児童の日記が抜粋、掲載されていました。)

石原 やっている私の方も、こたえという

のがない。どの先生も悩みながらと思います。

千葉 先生たちの意見は一致していたんですか？学年のなかでとか。

石原 どんなふうにしようかというのは学級担任任せ。あんまり言いにくい面もあるし。子どもによって対応が違うからね。情報交換がうまくいっている学年は、学級新聞を他の先生に配りあったことも、よくありました。お互いに高め合うことをやっているメンバーになると、フリーにそういったことができましたね。でも、先生のメンバーにもよりましたね。このような学級新聞を出さない先生には配りにくかったですね。

全体として取り組む

千葉 こんなことをきいたのですが、障害を持った子と一緒に幼稚園、学校で過ごす上で、担任の先生一人ががんばろうとしても無理。せめて学年そろって。でも、学年そろっても、それでも難しい。学校全体、幼稚園全体でないといけないという話でした。どう思いますか？

石原 その通りやと思うね。その当時も、学校としては、障害児教育とか、教育の中身的なこととか結構話しをしたり、研究会とかもしたりしましたよ。

先生同士の研究会、研究授業というのを、豊中はやっていて、その当時は結構熱心でしたね。豊中市レベルでもあったし、学校独自の学校内部のものもありましたね。そうしていかないと、お互いに高め合っていくことがないからね。自分のクラスだけ 1

年間見ていてはダメで、他をみたり、学びにいたり、意見交換をしていかないと。学校行事で修学旅行とか、林間学校という場面は、特に自分のクラスだけを知っていたらいいというものではできないものでした。他のクラスの障害を持った子のことも、知っておかないといけないし、どんな事態に関わることになるかもわからないから。そういう意味では、関係を、そして、連絡を密に学年でもしておかないといけません。そのためにも、学校としてしっかり方針を持ってやるということはとても大事です。

千葉 今おっしゃったのは、教員と学校についてですけども、それ以外にも PTA とか、保護者とかもありますよね。

前の方に座ってはいけない

石原 そうそう。それで、今は特に親との関係は厳しい時かもしれませんね。先生のやり方にもよるので、どの時代にも難しさはありますけどもね。

あの当時、大野さんと千葉君と一緒にだった A 君ね。そのお父さん、お母さんが苦しんだ事件もありますよ。A 君を始めて受け持って、学級通信とかに、さっきみたいに A 君のこととか、それに関連して、他の子が先生に怒られたことを書いていると、A 君だけ何で？とか、それだけをなぜ取り上げないといけないのか？という意識が保護者の方々に、たくさんあったみたいです。学級懇談会、保護者会で、黒板の前に私がいて、席をコの字型にして座ってもらっていて、たまたま、その A 君のお母さんが前の方に座ったんです。私の近い方に。後で、

聞こえてきたのは「なんで A くんのお母さんが前に座るねん！」と、こういうことをいう人がありました。障害を持った子の親がなぜ前に座るのかという意識が保護者にまだありましたね。ものすごいですよ。

鶴谷 こんな小さいところでね。

石原 家に伺った時にきくと、A 君のお母さんが言われたとおっしゃっていましたね。そんな時代やったね。でも、親はかわっていないところがあるかもしれませんね。

鶴谷 そうです。親は今もかわっていないですね。それと、福祉関係の人の意識と、一般の人の意識と、ものすごい差があると思います。

変化を保護者に伝える

石原 今回いくつか伝えたいと思ったことがあります。一つは、保護者の意識向上とかいうけれども、そのためには、クラスのなかで自分の子どもがどんな動きをしているのか？どう活動しているか？を保護者に知らせないといけない、と考えています。良い姿、悪い姿は別にして、悩んでいる姿もあり、あの子とこの子がこうなっているとか、ケンカしたことでもいいけれどもクラスで起こっていることを伝える。高学年になったら、子どもは親の前であんまり話さない。女子の場合は話しているかもしれないけどね。

千葉 男は特に親に学校の事を話さないですね。

石原 話さないでしょ。先生に怒られた！とか、あんまりいわない。だから、子どもが学校で活動している、できるだけいい面

を情報として親に伝えないといけないということが、今日伝えたかったことの1つですね。

千葉 それは学級通信を使ってということですか。

石原 それに限らずに、話してもいいし、訪問してもいいし、いろんな手はありますよね。

千葉 障害を持った子がクラスにいるかどうかということに限らずということですか？

石原 そうそう。学級づくりとして大事ですね。言いかえれば、子どもが変われば、親も変わるということで、これしかないと思ってきました。親に意見を言ったり、私はこう思っています！と言ったりしても、説得のレベルでしかありません。もともと説得できるような内容ではありませんしね。親は自分なりの育て方を持ってやっていますから。

でも、最近になればなるほど、親は先生をある程度軽くみているようになりましたね。当時は、親は先生を尊敬している人が多かったから、先生の言うことを聞いていたらいいい！という時代がありました。保護者がまだそんな意識でしたね。若い先生でいきなり担任しても文句ひとつ言わずについてきてくれた。今は先生が「こうやります！」「こんなんやっています！」といっても、親はなかなか心を動かしてくれない。けれども、子どもがちょっとでも成長しているのがわかった時には、親は変わっていくものと信じています。

大野 親がはっと思う瞬間なんだろうね。自分の子がこんなこと言ったんだ！と。「あ



んた何言ったの？」と親が子にいうきっかけづくりが学級新聞にあったんだね。

何も起こらないことは？

石原 そういう意味ではずっと、A君と関わった頃か、もう少し前から思っていたのは、親はかわってもらわないといけない、けれども、親と子と先生とは一緒にやらないといけません。鶴谷さんがいったみたいに、急にはかわりません。だけれども、きっと幼稚園の場合なら、ここの幼稚園に行きたいという保護者が絶対増えるからね。ここの学級いいなと思えば、この学級にずっといたいと思うし、一緒だと思いますね。だから、子どもがよくなれば親も変わってくる。子どもがかわれば、親もかわるんじゃないのかというのは基本的にずっと思ってきたことです。でも、子どもをかえるのも難しいよ。学力は急には上がらないし。すったもんだの取り組みも時にはしないと…。

千葉 鶴谷先生も原町幼稚園の通信『はらっぱ 7月号』で、幼稚園が園庭に遊具を置かなくなっているのは、園内事故が怖いか

らで、でもそういった場面を経験して、危機回避の経験の蓄積が低くなっていることの影響について（本当の事故に直面した時に対処できる経験が子どものなかに担保できなくなるのではないか？という指摘）書いておられましたけれども、そういった日常で、いろんなことが起こりながらも子どもたちが成長していくというところを省いていっている近頃の傾向ですよ。

鶴谷 そういう傾向がもう全体にありますね。

千葉 家庭へのアプローチ、啓蒙って大事ですよ。そう思うと先生方の「GOGO新聞」、「はらっば」は大事ですよ。日々の現場での援助だけやってもよくない。並行して別のチャンネルでも進めないと。

鶴谷 そう、そこで、関わる人の気持ちを変えていかないと難しいです。

千葉 私がこれまで関わってきた福祉現場も、そのあたり得意ではないですね。

学級づくり、学校づくり

千葉 お話をきいていると結局、障害を持っている子がいるクラスづくりとかではなくて、学級づくり、学校づくりを、いかに一生懸命やるかで、その結果として、障害を持った子がいても対応できていくのかなと思うんですがいかがでしょうか。

石原 まさにそうですね。思っていたのは、「障害を持った子のために」、「その子のために」、ではなくて、常にクラスに「動き」をつくりたかったわけ。全てに。だから授業であったとしても、常にその中で「動き」をつくる。そんなクラスになればいいなと

思ってきました。だから障害がある子のためにということではなくて、自然と障害を持った子に「A君いくで！」といったり、そのなかで「A君、何をしているねん」と障害を持った子に怒る子もおれば、ケンカをして泣く場面もあり、そんなことがどんどん出てくればいいな、というのはすごくあったからね。

大野 自分自身が自閉症っぽいといわれていた経験もあったから、「障害児のために」とかいうような、「障害児であると分ける」ということ自体に関しても、本当に考えますね。

思い出すのは、石原先生のクラスの時、A君が泳げるようになるまで、みんなで一緒に練習しようということをしたことですね。それを先日、石原先生と再会した時にきいたのですが、石原先生は、わざと障害児と過ごすことによく思っていない児童を、その泳ぎ方を教える役にした、ときいたんです。そういう障害を持った子との距離感というのは、人それぞれはつきりしてくるじゃないですか。私たち2人（大野と千葉）は関わっていた方の人間だから、分からないんだけど、比較的避けていた子たちのなかで、わざと担当を決めてやったと。水泳が得意な教える側の子を、持ちあげな



がら、先生は進めたんだろうなと思って。その、敢えてぶつけるというところがポイントですね。保護者とか、当時の本人たちも、そういう裏話があることは想像していなかったんじゃないかなと思いますね。そういう出来事がありましたね。感動の出来事としてよく覚えています。でも、実はそういうねらいがあったと先日、石原先生からききました。

石原 あれは、人選するのが大変でしたね。5人ぐらい頼まないといけないと思いました。A君と距離を置いている子、そして、泳げる子も、泳げない子も一緒にね、やんちゃな子にも頼んで、やさしい子にも。一人一人に頼んだな。頼んだのは異色メンバーやったと思う。けど、楽しくなるのやね、やっているうちに。少しでもA君も泳げるようになると。

大野 ドラマのようで、最後A君が泳ぎきったときのクラスの一体感というのは、もう言葉になりませんでしたね。

石原 楽しかったね、あれもね。

教室でのドラマづくり

石原 小学校は毎時間教えるものが違うから、その時間ごとにドラマができるという楽しさがありますね。自分の先生としての勉強のために、いろんな取り組みをしている学校などを、先輩とか後輩から教えてもらったりして、見学しに行ったりしていたのですが、2つだけ心に残っています。一つはある県の養護学校で年に1回、インドネシアとか南の方に行くんですよ。障害を持っている子にも原色のきれいな色を見せ

たいと思って。いろんなことでお金もいる。でも、それを目指していこうと取り組まれていました。それらの動きことを、その先生は「はったりをいう」と言い方で話されていました。「はったり」は何かなと思ったのですが、ウソのはったりでなくて、これしたいと思うのを、子どもにも言うし、職員にも言うし、自分にも言う。もう決めてしまう、方向を。そうして、定めていくということが大事だということが残っています。

クラスの初めの時は、必ず言いましたよ。前のクラスは、これがよかった、あれがよかったと。よかったことを山ほどいうんですよ。そうしたら、子どもたちは嫌がる。

千葉 覚えています！どんな嫌味な先生かと思いました。

石原 そうそう。前はよかったと楽しそうに私が言うんですよ。でも、これは絶対マネするなよ！といって、そこからを新しいクラスのスタートにするんです。それで、これはやめてくれよ、君らはちがうと。こんなこととか、あんなことあったけれども、前のクラスですよと、ずっと言い続けましたね。そうしてクラスを新年度スタートしながら、それでひとつの「はったり」のような、こんなクラスになったらいいね、というのを次にいっていました。

大野 嫌味やなと思ったん？

千葉 こんな先生は初めてやなと思って。

石原 初めは嫌味っぽく、オーバーにいつてましたね。

大野 子どもたちに「何くそ精神」を出させたんじゃないかな、その時点で。

千葉 反動、反発でね。

石原 始めにそういつてから、こんなこと

ができたらいいな、こんなことができたらいいなというのをちょっとずつ言っていこうと、思ってやっていました。それが「はったり」でクラスの目標でもありました。

教育は楽しく！

石原 それと「教育は楽しく」というのは、自分自身にもまわりの人たちにもずっといってきました。校長になっても、教頭の時も、ヒラの時も、ずっといってきました。自分が楽しくなかったらいけないから、教育というのは、やる側が楽しくないとね。自分自身が楽しくなかったら、子どもたちも楽しいはずがありません。教育というのは「たのしく」というのを外したら、学校を辞めなくてはならないなど、そのぐらい思ってきました。自分が楽しいと思っていないとやっていられないからね。

鶴谷 同じですね。教育はエンターテインメントというのを聞いたことがあります、あの言葉もピンとききました。

石原 それがあったから続けられたようなものです。

もう一つはある時、クラスづくり、学級づくりというのを真剣に取り組んで、今までやっていないような先生とも、一緒にやっていこうかということで、いろんな取り組みをしました。それでも、他の実践を見ると、もっと素晴らしいクラスがある。ある中学の先生、後輩だったんだけど、その人の実践をきくと、すごい差がある。私がやっていることと。子どもの元気の良さとか活力が違うのよね。どうしたら、そんなクラスになるんですか？ってきいたん

ですよ。「それは石原先生、簡単ですよ。子どもを好きになることではないですか？そこからじゃないですか？」とズバッといわれてね。それから、そのことを忘れずにやりましたね。なかなかすぐには好きになれない子どももいるけれども、好きになろうとすると、案外フィーリングというのは人間というのは感じるところがあると思えましたね。

鶴谷 子どもらが好きになってくれれば、クラス運営はうまくいきますね。

石原 そうなんですよ。でも、そんなことやっばり、なかなかうまくいきません。腹の立つこともありますし。

元児童のその後

千葉 福祉の大学にいったな二人とも。

大野 そうやね。

鶴谷 影響ですかね。

石原 もともと持っていたものがあるから…。

大野 先生は、そういつてくれるけれども、意識として、先生の影響だと考えるのが私のなかでは当たり前だと感じていますね。自分の幼少期の経験（自閉症といわれていた）も踏まえて、全ての物事に対して「差別をされること」に関することは、小学校時代に私らに根付いたこととしてはよかったと思っています。今の私がやっていることとか、生きていくなかでは間違いなく先生の影響を受けていますね。（千葉君も）はつきりいえるよね。

千葉 そうやな。振り返ると、やっばりやね。

大野 そこまで発動させた、きっかけを先生がくれたね。そもそも、なんでこの座談会に至る前に、小学校時代を注目し始めたきっかけ覚えている？

千葉 …なんやったっけ？

大野 私が京都で個展をしたときに千葉君が遊びに来てくれて、私が大学の冊子に書いた文章の中で、小学校時代にも自分のルーツがあるってことを書いたものをみつけて、すぐコンビニにコピーに行ったよね。私はそこに小学校時代の影響に関する文章を書くぐらい、実際にその頃のことを鮮明に覚えているわけだし。

石原 いいようにいってくれるけど、カッコよく言うと、やっぱり「ドラマ作り」をしたいというのはあったね。なんか、それが楽しくなるんじゃないかなというね。嫌みもいうけど、結果的に楽しくなるんじゃないのかなってね。

大野 決定的なのは、こんな世の中きれいごとでは、おさまらないというところにたどりついたことがあるというか、成し遂げた経験が、小学校で出来上がっているのよね。プールのことにしても、しっかり目標を持つこと、夢を見ること、疑いもせず、そこに向かうこと、というのは自分の生き方として、これだというのがある。振り返っても、私自身が自閉症と疑われていた幼稚園時代とは全く違った、小学校 5 年、6 年時代に意気揚々とした自分がいるからね。

中学時代の苦しみ

千葉 そうやな。あと、時期的に、その後の中学の時って大変だったんですよね。小

学校の時って、いろんなことが素直にできるけど、それが段々ね。

大野 そうだね、わかる、わかる。

千葉 自分にもカッコつけたいとか、まわりのやんちゃな子にもあわせていかないといけないという時に、じゃあ、そういう場面で、今まで一緒にいた障害を持っていた子に、どう接することができるかというのは、すごい苦しみました。

鶴谷 やさしさがカッコ悪いみたいな。

千葉 そういう時期ですよ。あいつと仲間なん？とかいわれたりしてね。そういう問題じゃないだろうと。小学校の時に、先生方に教えていただいたし、分かっているし、実感もあるけど、じゃあ、それを素直に出して、この集団の中で生きていけるのかと。

石原 そういうのあるからね。全部が千葉君みたいな考えと違うからね。だから、非常に難しいよな。5 クラスあったら、クラスによっても違うし、学校によっても違うし、複数の学校が集まって、中学校になっているから、それまでと違うというのが確実にあるもんね。

千葉 もうひとつの小学校の方には、障害のある子が確かいなかったか、少なかったかでした。それが同じ中学に入学した。僕らは、生活の中に、こんな時もあるわなという、その障害を持った子に付き合うという場面もあるんです。それが普通でした。ものごとの進み方が。けれども、別の小学校出身の子は、そういう経験が少ないからか、いじめるわ、からかうわ、閉じ込めるわ。

鶴谷 あからさまだよね。

千葉 やるんですよ。それに自分自身が戦

えなかった。せっかく教えてもらっていて、分かっていたのに、そんな自分に悔しいというのかな。

大野 中学に入ると、ますます男女の距離がパッと別れるところもあったから。障害を持った友達はその時はみんな男子だったし。

千葉 成長の時期的にもそういう時期だしね。

大野 そう、男女が一緒にいない時間も増えてくるわけじゃない。

千葉 そうやな。あの頃は、私の苦しみですね。中学でも、全生徒の前で、A君のお母さんが講演してくれたんですよ。多くの生徒があからさまにきいていない。

鶴谷 きくこと自体がダサイみたいな時期だからね。

千葉 何をいってるんだ、障害児の親が！みたいな。それが敗北感というか、あのお母さんにも申し訳ないなと感じました。たくさんお世話になって、一緒にすごしてきたのに。

大野 ほんまやね。きっと傷ついているだろうなという、しかも目の前でね。

千葉 それでも、お母さんは前で話すんです。今思い返しても、その勇気は本当にすごいなと思います。

大野 そういうことだよ。でも、親も一緒に、そういう現実に向きあえるかどうかというのがあるよね。普通教育を受けさせてくれるところに行くのか、特別教育に行くのかということであるね。「もういい、これで」ということになるのかどうかっていうところですね。

鶴谷 中学時代はあるね。

千葉 しんどかったです。今思い出しても、

やり直したいというか、やり直してもできるかなって思うし。

鶴谷 相当ハードル高いですよ。

千葉 やっぱ、そうですかね。

鶴谷 その中学生の時期って、そう素直にやさしさを出すというのはダサイというか、やんちゃな方が勢いを絶対持っているし、カッコよく見えるし。

大野 まあでも、中学はそういうところに入る余地が女子にはなかったな。特に男子のなかで起こっていたことに関してはね。

石原 小学校は女子の方が成長もはやいし、小学校では女子の力で持っている部分もありましたね。それと男子がうまく絡み合っているというのが、小学校でのクラスのひとつの形かもしれないね。中学入ると、男女は精神的にも違ってきたりするからね。

はやくから一緒に過ごす

千葉 基本的なことをいうと、はやくから障害を持った子と一緒に過ごしたという経験は、僕はよかったなって思っています。

鶴谷 子どもには大きな経験だと思いますよ。

千葉 そんなことない？

大野 その経験を良い経験であると認識したことがとても重要だと思う。

知っているある家族は、障害を持った人と過ごしてきたことで、障害っていうだけじゃなくて、どんなものにも、いろんなものにもためらわず、手を出せるようになった。そういうことは、どんなにまわりがこんなふうになってほしいと思っても、そのチャンスになるステージ、場所がなか

なかない。自然にふれて、野生動物に触れて、もしくは動物園で触れてできるようになるのとは、ちがうわけで、そういう機会が近くにあったおかげで、その子たちはそれに関して、立派に育つ。そういう機会が私たちにはあったのだろうと思う。今の私たちにとっては、そこがあったから今がある。これは、そもそも社会としては、すごく重要な話です。

一緒にいるのが自然

鶴谷 それと、言葉が難しいけれど、慣れみたいところ。

千葉 一緒にいて自然というか。

大野 そうです。そうです。

鶴谷 核家族でずっと過ごしている子は、例えば保育園の例なんだけど、高齢者の施設に慰問に行くと、しわしわの手が触れない。おじいちゃん、おばあちゃんに慣れていない子たちだからです。慣れている子どもは平気で握手とかできるんだけど、しわしわの手をみただけで抵抗を感じてしまう。それと似ているところもあると思う。

大野 そうだと思いますね。

鶴谷 日常的に、ふれあいがあるよね。

居場所を求めて

千葉 先程、障害を持った子を受け入れて



いる幼稚園に障害を持った子が集まるという話もありましたが、人数の割合も、障害の子が集まるというのはあんまりよくないと思っています。社会普通にまんべんなくしたら、そんなに集まっていないというのが普通ですよ。

石原 当時、豊中に引っ越す人が多かったですよ。障害を持った子の保護者が障害を持った子を学校が受け入れてくれているから。

鶴谷 もう今そういう現象が起こっていますね。わざわざ受け入れてくれるところに引っ越して入ると。近くにもあるけど、そこはいっぱい。県外からは、受け入れないとしたらいいですけど。

大野 私たちの時も、他の学年にも結構いたんだっけ、全然覚えていない。

千葉 あんまりいなかった。

石原 全体ではあんまりいないと思う。

千葉 うちの学年が多かった。

大野 普通に学年の人数も多いんだけどね。

地域の学校はイヤ！

石原 障害がある保護者も、普通の地域の学校に行かせたくない！というご家庭もありました。世間の目があるから行かせたくなくて、特別（養護）学級だけ、もしくは養護学校にいかせる気持ちを持っているご家庭も結構おられましたね。

障害を持った子が普通学級で学ぶということがね、なかなか一般的ではありませんでしたから。昔からいう、教育の目指している当たり前の姿があって、障害のある子がいて、当たり前、共に過ごして当たり前と

いう。そういう世界、世間にしていこうというのが大きな願いです。でも、そういう気持ちというか、そこまで持てない保護者がいたのは事実ですね。障害が重い子どもの保護者であればあるほど、地域の学校には行かせたくないと思っていた傾向があるね。

大野 あー。

石原 行くと白い目で見られて、その子がいじめられるんじゃないかと思うと、障害を持った子だけがいる学校に行かせた方が安全ではないかという考え方です。その方がその子にとってもいいのではないかというの、物凄くありましたね。それを崩すのが本当に大変でした。障害がある子がいるのは、この家ですよというデータが就学前から学校にはあがってきていました。ですので、先生何人かで障害を持った子がおられるご家庭に訪問に行きましたよ。「私たちのいる地域の学校に是非来てください！」というふうに誘っていかないと、なかなか来てくれないこともありましたね。

千葉 大野 へー、すごい、今もそうなんかな。

石原 当時は、そんな時代でした。今はちょっと分からないけど。

鶴谷 特別支援という考え方が始まってからは、だいぶ流れが変わって来たんじゃないかな。

石原 今はだいぶ違ってきた。当時は大変や。家から外に出す、親も子を家から出すということが大変な時代やから。

大野 屋久島で出会った障害者も似たようなケースがありますよ。あまりにも障害を持った方に島で出会わないから、なんでなんだろうと思っていたのですが、簡単にい

えば牢屋のようなところに入れられていましたね。

石原 明治、大正、昭和で、そういう時代が長かったからね。

大野 私が屋久島にいったころ、まだあったんですよ。ある方がいて、身体に障害があって、話は普通にできて。けれども、育てられ方が、家族も完全に、その子に対して、わがまま放題で育てたのか、何でも許される状態をまわりがつくって来たようでした。私は、本人ができないことはしても、できることは自分でしてね、というのが私の当たり前で、私がその人の近くにいても必要以上はしてくれないことに、不満をその人は感じて。

鶴谷 何で大切にしてくれないんだと。

大野 そうそうそう。ま、でも散々やり取りしたあとに、その方は「睦ちゃんは、なんで普通なの？」ときいてこられました。特別扱いをされすぎたが故に普通に扱われることにためらいを感じていたのだと思います。

鶴谷 物足りない、障害者だぞって！

大野 「そういうところに帰りたいの？」っていったって、私もたくさんやり取りをした後だったからそんなやり取りになったのですが。しかも、本当にある程度、社会になじめていなくても、ほおっておいてもきちんと家に帰ってこれるぐらいの人だったら、毎日ぷらぷらしています。うちら世代(1972年生まれ)の障害を持った子もいて、いろんな人に話しかけてコミュニケーションはとれていたりするんだけど、親がいなくなったら、どうするんだろうね。田舎だから、そのあたり差し障りのないぐらいの関わりという感じが出ています。

鶴谷 田舎にいけばいくほどね、その現実には。地域性もありますよね。



障害を持った子が地域の学校で学ぶという取り組みは、特別支援教育の以前から、障害児教育の一つの方法、統合教育として進められてきました。冒頭にも述べたように、現在、インクルーシブ教育というかたちによって、再び障害を持った子と地域の学校で一緒に学ぶ場面を見直す動きが出てきています。他にも同じような場面として、幼稚園、保育所、児童養護施設等において、障害を持った児童も健常の児童と同じ場面におり、そこで、援助を受けるという場面が増えているというのがあります。その理由としては、発達障害という新しい障害概念の登場による新しい障害者の登場、少子化による児童の減少により児童サービス自体が障害児も含めて考えないと維持できないところが出てきたという現実もあるように思います。また、これらの背景には、地域で暮らす権利意識の向上や、障害があっても教育を受ける権利意識の高まりなど、様々なものが考えられます。養護学校、特別支援学校が児童1人に対して、教員が1人～2人という状況も考えるとコストも大きくかかっています。それらを総合した結果としての、地域の学校で障害の有無に関わらず教育を受けるインクルーシブ教育という流れに向いているようです。

今回の座談会では、そんななか、現場で工夫をし、苦勞をし、試行錯誤をしながら、子どもたちの教育、保育に汗を流す人々の姿と、その思いに少しは触れることができたかもしれません。ですが、十分に語りつ

くせたとはいえ到底思えません。

実際にこの原稿の作業中にきこえてきたのは、統合教育を経験した豊中出身者が成人期の障害者への問題意識が低いという話です。障害を持った友達と当たり前で過ごしたが故に、豊中出身者は、成人しても障害を持った人も学校時代と同じように何とかなっているのではないのかと思って、成人期の障害者施策に関して問題意識が低いという話でした。これも、障害を持った友達と一緒に過ごしたから何もかも解決するということでないことを物語る話です。

座談会を終えて



● 鶴谷主一

対人援助マガジン、幼稚園の現場からⅣに「障害児を受け入れること」について書いたときは、「やっと本気で目の前にいる障害児とその親御さんに向き合った」園長の悩みをレポートしたような内容でした。もっときちんと受け入れ、取り組んでいる幼稚園もあると思います。そんな方からのご意見も頂ければなあ、という気持ちもありました。

今回の対談は、障害児受け入れ初心者の私にとって、とても興味ある対談でした。

実際に障害児のクラスメイトと過ごしたお二人と、その担任の先生とお話ができ、行われていたことや、当事者の気持ちが伺えて、知らなかった話をたくさん聞かせて頂き刺激になりました。また、専門家同士の話ではなくて、一般人？の私や大野さん、石川先生も教職だけど障害児専門職ではない、そんなメンバーがいろいろと話し合えたことは有意義だったと思います。

今年の8月5日に障害者基本法の一部を改正する法律の公布・施行の通知が文部科学省から出され、県の担当課を経由して各園に文書が通知されました。共生の理念、インクルーシブ教育の推進が謳われていましたが、県主催の「早期からの支援体制のありかた」というシンポジウムに出かけてみても、「早期から」に大きな役割を担うであろう私立幼稚園からは出席者はたったの2名。250人ほどの出席者のほとんどは公立の方か関係者の方・・・どうみても内輪でやってるような印象を受け、共生の意識を一般化していくことの難しさを感じたのでした。

今回の企画が少しでも外へ発信していくことにつながれば嬉しいです、参加させて頂きありがたかったと感じています。

● 大野睦

鶴谷さんのお話を聞いて初めて見えた視点がいくつもありました。障害を持つ同級生と一緒に教室で過ごすことが当たり前だと思っていた私たち。30年近い年月が過ぎても変わらない現実としてある数々の問題を、それもまた様々な視点からひとつずつ歩み寄れる社会にしなければと感じた一日でした。

石原先生が当時のことを鮮明に覚えておられたことも驚きでした。それだけ思いを込めて日々の学級運営をしていただいていたのですね。

どんなこともそうなんでしょうが、長い年月を経て初めてその意味を受け止めることが出来るところもあるのだと、日々変わらないことに屈せずその情熱を絶やさずになりたいと思います。

鶴谷さん、イシセン、バチケン（千葉）
本当にありがとうございました。

の発達、障害児・者問題、差別、教育、人権、地域格差、「障害がある」というのか、「障害を持つ」というのかというような言葉の問題…等尽きることはありません。今後も、この対談をきっかけに多くの議論が様々な場所で起きることを期待しています。そして、私たち自身もそんな一つの場をまた持ちたいと考えています。

石原愼先生、鶴谷主一先生、大野睦さん、本当にありがとうございました。心から御礼申し上げます。

●千葉晃央

なぜ、こんなこと企画したのか？それは、あの時も、そして今も、これまでも、障害を持ったご本人、そしてそのご家族、がんばっている先生たちの姿が目につかぶからです。その場面を経験した私たち。発信し、残すことが今の私たちにできることだと考えました。

編集：石原愼 鶴谷主一 大野睦

写真：大野睦 千葉晃央

責任編集：千葉晃央

おわりに



インクルーシブ教育というかたちで、今後も起こるであろう、障害をもつ子と共に過ごす場面。そんな、障害を持った子と一緒に過

ごす対人援助場面で働いている方々へのエールや、参考になればと思います。

この座談会で取り上げられた内容には多くの社会の課題が含まれています。子ども

編集後記

編集長(ダン シロウ)

六冊目の完成。ますます増頁で、やや中年太り風かもしれない。もしダラダラした過剰さが目に付いたら、名指しでお知らせを。意味のある長さ、連載を心がけ、「この時代の資料に！」と考えている編集長は、執筆陣の拡大、増頁化は基本的に大歓迎。

でも、独り言のブログや HP の飛ばし書きとは一線を画しておきたい。だからご意見は歓迎です。

しかし今後もこの調子だと、早晚、街の電話帳くらいになってしまう可能性がある。現在、少数数作成して執筆者にお届けしている印刷版は出なくなるかもしれない。そうになったら執筆者とご相談。

WEB マガジンなのだから、多くの読者にはそれぞれプリントアウトしたり、モニター画面で読んで頂いている。たびたび書いたことだが、ipad (もしくは類似の新製品) で見るとなかなか良い感じだ。

ま、何も決まりはないので、これからも編集長が楽しいようにやっていきまっさ。

■■

『ノーサイド』(新しい首相が総裁就任演説で叫んでいたが)を連載開始した中村周平くんが「今回も写真掲載構いませんか？ご迷惑でなければ・・・」と遠慮気味に添付ファイルで送ってきた写真を見た。

“高校時代”と題された一枚。グラウンドでのスナップだろう。表情から不安、決意、気後れ、拳の意志・・・いろんな言葉が浮かんできた。

ユニフォーム姿の高校生の眼差しに私が

勝手に読み取ったのは、ここから始まる物語である。

この周平くんは、まだ自分の未来を知らない。それは今の彼も我々も同じで、誰も明日のことなど予言できない。

それは拡大すれば、地震や津波、原発、そして台風で被災した人たちも同じだ。

そして誰も、起きなかった昔に戻ることは出来ない。誰かにおきることが、誰かにおきる。だから、自分に起きるかどうかわけが問題なのではなく、誰に起きたとしても、それをどう受け止めるかが、社会全体に問われている。

天野忠詩集の中の短文にこういうのがある。連合軍が勝利し、ナチスドイツが崩壊した後のことだ。強制収容所・記録フィルム街頭上映会がドイツ国内の津々浦々で行われた。ドイツ人の中には収容所のことを知らなかった者もあった。それを連合軍は全ドイツ国民に知らしめようとした。

上映会を後にした冬の夜の帰路。黙って歩く父子の頭上に雪が降り始める。息子が空を見上げながら、「あっ父さん、雪だ・・・」とつぶやく。

人はしばしば、何を語ればいいのか、途方に暮れる。しかしそんな時にこそ、語らなければならない。大したことなくて良い。自分の言葉精一杯の所を、そこにいる責任として口にしなければならない。

今がどういう時代なのか、渦中には分からないことがある。歴史になった頃に、はじめて明らかになる意味も存在するに違いない。マガジンがそう言う中の一つであると良いと思う。

■■

新連載の「ほほえみプロデュース活動奮闘記」は青森県の事業だが、計画される前から近くにいて、動いてゆくのをずっと関心を持って見ていた。

世の中は一発イベントの繰り返ししかできない、二流広告代理店もどきの行政マンで溢れている。「ほほえみ」について、ある県の女性が、「うちでも、似たようなことをやっている」と話しているのを立ち聞きし

て、本当に分からない人はいつまで経っても分からないのだなと思った。

誰かの取り組みが、目先を変えた思いつき企画にしか見えていない者は、所詮そこ止まり。

意地悪な私はずっと昔から、「突然、素人が知った風なこと吹いて…。何でもかんでも、思いつきアイデアだとしか認識できない奴は、一生それだ」と冷ややかに見ていた。

事実、全国津々浦々に、なんやかんやの思いつき祭りの後の残骸が横たわっている。莫大な金とエネルギーがゴミになる。

あっという間に消えてしまう歌手や芸人をイッパツ屋と言って笑う人たちが、仕事でイッパツ屋でしかないことをしている。

「継続は力なり」というのは至言だ。続かないものを信じる必要はない。続くことなら何でも良いわけではないが、立ち消えになる多くのモノより、良くも悪くもどこか優れている。そういうモノだけが社会の資源や装置として生き残るのだろう。

■ ■

書くべき事のある対人援助現場にいる方。どうぞ編集長まで、新たな分野、角度からの連載打診をしてください。学会に入会していただく必要はありますが、このマガジン、基本的に全ての方に門戸を開いています。

編集員(チバ アキオ)

「水曜どうでしょう！」(北海道テレビ放送制作 バラエティ番組)がスキだ。今は全国区の大泉洋氏も、もとは地方タレント。北海道でトップになったから、全国区へのチャンスを得た。何かしら、極めようと思った時に、東京に行く、その領域のメッカに行くというのはよくあるパターン。でも、大泉洋氏の場合は異なる。地方局制作の番組がこれほど全国でというのは本当に珍しい。また、DVD、グッズ展開と、その企画のセンスもよい。京都でも「水曜どうでしょう！」ステッカーを貼った車両は毎日見かける。地方ががんばるといえるのは、今、

本当に大事なことだと思う。◆原発誘致も地方を元気に、地元を元気にということが始められたことだ。そこには都会と地方とのあらゆる格差の問題が根底にある。原発産業で地元にお金を落とすと考えるのか、そうではなく、他の手段で地元にお金を！と考えるのか？◆すると、いろんな人の汗が見えてくる。B 級グルメもいとおしくなる。『長野伊那名物ローメン』、『秋田の横手焼きそば』なんかも最近いただいたな。◆あと、「ゆるキャラ」。こないだはパツとしないゆるキャラが、売れているゆるキャラに弟子入りし、ステージ・パフォーマンス等学んだりもしていた。このごろは、大手大学ではないところが大学のゆるキャラをつくって、大学間格差にも挑んでいる。◆世界遺産登録もしかりだ。小笠原諸島は週一回の定期便のみが交通手段。飛行場はない。だから、守られてきたものがあるといわれている。◆私の実家のある秋田県は、例にもれず過疎が進んでいる。秋田新幹線こまちの事を「秋田県脱出ポッド」といつているのも見かけたことがある。いろいろ考えてくると格差が全くなならないことは分かっている。それでも、私は私の身の回りの格差はできるだけ少なくしたいと思っている人間だ。◆資格を持っていない人は学んでいないのか？学会や専門職団体に属していない人たちには蓄積はないのか？自分たちの領域と、お隣の領域もみておくと違うでしょう！学歴は関係ないでしょう！…そんな差の是正を感じられることが、私にとってのこの対人援助学マガジンに関わっている理由でもあります。◆今回は、巻末座談会をたのしく、奔走しました。魅力ある方々と一緒にこうしたことができることは、本当にうれしいことで、私自身エネルギーをいただけることです。◆新連載も2本、またご一緒できる方が増えてうれしい限りです。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想

danufufu@osk.3web.ne.jp

学会時にも販売しましたが印刷版対人援助学マガジン（1号、2号、各1000円、第3号、第4号、第5号1300円）が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。メール便で発送します。

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランブルス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン 通巻6号

第二巻 第二号

2011年9月15日発行

<http://humanservices.jp/>

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪府中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

旅が好きです。唯一の趣味と言っているかもしれませんが。バックパッカーも、団体旅行も、妻と二人の旅も、一人旅も、どれも楽しめます。「街」が好きで自分の歳に合う旅の仕方をしてきました。

日本国内は、ほとんどの都道府県に仕事で出かけるので、気分転換は必然的に外国になります。

積極的に観光がしたいわけでもないので、どこかに行かなければならないような旅はしません。あてが外れたり、修復中だったり、その日は閉まっていたりもしょっちゅうです。窓口では「また来ればいいか…」と呟くのですが、大抵は二度と行きません。それよりもまだ知らない所を散歩するのが楽しいので。

秘境へ行こうとか、冒険しようとかいう気持ちもなくなりました。せいぜい、「珍しいところに行ってますね」といわれる程度の目的地選択です。

ヨーロッパの鉄道は三〇年以上前からお気に入り、トマス・クック時刻表片手に、あちこち鉄道を巡りました。「世界の車窓から」は、私のために用意された番組のようで、DVD化されてシリーズ発売されているものは、現在も継続購入中です。

リュブリャナ（スロベニアの首都）なんて、あまり行ってる人は少ないでしょう。それどこ？って方も多いかもしれません。イタリア北部に隣接した小国。クロアチアの手前って、説明になっていませんね。綺麗な小都市でした。旧ユーゴスラヴィア内戦が終わって、平和を満喫する国民の表情が、本当に明るいいい街でした。

妻が回復したら、まだ見ぬあちこちの街に出かけなければと、今のところ待機中です。

2011/09/15 団士郎